日本応用心理学会
第74回大会発表論文集

2007年9月8日(土)～9日(日)

帝塚山大学

TEZUKAYAMA UNIVERSITY

日本応用心理学会　第74回大会
発表論文集

2007年9月8日（土）～9日（日）

帝塚山大学

目　　次

特別講演・研修会・シンポジウム・ワークショップ

特別講演 ……1
9月9日（日）14:40-16:10　16606教室
「運転行動の階層モデルとヨーロッパの運転者教育の新たな展開」
講演者　エスコ・ケスキネン（フィンランド、トゥルク大学）
司会者　蓮花　一己（帝塚山大学）

大会企画シンポジウム ……3
9月8日（土）13：00-15：00　16501教室
「災害リスクの認識と対応：心理学がとらえる過去、現在、そして未来」
企画・司会　中谷内　一也（帝塚山大学）
話題提供者　木下　冨雄（国際高等研究所）
北川　博巳（兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所）
釘原　直樹（大阪大学）

自主企画ワークショップ1 ……5
9月8日（土）13：00-15：00　16601教室
「若手研究者が提案するストレスマネジメント教育のカタチ
－産業場面を想定して－」
企　画　者　加藤　純子（帝塚山大学）
話題提供者　矢野　優人（関西福祉科学大学）
福本　敏宏（帝塚山大学）
小西　浩嗣（帝塚山大学）
加藤　純子（帝塚山大学）

自主企画ワークショップ2 ……6
9月8日（土）13：00-15：00　16602教室
「PAC分析の過去・現在・未来 －個を科学する方法のさらなる発展にむけて－」
企　画　者　伊藤　武彦（和光大学）
話題提供者　内藤　哲雄（信州大学）
井上　孝代（明治学院大学）
指定討論者　岸　太一（東邦大学）

自主企画ワークショップ３ ……7
９月８日（土）13：00-15：00　16606 教室
「マイノリティに対するスティグマ・偏見・差別の低減
－ エンパワメントに繋がる支援－」
企　画　者　長坂　晟（和光大学）
話題提供者　長坂　晟（和光大学）
北風　菜穂子（明治学院大学）
飯田　敏晴（国立国際医療センター）
指定討論者　伊藤　武彦（和光大学）

自主企画ワークショップ４ ……8
９月９日（日）12：30-14：30　16501 教室
「日本応用心理学会の過去・現在・未来を語る」
企　画　者　藤田　主一（日本体育大学）
司　会　者　浮谷　秀一（東京富士大学）
話題提供者　大村　政男（日本大学）
荻野　七重（白梅学園短期大学）
田中　真介（京都大学）
指定討論者　大坊　郁夫（大阪大学）
内藤　哲雄（信州大学）

自主企画ワークショップ５ ……9
９月９日（日）12：30-14：30　16601 教室
「フィールド研究におけるデータ収集・介入困難
－ 大学院生が経験した事例から－」
企画・司会　岡崎　琴恵（お茶の水女子大学）
話題提供者　玉井　航太（国際基督教大学）
渡辺　亜紀子（お茶の水女子大学）
池田　満（国際基督教大学）
岡崎　琴恵（お茶の水女子大学）
濱口　まち子（お茶の水女子大学）
指定討論者　伊藤　亜矢子（お茶の水女子大学）

自主企画ワークショップ６ ……10
9月9日（日）12：30-14：30　16606教室
「経験に伴う運転行動の変化について」
企　画　者　中井　宏（大阪大学／日本学術振興会）
上田　真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
話題提供者　渕　真輝（神戸大学／大阪大学）
内藤　久士　（西日本旅客鉄道株式会社／放送大学）
中井　宏（大阪大学／日本学術振興会）
指定討論者　向井　希宏（中京大学）
太刀掛　俊之（大阪大学）

研修会Ａ ……11
9月8日（土）15:30-17:00　16601教室
「社会における応用心理士の使命と課題・留意点」
講　師　神作　博（中京大学名誉教授）
司　会　向井　希宏（中京大学）

研修会Ｂ ……13
9月9日（日）14:40-16:10　16901教室
「コンフリクト転換のカウンセリング」
講　師　井上　孝代（明治学院大学）
司　会　伊藤　武彦（和光大学）

口頭発表　第1日　9月8日（土）

口頭発表1　産業・職業　(16501)　9：30～11：30

座長　臼井　伸之介

16501-a-1	応用心理学の今日的課題と改善策	○長塚　康弘	（新潟心理学研究所）	15
16501-a-2	長時間飛行における疲労パターンについて	○竹内　由則	（航空医学実験隊）	16
16501-a-3	看護業務における安全教育の有効性評価について ―経験4-6年群を対象として―	○臼井　伸之介 和田　一成 太刀掛　俊之 村上　幸史 青木　喜子	（大阪大学大学院人間科学研究科） （平安女学院大学） （大阪大学安全衛生管理部） （神戸山手大学） （十条リハビリテーション病院）	17
16501-a-4	中年層と高齢層に見やすい液晶ディスプレイに関する評価 ―重心動揺計を用いての比較検討―	○藤掛　和広 高田　宗樹 大森　正子 長谷川　聡 宮尾　克	（名古屋大学情報科学研究科） （岐阜医療科学大学） （神戸女子大学） （名古屋文理大学） （名古屋大学情報科学研究科）	18
16501-a-5	教師のバーンアウト傾向の規定要因についての一研究 ―教師のパーソナリティ特性に着目して―	○澤田　幸嗣 宇惠　弘	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （関西福祉科学大学）	19
16501-a-6	職場内ソーシャルサポートについての探索的研究 ―サポート源を上司と同僚に区分して―	○加藤　純子 森下　高治	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学大学院人文科学研究科/帝塚山大学心理福祉学部）	20

口頭発表　第1日　9月8日（土）

口頭発表2　交通　(16601)　9：30～11：30

座長　松浦　常夫

16601-a-1	リスクテイキング傾向測定ツールの開発に向けて —ジレンマゾーンを例に—	○中井　宏 臼井　伸之介	（大阪大学大学院人間科学研究科/日本学術振興会） （大阪大学大学院人間科学研究科）	21
16601-a-2	アイカメラを用いた運転経験による視覚的探索およびハザード知覚への影響の実験的研究	○平山　裕記 蓮花　一己	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学心理福祉学部）	22
16601-a-3	交差点右折時における対向車への注視量の年齢層別比較	○矢野　伸裕	（科学警察研究所交通科学部）	23
16601-a-4	リスクの連続的評価と注視行動	○島崎　敢 石田　敏郎	（早稲田大学大学院人間科学研究科） （早稲田大学人間科学学術院）	24
16601-a-5	高齢運転者用ワークブックの作成とその妥当性	○松浦　常夫 石田　敏郎 垣本　由紀子 所　正文	（実践女子大学人間社会学部） （早稲田大学人間科学部） （実践女子大学生活科学部） （国士舘大学政経学部）	25
16601-a-6	航空事故事例にみるコミュニケーション齟齬に関する研究	○垣本　由紀子	（立正大学大学院心理学研究科）	26

口頭発表　第1日　9月8日（土）

口頭発表3　発達・教育　(16606)　9：30〜11：10

座長　小谷　正登

16606-a-1	なぜ、子どもを取り巻く危機、危険を察知すべきか —浅利式絵画診断法を実践することで聞こえてくる子どもの声—	○渡部　英夫	（のびのびライフアップスクール）	27
16606-a-2	教育評価の研究（その46、47） —思索と体験—	○岸本　英男	（大泉会四期会）	28
16606-a-3	中学生の学校適応に関する諸要因の検討 —「学校の荒れ」への組織的対応とは？—	○大前　泰彦	（和歌山県有田市立初島中学校）	29
16606-a-4	幼児の養育者における「親になる教育」に関する研究	○小谷　正登	（関西学院大学教職教育研究センター）	30
16606-a-5	要求度-裁量度-支援度モデルに基づく大学生のストレッサー —大学生用D-C-Sストレッサー尺度の作成—	○水澤　慶緒里	（関西学院大学大学院文学研究科）	31

口頭発表　第2日　9月9日（日）

口頭発表4　社会・認知　(16501)　9：30～11：10

座長　柿本　敏克

16501-b-1	「明るく元気に」病といいたいくらい ―他人を壊す―	○細部　国明	（城西大学）	32
16501-b-2	状況の現実感尺度の検討 ―仮想世界ゲームの実施条件とシナリオ条件の比較―	○柿本　敏克	（群馬大学社会情報学部）	33
16501-b-3	ユーモア測定尺度の作成(4) ―因子構造の再検討―	○宇惠　弘	（関西福祉科学大学社会福祉学部臨床心理学科）	34
16501-b-4	友人サポートおよび母親の養育態度と大学生の共感性との関係	○福岡　欣治	（静岡文化芸術大学文化政策学部）	35
16501-b-5	課題遂行コストの効果を利用した違反行動誘発プログラムの開発	○和田　一成 臼井　伸之介 篠原　一光 太刀掛　俊之	（平安女学院大学短期大学部保育科） （大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学大学院人間科学研究科） （大阪大学安全管理部）	36

口頭発表　第2日　9月9日（日）

口頭発表5　福祉・犯罪　(16601)　9：30〜11：10

座長　豊村　和真

16601-b-1	障害者に対する意識調査に関する試み (1)	○豊村　和真 高澤　昌代	（北星学園大学社会福祉学部） （北星学園大学大学院社会福祉学研究科）	37
16601-b-2	障害者に対する意識調査に関する試み (2)	○高澤　昌代 豊村　和真	（北星学園大学大学院社会福祉学研究科） （北星学園大学社会福祉学部）	38
16601-b-3	手書きひらがな文字の分類	○関　陽子	（科学警察研究所）	39
16601-b-4	犯罪不安感に関する研究 —地域防犯プログラムの試作—	○高橋　美奈 松田　睦代 桐生　正幸	（関西国際大学大学院人間行動学研究科） （関西国際大学人間学部） （関西国際大学大学院人間行動学研究科）	40
16601-b-5	大学生による犯罪者プロファイリングの検討	○桐生　正幸 高橋　美奈	（関西国際大学大学院人間行動学研究科） （関西国際大学大学院人間行動学研究科）	41

口頭発表　第2日　9月9日（日）

口頭発表6　検査・測定　(16606)　9：30〜11：30

座長　玉井　寛

16606-b-1	PC版VASおよびFaceスケールの妥当性の検討	○木村　友昭	（財団法人MOA健康科学センター/広島大学医歯薬学総合研究科）	42
		津田　康民	（財団法人MOA健康科学センター）	
		内田　誠也	（財団法人MOA健康科学センター）	
		山岡　淳	（財団法人MOA健康科学センター）	
16606-b-2	自己認知からの適応力把握4 —SCT（文章完成法テスト）の応用—	○玉井　寛	（福島学院大学）	43
		澤田　正康	（(株)ニコンシステム）	
		三浦　公一	（キャリアダイナミックス研究所）	
16606-b-3	ピアノ演奏時における心拍数の変化 —呼吸法の効果について—	○藤田　勉	（長野県短期大学幼児教育学科）	44
16606-b-4	多変量解析法を用いた筆者識別 —二筆跡間の筆者識別—	○三井　利幸	（数値解析研究所）	45
		菅原　博嗣	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	
		若原　克文	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	
		関　陽子	（科学警察研究所）	
16606-b-5	筆跡の特徴マッピングに基づく筆者識別に関する研究	○菅原　博嗣	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	46
		若原　克文	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	
		三井　利幸	（数値解析研究所）	
16606-b-6	同一筆者の書字意識が異なる筆者識別	○若原　克文	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	47
		菅原　博嗣	（愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所）	
		三井　利幸	（数値解析研究所）	

口頭発表　第2日　9月9日（日）

口頭発表7　看護　(16901)　9:30〜11:30

座長　山本　勝則

16901-b-1	がん終末期に求められる精神的ケア —ケア提供のタイミング—	○幸野　里寿	（京都大学大学院人間・環境学研究科）	48
16901-b-2	実習直前に感じる不安感への介入 —感情表出とアドバイスの影響—	○山本　勝則 吉田　一子 内海　滉	（獨協医科大学看護学部） （熊本保健科学大学保健科学部看護学科） （千葉大学）	49
16901-b-3	看護師の蓄積的疲労について —年代別の比較検討—	○多久島　寛孝 山本　勝則	（熊本保健科学大学保健科学部） （獨協医科大学看護学部）	50
16901-b-4	国家試験学習における友達仲間の意義 —コミュニティ感覚の探索—	村山　正治 ○石井　紀子	（九州産業大学大学院付属臨床心理センター） （東京都立北多摩看護専門学校）	51
16901-b-5	看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究 —最高と思う授業に含まれるガニエの9教授事象とARCS動機づけ理論—	○森田　敏子 松永　保子	（熊本大学医学部保健学科） （信州大学医学部保健学科）	52
16901-b-6	看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究 —インストラクショナルデザイン・ワークショップ参加者のIDへの理解—	○松永　保子 森田　敏子	（信州大学医学部保健学科） （熊本大学医学部保健学科）	53

ポスター発表　9月8日（土）

ポスター発表1　(16903)　15：30～17：30

在席責任時間　奇数番号　15：30～16：30　偶数番号　16：30～17：30

看護

P-1	看護師が自己認識の力を獲得する要因 —卒後3年目の看護師の意識—	○石井　裕美	（埼玉医科大学短期大学）	55
P-2	看護学生の看護技術修得度に影響を及ぼす要因	○宮﨑　素子 玉木　ミヨ子 蒲生　澄美子 関口　恵子 今野　葉月 佐藤　敬子 三宅　郁子 村田　和美 本多　和子 西土　泉 石井　裕美	（埼玉医科大学短期大学） （埼玉医科大学短期大学） （埼玉医科大学短期大学） （埼玉医科大学短期大学） （埼玉医科大学短期大学） （毛呂病院看護専門学校） （毛呂病院看護専門学校） （毛呂病院看護専門学校） （帝京大学） （埼玉医科大学短期大学） （埼玉医科大学短期大学）	56
P-3	看護学生の老年者対象職場選択への関連要因	○前田　恵利	（鳥取大学医学部保健学科）	57
P-4	看護学生のストレス因子構造（その5） —全日制と定時制の比較—	○小竹　久実子 今留　忍 内海　滉	（埼玉県立大学保健医療福祉学部） （杏林大学保健学部） （千葉大学）	58
P-5	統合失調症の人についてのビデオ視聴による偏見低減の効果 —AMD尺度とSDSJ社会的距離尺度による患者談話条件と医師説明条件との比較—	○小平　朋江 伊藤　武彦 松上　伸丈 井上　孝代	（聖隷クリストファー大学） （和光大学） （和光大学） （明治学院大学）	59
P-6	健康食品のイメージに関する研究 —看護学科学生と栄養学科学生の比較—	○關戸　啓子 内海　滉	（徳島大学医学部） （千葉大学）	60
P-8	看護経験の有無と行為手順の記述 —清拭手順の記述をもとに—	○星　薫 及川　理恵	（放送大学教養学部） （千葉県立野田看護専門学校）	61

矯正・非行・犯罪

P-9	窃盗犯のプロフィールと犯行手口の質的分析	○福本　純一 小杉　考司 福田　廣 松野　凱典	（山口県警科学捜査研究所） （山口大学教育学部） （山口大学教育学部） （追手門学院大学心理学部）	62
P-10	近隣地域における犯罪被害リスク認知に対して —知覚された環境が与える影響の検討—	○玉井　航太 池田　満	（国際基督教大学大学院教育学研究科） （国際基督教大学大学院教育学研究科）	63

交通

P-11	酒気帯び運転で取締りを受けた運転者の飲酒・運転パターン —質問紙調査結果—	○岡村　和子	（科学警察研究所）	64

産業・職業

P-12	心理会計 —3つの商品の前払い・後払いの一対比較(2)—	○蜂屋　真	（流通科学大学サービス産業学部）	65
P-13	中高年齢求職者のための自己理解支援ツールの開発	○長縄　久生	（労働政策研究・研修機構労働大学校）	66
P-14	EAPにおける復職支援プログラムの効果評価 —ストレスマネジメントスキルの習得を中心に—	○矢野　優人 大野　太郎	（関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科） （関西福祉科学大学健康福祉学部）	67
P-15	職業-家族生活の調整に関するPAC分析 —専門的スキルを有する既婚女性のパートタイム労働者としての再就職—	○石橋　里美 内藤　哲雄	（株式会社市場価値測定研究所） （信州大学人文学部）	68
P-17	障害者雇用拡大のための地域環境支援の方策(1) —障害者を雇用している事業所の諸条件の確認—	○吉光　清	（九州看護福祉大学）	69

P-18	産業組織の安全文化レベルに関する調査研究 —同一企業内事業所間の比較—	○奥村　隆志 余村　朋樹 細田　聡 施　桂栄 井上　枝一郎	(財団法人　労働科学研究所) (財団法人　労働科学研究所) (財団法人　労働科学研究所/関東学院大学文学部) (財団法人　労働科学研究所/関東学院大学人間環境学部) (財団法人　労働科学研究所/関東学院大学人間環境学部)	70
P-19	健康・美容関連商品の効果に対する推論と購買の傾向 (1) —消費者は本当に健康に効果があると思って買っているのか—	○花尾　由香里 岡村　一成	(東京富士大学経営学部) (東京富士大学経営学部)	71
P-20	在職者のストレスに関する研究 —研究の取り組みと方向性について—	○森下　高治	(帝塚山大学心理福祉学部)	72

社会・文化

P-21	日本における介護支援者としての FOW の社会心理学的研究 (1) —高齢者介護支援者としての比国人の心理的適性の研究—	○荻野　七重 齊藤　勇 山田　竜平	(白梅学園短期大学心理学科) (立正大学心理学部) (立正大学大学院心理学研究科)	73
P-22	気まずい内容伝達にメールはどの程度有効なのか	○濱　保久	(北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科)	74
P-23	日本における介護支援者としての FOW の社会心理学的研究 (2) —援助欲求・行動の日比比較文化的研究—	○山田　竜平 齊藤　勇 荻野　七重	(立正大学大学院心理学研究科) (立正大学心理学部) (白梅学園短期大学心理学科)	75
P-24	室内と屋外によるパーソナルスペースの変化についての研究 —明るさの影響も含めて—	○雨森　雅哉 中尾　彩子 松尾　千尋 白井　清太郎 山岡　淳	(国士舘大学大学院人文科学研究科) (文京学院大学人間学部) (株式会社ニチイ) (国士舘大学大学院人文科学研究科) ((財)MOA 健康科学センター)	76
P-25	日本における介護支援者としての FOW の社会心理学的研究 (3) —対人オープナー特性の日比比較文化的研究—	○齊藤　勇 山田　竜平 荻野　七重	(立正大学心理学部) (立正大学大学院心理学研究科) (白梅学園短期大学心理学科)	77

P-26	台湾留学生による母国の人間関係スキーマの PAC 分析	○内藤　哲雄	（信州大学人文学部）	78
P-27	日本人中高年女性の化粧行動に関する研究 —自意識との関係分析の結果から—	○八田　武俊	（岐阜医療科学大学保健科学部）	79

人格

P-28	社会的望ましさ反応傾向と承認欲求との関連の検討 —賞賛獲得欲求因子及び拒否回避欲求因子との相関分析から—	○河内　和直	（群馬社会福祉大学）	80
P-29	「血液型性格学」は信頼できるか（24 報）Ⅰ —「お笑い芸人」に血液型の特徴はあるか—	○浮谷　秀一 大村　政男 藤田　主一	（東京富士大学） （日本大学） （日本体育大学）	81
P-30	9 か月児の母親のレジリエンスが育児ストレスに与える影響の検討	○小池　はるか 河合　優年 山本　初実	（科学技術振興機構） （科学技術振興機構/武庫川女子大学） （科学技術振興機構/国立病院機構三重中央医療センター/三重大学連携大学院）	82
P-31	「血液型性格学」は信頼できるか（第 24 報）Ⅱ —「お笑い芸人」に血液型の特徴があるのか（続）—	○大村　政男 浮谷　秀一 藤田　主一	（日本大学） （東京富士大学） （日本体育大学）	83
P-32	性能的性格 (6) —予測の妥当性の検討 (1)—	○川島　大司 久米　稔	（東海学院大学人間関係学部） （適合性評価研究所）	84
P-33	首尾一貫感覚 (SOC) と 5 因子性格特性の関連について	○銅直　優子	（流通科学大学サービス産業学部医療福祉サービス学科）	85
P-34	MSC（創造的構え）テスト改訂の試み (11) —因子分析による質問項目の識別度 2—	○寺澤　美彦 久米　稔 成田　猛 高野　隆一 伊賀　憲子 内藤　美智子	（日本福祉教育専門学校） （適合性評価研究所） （秋田看護福祉大学） （秋田看護福祉大学） （文化女子大学） （松本短期大学）	86

P-35　抑うつ，自我構造と，日常生活における成功，失敗経験の認知との関連についての一考察　○林　潔　（白梅学園短期大学）　87

ポスター発表　9月8日（土）

ポスター発表2　(16904)　15：30～17：30

在席責任時間　奇数番号　15：30～16：30　偶数番号　16：30～17：30

認知・感情

P-36	乳癌検診の受診行動意図における影響要因の検討 ―年齢階級別での防護動機と期待強化動機の影響関係について―	○大森　直樹	（大阪医科大学附属病院中央放射部）	88
P-37	視覚・聴覚の二重課題における注意の偏りについての研究 (3)	○櫻井　美由紀 岩崎　祥一	（東北大学大学院情報科学研究科） （東北大学大学院情報科学研究科）	89
P-38	音声の基本周波数の高低が聞き手の感情認知におよぼす影響	○永光　優	（文京学院大学大学院人間学研究科）	90
P-39	乳児の泣き声が育児中の女性に及ぼす心理生理的影響 ―育児ストレスとの関連性―	○高橋　有里 桐田　隆博	（岩手県立大学看護学部） （岩手県立大学社会福祉学部）	91
P-40	主観的幸福度と仕事の優先度の関係	○事崎　由佳 岩崎　祥一	（東北大学大学院情報科学研究科） （東北大学大学院情報科学研究科）	92
P-41	スケッチマップ法の信頼性の検討 ―距離や角度の指標を用いて―	○白井　清太郎	（国士舘大学大学院人文科学研究科）	93
P-42	軽度の一過性運動による感情と圧反射感度の変化 (1)	○満石　寿	（文京学院大学大学院人間学研究科）	94
P-43	性的嫉妬の男女差と加齢による変化 ―高校生・大学生・45歳以上を対象とした探索的研究―	○本多　明生	（いわき明星大学人文学部心理学科）	95

臨床・相談

P-44	青年期の食態度と精神的健康との関連について	○清水　美帆	（桜美林大学大学院国際学研究科）	96
P-45	主観的ウェルビーイングの測度に関する研究	○角野　善司	（高崎健康福祉大学健康福祉学部）	97
P-46	児童館・学童保育所指導員と臨床心理士の連携についての面接調査	○渡辺　亜紀子 伊藤　亜矢子	（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科） （お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）	98
P-47	青年期の自己愛と家族機能について	○山本　美知子	（桜美林大学大学院国際学研究科）	99
P-48	大学生の生活不安と自己肯定感との関係	○鴫原　依子	（桜美林大学大学院国際学研究科）	100

検査・測定

P-49	自覚的ストレスと食習慣、生理指標との関連について	○内田　誠也 木村　友昭 津田　康民 山岡　淳	（(財)MOA 健康科学センター） （(財)MOA 健康科学センター） （(財)MOA 健康科学センター） （(財)MOA 健康科学センター）	101
P-50	反応歪曲を補正した心理特性値の推定	○服部　環	（筑波大学大学院人間総合科学研究科）	102

発達・教育

P-51	大学生の社会的スキルの検討　1 —KiSS-18 と K-SCT による比較—	○橋本　泰子 西村　和久 佐藤　嘉晃	（桜美林大学大学院） （桜美林大学大学院） （城西大学）	103
P-52	アレルギー児童の PAC 分析 —心理をふまえた教育的配慮のために—	○梶原　隆之	（文京学院大学人間学部）	104

P-53	大学生の社会スキルの検討 2 —風景構成法における検討—	○西村　和久 橋本　泰子 佐藤　嘉晃	（桜美林大学大学院） （桜美林大学大学院） （城西大学）	105
P-54	大学生のアルバイトと学業	○三井　清美	（文京学院大学大学院人間学研究科）	106
P-55	障害のある人の表現と造形活動に関する研究 —障害のある人の造形作品はどのようにして生まれるか—	○山田　宗寛	（社会福祉法人おおつ福祉会唐崎やよい作業所）	107
P-56	中期語学留学生のニーズと資源 —4 ヶ月間の語学留学事例から—	○岡崎　琴恵 伊藤　亜矢子	（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科） （お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）	108
P-57	全方位映像通信システムを利用したグループワークの実験と評価 (1) —グループワークの実験—	○井上　孝之 青木　慎一郎 柴田　義孝 佐藤　洋介	（岩手県立大学社会福祉学部） （岩手県立大学社会福祉学部） （岩手県立大学ソフトウエア情報学部） （岩手県立大学ソフトウエア情報学部）	109
P-58	保育学生における子どものイメージ研究	○林田　りか 中　淑子 遠藤　美根子 内海　滉	（県立長崎シーボルト大学） （元県立長崎シーボルト大学） （独協医科大学） （千葉大学）	110
P-59	全方位映像通信システムを利用したグループワークの実験と評価 (2) —グループワークの評価—	○青木　慎一郎 井上　孝之 柴田　義孝 佐藤　洋介	（岩手県立大学社会福祉学部） （岩手県立大学社会福祉学部） （岩手県立大学ソフトウエア情報学部） （岩手県立大学ソフトウエア情報学部）	111
P-60	就職活動に対する自己効力感 —大学生を対象とした測定—	○太田　さつき 田畑　智章 岡村　一成	（東京富士大学経営学部） （東京富士大学経営学部） （東京富士大学経営学部）	112
P-61	学習への動機づけが試験成績に与える影響 I —進学動機と学習スタイル—	○松田　浩平 佐藤　恵美 中山　智恵	（文京学院大学） （白百合女子大学大学院文学研究科） （文京学院大学大学院人間学研究科）	113

P-62	発達障害児を持つ母親とイルカ触れ合い活動 —活動前後の母親のストレス変化—	○植田　有香 宮川　治樹	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学心理福祉学部）	114
P-63	学習への動機づけが試験成績に与える影響Ⅱ —試験成績と原因帰属—	○佐藤　恵美 中山　智恵 松田　浩平	（白百合女子大学大学院文学研究科） （文京学院大学大学院人間学研究科） （文京学院大学）	115
P-64	小学校における学生サポーターの活用の検討 (1) —事前のニーズ調査を通して—	○佐脇　亜依 神澤　創	（帝塚山大学大学院人文科学研究科） （帝塚山大学）	116
P-65	学習への動機づけが試験成績に与える影響Ⅲ —学習能力と試験成績—	○中山　智恵 松田　浩平 佐藤　恵美	（文京学院大学大学院人間学研究科） （文京学院大学） （白百合女子大学大学院文学研究科）	117
P-66	母親の育児ストレスの規定要因の分析 —親の養育態度、愛着、ならびにソーシャルサポートとの関連—	○南　憲治 寺見　陽子	（神戸親和女子大学発達教育学部） （中部学院大学子ども学部）	118

特　別　講　演

【特別講演】9月9日（日）14:40～16:10　16606教室

The hierarchy model of driving behavior and driver education in Europe - new trends

Prof. Esko Keskinen (Turku University, Finland)

運転行動の階層モデルとヨーロッパの運転者教育の新たな展開

エスコ・ケスキネン教授（フィンランド、トゥルク大学）

最近のヨーロッパの運転者教育システムの理論的な出発点は、Keskinen (1996)で提唱された運転行動の認知的階層理論である。このモデルでは、運転者行動は階層(水準)として記述される。下位の二つの水準は「車両マヌーバーのスキル」と「交通状況の支配」であり、多くの運転者教育がこの両側面に関して行われている。第三の水準は「運転の目標と社会的文脈」という水準であり、この水準に関わる側面はトリップの計画やトラベルの決定など日常生活の具体的な文脈と関係している。さらに、最上位の水準として、「人生の目標と生活技能」があり、これは運転と直接に関わるというより、ドライバーの人生の動機や目標と関わっており、同様に衝動コントロールといった個人の能力と関連している。

中心となっている考えは、安全運転に関する限り、運転行動に影響する重要な要因が階層の最高水準である「人生の目標や生活スキル」に関係しているということである。この水準はドライバーの運転行動や衝動をコントロールしている彼らの動機や技能とも関係している。若年ドライバー問題、とりわけ若年男性問題は交通法規の知識や車両のコントロールの問題だけではなく、個人の動機をいかにコントロールし、自分自身をいかにコントロールするかという問題である。

動機的側面に関連させてドライバーのタスク(課題)を理解するという考え方は訓練手法にも影響を与える。伝統的な教師中心の教育は、交通法規や適切な行動の仕方を教えるためには適切だがそうでなければ不適切である。ドライバーに欠けていることは、基礎的な知識ではなくて、自分自身の動機と自分の運転に影響する要因を評価する技能である。もう一つの重要な考え方は、学習場面の中央に位置して、学習という仕事をするのはそのドライバー自身であるという点である。

フィンランドやスイスで実施された２段階運転者教育システムでは、こうした自己評価に関する内容とそれに対応した教育技法（たとえばフィードバック法）が導入された。最近のＥＵプロジェクトである Gadget や DAN では、ヨーロッパの運転者教育の内容と手法について大規模な調査研究が実施されており、階層理論及びそれに関連する教育手法が活用されている。

大会企画シンポジウム

【大会企画シンポジウム】9月8日（土）13：00～15：00　16501教室

財団法人関西エネルギー・リサイクル科学研究振興財団後援

災害リスクの認識と対応：心理学がとらえる過去、現在、そして未来

企画と司会：中谷内一也（帝塚山大学）

話題提供者：木下冨雄（国際高等研究所）　北川博巳（兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所）　釘原直樹（大阪大学）

企画の趣旨：災害は心理学者にとって興味深い研究対象である。災害への対応には幅広い研究分野からのアプローチが可能であり、実務的な応用に対する社会的なニーズも高い。すなわち、すべての分野の心理学研究者が理論的、ないしは、実践的に貢献しうることが災害研究の特徴である。本シンポジウムでは、さまざまな災害やそのリスクがかつてどのように認識され、それが時間の経過に伴ってどのように変化してきたのか、そして、これまで経験してきた災害の諸相から何を学んで未来のマネジメントにつなぐことができるのか、という問題を検討したい。

釘原直樹（大阪大学）マスコミが攻撃対象とする災害時のスケープゴートの変遷

災害や戦争で多数の人々が死亡するような事態が発生した場合、しかもその原因を特定することが難しい場合、人は明確な原因（責任の所在）を見出すべく努力するような志向性を持っている。人間は曖昧な状況には耐えられずフラストレーションに陥る。そして責任所在のターゲットとして最も選択されやすく、また人々のフラストレーションを解消しやすいのは特定の人や組織集団である。ゆえに例え自然災害のような不可抗力の場合でも、非難攻撃の対象（スケープゴート）として個人や組織が選び出される。スケープゴートは時間経過にともなって個人から集団や組織、そして社会全体へと移り変わるというイメージがある。この現象の存在を確認するために新聞記事の分析を行い、それをもとにスケープゴートの波紋的拡散の数理モデルを構成し、事件の回想調査や時系列的記憶バイアス実験を通してモデルの検証を行う。

北川博巳（兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所）災害弱者の避難と生活-災害から何を学び何を改善すべきか-

近年大地震や水害などの災害が発生するたびに、高齢者・障害者の避難問題がクローズアップされている。たとえば、安否確認で地域の中に要介護者がどの家にいるのか把握していない、水害のときは逃げずに家の二階にいた車いす利用者などの報告がある。また、高齢者は環境変化の対応が難しく、避難所での暮しにストレスを受けやすいし、復興後もこれまでの地域のつながりが希薄化するなどの問題がある。そういう意味では、健康な人たちが自力で避難する認識を変え，より多様化した被災者を考えた防災計画をマネジメントしてゆく必要もあろう。とくにハード面だけでなく、地域の人材育成などソフト面的な対応も考慮したマネジメントも重要となるであろう。

木下冨雄（国際高等研究所）リスクコミュニケーションの思想と技術 -リスクへの対応はどう進化したか-

現代は「リスク社会」と呼ばれることがある。しかし統計資料を見れば、昔に比べてそれほど客観的リスクが増えた訳ではない。増えたのはむしろ主観的リスクである。「安全と安心」というスローガンが巷に溢れている１つの理由はそれであろう。この時代の空気を反映して、リスクへの対応も相当変化してきた。昔は「知らしむべからず、由らしむべし」とか「無事故神話」的な専門家中心の広報が普通であったが、最近はステークホルダー全員に対する情報提供と理解が求められるようになり、そこでリスクコミュニケーションという、新しい共考の技法が脚光を浴びることになった。ここではその思想と技法について概要を述べる。

自主企画ワークショップ

【ワークショップ1】 9月8日(土) 13:00～15:00 6F 16601教室

若手研究者が提案するストレスマネジメント教育のカタチ

～産業場面を想定して～

○加藤純子[1)]　矢野優人[2)]　福本敏宏[1)]　小西浩嗣[1)]

1) 帝塚山大学大学院人文科学研究科　2) 関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科

【ねらい】近年、産業場面でメンタルヘルスの問題が大きく取り上げられている。厚生労働省（旧労働省）が 2000 年に発表した「事業場における労働者の心の健康づくりのための指針」（以下、メンタルヘルス指針）に基づき、各企業や組織はメンタルヘルス教育を何らかの形で取り入れている。しかし、実情に合った有効な教育を展開しにくいのも現状である。そこで、このワークショップではストレスマネジメント教育に焦点を絞り、受講者にとってより“ためになる”ことをねらいとし、心理学的アプローチにとどまらず、生理学的データを示し、実践的アプローチにも広げた教育方法を提案する。ワークショップ後半は、前半の提案を基にフロアの方々とストレスマネジメント教育について検討したい。

【時間配分】1)話題提供と質問受付：80~90 分、
2)フロア参加者と討論：30~40 分（受けた質問を基に開始）

【話題提供】

1. EAP 活動におけるストレスマネジメント教育について

（関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科　矢野優人）

メンタルヘルス指針では、事業場におけるメンタルヘルスケアの具体的な進め方として、①セルフケア、②ラインによるケア、③事業場内産業保健スタッフ等によるケア、④事業場外資源によるケアの 4 つを推奨している。その中で近年では、事業場外資源としての「従業員支援プログラム（Employee Assistance Program : EAP)」が注目されてきており、職場のストレス対策を実施する際、事業所内に産業保健スタッフが十分に配置できない場合には、EAP によるメンタルヘルス研修が活用されてきている。そこで、職場のストレスマネジメント教育を事業場外資源として実践している EAP 機関を取り上げ、その現状を概観する。また、職場のメンタルヘルスケアでは、うつ病による休職者の増加に伴う「職場復帰支援」も重要な課題の一つとして取り上げられている。ここでは主に関西福祉科学大学 EAP 研究所で実施されている復職支援プログラムの取り組みについて紹介し、職場復帰支援におけるストレスマネジメント教育について取り上げる。そして、それらの取り組みの効果などをもとに、今後の産業領域におけるストレスマネジメント教育の課題や導入のカタチについて検討する。

2. 生理学的データが示す、教育の“カタチ”へのヒント

（帝塚山大学大学院　加藤純子）

心の問題が身体症状となって出現するように、心と身体の健康は関連している面がある。従って、ストレスマネジメント教育を行うに当たり、ストレスの生理学的側面を理解して教育に取り入れることも従業員のストレスに対する理解を深めるうえで必要と考えられる。しかし、心理学的アプローチに生理学的側面を取り入れたり、関連づけが十分になされていないのが現状と考える。生理学的側面は、心理学の分野で求められる「エビデンス・ベースド」を満たす要素も多く含んでいる。そこで、まずストレスの心理学的過程と生理的反応について概観し、それを踏まえて、「心」と「身体」に関する研究事例を数例紹介し、これらの事例から今後のストレスマネジメント教育のカタチについて議論・検討したいと考える。

3. アドベンチャープログラムというスタイル

（帝塚山大学大学院　小西浩嗣 福本敏宏）

アドベンチャー教育とは、元来、自然環境の中での活動を通して個人・グループが学び成長するための教育手法である。大自然の中で行われる活動だけに限定せず、日常において、人が持つ成長を妨げる固定観念（不可能・無理・わからない・できない等）や意識を、「もしかしたら、できるかもしれない…」にシフトチェンジすること自体がアドベンチャーと捉えている。アドベンチャー教育の適用分野として、難波（2001）は、学校教育（授業カリキュラムへの導入）、地域における青少年教育指導者育成、企業研修、メンタルヘルス面・医療機関対象の研修、スポーツチームの強化などをあげており、アドベンチャー教育発祥のアメリカでもアドベンチャープログラムによるカウンセリングの応用として、中学・高校や特別教育校などの学校分野での ABC（Adventure Based Counseling)、病院や療養施設等医療機関での治療プログラム、さらには罪を犯した青少年の更生プログラム等、多様な分野において導入されている（Schoel,J. Prouty,D. & Radcliffe,P. 1989)。今回、実際にプログラムを実施したときの映像や、参加者と共に一部のプログラム体験を通して、産業場面でのメンタルヘルスに有用であるか検討する。

【ワークショップ2】 9月8日(土) 13:00～15:00 6F 16602教室

PAC分析の過去・現在・未来

—個を科学する方法のさらなる発展にむけて—

企画者：伊藤　武彦[1)]　話題提供者：内藤　哲雄[2)]　井上　孝代[3)]　指定討論者：岸　太一[4)]

([1)] 和光大学現代人間学部　[2)] 信州大学人文学部　[3)]明治学院大学心理学部　[4)] 東邦大学医学部)

キーワード：SPSS, HALWIN, 実施のコツ, 指標, 解釈の抽象度, 拡張と応用

このセッションの目的は、個を科学する方法としてのＰＡＣ分析の特徴とこれまでの研究成果をふり返り、今後の新しい分野の拡大や、技法的な洗練について、討論する場を提供することである。具体的には、内藤(2007) で指摘された諸事項について具体的に検討していきたい（以下は、内藤 (2007) を一部改変して引用)。

ＰＡＣ分析のＰＡＣは、個人別態度構造(Personal Attitude Construct)の略称である。元々は、個人別に態度構造を測定するために開発されたものであるが、現在では、態度やイメージの構造だけでなく、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスまで測定できることが確認されている。当該テーマに関する自由連想（アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、クラスター構造についての被検者のイメージや解釈を聴取すること、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度・イメージ構造を測定する方法である。統計学と了解的方法が、相互補完的・相乗的に作用するものとして合併されている。

検査者がもつ理論的なスキーマ（ものの見方）に沿って検査者が変数を決定するのではなく、被検者自身が暗黙裏に（気づかずに）もっているスキーマに沿って変数を連想していくことで、研究者が気づかなかった関連変数や、その関係構造を発見することが少なくない。個人特有の変数の全体構造が解明されることから、行動問題の内容やメカニズムを発見(診断的評価)するのに有効であり、具体的な変数（連想項目）は認知行動療法の治療プログラムに組み込むことができる。他方、被検者が自己自身のクラスター構造についてのイメージや解釈（意味づけ）を、自ら語り、検査者とともに構造の意味を発見していく間主観的（了解的）な解釈技法は、現象学的なデータ解釈技法であるとともに、カウンセリングそのものであり、ナラティブ・セラピーとしての特徴を持っている。これらの特徴から、臨床心理学分野での利用が多い。他方で、個人の暗黙裏のスキーマを分析できることから、対人認知や人間関係スキーマの研究にも利用されている。本心を容易に明かさない中国人の面子の比較文化的研究などの例は、現象社会学的なアプローチに適していることを示す。またわかりやすい教え方、授業でのつまずきなどの教授法や授業の分析、個人の学習診断に関しては、日本語教育や多文化間教育に利用されている。家族イメージや担任教師などによる学級構造の分析に関する研究は、集団の分析にも活用できることを示している。

上記のようにＰＡＣ分析は、態度やイメージの個人別構造分析に限定されるが、心理学を超えた多くの分野で利用できる技法である。しかし、昨今の利用増加傾向は、技法の価値を理解してというよりも、ＰＡＣ分析で用いるクラスター分析がHALWIN注１）やSPSSなど市販の統計ソフトを使って簡単にできるからではないかと思うのである。利用者からの質問や相談に応じていると、ＰＡＣ分析特有の知識や技術についてよりも、それ以前の基本となる科学的アプローチがわかっていない方もいるようで、戸惑うことが少なくない。いったい何を調べたいのかが伝わってこず、デンドログラムの切断や解釈、結論に首をかしげたくなるようなものがある。ＰＡＣ分析を用いると、実験計画法や統計についての知識がなくても、個別の対象者にインタビューして内容分析した経験がなくても、形式的・機械的に記述統計学を適用し、被検者自身に問いかけながら質的分析ができる。しかし現実には、変数も仮説も、理論の生成すらも、すべて被験者任せ、運任せで、クラスター構造は検査者の事前のイメージに合わせて読み取り、被検者の言葉は自分の見解に合うところだけ繋ぎ合わせて解釈し、結論を導き出している人さえいる。

そこで、ＰＡＣ分析を効果的に利用できるように、科学的で独創的な研究をするための基礎知識について概説するとともに、ＰＡＣ分析と関連する理論や技法との比較をしながら本技法の特徴を明らかにしたい。ついで、研究テーマに応じた連想刺激の作成の仕方、デンドログラムの切断、結節の筋道の読み取り、各連想反応への補足質問の仕方、各連想反応項目の＋－０に基づくクラスターの解釈、総合的解釈の仕方について、実践的に解説する。実施技法の詳細については、『ＰＡＣ分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』（内藤, 2002）を参照していただきたい。

なお、ＰＡＣ分析は、被検者個人のプライバシーに関わる情報を入手するだけでなく、防衛的に抑圧している問題に直面させる危険性を持つ技法である。被検者のプライバシーと権益の保護を最優先すると共に、実施を拒否したり中止できることについて明確に伝えることが必要である。実施について承諾を得ることができても、学会発表や論文発表での同意を得られないことが少なくない。このような倫理的問題についても討論したい。

【文献】内藤哲雄(2007)「ＰＡＣ分析を効果的に利用するために」内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一（編)『ＰＡＣ分析事例集　第１巻』ナカニシヤ出版（印刷中)

【ワークショップ3】9月8日(土) 13:00～15:00 6F 16606教室

マイノリティに対するスティグマ・偏見・差別の低減

― エンパワメントに繋がる支援―

企画者：長坂　晟[1)]

話題提供者：長坂　晟[1)]　北風 菜穂子[2),]　飯田 敏晴[,3)]

指定討論者：伊藤武彦[4)]

([1)] 和光大学社会文化総合研究科　[2)]明治学院大学心理学研究科　[3)]国立国際医療センター精神科　[4)]和光大学　現代人間学部)

キーワード：マイノリティ，エンパワメント，スティグマ，偏見，差別

マイノリティに対する支援を考えるにあたり，スティグマ・偏見・差別の問題を避けて通ることはできない。本シンポジウムでは，HIV・性同一性障害・性被害者へのスティグマ・偏見・差別の問題について，その実態について改めて見直し，これからの支援を模索することを目的とする。性に関連する偏見に直面することなしに，これらの領域での支援を行うことはできない。支援のあり方は現時点で確立しておらず，今後の研究および実践が期待される領域である。

発表内容は，HIV 感染症／AID 患者を取り巻く実情，性同一性障害者の治療段階に即した支援の模索，性被害と関連の深いレイプ神話研究の紹介をする。

第一に，性同一性障害とは，身体的性別（sex）と心理的性別(gender)が一致しない人々を指す用語である。当事者は，生きていく術として，心の性と合致した振る舞いや行動をするが，周囲の人は，彼らが非典型的であることを理由に偏見を抱く。

また，身体を心の性へ合わせていく治療や，法的手段がさまざまあり，彼らは多くの選択をしながら，そのプロセスを経ていく。当事者を取り巻く人々の多くは，一つの治療が終わると，アイデンティティが自然に確立し，社会の中で自然に生きていくことが可能になると思われている。しかし，性同一性障害でない人々がたどる発達的プロセスにはない独特なアイデンティティの揺れが存在する。

そして，gender の方へ変化する獲得的側面と，治療などを受ける代わりに家族や職を失うなど喪失的側面を一方向的に進むのではなく，繰り返しや停滞しながら進行していく(長坂,2006)。このように，アイデンティティを再確立することや，再確立したアイデンティティで生きていくことは当事者にとっては想像以上に辛い作業であり，社会参加が不可能なケースもある。

性同一性障害者の支援を考える際，当事者に重点を置く以上に，周囲ひいては社会に対して正しい知識や理解を付与する心理教育的な働きや，専門家が研究を進め資料を蓄積することにより，当事者の正しい情報を発信していく姿勢が求められている。

本シンポジウムでは，当事者の語りから，性同一性障害者が治療過程において体験する偏見や差別を紹介し，社会がどのような視点で彼らを支援し，働きかけをしていくべきかについて検討する。

第二に，厚生労働省のエイズ動向委員会は，2006 年の 1 年間で新たに報告されたエイズウィルス(HIV)の感染者が，前年より 82 人増え，過去最高の 914 人と発表した。その増加ペースは拡大傾向にある，という。尚，この数は医療機関や保健所における抗体検査により判明された実数である。実際には，把握されない多くの感染者の存在が推測される。例えば，報告者は全体の 20%のみとする国もある(Zhou, 2007)。各国の診療体制や状況により多少の差異はあるが，こうした感染拡大の背景として，HIV/AIDS に対する誤った理解，当事者への偏見・差別の存在が共通して指摘されている(例えば，Herek etal., 2003; Dias et al, 2006)。それは，抗体検査の受検やパートナーへの告知だけでなく，予防的介入すら困難なものとする（Zhou, 2007)。

治療技術の進歩により慢性疾患となった今日，当事者の QOL という観点から「エイズに対する偏見と差別」を取り上げ，その低減につながる方策について考えることは急務の課題と考えられる。本報告ではその一貫として，近年の研究を概観し，大学生を対象とした実践例を報告したい。

第三に，レイプ被害者は直接的な身体的・精神的な被害だけでなく，ある種のスティグマを付与され，間接的に傷つけられることが多い。これを実際の被害に付随して起こる被害，二次被害と呼ぶが，二次被害が起こる背景には，レイプやレイプ被害者への偏見があると考えられている。

被害者の責任を追及し，加害者を免責するような思い込みをレイプ神話(rape myth)と呼び(Burt,1980)，大渕他(1985)では，性犯罪者が一般大学生よりもレイプ神話を支持していることを明らかにし，レイプ神話が性犯罪を助長する可能性を指摘している。2005 年の日本における強姦事件は 1683 件(犯罪白書 2006 年版)であるが，多くの隠数が予想される。これからの性被害者支援は，被害者本人への心理的アプローチだけでなく，性犯罪の予防及び社会の偏見をなくす努力による二次被害の予防の視点が不可欠である。

最近の一般大学生のレイプ神話支持率の調査から，レイプ神話には強く信じられている側面とそうでない側面があることが明らかになった。この結果を基に，これからの予防プログラムのあり方と問題点について検討する。

【ワークショップ4】 9月9日(日) 12:30～14:30 5F 16501教室

日本応用心理学会の過去・現在・未来を語る

企　画　者　藤田主一（日本体育大学）
司　会　者　浮谷秀一（東京富士大学）
話題提供者　大村政男（日本大学）……過去を語る
話題提供者　荻野七重（白梅学園短期大学）‥現在を語る
話題提供者　田中真介（京都大学）……未来を語る
指定討論者　内藤哲雄（信州大学）
指定討論者　大坊郁夫（大阪大学）

【企画の趣旨】 日本応用心理学会の歴史は古く、記録によれば昭和2年から関西地区で応用心理学の研究会が継続して開かれ、また同様に昭和6年から応用心理学会の会合が東京で継続的に開かれた。そして昭和9年4月、東西の応用心理学会の合同第1回大会が京都帝国大学を会場にして開催され、以後の（日本）応用心理学会大会は4回を数えた。

戦争による中断の後、復興第1回大会が早くも昭和 21 年に開かれて以来、日本応用心理学会は 60 周年の節目を迎えた。輝かしい歴史と伝統を礎に発展してきた本学会の過去と現在を知り、未来を展望するよい機会の到来である。

話題提供者のうち、大村政男先生に過去、荻野七重先生に現在、田中真介先生に未来を語っていただき、本学会のあるべき姿を追求したい。

【話題提供】 ＜大村政男＞

復興第1回大会は昭和 21 年 3 月 17 日（日）、会場は当時神田三崎町の日本大学本部があった建物。この建物は空爆をかろうじて免れていたが、まわりは焼野が原であった。第1回の大会での発表件数はわずか 11 件であったが、第2回（昭和 21 年 10 月、慶應義塾大学）になると 48 件になる。その後、発表件数は第 3 回 37 件、第 4 回 42 件、第 5 回 23 件、第 6 回 45 件と up & down したが、第 7 回では 68 件に達し、第 11 回大会（昭和 26 年 7 月、千葉大学）では初めて 110 件になった。当時、春秋 2 回の大会だったので、主催校も発表者も大忙しであった。発表の形式はすべて口頭発表。発表時間は 1 件約 15 分ぐらいに制限されていたが大先生ほど時間を無視した。資料は大きな紙に墨汁で書いたものを黒板に貼っていた。マジックインキやT字形の掲示具が使われたのはずっと後のことになる。

この学会は復興当時は「応用心理学会」と称していたが、昭和 26 年 11 月から日本という文字を冠するようになった。昭和 5 年ごろの名称にもどったのである。学会には、教育心理部会・産業心理部会・犯罪心理部会・臨床心理部会などの部会があって、猛烈な活動（関係官庁などに対する建議書や陳情書などの提出）を展開した。現在、学界で課題になっている資格問題は、昭和 29 年 7 月 4 日、名古屋大学で開催された第 17 回大会のおりに口火が切られていたのである。「心理学者の心理学」を問いたいところである。

＜荻野七重＞

大村先生の話題提供を引き継いで、ここ 15 年間の会員数と機関誌の内容を概観して把握したこと、加えて、事務局長や常任理事として知りえたことを中心に、日本応用心理学会の現在を考えてみたい。

1996 年（平成 8 年）の本学会の会員数は約 900 名、その前の年の約 1000 名から大きく減少しているが、これは長期会費未納者を整理したことによるものである。したがってこの年、実質的な会員数がほぼ確定したと考えられる。その後会員数は徐々に増加し、現在約 1100 名の会員によって成り立っている。この間の主な出来事・変化は、認定応用心理士制度が発足したこと、学会賞・奨励賞制度（今回、学会賞に1本化され論文賞・実践活動賞の 2 部門になる）が設けられたこと、国際交流委員会の発足により、海外への学会の発信が行われるようになったこと、ホームページや倫理綱領が作られたこと、会員による理事選挙制度が発足したことではないかと思う。そうした意味では、日本応用心理学会にさまざまな新しい風が吹き始めたといえるのではないかと考える。

しかし、順風満帆で進んでいるといえるかどうかはいささか疑問である。例えば 1996 年の「応用心理学研究 Vol.22」から、機関誌は年 2 巻の発行と決まった。ところが、資料で示したいと思うが、この年から掲載論文の数が減少し、2001 年を待ってようやく 2 巻の発行を実現するに至っている。他の諸学会に先駆けて英文論文の掲載を可能にしたことは進展であるといえるが、「応用心理学研究」への投稿論文数はあまり多くない。今年度初めに機関誌編集委員会は新しい方針を打ち出したが、こうした改革を含め、低迷の問題点はどこにあるのか、その打開策は何かを検討し、学会の活性化を次世代に託していきたいと思う。

＜田中真介＞

子どもたちは、幼児期後期～児童期初期の 4 歳から 6 歳頃に、自分自身の発達的変化についての認識の仕方それ自体を質的に変化発展させる。4 歳代までは幼少期－現在－将来の「自分の変化」を、身体の大きさなどの「大－小」「強－弱」といった対の指標のみで捉える傾向にあるが、5 歳後半から 6 歳代になると、自分の身体各部の微細な変化を捉え、新たに獲得される内面的特徴や生活のしかたなどを表現でき始める。それは、目に見えないものを直観的にイメージし交流する力となって書き言葉を準備するとともに、自分の未知の価値を新たに発見する力となり、価値認識力は対象をさらに深く知る力を与える。思春期～成人期においても同様に、社会の中で自分の位置を確認し（自己同一性）、自己を価値づける力（自己信頼性）と対象認識の力とを連関させつつ形成する。「過去－現在」を新たに捉える力がつくことによって「現在－未来」を新たに見通し、夢見る力（＝新しい人間性・人格像・社会のあり方を発見し創造する力）を獲得していく。

ここでは、(1) 学術研究を志す集団・組織において、未来を構想する力がどのようにして形成され充実していくか。(2) そのような構想力と社会認識によって、応用心理学という学問分野において将来どのような研究問題が提起されるか。(3) 相互の信頼と尊重と期待のもとに、構成員がそれらの諸問題を学会という場で考究し社会に貢献しようとするとき、どのような協同的・集団的な研究活動のシステム設計が必要となるか。これらについて試案を述べ、学会の未来を考えるための検討の素材を提供したい。

【指定討論】 話題提供を受けて、内藤哲雄、大坊郁夫の両先生にそれぞれの専門的立場から討論していただく。司会は浮谷秀一先生にお願いした。また、時間の可能な限りフロアーの諸先生からも活発なご意見を頂戴し、本ワークショップが実りある成果を収め、本学会のますますの発展に大きく寄与するものであることを切望したい。

【ワークショップ5】 9月9日(日) 12:30～14:30 6F 16601教室

フィールド研究におけるデータ収集・介入困難

― 大学院生が経験した事例から―

企画者・司会者：岡崎 琴恵（お茶の水女子大学大学院）
話題提供者：玉井 航太（国際基督教大学大学院）
渡辺 亜紀子（お茶の水女子大学大学院） 池田 満（国際基督教大学大学院）
岡崎 琴恵（お茶の水女子大学大学院） 濱口まち子（お茶の水女子大学大学院）
指定討論者：伊藤 亜矢子（お茶の水女子大学大学院）

【ワークショップの目的】

様々な研究目的をもって人、組織、コミュニティに参加し、関わり、研究をする際、どの研究者も一度は経験する壁がある。それは、調査への参加拒否、方法・調査内容の変更、介入研究では調査者の役割の変化、研究過程上予期せぬ関係性の浮上などの多くの課題と問題である。

本ワークショップでは、これらの課題について、実際に大学院生が経験したデータ収集・実践困難について話題を提供する。研究者としての経験が浅く、様々な壁にぶつかりながら研究を進める大学院生が、どのように研究フィールドを獲得し、どのように研究活動を継続していったか。ワークショップ参加者の皆様からも経験やその時の解決策などのご意見を頂き、研究を行う際の研究者の留意点について討議したい。

【話題提供】

玉井航太（国際基督教大学大学院）

企業組織における研究は調査対象先である企業と研究者の継続的な交渉が特に必要不可欠となる。企業という利益追求を目的とした組織にとって研究者は異物であり、企業組織にとって研究がメリットになるか不明だからである。そうであるからこそ、研究者は自らの研究がどのような意味を持つのか企業に理解してもらうことに努め、企業にとって有害な異物とならないために最大限の考慮を払わなければならない。しかしながら、たとえそのような努力をしたとしても、研究者が立てた目的と方法がそのまま実行されるとは限らない。そこには企業組織からの要望と研究者のコンテクストとは違った研究への見方が影響する。それは研究者にとって困難を伴う作業を要求し、時には研究目的の変更を余儀なくされるであろう。本ワークショップにおいては、企業組織での研究事例を通して学術とは異なったコンテクストを持つ現場での研究困難性を検討する。

渡辺亜紀子（お茶の水女子大学大学院）

インタビュー調査を実施する際のフィールドおよび協力者をいかに確保し、調査への同意を得るかという課題に焦点を当てたい。インタビューは他の調査法と比較して、時間や労力を最も要する調査法の１つであり、それだけフィールドの対象者を大いに制約し、一般的に多忙なフィールドの対象者にとって負担が大きく、調査協力が得にくい方法と言えよう。さらに、インタビューの対象となるグループ自体に属する人が少ない場合には、より対象者が得られにくくなってしまう。また、近年では、個人情報保護法の成立に基づき、守秘義務の観点から教育現場をはじめ、個人情報が関連する内容の調査の遂行が困難となっていることも、インタビュー調査をする際の大きな壁である。つまり、インタビュー調査を実施する際は、調査の同意を得ることが、第一に直面する課題といえる。このワークショップでは、インタビュー協力への同意を得るための工夫や留意点について皆さんと考えていきたい。

池田満（国際基督教大学大学院）

筆者は某市にある公立小中学校全 16 校を対象に、教員間のソーシャルサポート促進を通した教員のバーンアウト予防プログラムの実践と効果研究を実施している。この実践研究の特徴は 1)プログラム立案をサポートし、効果に関するデータ収集・分析を行う研究者、2)プログラム内容を決定し実施する教頭会、3)プログラムの対象となる教員という三層構造の中で、研究者は教頭会とのみ協働的に活動をし、プログラムの対象者である教員とは直接関わらないという点である。本研究において、現場への介入初期の研究者主導の状態から、学校という現場を熟知し、現場に対して責任を持つ立場である教頭が主導する「研究者が現場へ踏み込みすぎない」協働的関係を築いてきた経験を振り返り、協働的実践・臨床研究における研究者と現場との役割・責任の分担、関係構築について考察する。

岡崎琴恵（お茶の水女子大学大学院）

様々な調査・実践過程において、研究者が質問紙を用いてデータの収集をすることは少なくない。しかし、この調査自体が実践過程に変化をもたらす場合がある。筆者が行っている「研究者と教頭会の協働的パートナーシップ（池田氏と共同研究）」のプロセスを追うために実施した、質問紙調査による中間評価は、単にプロセスの途中段階の状態を示すものではなく、その研究者との関係性や研究過程で重要となる要素について枠組みを提示するものとなった。この調査の影響は、研究者の意図が伝わると共に、曖昧であった両者の関係性の枠組みを明確化することとなった。このような質問紙調査を行うこと自体の対象者への影響は以前から言及されてきているが、プロセスを捉える上でどのように調査の影響を考慮するか、またどのようにプロセスを捉えることが有効であるかについて検討したい。

濱口まち子（お茶の水女子大学大学院）

学校現場における不登校や学級崩壊，特別支援教育に対する専門的知識の必要性が指摘される中，大学と学校が提携し，心理学を学ぶ学生が学校現場で実践及び研究を行う事例が報告されてきている。このような大学と学校による協働が効果的に行われることで，学生は実践的な経験を積む場と研究のフィールドを，学校は専門性をもつ人的資源を得ることができる。しかし，実践，研究両面において発展途上の学生が，学校という独自の文化を持った現場に継続的に入り，複数の関係者と協働していく際には様々な困難も予想される。ここでは，大学と学校の互恵的な実践研究の一形態として，話題提供者ら大学関係者と小学校の教職員が立ち上げた学校内相談室運営過程における困難点を，本プロジェクトに教育相談員として関わった大学院生の立場から話題として提供したい。

（おかざきことえ・たまいこうた・わなたべあきこ・はまぐちまちこ・いけだみつる・いとうあやこ）

【ワークショップ6】 9月9日(日) 12:30～14:30 6F 16606教室

経験に伴う運転行動の変化について

企画者： 中井　宏　（大阪大学大学院人間科学研究科／日本学術振興会）
上田　真由子　（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
話題提供者： 渕　真輝　（神戸大学大学院海事科学研究科／大阪大学大学院人間科学研究科）
内藤　久士　（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所／放送大学大学院文化科学研究科）
中井　宏
指定討論者： 向井　希宏　（中京大学心理学部）
太刀掛　俊之　（大阪大学安全衛生管理部）

【企画の趣旨】

近年、各産業界では安全に対する意識が高まり、様々な安全対策が講じられている。交通場面においても同様のことが当てはまり、ハード面の対策と同時に、それを操作する人間への教育手法などに関する研究が盛んである。

本ワークショップでは、自動車、鉄道、船舶という異なる移動(モビリティ)手段を運転・操縦する者の行動および意識について、応用心理学的見地から考察を加える。3 名の話題提供者は、運転経験や操船経験に伴う行動変容や意識の変化に焦点を当て、産業心理学や学習心理学領域等の知見を踏まえながら現場の実情を紹介する。その中で、現在問題視されている点を例示し、その背景にある原因や考えられる対策などについて解説する。

次に指定討論者を含め、3 者間の共通点あるいは相違点を探り、議論を進める。最終的には、安全性や快適性の向上に向けて、各領域でこれまでに得られた知見の他分野への展開可能性などに言及し、議論を深めることを目的としている。

【話題提供】

1．学生と実務経験者の避航操船の差異について

神戸大学大学院海事科学研究科
大阪大学大学院人間科学研究科　渕真輝

海上交通においても、衝突を回避する際の心的過程は、自動車運転時と同様と考えられるものの、船舶の特性から方法や時間的スパンは大きく異なる。

学内船舶実習では、学生が主体的に避航操船を完遂することはほとんどない。この理由として、衝突のおそれを認知できないことや操船方略を判断できないことが考えられる。特に後者については、海上衝突予防規則はガイドラインを示すのみで、その判断を大きく個々の船員に委ねているために非常に重要である。

そこで、話者の船上での実体験や紙筆実験の結果に基づき、様々な場面で選択される方略について、実務経験者と学生の差異を検討する。

2．鉄道業における乗務員教育について

西日本旅客鉄道株式会社安全研究所
放送大学大学院文化科学研究科　内藤久士

JR 西日本では、安全を最優先する企業風土の構築に向けて「安全性向上計画」を策定し、その中で、乗務員に対して新たな研修制度の整備（新任者研修、新任者フォロー研修、全乗務員への３～５年毎教育など）や、教育訓練設備の拡充（シミュレータの配備など）を行っている。

また、技術継承の観点から、経験豊富なエキスパート社員を指導者として各運転職場に配置し、若手層・中堅層の育成を図っている。

今後は、乗務員に対する教育訓練を、個々の乗務員の知識や経験を踏まえた、より一層教育効果の高いものにしていく必要がある。当社の乗務員教育の概要について、ヒューマンファクターの観点から述べる。

3．自動車運転技能の自己評価とリスクテイキングについて

大阪大学大学院人間科学研究科
日本学術振興会　中井宏

自身の行動に伴う危険を認識していながら、敢えてその行為を行うという「リスクテイキング」について、自身の運転技能に対する高い自信が規定因の一つと考えられている。つまり、事故可能性を高める危険対象物（ハザード）を正しく知覚しても、運転技能の自己評価が高すぎるとリスク知覚が甘くなり、結果的にリスクが敢行されやすいとの仮説が導かれる。

この自己評価とリスクテイキング行動との関連について、質問紙や観察調査およびドライビングシミュレータ実験の結果から言及する。また、経験年数による自己評価や運転行動の差異について、行動分析学や学習心理学的側面から考察する。

【指定討論】

1．産業心理学の立場から

中京大学心理学部　向井希宏

作業行動は、経験にともなって習熟する。手技的な操作は、知識ベースから技能ベースへと変化し、精神的な作業では経験によって複合的な作業が可能になるという形で効率化がすすむ。

当日は、各種作業の技能習熟過程に言及し、かつ、提供された話題に対してコメントを加えながら、運転行動と経験との関連について、特に「安全」という面から論議を深める。

2．安全教育学の立場から

大阪大学安全衛生管理部　太刀掛俊之

大学の教育研究とは、知識と経験を獲得し、それらをベースに、新たな知見を生産する営みであるが、特に理工系分野では、多様なリスクをコントロールする必要が求められる。

当日は、知識と経験を、安全の確保を前提としてどのように伝えるかという教育的観点を考慮しながら、知識と経験、及び安全行動との関連について議論する。

（なかい ひろし・うえだ まゆこ・ふち まさき・ないとう ひさし・むかい まれひろ・たちかけ としゆき）

学会企画委員会企画

第　6　回　研　修　会

【研修会Ａ】 9月8日（土）15:30～17:00　16601教室

講義題目 ： 社会における応用心理士の使命と課題・留意点
講　　師 ： 神作 博 （中京大学名誉教授）

【講義要旨】
社会において応用心理士が活発に有効に活躍することを志向し、下記のようにその使命、課題・留意点などについて考究する（講師のささやかな経験を土台としての限定的発想・展開であることを付言しておく）。

1　使命
現実的な問題に対する応用心理学よりの心理学的支援
（1）心理学的視点よりのアドバイス（単一要因的でなく、実践的総合的であることが望まれる）……第3者の立場、傍観者的立場（スタッフ的）
専門的な考え方、知識・情報・技術等の提供
（2）当事者としての視点・立場を想定しての主体的支援（責任と実践性とを共有することが望まれる）……主体者の立場（ライン的）
人間行動全般をダイナミックに強弱の度合いも考慮して、組織・制度等の運用とも関連させつつ、一体化して全体を考え、責任ある現実解決への道を提示する。

2　課題
（1）応用心理士の資格制度のあり方、その運用方式の考究
（2）応用心理士会の結成と活動、機関誌の発行等
（3）応用心理士の自覚と自己研鑽
（4）応用心理士の育成の仕方、され方
（5）応用心理士に対する相談窓口の設置（応用心理士“駆け込み寺”）
（6）応用心理士の社会における活動要請の発掘、PR
など

3　留意点
（1）学会側の応用心理士制度の検討
（常任理事会・理事会に委ねる）
（2）応用心理士側での留意点
A　全般的、一般的
(A) 有効なアドバイス、効果的な貢献・活動に必要と思われる事項
① 関連法規等の理解・通暁
② 組織について
③ 人材育成のしかたについて
育成計画・プログラム
Role Playing 法
課題論文の導入
など
④ 管理のあり方について
小集団活動
など
⑤ 情報の流れのあり方について
⑥ 業務改善提案のあり方について
⑦ 集団規範形成のダイナミックスについて
など

(B) 応用心理士としての留意点、心がけ

① 人から信頼される人間であること
② 適切な話し方、言葉づかい、説得性のある話し方の可能なこと
③ 適切なプレゼンテーションの可能なこと
④ 広範な知識を有すること
⑤ 柔軟な思考を有すること、縦横無尽な発想、“シアリアル・バリアブル・アナロジー“の発揮が可能なこと
⑥ 円滑な対人関係樹立のしかたを身につけていること
⑦ ネーミングの効果をよく認識していること
⑧ カウンセリング的発想と仕事の進め方を熟知していること
⑨ 現場に足を運び、現場（含ふんい気）をよく観察すること
⑩ 現場の人との面談、意見の聞き取りを十分にすること
⑪ その際に“他人的”にならぬこと
⑫ 職場に立ち入っても“違和感”を感じさせぬようにすること
応用心理士も含めての職場の“一体感”を醸成するように心掛けること

B 専門的、特定分野的
講師の体験談を中心に具体例を展開

【講師略歴】

千葉大学文理学部心理学専攻卒業　医学博士（東京医大）
防衛庁航空医学実験隊創設と共に同隊航空心理研究員、加えて航空事故調査官（心理担当）、飛行安全幹部課程教官（航空心理学担当）、長官（現大臣）特命飛行安全総合監察の監察官（心理・教育・衛生担当）等を兼務
中京大学文学部心理学科・同大学院文学研究科心理学専攻（現心理学部・同心理学研究科）教授、文学部心理学科主任、心理学部長代理、文学研究科長を歴任
現在、中京大学名誉教授、放送大学客員教授
日本交通心理学会会長・前日本色彩学会会長・中部盲導犬協会会長

【主な著書】

「応用心理学」神作 博、向井希宏 共著 2005 放送大学教育振興会
「労働と生活の心理学」越河六郎、星 薫，神作 博 共著 2001 放送大学教育振興会
「航空照明」運輸省（現国土交通省）航空局 編 分担執筆 1986 航空振興財団
「新編 色彩科学ハンドブック（第2版）」日本色彩学会 編 分担執筆 1998 東京大学出版会
「錯視の科学ハンドブック」後藤　男、田中平八 編 分担執筆 2005 東京大学出版会
など

【研修会Ｂ】9月9日（日）14:40〜16:10　16901教室

講義題目：コンフリクト転換のカウンセリング
講　　師：井上孝代（明治学院大学心理学部）

【講義要旨】カウンセリング心理学の立場から、平和学者ヨハン・ガルトゥングの提唱する紛争解決法である「トランセンド・メソッド」の概要を知り体感していただくことが、この研修会の目的です。そのために、井上(2005a, 2005b)の内容を紹介するとともに、場所と時間が許せば、グループによるエクササイズのなかで、ブレーンストーミングを行うことにより、実際のトランセンド・メソッドを体験していただきます。

コンフリクト（＝もめ事、紛争）を上手に解決するためには、共感と対話と創造性によって非暴力的に対処することが必要です。トランセンド法は、日常生活のいざこざから、国際的地球的な対立の問題まで、応用範囲の広い、紛争解決の一般理論です。また、実際の生活に応用できる実用的な方法でもあります。

また、対立がこじれてしまい、相手を傷つけてしまったあとの、仲直りの仕方を考えます。これは、戦争や内戦後の課題としての和解の問題でもあります。和解の１２の方法についても、井上(2005a)も参考にしながら述べていきたいと思います。

【講師略歴】
九州大学大学院修了。博士（教育心理学）。明治学院大学心理学部教授、現在心理学部長。臨床心理士、学校心理士、認定カウンセラー。マクロ・カウンリング研究会主宰。トランセンド研究会元会長。専門は、カウンセリング心理学、コミュニティ心理学、異文化間心理学。家庭裁判所調停員。四谷マクロカウンセリングセンター所長。２００６年多文化間精神医学会学会賞を受賞。平和学者ヨハン・ガルトゥングより認定されたトランセンド・トレーナー。

【主な著書】
●トランセンド法に関するもの：
井上孝代（2005a）『あの人と和解する：仲直りの心理学』講談社新書
井上孝代（編）（2005b）『コンフリクト転換のカウンセリング』川島書店
●その他の編著書
井上孝代（編）（2004）『コンフリクト転換のカウンセリング』川島書店
井上孝代（編）（2006）『コミュニティ支援のカウンセリング』川島書店
井上孝代（編）（2007）『つなぎ育てるカウンセリング』川島書店
井上孝代（編）（近刊）『エンパワーメントのカウンセリング』川島書店
●訳書
ルイス他（井上孝代監訳）（2006）『コミュニティ・カウンセリング』ブレーン出版
ストーン＆ダヒア（井上孝代監訳）（近刊）『スクールカウンセリングの新しいパラダイム：MEASURE法による生徒のためのアカウンタビリティー（仮題）』風間書房

研究発表(口頭発表)

応用心理学の今日的課題とその改善策

長塚康弘

(新潟心理学研究所)

応用研究、基礎研究、課題

問　題

今日、わが国では事件・事故、犯罪・非行、いじめ、自殺、不登校、学力低下とその改善・しつけなどをめぐる社会・教育問題が頻発し、未解決なケースも多い。これらの報道を見聞きすると、しつけ（教育）を要するのは子どもなのか親なのかと疑わざるを得ないほどの混乱状態が生じていると感じざるを得なくなる。

このような事態に置かれ、筆者は応用心理学徒を自認する研究者として内心忸怩たるものがある。上記のような問題の発生やその解決の責任が全て応用心理学者にあるとは言わないが、問題が発生し続けるのは自らを含む応用心理学者の研究の問題解決への貢献度が低いからではないかと感じるからである。

上記の諸問題については関係領域の応用心理学者（たとえば交通事故については交通心理学者、犯罪・非行については犯罪心理学者、いじめ問題については臨床心理学者・教育心理学者等）が「自分に関係のある出来事」と捉え、研究してきた。また、多くの応用心理関係者はそれぞれの学会が標榜する目的を承知して加入している。筆者は日本交通心理学会が「交通事故の抑止に寄与すること」をその目的とし、本学会が「文化と福祉の向上発展に貢献すること」を目的にしていることに賛同して入会し、会員活動を行っている。

最近では、現下の社会問題を研究者個人が応用心理学の課題として捉え、その解決に取り組もうとするのみではなく、学会が組織としての課題として捉え対処しようとする動きもある。日本心理学会では1997年前後から心理学（者）の社会的貢献を問い、従来はそれが欠如していたこと、今後その必要性があることをめぐるシンポジウムやワークショップ等を主催している（長塚 2006）。学会、就中、基礎研究に関わりの深い日本心理学会が心理学の社会的貢献を積極的に問いかけたことは、心理学自体が現実対処への視点を持たねばならないほど課題解決への心理学的対処を要する課題が増加していることを示す。しかし今日的課題解決への学界を含む意欲の高まりにも拘わらず問題が解決しないのはなぜか。筆者は研究内容、方法に問題があると考える。以下で問題の所在を検討する。

方　法

応用心理学研究に関する長塚（1997a, 1997b,2000, 2001, 2006）のﾚﾋﾞｭｰ及び交通心理学会大会論文集等を参照して検討する。検討に当たって三隅(1989)の「わが国の交通心理学研究で緊要な課題は交通事故防止のための効果的方法の開発である」という指摘及び青木（1985）が心理学の基本的目標として述べた次の行動研究の４ステップ論を指標とした。

1段階　行動の記述－交通行動の存在事実の客観的記述
2段階　行動の説明－集積された事実の組織的説明
3段階　行動の予測－行動生起の可能性の予測・予想
4段階　行動の制御－予想される危険行動の制御・抑止

上記各項目の説明は筆者の加筆になるが、筆者は応用心理学研究は４段階の「行動の制御」に至らなければ科学としての存在理由が疑問視されると考える。

結　果

交通心理学研究について検討した。その結果、交通行動の予測と制御の段階に到達していると考えられる研究例として武内ら(2007)の研究を挙げる。事故多発に悩み、その解決策を模索しつつ、研究者(長塚)が心理学的行動理論(Koffka,K.) 及びｱｸｼｮﾝﾘｻｰﾁ法(Lewin,K.)に基づいて開発したｷｬﾝﾍﾟｰﾝ研究を全社的に認識し、「知覚不全排除」の具体的方法として「一時停止・確認ｷｬﾝﾍﾟｰﾝ」を６年間継続した。物損事故費用及び第一当事者人身事故件数に減少傾向が認められ、一時停止・確認行動は有効な安全確保の方法であるとの結論を得た。研究及びｷｬﾝﾍﾟｰﾝは継続中である。

考　察

心理学研究の基礎は行動の記述・説明であるが、内海（1997）が述べたように「日本の交通事故はどんな起こり方をしているのか、現実の具体的交通に目を向ける」と同時に「交通事故防止に拘わる人は病気を発見し、治療し、予防する医者の立場に立ち、対処することが大切である。人の幸せのために交通心理学会を世に役立つ学会にしてもらいたい」という声に即した研究の推進が今後の交通心理学、応用研究の改善策である。

引用文献

青木民雄 1985 心理学の課題と方法 青木民雄編著 心理学要論 福村出版 15-20.

Misumi, J. 1989 Introduction: Applied psychology in Japan. Applied Psychology: An International Review, 38, 309-320.

長塚康弘 1997a 真の「応用研究」とは何か―応用心理学における２つのアプローチ― 日本心理学会第61回大会発表論文集 25

長塚康弘 1997b 真の「応用研究」とは何か(2)―応用研究の具体例― 日本応用心理学会第64回大会発表論文集 15

長塚康弘 2000 心理学者の社会的貢献志向と研究内容のミスマッチ 日本心理学会第64回大会発表論文集 9

長塚康弘 2001 心理学者は社会的役割をどう果たしているか－心理学の基礎と応用－北海道心理学会・東北心理学会第９回合同大会 企画シンポジウム

長塚康弘 2006 交通心理学研究の現状と問題点－応用心理学研究のあり方に照らして－新潟経営大学紀要 第12号 63-80

武内聰志 2007 知覚不全排除を目指す安全第一宣言の効果(実践報告 No2) 日本交通心理学会第72回大会発表論文集 20-30

内海　倫 1997 故宇留野藤雄先生を偲ぶ 「宇留野藤雄先生追悼記念会特別講演」日本交通心理学会大会（麗澤大学）

山下俊郎 1968 応用心理学の行き方 日本応用心理学会会報 No.12 (1968年5月)

（ながつか やすひろ）

長時間飛行における疲労パターンについて

竹内　由則[1]
(航空医学実験隊)

キーワード：長時間飛行，疲労，戦闘機パイロット

【研究の目的】航空自衛隊は米空軍がアラスカで実施している多国籍間演習に4年前から参加している。通常，戦闘機の飛行時間は約1時間であるが，アラスカに飛行するためには片道約7時間の飛行が必要である。単座機の長時間操縦が他の長時間作業と大きく異なっている点は，いったん始めたら作業の中断や休憩が許されないこと，着座したままで立ち上がることも腕を伸ばすこともできないこと，つまり精神的にも身体的にも非常に厳しい拘束条件下に長い間，置かれることである。

このような特殊作業における疲労の変化パターンを調べるのが本研究の目的である。

【方法】日本とアラスカ間，約7時間の飛行を数機ずつの編隊を組んで行った。被験者は3往復述べ48名である(中には2回飛行した者も存在した)。

疲労測定にはFig.1に示す用紙を用いた。離陸を0時とし，横軸に1時間ごとにメモリが振ってある。被験者は疲労を感じた期間にラインを引き，さらにそれが強い疲労であった場合にはさらにその上部にもう1本のラインを引くよう求められた。

記入は飛行中もしくは着陸後に行った。

【結果】Fig.2に全般的疲労の変化を，Fig.3に倦怠感・単調感と眠気の変化を示す。

図は，全データを図式化したものであるが，被験者全員がほぼ同様のパターンを示していた。

疲労は離陸およそ2時間後から始まり，その後，時間経過とともに直線的に増大していた。着陸1時間前から急激に低下し，着陸後まもなく回復していた。

示す。倦怠感は，全般的疲労を感じ始めた離陸約2時間後からいっきに高まり，着陸直前まで飛行中ずっと継続していた。眠気は図中の茶色の破線で示されているが，倦怠感を感じ始めた時期より始まり，倦怠感を感じている期間の中央でピークとなった。

【考察】通常国内で飛行する場合，比較的長くても2時間程度であるが，そこを過ぎたあたりから疲労を感じ始めている。これは，パイロットがその時間を記憶していて，それ以上の操縦に違和感を覚えたというのではなく，2時間以上同一作業を継続していたために疲労を感じたということであろう。

その後，疲労は時間と共に増大している。長時間作業の際の疲労の変化には，大小のリズムや慣れによる平坦化が現れることもあるが，単独飛行の際の疲労は直線的に蓄積されている。操縦自体は給油機に追随して水平直線飛行を続ける操作であり，困難さや緊張感を伴うものではない。さらにほとんどが雲上飛行であったため，風景の移り変わりによる刺激を受けることも少なかった。

疲労は着陸約1時間前に急速に減少した。作業終了間際にやる気が回復したり，成績が向上したりすることはよく知られているが，長時間飛行では拘束時間が長かったこともあって特に強く現れたようである。その他にも，空中給油機と別れて地上との交信によるナビゲーションが開始されたこと，

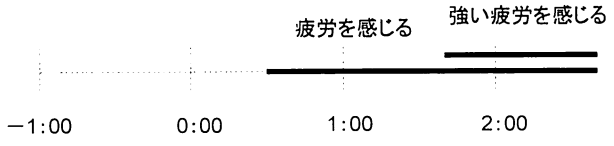


Fig.1　疲労測定用紙

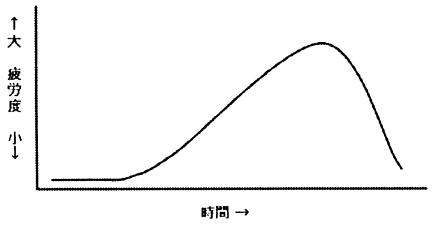


Fig.2　全般的疲労の変化

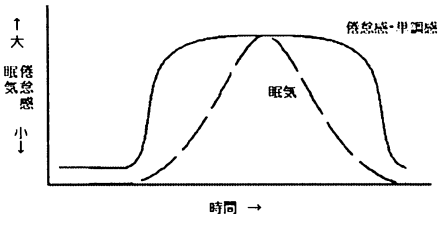


Fig.3　倦怠感・眠気（破線）の変化

洋上飛行から陸上飛行となったこと，着陸後の活動への緊張感等，これらが疲労を解消したのであろう。なお，疲労状態は当日の勤務終了時には離陸前の状態にまで回復していた。長時間飛行による疲労は飛行中にみられる一過性のものであるといえる。

作業自体が刺激に乏しいものであったことは，倦怠感・単調感の図にも表れている。事前に定められた計画により，不定期間隔で7回程度の空中給油を受けるが，十分な訓練を受けているパイロットにとっては，未経験の空港への着陸も含めて，“やり慣れた通常動作”以上の刺激とはならなかったようである。

眠気は「ただちに眠りにつながるものではない」とのことであったが，意識水準が低下していることは間違いなく，事故に対するよりいっそうの注意が必要である。

本研究は，すなわち長時間の単調作業における疲労のパターンを調べたものであるといえる。その結果，潜伏期間，蓄積期間，回復期間の3つの過程に区別できることが明らかとなった。各期間に応じた対策を施すことで事故防止に貢献できるものと思われる。

また，今回用いた疲労測定方法は，時間的に記憶をたどりながら記入できること，回帰的に修正可能なこと等，非常に有効であった。

（たけうち　よしのり）

看護業務における安全教育の有効性評価について

— 経験 4-6 年群を対象として —

○臼井伸之介[1)]　和田一成[2)]　太刀掛俊之[3)]　村上幸史[4)]　青木喜子[5)]

([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科　[2)]平安女学院大学　[3)]大阪大学安全衛生管理部　[4)]神戸山手大学　[5)]十条ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病院)

キーワード：看護、安全教育、ヒューマンファクター

【目的】　臼井,和田,青木,太刀掛(2005)は特にヒューマンファクターに焦点を当てた安全教育を新人看護師を対象に実施し，看護安全教育の有効性について検討した。本研究ではほぼ同様の教育を経験 4-6 年の看護師を対象に実施し，安全教育が受講者の安全態度や意識の向上に有効か（目的１），教育の効果があればそれは持続するか（目的２），教育が教育内容に対応する項目以外の，より一般的な安全に係る意識や態度の向上に般化するか（目的３），職務経験は教育効果と関係するか（目的４），以上４点を明らかにするため調査を行った。

【方法】　調査協力者：　京都府内Ａ・Ｂ・Ｃ病院に勤務する看護経験４年から６年の間の看護師 30 名。

調査手続き：　１回２時間にわたる安全教育を４回課した。第1回安全教育はヒューマンファクターを専門とする大学教員の講演であり，第2～4回はグループ討議形式であった。教育の前後で質問紙による意識調査を行い，その比較から教育効果を測定した。さらに約3ヶ月後に同内容の質問紙調査を行い，教育効果の持続性について検討した。

質問紙質問項目：　Ⅰ.看護場面での安全活動・意識について(22 項目)；「そう思うか否かの程度」を 7 件法で求めた。Ⅱ.日常場面でのリスク認知について；日常および交通場面での不安全行動に関する 12 項目について，それぞれのリスクの敢行度，認知度を 0 から 100 までの数値で求めた(芳賀他 1994 より)。Ⅲ.看護場面での作業者心理のリスク認知について；長山他(1989)を参考に，看護場面での不安全行動に関して「急ぎ」「面倒」「思い込み」の心理に関わる 12 の質問を作成し（それぞれ４項目)，「そう思うか否かの程度」を 0 から 100 までの数値で求めた。Ⅳ. 看護場面でのインシデント分析について；インシデントを１事例提示し，その発生要因となりうる 12 項目，なり得ない９項目について，発生要因として考えられる項目すべてに○印を求めた(質問項目は組織，作業，個人の３要因で構成された)。Ⅴ. 写真・イラストで提示された看護２場面についての危険予測の自由記述。Ⅵ. 個人のエラー傾向について（20 項目，芳賀他 2006)。Ⅶ. フェイスシート(10 項目)。Ⅰ～Ⅳは臼井ら(2005)とほぼ同一内容であり，Ⅴ,Ⅵは本調査で新たに追加された(合計 112 項目)。

教育内容：　グループ討議のテーマは，第2回教育は「危険予知訓練その１；看護場面での種々の危険源を認知し，その対策を考えるスキルの獲得」，第3回教育は「危険予知訓練その２；エラーが発生しやすい作業中断時の危険性理解」，第4回教育は「インシデント事例分析；事象関連図と要因関連図の作成による発生要因の理解」であった。討議の手順はおよそ，1) 研修のねらいの説明(20分)，2) グループ討議の具体的進め方の説明(30分)，3) グループ討議(50分)，4) 結果発表と講師による講評(20分)であった。

【結果】　Ⅰ.について：　安全意識に関する質問10項目中2項目で教育後（2回目調査)，意識の向上が見られた。ただし全項目で得点が高く，天井効果が見られた可能性がある。Ⅱ.について：　日常･交通場面ともにリスク認知得点で教育後，有意な上昇が見られた（いずれも$p<.01$)。一方，リスク敢行得点では差がなかった。また前者では3回目調査でも1回目より有意に高く，効果は維持されていた。Ⅲ.について（Fig. 1 参照)：　「面倒」「思い込み」の平均得点は有意に上昇し（いずれも$p<.05$)，意識に向上が見られた。また3回目調査でも1回目より有意に高く，効果は維持されていた。一方「急ぎ」項目には変化が見られなかった。Ⅳ. について：　組織，個人要因で得点に有意な上昇が見られた（いずれも$p<.01$)。また3回目調査でも1回目より有意に得点が高かった。作業要因は差がなかったが1回目調査の得点が高く，天井効果が見られた可能性がある。Ⅴ. について：　場面1，2ともに危険予測の記述数は2回目で有意に上昇していた（いずれも$p<.01$)。また場面2のみ3回目でも有意に上昇していた（$p<.05$)。

【考察】　安全教育の有効性について：　教育の前後比較から，概ね教育後の得点が安全な方向に有意に変化しており，安全教育の有効性が確認された。

教育効果の持続について：　教育効果の見られた項目の多くは３回目調査でも効果を維持しており，今回の安全教育の効果は一過性でないことがある程度確認された。

教育効果の般化について：　今回の質問項目の多くは安全教育内容と密接に関わる内容であった。したがって教育の効果は看護業務という特定の場面に限定された可能性もある。しかし「日常・交通場面でのリスク認知」に関する質問は，特に今回のグループ討議ではテーマとしなかった場面であるにもかかわらず，その認知度得点が向上していた。すなわち教育効果がある程度般化したと解釈された。

作業経験と教育効果の関連について：　新人看護師を対象とした先行研究（臼井ら 2005）では得点が向上しなかった項目（例えば日常・交通場面のリスク認知得点，看護場面での作業者心理の急ぎ,面倒得点など)で教育効果が見られた。すなわち，経験 4-6 年の看護師において安全教育内容が，特にグループ討議を通して自らの体験と重ね合わすことにより一層活性化され，それが相乗効果となって有効に作用した可能性が考えられた。

【展望】　作業の安全性を向上させるためには，リスク認知能力を高めるだけでなく，不安全行動を抑制するなど，行動を安全な方向に変容させなければ事故やインシデントの防止にはつながらない。今後は教育効果がいかに行動変容に作用するか，行動パフォーマンスレベルで検討する必要がある。

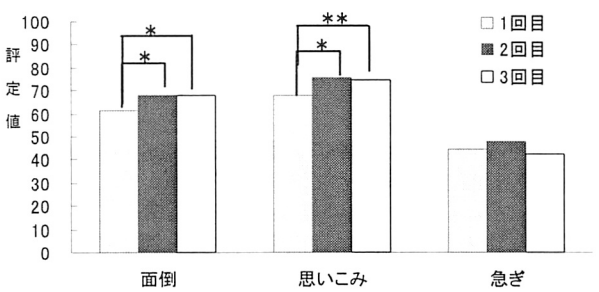


Fig.1 看護場面の作業者心理のリスク認知結果

(* $p<.05$, ** $p<.01$)

【引用文献】　臼井伸之介・和田一成・青木喜子・太刀掛俊之 2005 看護における安全教育の有効性に関する研究 -質問紙調査結果- 日本心理学会第 69 回発表論文集，1327.

（うすい しんのすけ・わだ かずしげ・たちかけ としゆき・むらかみ こうし・あおき よしこ）

中年層と高齢層に見やすい液晶ディスプレイに関する評価

― 重心動揺計を用いての比較検討 ―

○藤掛和広[1)]　高田宗樹[2)]　大森正子[3)]　長谷川聡[4)]　宮尾 克[1)]
([1)] 名古屋大学情報科学研究科　[2)] 岐阜医療科学大学　[3)] 神戸女子大学　[4)] 名古屋文理大学)

キーワード：液晶ディスプレイ、高齢者、重心動揺

【研究の目的】　液晶ディスプレイは動画表示の際に，「ぼやけ」や「にじみ」を感じるとされその「ぼやけ」によって使用者が乗り物酔いに似た気分の悪さ，映像酔いを誘発するとされている．そのため，「ぼやけ」が生じない液晶ディスプレイを使用すれば，映像酔いは生じないと考えられる．そこで，従来型の液晶ディスプレイと新たに開発された液晶ディスプレイについて，被験者が注視している際の姿勢の変動を比較し，映像酔いの影響を検討する．

【方法】　実験は，被験者がディスプレイ画面上をスクロールする地図を注視し，その地名や建物の名称を読み上げる．そして，地図読み上げ課題遂行中の平衡機能検査として，被験者の足圧中心（Center of pressure：以下 COP）動揺を測定した．COP の測定は，課題遂行前の安静時と，課題遂行中の各 30 秒間とした．

COP 動揺の結果は，従来の定量化指標の「総軌跡長」「単位面積軌跡長」「力の総和」と，新たな定量化指標である「疎密度 S_2」「鎖１の総長」「鎖２の総長」によって評価した．鎖１は後者から加わった力が小さい COP の総軌跡長で，安定性を示している．鎖２は後者から加わった力が大きい COP の総軌跡長で，不安定さを示している．

2.1　**表示装置（液晶ディスプレイ）**：　実験には，２種類の液晶ディスプレイを使用した．ひとつは，従来から主流の表示形式であるホールド駆動型液晶ディスプレイ（以下，従来型ディスプレイ）である．もうひとつは，新たに開発された擬似インパルス駆動 OCB (Optically Compensated Bend) 型液晶ディスプレイ（以下，OCB ディスプレイ）である．

2.2　**被験者**：　被験者は，中年層（44 歳～64 歳：16 名），高齢層（65 歳～73 歳：18 名）を対象とした．被験者は，テレビなどを視聴する際に（1~2m 程度の距離），眼鏡などを使用している場合，本実験でも眼鏡などを装用した．

【結果】　高齢者の COP 動揺例を図１に示す．図１に示した高齢者の動揺図は，OCB ディスプレイ使用時は従来型ディスプレイ使用時よりも，特に前後方向（Y）の最大振幅が縮小している．左右方向（X）の最大振幅でも，OCB ディスプレイ使用時は従来型ディスプレイ使用時よりも，やや縮小している．また，OCB ディスプレイ使用時の COP 動揺は，安静時の最大振幅の範囲と大きな違いは見られなかった．

COP 動揺の定量化指標の値を，年齢層と提示条件ごとに集計した．表１は中年層の指標の値を示し，表２は高齢層の指標の値を示す．

表１の中年層の定量化指標による評価は，単位面積軌跡長を除く全ての指標で従来型ディスプレイの値が高く，次いで OCB ディスプレイの値が高い結果となった．表２の高齢層の定量化指標による評価は，単位面積軌跡長と鎖１を除く全ての指標で従来型ディスプレイの値が高く，次いで OCB ディスプレイの値が高い結果となった．鎖１以外の指標は不安定さを現すことから，中年層と高齢層で，従来型ディスプレイ提示条件では立位の不安定さが示され，OCB ディスプレイ提示条件では立位の不安定さが改善されていることが示された．また，立位の安定性を示す鎖１では，中年層では従来型ディスプレイの値が高い結果が示されたが，高齢層では OCB ディスプレイの値が高い結果が示された．

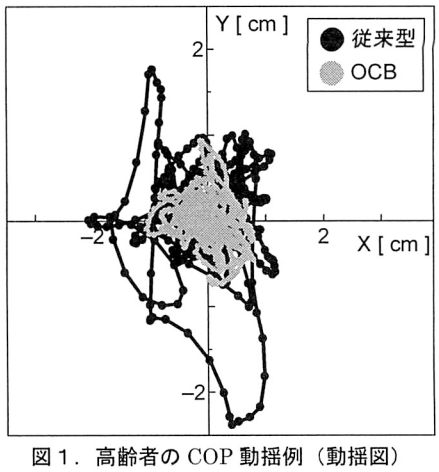


図１．高齢者の COP 動揺例（動揺図）

表１．重心動揺の定量化指標による評価
（中年層の平均値±標準誤差）

指標	安静時	従来型	OCB
総軌跡長	35.78±2.08	68.29±4.51	66.31±4.39
単位面積軌跡長	28.41±1.33	15.77±2.38	16.15±1.95
疎密度 S_2	1.47±0.03	2.93±0.22	2.76±0.20
鎖１の総長	2.49±0.31	3.17±0.39	3.07±0.37
鎖２の総長	1.33±0.09	2.02±0.15	2.00±0.18
力の総和	83.03±6.38	165.30±11.39	160.73±24.76

表２．重心動揺の定量化指標による評価
（高齢層の平均値±標準誤差）

指標	安静時	従来型	OCB
総軌跡長	50.66±3.99	77.59±6.57	76.45±6.85
単位面積軌跡長	32.16±2.24	19.37±1.78	20.99±2.07
疎密度 S_2	1.61±0.05	2.81±0.22	2.68±0.20
鎖１の総長	5.33±0.68	3.59±0.45	4.15±0.53
鎖２の総長	1.97±0.16	2.24±0.20	2.20±0.22
力の総和	128.54±13.48	209.65±20.29	208.40±24.76

【まとめ】　新しく開発された OCB 液晶ディスプレイと従来からの液晶ディスプレイについて，高齢者を含む被験者が注視している際の姿勢の変動を比較した．その結果，中年層と高齢層ともに，OCB ディスプレイと従来型ディスプレイの間に差が認められ，OCB ディスプレイ提示時に重心の不安定さが改善された．

【謝辞】　本研究は，21 世紀 COE プログラム「計算科学フロンティア」の支援によって実施された．

【引用文献】

松田隆夫・大中悠起子 2005 -「映像酔い」の自覚的評価とその誘発要因- 立命館人間科学研究 第９号
高田宗樹・北岡良之・市川真澄・宮尾克 2003 -重心動揺における幾何学的な指標の物理学的意味- Equilibrium Res (Vol.62, No.3, 168-180)

（ふじかけ かずひろ・たかだ ひろき・おおもり まさこ・はせがわ さとし・みやお まさる）

教師のバーンアウト傾向の規定要因についての一研究

－教師のパーソナリティ特性に着目して－

○澤田　幸嗣[1)]　宇惠　弘[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]関西福祉科学大学)

キーワード：バーンアウト、性格特性、自己効力感、教師

【目的】本研究の目的は、昨今問題視されつつある教師のメンタルヘルスの問題のうちバーンアウトに焦点を絞り、バーンアウトの生起に関連する規定要因の探索およびその対処法略の糸口をつかむことである。特に本研究では、教師自身のパーソナリティ特性及び、教師の職業上の問題についての相談行為について焦点を当てていく。パーソナリティ特性については具体的には、教師自身の性格特性と自己効力感について取り上げる。

【方法】調査対象：T 県の小学校に勤める教師、男性 48 名、女性 94 名の計 142 名。年齢構成は 20 歳代 19 名、30 歳代 28 名、40 歳代 65 名、50 歳代以上 26 名、不明 4 名であった。

調査手続き：公立小学校 9 校、180 名の教員に対して質問紙を配布した。一ヶ月の期間を設け回収し、153 名の回答を得た（回収率 85%）。そのうち、有効な回答は 142 名（92.8%）であった。

調査内容：①バーンアウト尺度（田尾・久保,1996）：Maslack & Jackson による MBI（Maslack Burnout Inventory）を翻訳、修正したもので「脱人格化」「個人達成感」「情緒的消耗」の 3 因子、17 項目からなる。この尺度は看護師を対象として作られたものであり、そのため項目中の「患者」という表記を「児童生徒」と変更して用いた。

②BIG5 性格特性検査：この検査は「外向性」、「協調性」、「勤勉性」、「情緒安定性」、「洗練性」の 5 つの因子に加え、調査対象者に対する Lie 尺度 1 因子を加えた計 6 因子、24 項目で構成されている。

③自尊感情尺度：この尺度は 10 項目からなる尺度で、その内容は自尊感情を測定するためのものである。自尊感情の定義としては、他者との比較ではなく自己への価値を評価する、というものである。つまりこの尺度の得点が高いほど自己への効力感を感じやすいと考えられるため、この尺度を自己効力感の尺度として採用した。

④フェイスシート：性別、年齢、教師歴（以下、キャリア）、教師自身の家族構成など計 8 項目設けた。

【結果及び考察】伊藤(2000)研究において、MBI 尺度を教師に対して実施した場合、本来の因子構造と異なる結果が見られた。このことから本研究においても MBI 尺度を因子分析した結果、2 因子が得られ、それらを伊藤の研究を参考に身体的疲労感の因子である「消耗感」と精神的疲労感の因子である「達成感の後退」とそれぞれを命名した。

この 2 因子をそれぞれ従属変数とし、性別、キャリアをグループ化変数として比較検討をした。性別については達成感の後退について有意な差($t(140)=2.39$, $p<.05$)が見られ、女性のほうが達成感の後退を強く感じているという結果が得られた。

キャリアについては、1 年から 13 年までを「若手」(n=42)、14 年から 22 年を「中堅」(n=55)、23 年以上を「ベテラン」(n=40)の 3 群を独立変数として、一元配置分散分析を行ったところ、若手よりも中堅以上の人のほうが達成感の後退を感じているという結果が得られた（$F(2,136=3.659$ $p<.05$)。この結果から、ある程度以上の経験を積んでいる人は相談を受ける側、あるいは責任を任される側になりやすいことから、精神的な負担として作用していると考えられる。また、経験から職務上の限界を感じてしまうこともあるのではないかと考えられる。

また、教師自身が職務上の悩みや問題を同僚に相談しているか否かを独立変数として分析した結果、消耗感において、同僚に相談している方が消耗感を感じにくいという結果が得られた($t(140)=2.36$, $p<.05$)。このことについては同僚への相談という行為が教師の抱えている問題を解決することや、協力体制を築くのに役立つと考えられる。このことが結果として教師の負担軽減に役立ち、そのことから今回のような結果が得られたと考えられる。

パーソナリティ特性との関連を検討するために、バーンアウト 2 因子をそれぞれ基準変数とし、説明変数は年齢、性別を第 1 階層に、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、洗練性、自己効力感を第 2 階層に設定し階層重回帰分析を行った(Table1 参照)。

Table1　バーンアウト２因子についての重回帰分析の結果

		消耗感		達成感の後退	
		β	R(R²)	β	R(R²)
1	基本的属性		.066 (.004)		.232 (.054)*
	性別	-.023		.190*	
	年齢	-.061		.129	
2	パーソナリティ特性		.565 (.319)**		.583 (.340)**
	外向性	-.183*		-.232**	
	協調性	-.219**		-.020	
	勤勉性	-.085		-.280**	
	情緒安定性	-.127		-.073	
	洗練性	-.029		-.153	
	自己効力感	-.250**		-.117	

注) **‥p<.01　*‥p<.05

まず消耗感については、階層重回帰分析の結果から、外向性、協調性、自己効力感がそれぞれ有意な負の影響を与えていた。外向性と協調性が影響を与えているということは、対人関係が消耗感に関与していると考えられる。このことは、相談行為を行っている教師とそうでない教師との間に差が見られたこともこのことを支持していると考えられる。また、自己効力感については、教師が授業や学級経営をどれだけうまくやれているか、ということについての自分の判断が影響していると考えられる。

達成感の後退については、階層重回帰分析の結果と男女比較の結果から、女性の方が達成感の後退を感じやすいと考えられる。また外向性と勤勉性が負の影響を与えていた。このこととキャリア別の比較の結果から、観念的で、ある程度の経験を積んでいる女性の教師のほうが達成感の後退を感じやすいと考えられる。また、自己効力感が有意な影響を与えていなかったことから、対外的な評価の与える影響が大きいと考えられる。

【引用文献】伊藤美奈子 2000 教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究　教育心理学研究 48,12-20

田尾雅夫・久保真人 1996 バーンアウトの理論と実際＜心理学的アプローチ＞　誠信書房

（さわだ こうじ・うえ ひろし）

職場内ソーシャルサポートについての探索的研究

― サポート源を上司と同僚に区分して ―

○加藤純子[1)]　森下高治[1,2)]
([1)] 帝塚山大学大学院人文科学研究科　[2)]帝塚山大学心理福祉学部)

キーワード：ソーシャルサポート、職場、ストレス反応

【研究の目的】ソーシャルサポート(以下、サポートと略記)は、職場ストレッサーとストレス反応の低減に有用な要因として注目されている概念であり(小杉, 1999)、会社内で良好な対人関係が保たれている従業員、すなわち会社内サポートを高く保持している従業員ほど、「他者からの援助を求める」などのコーピング方略の使用が有意に増加し、その結果ストレス反応の低減がもたらされることが明らかにされている(田中ら, 2002)。これまでの研究では会社内サポートを一括りにしたり、サポート源のみ分類した研究がほとんどであり、会社内でどんな種類のサポートを誰から得られると知覚しているのかを測定した研究は見当たらない。

ところで、厚生労働省が行っている労働者健康状況調査(2002)の中で「仕事や職業生活での強い不安や、悩み、ストレスあり」と回答したものは61.5%であり、その職場ストレスの内容としては、「職場での人間関係」(35.1%)が一番高かった。「職場での人間関係」は、労働者の健康を考える上でも重要なポイントであることから、本研究は、会社内サポートの中でも職場内サポートに焦点を置くこととする。また、職場でのサポート源や種類により、サポートを知覚する者のストレス反応が異なることを仮定するため、職場内におけるサポート源を上司・同僚（部下を含む）に区分し、サポートの種類について分類を検討したい。

当初、この研究は職場内ソーシャルサポートの尺度作成を目的として着手したが、結果的には尺度づくりに至る分析結果とはならなかった。しかし、探索的に分析を進めた所今後職場内サポートの種類を考えていく上で、示唆的な分析結果が得られたと考えるため、その結果から検討したい。

【方法】

対象　平成19年3月に職場にて調査を実施した。A県2市町の職員889名(男性403名,女性486名,有効回答率81.7%)。男女構成比に大きな偏りがなく、男女混合で検討した。

調査票　ストレッサー、ストレス反応、コーピング、ソーシャルサポート、ソーシャルスキルを問う独自の質問紙を用いた。本研究では、このうちストレス反応(SRS-18, 18 項目)とソーシャルサポートの項目を採用した。ソーシャルサポートの項目は、4 つの因子(助言・相談,慰め・励まし,物質的援助・金銭的援助,行動的援助)からなる、サポート内容とサポート源を分類する試み(福岡, 2000)で用いられた21項目から、事前調査と心理学大学院生で協議して選択した10項目を、上司と同僚(部下を含む)それぞれについて問う内容とした。回答形式は4件法を用いた。

分析方法　1)ソーシャルサポートの項目について因子分析を行った。2)ソーシャルサポートの項目について上司・同僚別に、1）で残った項目について探索的に因子分析を行い、その因子ごとの得点をもとに対象者を四分位により、上位25%を高群、下位25%を低群に分類し、因子ごとに高群と低群でストレス反応の平均の差の検定(t 検定)を行った。

【結果】1)上司・同僚の群とも、天井効果の認められた4項目を除いた6項目で因子分析を行ったところ、それぞれ1因子が抽出された。2) 1)で天井効果の認められた4項目は、前述の分類では、物質的援助・金銭的援助と行動的援助に該当する項目であった。そのため、それ以外の6項目で2因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行ったところ、上司と同僚で同じ項目からなる2因子が抽出された。因子Ⅰ(上司;α=.889,同僚;α=.852)は「慰め・励まし」、因子Ⅱ(上司;α=.887,同僚;α=.877)は「助言・相談」と命名でき、前述の分類と同一であった。t 検定では、全ての因子において、サポートを高く知覚している群のストレス反応が、低く知覚している群よりも1%水準で有意に低かった(図1)。

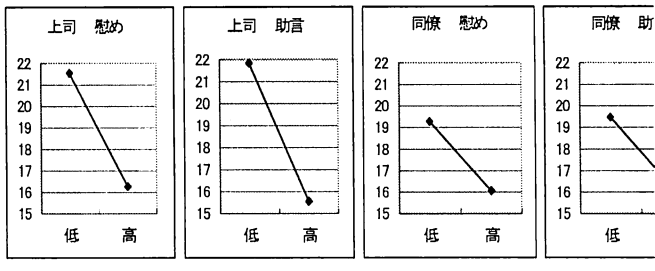


図.1. サポート因子ごとのt検定結果

【考察】職場内サポートがどれだけ得られるかという知覚では、どんな内容であるかという種類によらず、誰から得られるかというサポート源の区別がなされていると考えられる。これには、今回の調査が元々サポート源を区別して問う内容であったことの影響は考慮しなければならない。探索的ではあるが、サポートの種類の特徴を捉えるために行ったt検定では、いずれの群においてもサポート知覚高群が、低群よりも有意に低いストレス反応であった。両者の時間軸的測定は行っていないが、ソーシャルサポートはストレス反応の低減に有用(小杉,1999)という先行研究にも合致する結果である。更に、t 検定の結果から、上司サポートの知覚高群・低群のストレス反応の平均の差が、同僚サポートの知覚高群・低群の差よりも大きいことから、上司サポートの知覚が、同僚サポートの知覚よりもより重要性があるとも推測される。すなわち、上司の役割が、同僚の役割よりもより従業員の精神的健康にとって重要である可能性があると考える。この点については、今後分析による検討を進めたい。

今回分類がなされなかったサポートの種類については、因子分析時に天井効果の認められた項目が上司・同僚ともに4項目であったことや、サポート項目の各平均点が全て中央値を超えていたことから、元来サポートの高い職場で様々な種類のサポートが混同してなされるため、種類について意識せずとも様々なサポートが得られるとの知覚がある、と推測される。Karasek ら(1989)が職種とサポートの関係を明らかにするために行った米国人労働者の調査では、公務員はサポートの高い群に位置することからも、日本においても同じような状況であるとも考えられる。この調査を多業種に広げ、業種間でサポートの知覚に差異があるか等について検討することも、今後の課題である。

【引用文献】

福岡欣治 2000 ソーシャルサポート内容およびサポート源の分類について 日本心理学会第64回大会発表論文集
鈴木伸一ほか 1997 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究

（かとう じゅんこ・もりした たかはる）

リスクテイキング傾向測定ツールの開発に向けて

— ジレンマゾーンを例に —

○中井　宏[1),2)]　臼井　伸之介[1)]

([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科　[2)]日本学術振興会)

キーワード：リスクテイキング、ジレンマゾーン、運転技能の自己評価

【目的】交通事故や産業事故などの原因を考えると、JCO 臨界事故や関電美浜原発 3 号機事故を例に挙げるまでもなく、違反・リスクテイキング行動を防止する対策の考案が重要な課題となっている。

そのため、リスクテイキング傾向を測定するための検査ツールは、様々な領域でのニーズが高いものの、未だ開発には至っていない。違反やリスクテイキングの研究では、実験や検査の対象者に構えが生じるため、目的を伏せて実施するか、または目的が分かっていてもリスクを冒してしまうような検査にする必要がある。そこで我々は、リスクテイキング傾向の測定指標として、違反か違反でないかの基準が曖昧でグレーな部分が多い行動指標に着目した。

特に自動車運転場面には、そういった行動が非常に多いが、本実験では黄信号無視を取り上げることにした。本稿では、個人が持つジレンマゾーンと、運転技能の過信度および安全態度との関連を分析することを目的とした。

【方法】研究用ドライビングシミュレータ(㈱三菱プレシジョン製)を用い、シナリオは Visual C^{++}によって作成した。3 つの液晶プロジェクタを用いて前方スクリーン(約 120cm×90 cm)に前景を投影し、ドライバーからの視野角は約 96 度×19 度だった。

実験協力者は、普通免許を有する男性 10 名であり、平均年齢は 31.4 歳(SD=2.95)、平均運転経験年数 11.5 年(SD=3.63)、平均年間走行距離は 6800km(SD=4895)だった。実験に先立ち、安全態度検査 SAS592(大塚・鶴谷・藤田・市川, 1992)、過信度測定ツール(中井・臼井, 2007)へ回答を求めた。

走行コースは約 1.9km の直線路であり、1 周あたりの信号交差点は 5 カ所だった。コース両端は無限にループし、各ドライバーには同じコースを 60km/h で走行するよう求めた。このとき、自車両の速度から各交差点への到達予想時間を算出し、それに基づいて信号現示の変化を設定した。また、走行中には他車両や歩行者等は出現しなかった。

信号現示の変化タイミングは、2.1 秒から 4.5 秒までを 0.1 秒ごとの 25 段階で設定し、恒常法でジレンマゾーンを測定した。2 周する間にランダムな 5 カ所の信号が変化するようなシナリオを作成し、各ドライバーについて 11 周(速度が安定しないと考えられる 1 周目では信号現示を変化させず、2 周目から 11 周目の信号を操作した)の走行 3 セットを課した。

青のまま表示された信号に対しては、特に反応を求めず、接近中に黄に変化した信号機については、「行く」か「止まる」の意志決定を口頭で反応するよう求めた。

【結果】本実験の従属変数には「行く」と 1 度でも答えた数値の最大値を採用した。これは、1 回でも「行く」と答えた秒数を、そのドライバーが潜在的に冒す可能性のあるリスクと捉えたためである。このジレンマゾーンの最大値と、質問紙から得た過信度および安全態度、ドライバー属性との相関、および運転歴との関連を分析した。

Table 1 は各ドライバーの質問紙への回答およびジレンマゾーンの上限(秒)を示したものである。運転技能の過信度は正ならば過信、負ならば謙遜と考えられる。運転歴については違反の中でも速度超過によるものを別記した。相関分析を行ったところ、安全態度のうち自己顕示性(r=.674, p<.05)と攻撃性(r=.888, p<.01)が高いドライバーほど、信号現示が手前で黄になっても進入することが示されたが、過信度やドライバー属性との間には有意な相関は見られなかった。

Table 1 実験の集計結果

運転技能の過信度			安全態度				運転歴			
運転マヌーバ	手技的操作	配慮	感情高揚性	自己顕示性	攻撃性	非協調性	物損	違反	速度	最大値(秒)
0.40	−1.00	−0.25	23	13	15	19	有	有	無	3.2
−0.80	−1.00	−0.50	22	11	9	18	無	有	無	3.3
−0.20	−0.25	−0.50	29	13	17	23	無	有	無	3.3
0.00	0.00	1.00	16	12	13	12	無	無	無	3.4
1.40	0.50	0.00	20	14	17	19	無	無	無	3.4
−1.60	−3.25	−0.50	28	24	30	23	有	有	有	3.7
−2.40	−1.75	2.75	26	21	23	20	有	有	無	3.8
0.20	−1.50	1.25	30	19	27	22	有	有	有	3.9
0.00	0.00	−1.00	34	26	29	23	有	有	有	3.9
1.00	0.75	−0.50	23	14	29	21	有	有	有	4.0

次に、事故歴や違反歴とジレンマゾーンとの関連を分析した結果、Table 2 のように、物損事故の有無、速度超過の有無において有意差が見られ、物損事故や速度超過の経験があるドライバーほど、ジレンマゾーンが長いことが示された。

Table 2 運転歴とジレンマゾーン

		ジレンマゾーン	t値	p値
物損事故	あり(n=6)	3.75	−2.689	.028
	なし(n=4)	3.35		
速度超過	あり(n=4)	3.88	−4.024	.004
	なし(n=6)	3.40		

【考察】本実験では、ジレンマゾーンと過信度および安全態度との関連を検討したものの、過信度との相関は見られなかった。これは、加減速時に生じやすいシミュレータ酔いを防ぐ等の目的で、口頭反応だけを求めたため、ブレーキ操作等の技能が必要とされなかったことが原因と考えられる。

一方で、ジレンマゾーンは、安全態度や事故歴・違反歴と関連が見られた。SAS592 は、その開発段階で通常講習受講者と簡素講習受講者を敏感に判別する項目から作成されているため、安全態度と事故・違反歴の両者が同一の結果となることは予想の範囲内である。しかし、リスクを敢行しても即座に事故に繋がる確率は低いため、実験で得られたリスクテイキング指標と事故経験の間に有意な関連が見られることは希であると言える。それにもかかわらず、本実験で有意な関連が見出されたことは、ジレンマゾーンが事故傾向やリスクテイキング傾向を測定する指標として有効であることを示唆した。

【今後の展望】本実験では口頭反応だけを求めたが、実際のブレーキ操作を課す条件での追試を行うとともに、今後はサンプル数を増やして、得られた知見の信頼性を検証する必要があろう。また、ジレンマゾーンは、停止した場合に待たされる時間(リスクの不効用)や、後方車両との間隔(追突のリスク)を調整すれば、その変化を分析できることから、リスクテイキング行動発生メカニズムの解明にむけても、応用展開可能性が大きいと考えられる。

【謝辞】過信度測定ツールの開発に対して、大阪交通科学研究会より研究助成を受けました。ここに記して謝意を表します。

【引用文献】

中井宏・臼井伸之介 2007 運転技能の過大評価傾向とドライバー特性の関連 日本交通心理学会第 72 回大会発表論文集, 15-18.

大塚博保・鶴谷和子・藤田吾郎・市川和子 1992 安全運転態度検査 SAS 592 の開発 科学警察研究所報告交通編 **33**(2), 45-51.

(なかい ひろし・うすい しんのすけ)

アイカメラを用いた運転経験による視覚的探索および ハザード知覚への影響の実験的研究

○平山 裕記[1)] 蓮花 一己[2)]
([1)] 帝塚山大学人文科学研究科臨床社会心理学専攻 [2)]帝塚山大学心理福祉学部)

キーワード：アイカメラ、ハザード知覚、運転経験

【目的】

従来のハザード知覚研究では、ハザードの理解度などを調べたものが多く、眼球運動のように生理的反応を取り扱う研究は少ない。本研究は、運転経験の差によって視覚的探索およびハザード知覚への影響がどのように現れるのかをアイカメラを用いて眼球運動から調査・研究する。

経験の差が運転行動に正の効果を生むと仮定し、「運転経験が長いほど運転行動に関わる対象(交通関連対象・動的対象・ハザード対象)への注視時間が長く、またハザード対象への注視の開始が早い」を仮説とした。さらにハザード対象に関しては類型別の違いを検討した。

【方法】

実験参加者：22歳から50歳までの計20名(男性11名、女性9名)で、運転経験歴を調査し初心者群(10名、平均年間走行距離 537km)と経験者群(10名、平均年間走行距離 4770km)に分け調整を行った。なお、眼鏡使用及び視覚異常の者は省いた。

実験環境：帝塚山大学応用心理実験室内アビテックス(防音設備等の環境調整室、2.7×2.7×2.2m)で実施した。

実験機材：アイマークレコーダ(NAC,EMR-8B)、顔矯固定具(NAC,EMR-NL)、映像呈示用42型プラズマディスプレイ(Victor,PD-42DV4)、映像記録用デジタルビデオデッキ(SONY,DSR-30)、記録映像確認用19型モニター(Victor, DTV component-Multi)を使用した。

実験手順：実験参加者はフェイスシート記入後、アイマークレコーダでの正確な撮影のため顔矯固定具によって参加者の頭部運動を制限した。固定が確認されたらアイマークレコーダのキャリブレーション作業を行い、眼球の形状等の問題がなければ実験を開始した。実験参加者はスクリーンに呈示される15～25秒の交通場面の刺激映像を計13場面視聴した。この刺激映像は先行研究(蓮花ら 2003、Renge,K 1998)のハザード知覚テストを用いた。これは速度変化が少なく複数のハザードが含まれている一般車両による交通場面である。映像呈示中は眼球運動をアイマークレコーダによって記録した。刺激映像の呈示終了後、参加者は顔矯固定具を外し、視聴中に「危険である」あるいは「気になった」と感じた対象を先行研究で用いた質問紙に記入した。この際、対象を再確認するため刺激映像を再度呈示した。

分析方法：アイマークレコーダのデータから場面別に、注視時間・注視回数・確認の早さ(ハザード検出潜時)を解析した。注視時間と注視回数のデータは、「交通関連対象・非関連対象」、「動的対象・静的対象」のそれぞれに対してどの程度の割合で注視を行ったか、また先行研究でのハザード対象を類型別にどの程度の注視を行ったかについて、経験による差を調べた。ハザード検出潜時は、ハザードが出現してから視線を向けるまでの時間であり、経験による差を調べた。

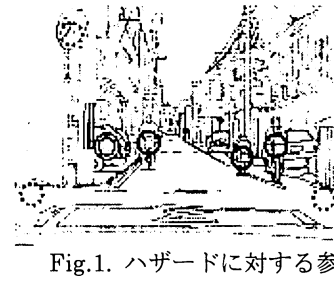
【結果】

注視対象の「交通関連・非関連」属性に関して、場面別および全場面総合で注視時間を算出し検定にかけたが初心者群と経験者群の間に有意な差は見られなかった。

注視対象の「動的・静的」属性に関して、場面別および全場面総合で注視時間を算出し検定にかけたが初心者群と経験者群の間に有意な差は見られなかった。

ハザードに対する注視時間を全場面のハザード毎に算出した。各ハザードの出現時間が同じでないため映像停止の4秒前から映像停止までの時間内の注視時間を求めた。この注視時間を初心者群と経験者群で検定にかけたところ、45個のハザードの中で6個のハザードに対して有意な差が見られそのほとんどにおいて経験者群が初心者群より注視時間が長かった(Fig.1)。

ハザード検出潜時と注視回数に対して場面別および全場面総合で初心者群と経験者群間で有意な差は見られなかった。



番号	類型	初心者	経験者	差
1	潜在	1.8	7.3	P<.05
2	潜在	2.1	2.8	n.s
3	行動予測	2.7	6.4	n.s
4	顕在	31.1	24.6	n.s
5	顕在	7.6	13.2	n.s
6	顕在	12.4	8.9	n.s
7	潜在	2.2	8.8	P<.05

Fig.1. ハザードに対する参加者群別の注視時間(例)
(表の番号は、図の円に左から順に割り振ったものである)

【考察】

注視時間において有意な差が見られた6個のハザードは顕在的ハザードが1個、潜在的ハザードが3個、行動予測ハザードが2個であり、顕在的ハザードのみ初心者群の方の注視時間が多かった。このことから同じ場面を注視していても、運転経験の長い者ほど潜在的・行動予測的な直接に危険性の見え難いハザードへの知覚に強みがあり、逆に初心者は顕在的な目に見えるハザードに知覚が引っ張られてしまう傾向があることが推測できる。注意を向けるべき対象を正確かつ迅速に判断できることが蓄積された経験の利点だとすれば、実際の運転でしか得られない「経験」をどうすれば人為的・教習的に蓄積させることができるか検討する必要があると考えられる。今後の課題としては、実験参加者の運転経験の幅をより広く取ること、経験による差の現れやすかった潜在的ハザードと行動予測ハザードに的を絞った刺激映像の作成、眼球運動とハザード認知・リスク判断の結びつき、などが挙げられる。

【引用文献】

蓮花一己・石橋富和・尾入正哲・太田博雄・恒成茂行・向井希宏 2003 高齢ドライバーの運転パフォーマンスとハザード知覚 応用心理学研究 29巻 1号 p1-16

Renge,K 1998 Drivers' hazard and risk perception, confidence in safe driving, and choice of speed IATSS Research Vol.22 No.2

(ひらやま ひろき・れんげ かずみ)

交差点右折時における対向車への注視量の年齢層別比較

矢野　伸裕
（科学警察研究所交通科学部）
キーワード：高齢運転者、交差点右折、注視特性

【研究の目的】 交差点を右折する際は、対向直進車だけでなく、信号機や右折先の横断歩道上の歩行者の動きなど、様々な対象に注意を配分し、交通状況の時々刻々の変化を捉える必要がある。対向直進車に対する情報処理をどの程度効率的に行えるかで他の対象への注意配分量も異なり、交通場面の全体状況の把握の程度も影響を受けると思われる。

本研究では、交差点右折時の注視特性を年齢層別に調べ、対向車など対象別の注視量について比較検討した。

【方法】 実験では運転シミュレータ（三菱プレシジョン製 DS-6000）を使用した。同シミュレータでは、運転席前方の３つの 29 インチブラウン管ディスプレイ上にコンピュータ・グラフィックスで作成された走行中の映像が表示され、映像は運転者の操作に応じて変化するようになっていた。運転席は実車を模して作られており、シートやハンドルの他、アクセルやブレーキ、速度表示、ギア等の装備は実際の車と同じ部品が使われていた。同シミュレータは国家公安委員会の認定を受けており、自動車教習所等で使用されている。また、運転中の注視行動をアイマークレコーダ（ナック製 EMR-8）を用いて計測し、アイマーク映像等をビデオテープに記録し、後日これを再生して分析を行った。

実験には、科学警察研究所と三菱プレシジョンで制作した『運転者特性検査編２』プログラムを実験用に改訂して用いた。市街地の一般道の走行コースで、所要時間は約 10 分間であった。コース中に信号交差点での左折が２回、右折が１回含まれており、他は直進であった。直進、左折及び右折は案内標識によって指示された。

コース中の信号交差点右折場面では、実験参加者の車両が交差点に進入すると６台の直進対向車が流入してくるが、対向車の流入パターンとして次の４通りが用意された。

①３台目と４台目の間に大きな gap が生じ、実験参加者はこのタイミングで右折を実行(信号機は３色灯器で青が継続)
②６台が数珠繋ぎで流入し、実験参加者は６台すべてが通り過ぎてから右折を実行（信号機は３色灯器で青が継続）
③６台が数珠繋ぎで流入するが、６台目が赤信号で停止し、その後、全赤表示中に実験参加者は右折を実行（信号機は３色灯器で青→黄→赤と切り替わり）
④６台が数珠繋ぎで流入するが、６台目が赤信号で停止し、その後、右折矢表示中に実験参加者は右折を実行（信号機は３色＋右折矢の灯器で青→黄→右折矢と切り替わり）

実験参加者車両の挙動と各対向車の挙動のタイミングはシミュレータのプログラムによって調整された。上記の４パターンは、信号交差点での典型的な右折場面と言える。

実験参加者（若齢者８名、高齢者 10 名）は、制限速度近傍の速度で走行すること、指定された地名を目的地として走行すること、普段の運転と同じような気持ちでドライビング・シミュレータを運転すること、を教示された。そして各参加者はコース走行を４回行ったが、上記①～④のパターンがそれぞれ１回ずつ含まれていた。

ビデオテープに記録されたアイマーク映像を再生し、対向車待ち中、すなわち右折する信号交差点内で実験参加者の車両が停止した時点（時速 10km 未満になった時点）から右折を開始した時点までの注視行動を分析した。そして、注視対象別に注視合計時間とその全体に占める割合（注視割合）を算出し、４回の走行（①～④のパターン）で平均して各参加者のデータ値とした。

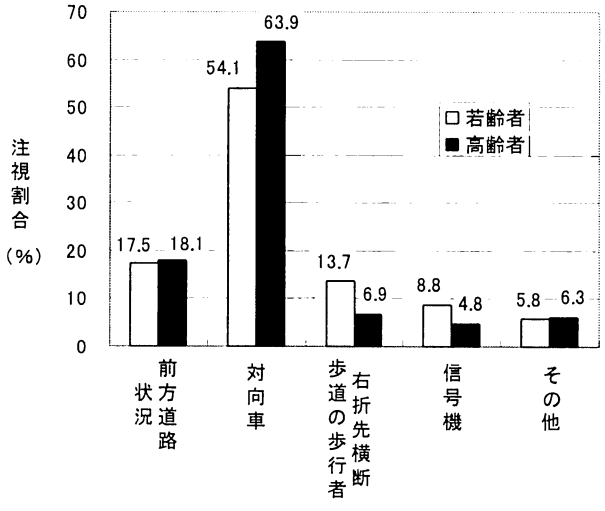


図１　対向車待ち中における注視対象別の注視割合
４回の走行（①～④の対向車流入パターン各１回）の平均

【結果】 図１は注視対象別の注視割合を年齢層別に比較して示したものである。対向車待ち中において、対向車を注視した時間の占める割合は若齢者で 54.1%、高齢者で 63.9%であり、有意傾向にとどまるが（$F=3.335, P<0.1$）高齢者の方が対向車を注視する量がやや多かった。一方、右折先横断歩道の歩行者（$F=7.054, P<0.05$）や信号機（$F=4.496, P<0.05$）に対する注視量は若齢者の方が統計的有意に多かった。

【考察】 若齢者と比べて、高齢者では対向車への注視量が多く、その分、右折先横断歩道の歩行者や信号機への注視量が少なかった。交差点右折場面では対向車に対する情報処理の重要度がもっとも高いとしても、注意が対向車に偏りすぎると他の対象への注意配分が減り、交通状況全体を把握することが困難になると思われる。高齢者では対向車に対する情報処理の効率が低いために対向車への注視により多くの時間が必要となり、そのトレードオフで他の対象への注視量が少なくなっていると考えられる。これは高齢運転者にとって、対向車に対する情報処理負荷が高いことの現れとも言えるであろう。右折先横断歩道の歩行者への注視は、右折実行に備えた先取りの安全確認であり、将来の行動段階への認知的な準備となるものと思われる。交差点右折場面で高齢運転者の注意が適切に分散され交通状況全体の把握がよりよく行われるように、対向車に対する情報処理負荷を低下させるような対策が必要と言える。

（やの　のぶひろ）

リスクの連続的評価と注視行動

○島崎　敢[1)]　石田敏郎[2)]
[1)]早稲田大学大学院人間科学研究科　[2)]早稲田大学人間科学学術院
キーワード：リスク知覚，注視行動，タクシードライバー

【研究の目的】航空や医療，原子力などの他分野と異なり，自動車の運転では，ハザード出現から事故に至るまでの時間が非常に短い．また他分野ではシナリオ性を持ったハザードが散発的に出現するのに対し，自動車ではより単純なハザードが連続的に出現する．適切な行動が選択されるためには，行為者によって知覚されるリスクの大きさが適切であることが必要で，時間的余裕がある場合にはリスク知覚の大きさだけを問題にすればよいが，自動車運転においては，リスク知覚の大きさが適切でも知覚のタイミングが遅ければ対処が間に合わない．従って，リスク知覚の大きさの適切さだけでなく時間的な適切さが重要になる．しかし，ハザードの出現から発見，さらにリスク知覚に至る運転者の情報処理過程に関して，時系列情報を含めて分析を行った研究は見当たらない．そこで，本研究では，これらの一連の情報処理過程に関して，時系列情報を含め，総合的な分析を行うことを目的とした．

【方法】実験に参加したのは20名のタクシードライバーで，うち 9 名はほとんど事故を起こさない運転者(以下優良運転者)，残りの 11 名は繰り返し事故を起こす運転者(以下事故反復者)である．参加者の選出は協力を得たタクシー会社の運行管理者に依頼した．事故件数を除く経験年数や年齢などの値には両群の間に有意差はない．

参加者に課せられた課題はアイカメラ(NAC EMR-8B)をつけた状態で前方スクリーンに映される刺激映像(動画)を見ながら，刺激映像から感じられる現在の危険(リスク)をリスク評価レバーによってリアルタイムに表現することである．

刺激映像は乗用車の運転席付近から撮影した 1 分前後の走行映像 15 場面で，いずれも片側 1 車線以下の道路の発進から停止まで，ハザードをランダムに含む自然な交通映像で比較的速度変化の少ないものとした．

リスク評価レバーは315mmの範囲で平行に動くレバーで，奥が危険大，手前が危険小として教示した．レバーは PC に接続され，30Hz，101 段階でリスク評価値を記録した．アイカメラの出力映像と現在の評価値を示す PC 画面は 4 分割器を介して 1 本のビデオテープに記録した．

【結果】分析は，まず実験参加者のリスク知覚反応(レバーを危険方向に動かす動作)に着目し，その反応開始時刻と評価値，反応終了時刻と評価値を記録した．さらに反応開始時に注視していた対象を，リスク知覚反応を生じさせたハザードとして扱い，反応開始時の注視が始まった時刻(直前注視時刻)，対象ハザードがはじめて画面上に出現した時刻(出現時刻)，対象ハザードを実験参加者が最初に注視した時刻(発見時刻)を記録した．出現時刻は全実験参加者で同じであり，これらの値を引き算して所要時間を算出した(図 1 中の A, B, C, D)．分析対象となったハザードは 277 ハザードであった．図 1 は典型的な反応の時間的ずれが見られたハザードの，出現から反応終了に至る両群の平均時間を示したものである．

なお，各ハザードに対するリスク知覚反応人数は 1 人から全員まで様々であった．そこで，まず全場面合計の両群の反応数(優良運転者：平均 121.7, SD=17.9, 事故反復者：平均 101.1, SD=21.5)を従属変数として t 検定を行った．その結果事故反復者の反応数が有意に少なかった($t(18)=2.33$, $p=.03$)．

一方の群だけが反応した 60 個のハザードを見ると，事故反復者だけが反応したハザードは障害物などの固定物が，優良運転者だけが反応したハザードは歩行者が多かった．

レバーポジションより算出したリスク知覚の大きさを表す指標にはいずれも両群の間に目立った差は見られなかった．

リスク知覚反応の時間的なずれを分析するために，両群とも 1 人以上反応したハザードの時系列指標の平均値を比較した．なお両群とも 2 人以上が反応したハザードについては t 検定も行った．その結果多くのハザードで出現時刻を基準にして見た 4 つの値(図 1 中の A, A+B, A+B+C, A+B+C+D)について，いずれも事故反復者が長い傾向であった．

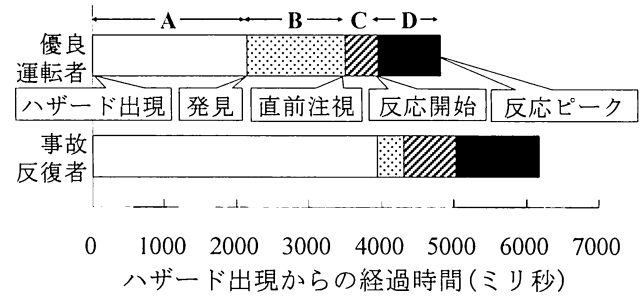


図 1　典型的なハザードに対するリスク知覚反応のずれ
(対象ハザード：見通しの悪い左 T 字路)

表 1 は図 1 中の A, B, C, D の所要時間比較で差が見られたハザードの個数である．ハザード出現から発見までの時間(A)で事故反復者の所要時間が長い傾向が最も顕著に現れており，B, C, D の所要時間には両群に目立った違いは見られない．

表 1　所要時間比較で差が見られたハザード数(個)

優良運転者の所要時間が大				事故反復者の所要時間が大			
A	B	C	D	A	B	C	D
2	7	3	7	28	3	4	6
54	117	101	107	132	77	104	97

上段：t 検定で $p<.05$ で有意差があったハザード数
下段：平均値の単純比較(有意差なし)

【考察】リスク知覚の大きさの指標には目立った差が見られなかったことから，事故反復者の事故の多さは，リスク知覚の大きさの不適切さというよりは時間的不適切さに起因している可能性が示唆された．表 1 より，リスク知覚の遅延はハザード発見の遅延に起因していると考えられるが，これは，事故反復者が交通環境情報を探索的，網羅的に取得しているのに対し，優良運転者が予測的，選択的に取得しているためだと考えられる．リスク知覚反応数に差が見られたのも同様の原因であろう．事故反復者が予測的，選択的情報取得スタイルを獲得できるような教育，訓練の開発が必要である．

(しまざき かん・いしだ としろう)

この研究は三井住友海上福祉財団の研究助成金によって行われた．記して感謝する．

高齢運転者用ワークブックの作成とその妥当性

○松浦 常夫[1)] 石田 敏郎[2)] 垣本 由紀子[3)] 所 正文[4)]
([1)] 実践女子大学人間社会学部 [2)]早稲田大学人間科学部 [3)]実践女子大学生活科学部（当時） [4)] 国士舘大学政経学部）
キーワード：高齢運転者、ワークブック、危険運転尺度、補償的運転尺度

【研究の目的】 高齢運転者に対して、日頃の運転を反省し、安全運転に努める機会を提供するために、高齢運転者用ワークブックを作成した。これは高齢運転者の心身機能の低下による不安全運転行動の傾向を測定する「危険運転尺度」と心身機能低下を補償して運転しようとする「補償運転尺度」から成り、高齢運転者への面接と質問紙調査を基に作成された（松浦ほか, 2006)。本稿ではこのワークブックの妥当性を検討する。また、回答結果を分析して、使いやすく役立つ内容になるようにワークブックを改良するための知見を得る。

【方法】 日本交通心理学会が認定する交通心理士が在籍する指定自動車教習所 60 校に調査依頼文を送った。対象となるのは、高齢運転者講習に参加するために来た普通免許保有者で、性別、年齢に関わりなく無作為に対象者を選ぶが、全く運転していない高齢運転者は除いた。調査協力を了承した自動車学校は 32 校であり、分析対象者は 3,132 人であった。

ワークブックは高齢者講習の前後に実施した。対象者には、調査に同意する場合は同意書に署名すること、調査協力費（金額は５００円か相当額の品物）を支払うことを伝えた。ワークブック実施の際には担当の教習所職員が付き添い、回答の手助けをしたり、質問に答えたりした。

ワークブックはＡ４で次の７ページからなった。

Ｐ１：表紙で性別、年齢、運転頻度も調べる。
Ｐ２：不安全な運転や心身機能の低下の自覚がいつからあるかを聞いた不安全運転尺度（15 項目)。危険得点を算出。
Ｐ３：補償的運転行動をいつから取るようになったかを聞いた補償的運転尺度（１５項目)。補償得点を算出。
Ｐ４～５：危険得点と安全得点のバランスから見た安全運転度の自己診断をする。
Ｐ６：自己診断結果の解説。
Ｐ７：ワークブックの有効性を調べる。また、事故や違反歴をここで質問した。

【結果】 1 危険運転尺度の妥当性

表１に示すように、危険得点（そういった運転をしているという項目数）を従属変数とし、性別、年齢、運転頻度、運転行動、事故違反点、正回答数を説明変数とする重回帰分析をおこなった。性別は男性を１、女性を２、運転頻度は１．ほぼ毎日～６．まったく運転していない。運転行動は、７項目からなる運転行動の指導員評価の得点を加算したものを用いた（各項目は５段階評価で、最低は７点で最高は３５点、α係数は.83)。事故違反点は、過去３年間に人身事故、２当人身事故、物損事故、２当物損事故、および違反の各々があったら１、なかったら０として、その５項目の合計点とした。

表２より、危険得点が高いグループは、「年齢がより高い、運転頻度が少ない、運転行動の評価点が低い、事故違反が多い、ワークブックの回答に誤りがあった」高齢運転者であった。こういった人々に共通するのは、運転時のエラーが多いことが予想される人々であり、そういった人たちが自分の運転に対してエラーや運転上の支障を訴えていたことは、妥当な結果といえる。

表１（上）と表２（下） 危険得点の重回帰分析

	平均値	標準偏差	N
従属変数			
危険得点	4.72	3.22	2793
説明変数			
性別	1.14	0.35	2793
年齢	74.42	4.17	2793
運転頻度	1.54	0.89	2793
運転行動	18.84	3.91	2793
事故違反点	0.44	0.79	2793
正回答数	3.95	0.30	2793

	標準化係数 β		相関係数 r	
性別	0.007		0.005	
年齢	0.078	***	0.097	***
運転頻度	0.173	***	0.174	***
運転行動	−0.050	**	−0.078	***
事故違反点	0.101	***	0.094	***
正回答数	−0.046	*	−0.052	**
重相関係数R	0.231	***		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

2 補償的運転尺度の妥当性

同様に、補償得点を従属変数とし、性別、年齢、運転頻度、運転行動、事故違反点、正回答数を説明変数とする重回帰分析をおこなった。補償的運転をよく行っているグループは、「女性、年齢がより高い、運転頻度が少ない」であった。運転行動や事故違反とは有意な関係が認められなかった。

重回帰分析では見いだされなかった補償得点と事故違反点との関係を、事故違反点を目的変数とした決定木（ＣＨＡＩＤ）を用いた分析により調べた。説明変数は、性別、年齢、運転頻度、運転行動、危険得点、安全得点、正回答数とした。その結果、事故違反点にまず影響する変数は危険得点であり、危険得点が６点以上の群の事故違反が多いこと、また枝分かれした６点以上群を見ると、その中でも運転行動の評価点が低い群ほど事故違反が多かった。更に、その運転行動の評価がふつうの群（15 点～20 点）では、補償得点が低い群ほど事故違反が多かった。

【考察】 危険得点の平均は 15 点中の４～５点であり低かったが、補償得点は 15 点中の 10～11 点で高かった。高齢者の中でも年齢が高い運転者ほど危険得点も補償得点も高くなる傾向が見られたが、10 歳違っても１点程度で差は小さかった。

危険尺度の妥当性を調べると、危険得点が高い人ほど事故・違反歴があり、また指導員による運転行動の評価が低かった。補償尺度の妥当性については、事故・違反歴や運転行動において、補償得点が高いほど安全であるという一般的な結果は得られなかった。これは危険を自覚した運転者ほど補償的運転をしがちであるためと考えられる。ただし、決定木を用いた分析から、危険得点が高い人に限っては、補償得点が高いほど比較的、事故違反点が低いという結果が得られた。

（まつうら つねお・いしだ としろう・かきもと ゆきこ・ところ まさぶみ）

航空事故事例にみるコミュニケーション齟齬に関する研究

垣本由紀子
立正大学大学院心理学研究科

キーワード；航空事故、コミュニケーション齟齬、ヒューマンエラー、

はじめに：米国 NASA に報告される飛行安全報告制度（ASRS）、いわゆるヒヤッとしたりはっとしたインシデントレポートの中では、不適切なコミュニケーションに関する事例が多く報告されている。事故事例における「コミュニケーション」の重要性が示唆されていると考えられる。そこで本研究では、コミュニケーション齟齬に至る機序について考察し、再発防止の一助としたい。

方法：２００１年から２００６年の間発生した航空事故１４２件、重大インシデントについて公表されている報告書をベースに齟齬の形態を SHEL モデルにより次に４つに分類する（第５２回日本航空宇宙環境医学会、２００６）。①パイロット－航空交通管制官３件、②　パイロット－キャビンアテンダント５件、③　ヘリコプターパイロット－地上作業員６件、④　ヘリコプターパイロット－環境・敷設物５件。これらの中で、①の事例については航空のコミュニケーション齟齬としてテネリフェ以来よく知られている事例である。ニアミスや、空中衝突の可能性もありきわめてクリティカルであることには変わりないが、ここでは、従来取り上げることの少なかったヘリコプターと地上作業員とのかかわりについて考えてみたい。

結果と考察：６年間に発生した事故の概要を述べると以下のようになる。

・2001.10.22　札幌市五天山公園建設現場。急な傾斜地区に物資輸送で、荷物を降ろした後、荷降ろし作業に従事していた地上作業員を荷つり用ロープに地上作業員をひっかけたまま上昇。地上に降ろそうとして作業員は地面に落下し、負傷を負った。

・2002.6.28　奈良県宇陀郡山中。荷物を下ろし、そこから離脱するときに、地上にある木材運搬用クレーンに、荷降ろし用ワイヤーが引っ掛かり、ヘリコプターは落着横転。機長は負傷し入院した。

・2005.8.20　山形県天狗山地内。物資輸送中、荷降ろし地付近において、つりさげていた物資が、地上作業員に衝突し死亡した。

・2005.10.18　富山県宇奈月町音沢谷　橋梁建設中現場へ、資材を運搬中、荷降ろし作業において、つりさげていた資材が地上誘導院に接触し、右足骨折。

・2006.1.10　海難救助訓練中、船舶上の救助要員を、航空機つり上げ用ワイヤーにより機内に収容しようとした際、当該救助員が保持していたロープが船舶に絡まり左腕前腕部を骨折した。

分析：①作業の特色は、訓練中の海上の事例を除き、いずれも荷（材木、建設資材等）を吊り上げ、作業現場に荷を下ろす作業中の事故である。荷つり上げと荷降ろし現場をヘリコプターは２～３百回と往復する厳しいが単調な作業といえる。

②　不安全行動について：パイロットは、操縦に専念しなければならず、地上作業員を直接視認できないことがほとんどである。地上とパイロットの中継は機乗した整備員が行う。ヘリコプターを移動させるイナーシャがあり、また地上の意図が伝わらず齟齬が生ずる。

まとめ：コミュニケーション手段が通信とは限らず、非言語コミュニケーションが混在して使われる。また、パイロットと地上作業員の間に複数の中継者が存在し、効率的とは言えず、改善の余地が認められた。　（かきもとゆきこ）

なぜ、子どもを取り巻く危機、危険を察知すべきか

― 浅利式絵画診断法を実践することで聞こえてくる子どもの声 ―

○渡部英夫
（のびのびライフアップスクール）

キーワード：心理、生理、矯正、発達

【研究の目的】子ども達を取り囲む生活環境には、様々な危険が待ち受けている。その一つ、家庭内での転倒は、幼児期にありがちな出来事である。頭部の重さを支えるだけの、脚力、筋力がまだない、成長過程にあるからである。子どもの転倒が後遺症となるかの判別が自宅で出来ることは社会にとって有益なことです。描画に現れた後遺症のサインの発見、療法による治療のケースの効果と、変化を明らかにすることを目的とする。14年間の研究を用いたケーススタディー。

【方法】浅利式絵画診断法（1953年日本応用心理学会会長・東京文理大学、小保内虎夫教授の紹介で「児童心理」金子書房に「児童画による疾病障害の発見方法」と題して発表）の、自由想画による無条件法を採択とは、親もしくは、大人からの指導を受けず、題材も本人の意思による描画手法だからである。その方法で描かれた児童の絵を、浅利式診断標識に照らし合わし読み取る。（参考文献、浅利篤、2004）

【被験者】1993年0君に、接したのは小学5年生の時。母親は、0君が学校などで描いてくる絵に対し疑問を持っていた。理由は自宅では不思議な絵をよく描いている姿を見ていた。本人も、先生からの指導が入っていたので、自分のオリジナルの絵ではないと思っていたとの感想。そこで、親の了解を得て面接し自由に描画をさせた。母親にとって、最も心配だったのは、子どもの学業成績と、運動能力がないのではないかという二つの不安があった。一つは、国語の時間で学んだことや、家庭教師をつけて学んだはずのことが、覚えていなかったこと。もう一つは、野球のリトルリーグに入団していたが、ボールの距離感を判断できない、走っていて壁によくぶつかるなどということが気になっていた。

【手続き】0君は自由に、B3の画用紙に4枚の絵を描きあげた。

【描画の結果】初めて自由に描いた、0君の絵の中には、逆三角形の顔が描かれている絵が在った。（Fig.1逆三角形）

【分析の視点】以下の浅利式絵画診断法1,2の視点で描画を診断した。1,構図（顔面投射、体躯投射、咽喉投射）子どもが描画した一枚の紙は人間の顔面、体躯、咽喉三つのパターンが表出される。（参考文献、浅利・渡部、2004）Fig,2

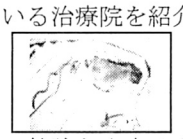
0君の描画は顔面投射された絵であると診断。その中でも頭部切断画は、子どもが持つ劣等意識という診断になるが、頬がそげていた。2、形態（シンボル・記号）描画した絵の形の持つ意味があり、その形にはそれぞれ意味がある。（参考文献、浅利、渡部、2004）浅利式診断法では、三角は形態診断によると鋸歯紋の一部であり、三角の繰り返しはデスパターンと言われ。危機察知能力を示している。

Fig.1 逆三角形

Fig.2 顔面投射　体躯投射　咽喉投射

【分析の結果】三角の顔の描画の診断をして、すぐに母親に、子どもの頃、頭部を打ったことがないかを聞く。0君は、2歳位の時マンションのベランダのコンクリートの床に頭を打ち、病院に駆け込み、脳の波形が乱れていることを発見し、3ヶ月通院した。医者は、多少の波形の乱れも大丈夫との結論。その後通院を終了していた。ただ、母親は子どもが勉強出来ないという意識だけは持っていたと言う。0君の描画から、転倒の後遺症が判明した。そこで治療を勧めることとなる。

【治療過程】物理療法で針を併用している治療院を紹介し、定期的な治療を勧める。一年目には描画に頭部の変化が見えるようになった。（Fig.3頭部凸）



描画もしっかりと人物画を描き、また、勉強も出来るようになり、県立高校へ進学を果たした。母親は直ったという意識から、教室と、治療院に通うことがなくなった。ところが、0君が高校3年の頃、息子さんが精神病院に入院したと突然母親から連絡が来た。（参考文献、谷口、1990）

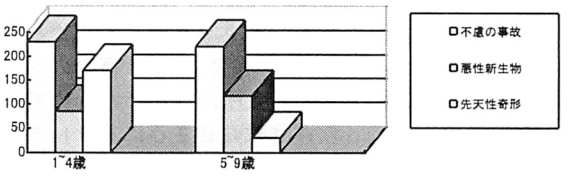
早期退院の後、再び教室通いと、治療に通院を試みた。N教室では絵画と言語の回復を図るため、9マス速読法での学習を始め、中学生レベルの国語から社会、理科などの常識を身に付けさせた。25歳の現在では、運転免許を取れるまでになり、無事免許を取得。現在も、親子はゆっくりとしたペースで教室と関係を持っている。

【考察】1, 異変の、発見の鍵は、浅利式診断法の構図、形態、色彩の意味が交差する点で理解できる。2,治療は治療家にお任せするとして、子どもの危機、危険、異変は家庭でも察知できる可能性がある。3,無条件で自由に絵を描ける家庭環境、親が事前に実践知識を持つ事で、子どもの危機、危険察知が可能。4,打撲による後遺症の子どもの症例も散見されている。（Fig.4腹部打撲）

本件は、0 君のケースだけである。今後、診断の信頼性と妥当性の向上を研究上の課題として、絵画診断技法と共に物理療法の可能性も研究してゆきたい。

【不慮の事故の統計】

{厚生労働省の「人口動態統計」（平成 15 年）（10 万）によると、乳幼児の死因順位} 1～4 歳児、5～9 歳児は「不慮の事故」が 1 位。全年齢と比較しても、幼児の、窒息、溺死、転倒などの不慮の事故には特に注意しなければならない。



【引用文献】（浅利篤・渡部英夫編　浅利式絵画診断事典　コスモトゥーワン出版）（谷口末翁　物理療法の難病治療　トト湘南）（浅利篤　児童心理６月号52P）

（わたなべ　ひでお）

教育評価の研究（その４６、４７）

― 思索と体験 ―

岸本　英男
（大泉会四期会）

キーワード：教育と政治、宗教、生涯学習

はじめに

本学会第７３回大会では、個別発表は口頭発表のみと限定されたので、本研究（一連の継続研究発表）の４６回発表論文は未公開となり、従って今回の４７回発表と共に公開して継続研究の趣旨にそわせる事にする。元来、日本教育の近代化には二つのターニングポイントがあり、一つは明治学制の寺子屋から近代学校への脱皮を可能ならしめた。師範学校制による教員養成の組織的合理的文教行制の実施、次は敗戦による皇民教育から近代市民制教育制度への転換が、それである。そして現在、教育再生制度化に向けての教育見直し論がとりざたされている事になる。筆者は、戦前戦中戦後に小学校教師として、具体的にその場に居合せた事になるが、一貫して実感した事は、教育評価観のうつりかわりに伴なうナンセンスと矛盾混乱、そして今日一貫してそこに流れている不易流行の概念である。つまり時と共にかわり行くものは政治に支配される教育、かわらないものは、教育の底を流れる宗教であり、加齢に伴う「自分への気づき」つまり「ヒト一生の学習課題の発見」という事であり、それらを統合した訳説の創造とその実証という事になる。

○　本研究の目的

現時点に於ける仮説の設定

「自己への気づき」にめざめる事が「子どもからおとなへの通過儀礼」のひとつである以上、その時点で個性が生ずる。そして、万人が運命共同体の一人としてストレス社会の構成メンバーとしての自覚を実体験して自己一生の学習課題を自己に課す事になり、結果として、生涯をかけて実証する。人は所詮、そのための遺伝子の走狗でしかない。人の一生はその間にゆれ動く一本の葦でしかない。この命題が人類の文明の仮説である。その当否を検証する過程の一つとして教育評価の研究を継続する事が目的である。

○　方法と結果

果して、人間は文明の総括としての教育評価観に対して、どの程度、納得してきたか、万人に万人の尺度があるという、評価の条件を満足させる説明原理は従来の教育哲学や心理学からは、答えが得られず、今日僅かに応用心理学に、そのなぞときのキーが求められている。その仮説に基づく筆者なりの思索と体験を加齢に伴なう結晶性知能として検証する、継続発表を試みつつある事になる。キエルケゴールの言葉をかりれば「死に至る病い」の渦中にある事になる。「既に現在までの研究過程は筆者の職歴に応じた多様性のバラツキがあるが、そこには一貫した原理がある。つまり E=f（GAT）であるが変転極まりない教育制度の現象面の説明原理として必要過充分な役割を果たしてきた。古来「教育」をめぐって多くの警句がとりざたされてきたが「教育」という概念の多義性、日常性が余りにも広範で、とらえ所がなかったためでもあろうが、その中の一つに「教育は教育せざるにあり」の文言がある。これは直接「教育評価」に通ずるもので、「教育評価はできないもの」として、それにたずさわる関係者の免罪符となってきた。当然それは教育行政上の盲点となり、さまざまの解釈を生み、今日に及んでいる。筆者は、この明るみの矛盾の解決にチャレンジしてきた事になるが、この原理は敗戦後の米国のチエに基づき６０年の検証期間を経て、今日漸く一般社会に定着しつつある。この事実が「教育」問題の不易流行性を傍証しつつある事になろう。

今日漸く明らかにされてきた不易の原理は「教育評価」は、とりも直さず「するがわ」と「されるがわ」とのカウンセリングであり、流行の原理は、相方ともに、発達過程にある人間同志の仮説の創造と実証であり、更にそこに一貫する原理は一種の宗教である。それは、教育現象としての至高聖所（アバトーン）であり、有限を自覚した人類が、求めてやまない「心のあり場所」つまり「いやし、いやされる」具体的場であり、絶望的状況を通しての希望願望、つまり、その無限のサイクルを通してのライフワーク、そのプロセスが「流行」という語義にあてはまる事になろう。

○　考察　日本の教育は、富国強兵の国家目的に呪縛されたあげく、心身の発達にハンディのある者は、特殊教育として差別され、教育のローヤルロードから疎外されていかざるを得なかった。日本だけでなく世界の文明先進国に共通して見られる文化現象の一つとされてきた。而しその現象は人類の英知の進化に逆行するものであることが、一連の科学の進歩発展によって実証され、さまざまな方向で軌道修正され、世界的常識になりつつある。日本に於てもそれらを「特殊教育」という狭い概念で、かこいこむ事なく「特別支援教育」の概念で新な校内支援制度として、すべての小中学に、２００７年度までに定着する施策が実現されてきた。筆者は既に１５年先から、そのパイロットプランを試行して本学会で研究発表を継続してきたが、今日漸くその普通妥当性が文教政策のバックボーンとして定着しつつある事になる。既に先進国アメリカでは、１９７０年代から学際的研究の成果の一つとして世界の教育界に著書を通じて発信し続けていた。それぞれの国内教育制度に、それが定着してくるには、３０年内外の時間を要した事になろう。そしてその間に有為な研究者実践者の多くが絶望裡に、その生涯を閉じた事になる。末法思想に僅かに救いを見出した事が関係者の証言によって明らかである。勿論その間には思慮分別の浅はかさによる姪祠邪教のカルト集団のわなに陥る所謂高学歴社会の落し子の例（オウム集団等）もあるが、いづれも人間形成の決定的時期に於ける克己復礼の価値観の欠如、（生涯学習の意味のとりちがえ）等余りにも急激な社会の変化に、教育評価観が追いつかず、ナンセンスと混乱のカオスから文明の閉息状況に陥っている病める近代文明社会の症状・・・末法現象に立ちむかう絶望との戦いこそ、「教育評価」の原理と観念し、そのための道程を見きわめる事こそ、当面の課題であろう。

筆者は嘗て心障学校担任として４０年、所謂、特殊教育として、かこいこまれたがための利害得失を身近に経験したが、今回の文部科学省の制度面からの改革に、多くの期待をよせる者の一人である。長い間スシづめ学級のコトバで普通学級で、はじきとばされてきた子どもたち一人ひとりに、正しい支援の手がのばされてきた事は、絶望の底に、ひと筋の光を見た喜びである。

岸本英男

中学生の学校適応に関する諸要因の検討

― 「学校の荒れ」への組織的対応とは？ ―

○大前泰彦
（和歌山県有田市立初島中学校）

キーワード：学校適応、問題行動、学校システム

【研究の目的】

学力低下問題に起因した教育改革は、様々な論議を繰り返しその方向性を模索しているが、児童・生徒の学校適応に関する効果的な施策は打ち出されていないとの指摘もある。「希望格差社会（刈谷）」によって、学力の格差は勿論、学校適応感にも格差が拡大していくおそれは十分ある。

平成１８年度の少年非行等の概要（警察庁生活安全局少年課）によると、我が国では、刑法犯少年、触法少年、特別法犯等の検挙・補導件数は年々減少してきているが、校内暴力やいじめは増加してきている。また、児童虐待や性的問題（出会い系サイト等含む）も増加してきている。この傾向は今後も続くであろうと考えられる。

学校での問題行動はその予防や対処がうまくできないと、大きな荒れとなる。学校での最大の問題は、「荒れ」である。学校が荒れると、授業不成立・学力低下、いじめ・暴力多発、不登校増加、教師のメンタルヘルス悪化・精神疾患・早期退職、保護者や地域からの不信・修復困難等々全ての問題が出てくる。したがって、学校が安全であることは、最優先課題なのである。しかし、どういうわけか「生徒指導」関係の書物は少なく、また、その方法としては「生徒理解」を中心とする教育相談的方法が中心である。「学校カウンセリング」を冠する書物は極めて多いが、問題行動への対処については、組織的具体的なものは少ない。生徒指導に関して、スクールカウンセラーの役割が強調されることが多いが、学校現場での様々な調査によれば、非行・問題行動や学校のスタッフの組織的行動に対する援助としては期待されていない。それは、スクールカウンセラー（臨床心理士）養成の課程において、実践的な生徒指導論が学ばれていないことも一因であろう。

文部科学省は、平成１８年５月に、新しい生徒指導の指針を示したが、この中には、プログレッシブ・ディシプリン及びゼロ・トレランスという語が明記されている。アメリカの生徒指導の方法を導入・検討し始めているのである。

本研究は、以上のような問題意識から、

1　「荒れた状態の学校」において組織的対応を常に念頭において取り組んだ事例
2　「学力と不適応」との関係をデータ分析したもの
3　「問題行動」生徒への個別カウンセリングの事例

を総合的に考察していくことにより、新しい生徒指導実践論の構築への問題提起としていくことを目的とする。

【方法】

＜事例研究１＞

Ａ県Ｂ中学校では、平成１５年度大きな荒れを経験した。次年度も荒れが継続していくことが危惧されていた。所属職員にとって、どのような方針で取り組んでいくのかが、最大の課題であった。事例１は、全職員が一致団結して取り組み１年後には大きく変化し、２年後にはその地方で最も落ち着いた学校と言われるまでになった取り組みの総括である。

＜調査研究１＞

生徒の問題行動は、「突然キレる」「予想不可能」などと宣伝されるようになってきたが、通常は、そのようなことは極めて少なく、学校生活上のサインは「授業態度」「遅刻」「欠席」「服装」「部活動」などに現れてくる。本調査研究は、学力と問題行動との関係を求めたものである。

＜事例研究２＞

Ａ県Ｃ中学校は、長期にわたって「荒れ」が続き県内ワース３の１つとまで言われてきた。近年大きく改善され、かつての荒れは影を潜めている。事例研究２は、Ｃ中学校において、主として教職員の問題点とその克服過程とともに家出・リストカットを繰り返す生徒への個別カウンセリング経過を示しながら、学校カウンセリングの諸問題を提起していくたいと考える。

【結果】

・事例研究１では、①毎朝全校集会を開き、１日のスタートを整然と始めることを目指し、②定期テスト、学力テストの後には、学習相談を必ず設定して全校的に取り組み、③授業妨害、抜けだし、暴力行為等への具体的実践マニュアルを作成しその通りに取り組み、④進路意識を高める授業、学年集会を繰り返す、等により１日１日の変化は大きくはなかったが、１年後～２年後には大きく改善された。

・調査研究１では、定期テストの成績と、服装違反、遅刻等の頻度との関係を求めたが、これらには一定の相関関係は認められるものの、単純な１要因で規定されるものではなく、様々な対人関係、自尊感情、未来指向性等も影響を及ぼしていよう。ただし、学校内での規律ある生活を求めることは、学校全体の風土に関係していくため、必要不可欠であろう。

・事例２では、管理職のマネージメント能力と職員の仕事に対するモチベーションが低いと学校は荒れていくということ、そのような中でのスクールカウンセリングは、「ミニクリニック・モデル」等では全く不十分であることが分かった。

【考察】

学校は集団生活の場であり、学力向上等の価値実現を目指す目的意識的活動が日々行われている。個性重視、個別指導等が強調されていても、集団指導、ほぼ同様のカリキュラムという原則は変わらない。我が国の家庭、地域社会、情報社会が大きく変化していく中で、とりわけ集団への適応というのが古くて新しい課題となっている。グローバリゼーションと個性化の下、格差社会が広がっていくならば、学校のシステムは逆により組織的に活動していく方向性が必要であろう。

学校は集団指導を放棄できない。ならば、グループダイナミックスやモチベーションをキーワードとし、具体的取り組みとしては、「つながり」と「予防」を強調し、学校のスタッフのそれぞれの役割を明確にし、チームを組んで組織的に生徒を支援していく方法や、保護者や地域とどうつながっていくかが最重要課題であろう。そのために、学校教師は、様々なトレーニング（授業、体力強化、アセスメント、生徒への対応、保護者とのつながり）を行うことが必要である。生徒のこころを育てるために、「つながり」と「協働」が必要である。

（おおまえ　やすひこ）

幼児の養育者における「親になる教育」に関する研究

小谷　正登
（関西学院大学教職教育研究センター）

キーワード：子育て支援、親になる教育、養育者

【研究の目的】　近年，都市化，核家族化，地域における地縁的なつながりの希薄化などを背景に，家庭の教育力の低下が指摘され，また，少年非行や児童虐待の深刻化，急速な少子化の中で，すべての親に対するきめ細やかな家庭教育支援を充実することが求められている。この家庭教育支援は，鯨岡（1998）が述べるところの「育てられる者」の一種の変身の過程を援助するものと捉えることができる。さらに同氏は，養育者としての大人の両義性として，自分の親への同一化と反同一化，わが子への同一化と反同一化，そして，社会通念としての養育行動への同調と非同調の３つをあげている。そして，この３つの両義性が重ね合わされ，錯綜した両義性が立ち現れ，そこに生じる共振や揺らぎの中で「育てられる側」から「育てる側」へと移行するとしている。すなわち，このことは成長し親になった時にそこで成長が完成したと考えるのではなく，そこからが「育てられる側」から「育てる側」への未熟な発達の始まりの第一歩であり，自らが「育てられる側」を育てながら「育てる側」として育つということである。さらに，この過程には今日の養育者を取り巻く諸環境を考えるとき，適切な「子育て支援」であるところのソーシャル・サポート、つまり「親になる教育」が必要であることを示している。その一つである情報的サポート提供の有効な方法としてサイコエジュケーション（Psychoeducation 心理教育，心理学の理論や技法を教育に援用すること）があげられる。國分（1998）は，サイコエジュケーションを「①集団に対して，②心理学的な考え方や行動の仕方を，③能動的に，教える方法である。」とし，治療的カウンセリングとされる伝統的なカウンセリングに対し，開発的・予防的・育てるカウンセリングと位置づけている。本研究は、サイコエジュケーションの技法を用いて，発達心理学，臨床発達心理学および幼児教育学などの見地に基づく正確な知識の提供すなわち情報的サポート（informational support）の提供が，幼稚園児の養育者の抱える育児不安を軽減し，楽しい子育てを実現するために有効であると考え、その実践内容を示し，その実践による子育て支援の効果を明らかにするものである。

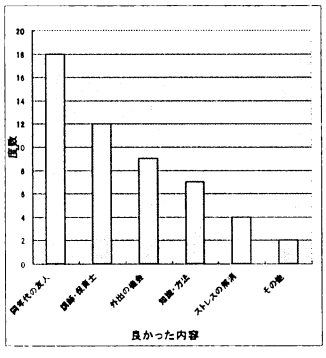
【方法】

1. 対象　兵庫県内の私立幼稚園（在園児３～５歳児，2002年：71名，2003年：73名，2004年：65名，2005年：68名，2006年：56名））の参加を希望した養育者を対象として実践を行い，研究の対象とした。なお，同幼稚園が位置する地域は都市部かつ私・国立中学校受験の盛んな地域であり，養育者の教育・育児に対する意識が高い地域である。なお，筆者が同地域に居住していることもあり，卒園後も一部の子ども・養育者に対して支援関係が成立している。

2. 期間　2002年６月～2006年３月の４年間，全21回の実践を実施した（2007年１月で全24回）。

3.**方法**　子育て支援の効果を実践に参加した保護者のアンケートをもとに明らかにした。

【結果】　アンケート内容を通して，今回の実践によって①子ども観・子育て観の変化，②具体的な知識の提供による生活の変化，③サポート内容の変化，④支援関係の成立と促進による専門機関の紹介，および⑤児童期・思春期をみすえた子育て意識の芽生えの５項目に分類される広範囲にわたった支援の効果が得られた。本実践は，情報的サポートの提供に主眼をおいたものであったが，回を重ねる中で在園児のみならず，兄弟姉妹についての個別相談を受けるようになり，情緒的・自尊感情的サポートの提供もなされたと考える。また，これによって保護者同士のネットワーク形成による共行動的サポートへと展開する方向性も見られた。加えて，卒園後も支援関係が継続している保護者もある。なお，保護者同士のネットワーク形成による共行動的サポートの重要性について，小谷・土井（2006）は，私立保育所で実施された「子育て支援」事業に参加した０歳児（第１子）の子どもを養育する母親，計38名を対象としたアンケート調査の結果から，参加者の多くが「参加して良かった内容」として「母子共に同年代友人ができた」，「講師・保育士との交流」をあげ高い評価を示している（Fig.1.・Fig.2）ことを報告している。また，第18回（2005年９月21日実施）で行った「子育てが終わると考える時期について」のアンケート調査の結果では，12名という限られた回答数であったが83.3%の保護者が「高校卒業時以降」と答えるなど，視点を遠くにおいた子育てがなされていることが明らかにされるとともに，小学校から始まる学習および教育問題に対する不安も示された。



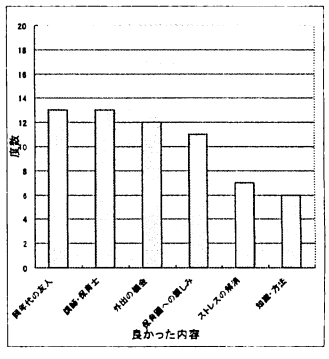


Fig.1.参加して良かった内容（03）Fig.2.参加して良かった内容（04）

【考察】　渡辺（2004）は，保育所を中心に進められている「子育て支援」に対する幼稚園の子育て支援機能の意義と重要性として，親子関係を巻き込む形で子どもの育ちを伝えることによって将来のさまざまな問題を未然に防止する可能性を述べている。本実践において，以上の①～⑤にわたる広範囲な支援の効果が見られたことから，従来から見られる支援事業のような諸問題に対する対処療法的な解決策に加え，本実践研究のような適切な時期に「親となる教育」を実施し，予防医学的な方策をとることで子育て支援の効果および家庭の教育力がさらに向上すると考えられる。

【引用文献】

國分康孝（編）　1998　サイコエジュケーション　学級担任のための育てるカウンセリン　グ全書２　図書文化
小谷正登・土井由美　2006　全人教育プログラム（ETM）を通じての「個」の育ち（２）－「子　育て支援」の視点から－　日本発達心理学会第17回大会発表論文集　524.
鯨岡峻　1998　両義性の発達心理学　ミネルヴァ書房
渡辺英則　2004　幼稚園の今：子育て支援の流れの中で　発達，98，9-15.

（こたに　まさと）

要求度-裁量度-支援度モデルに基づく大学生のストレッサー

― 大学生用 D-C-S ストレッサー尺度の作成 ―

○水澤慶緒里 [1)]
([1)] 関西学院大学大学院文学研究科)

キーワード：D-C-S モデル，拡張 Karasek モデル，大学生活全般，ストレッサー尺度，因子分析

【目的】大学生のストレッサー尺度は，大学生用ストレス自己評価尺度（尾関・原口・津田，1994）や大学生用日常生活ストレッサー尺度（嶋，1999）のように，デイリーハッスルズに関するものが中心である．

一方職業性ストレス理論モデルの1つに，仕事の要求度を減少させずに，裁量度または支援度を増加させることで心理的ストレスの軽減を図ることができるとされる，仕事の要求度－裁量度－支援度モデル（Demand-Control-Support model；Johnson&Hall，1988 以下 D-C-S モデル）がある．水澤・中澤(2007)は，この拡張 Karasek モデルとも言われる D-C-S モデルが，育児期の女性の家事ストレス，育児ストレスに対しても有効であることを確認した．

この結果から D-C-S モデルは，職場のような制約のある状況だけではなく，比較的制約の少ない学生生活においてもストレッサー尺度構成が可能ではないかと考えた．本研究では，大学生活全般にわたるストレッサー尺度項目を，D-C-S モデルに基づき作成する．

【方法】2007 年予備調査項目収集のために大学生を対象に，日頃の学生生活でのストレッサーを自由記述方式により調査した．収集した項目と他の大学生ストレッサー尺度を参考に，要求度（以下 D）16 項目，裁量度（以下 C）19 項目，支援度（以下 S）18 項目，計 53 項目を初期項目とした．

尺度の最終項目選定のために，同年 5～6 月，関西の私立大学共学 1 校，女子大学 1 校の授業時間内での調査，および授業時間外での留置調査を行った．大学生 557 名，うち男性 254 名（年齢 18～24 歳），女性 303 名（年齢 18～25 歳）のデータを回収した．

【結果】全 53 初期項目について最尤法による因子分析を行ったところ，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性により，3 因子構造が妥当と考えられた．そこで初期項目 53 項目について因子数を 3 に指定した因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った．因子負荷量の絶対値が .30 未満，および D-C-S モデルの概念とは異なる構造を持つ項目を削除した．その結果第 1 因子は「なぐさめてくれる人がいる」といった内容の項目の因子負荷量が高く，D-C-S モデルでは S 項目と対応していたため，これをサポート因子とした．第 2 因子は「希望する就職や進学ができそうだ」など D-C-S モデルの C 項目と対応していたためコントロール因子とし，第 3 因子は「就職や進学のための勉強をする必要がある」など D 項目と対応していたため，デマンド因子とした．その結果 D9 項目，C9 項目，S14 項目の計 32 項目となった．最終 32 項目を大学生用 D-C-S ストレッサー尺度の尺度項目とした．32 項目の因子パターンを Table1 に示す．また信頼性の検討のため Cronbach の α 係数を算出したところ，ほぼ十分な内的整合性が見られた（α=.67～.92）．

【考察】本尺度は初期項目の段階から，学業に加え就職，クラブ・サークル活動，友人，恋愛，アルバイト，私生活と多岐にわたるストレッサー項目，また S 尺度に道具的サポートと情緒的サポートの 2 種に大別される項目も取り入れた項目で構成している．しかし恋愛に関しては最終 32 項目中 1 項目が選択されたのみであった．本研究では個人の恋愛状況の差を考慮しなかった点はあるが，大学生にとって恋愛問題は同じ事象がディストレスとなる場合，ユーストレスとなる場合があると推測され，一定の方向を持つストレッサーではないことが考えられる．

本研究では大学生活の時間的制約に関わるストレッサー項目は全て棄却された．学生には時間的余裕があるため，時間的制約はストレッサーにはならないことが推測された．また身の回りのことに関しても自分のことのみをする程度ではストレッサーとならないことが予測された．

Table1　大学生のストレッサーに関する D，C，S の因子パターン

項　目	S	C	D
なぐさめてくれる人がいる	.804	.066	.116
困った時，助言アドバイスをしてくれる人	.774	.058	.112
話し掛けてくれる人がいる	.770	.028	.016
温かいことばを掛けてくれる人がいる	.770	.125	.123
わからないことがあった時教えてくれる人がいる	.766	.060	.055
気晴らしに付き合ってくれる人がいる	.680	.112	.057
一緒におしゃべりをしてくれる人がいる	.674	-.043	.076
立場をわかってくれる人がいる	.666	.305	.139
物を貸したり、くれたりする人がいる	.657	.174	.058
話、グチを聞いてくれる人がいる	.649	-.018	.135
授業で出た課題の内容を教えてくれる人がいる	.586	.055	.093
テスト前にノートを貸してくれる人がいる	.531	.107	.072
テストや就職の情報のやりとりをする人がいる	.471	.335	.053
授業で代返，代筆をしてくれる人がいる	.447	.203	.127
希望する就職や進学ができそうだ	.008	.520	.048
クラブ，ゼミのメンバーは言うことを聞いてくれる	.238	.473	.112
学業，クラブでの努力が認められている	.096	.461	-.010
自分が何をしたいのかわからない（逆転）	.078	.442	-.170
言いたいことを相手に上手く伝えられている	.148	.426	-.053
恋の駆け引きができている	-.031	.404	.217
ゼミの先生となごやか話すことができている	.152	.399	-.004
予定を上手く調整してクラブ活動等に出ている	.190	.377	-.007
気まずくなった人と仲直りできている	.244	.354	-.029
就職や進学のための勉強をする必要がある	.014	-.101	.593
就職進学に必要な資格を取得する必要がある	.107	-.220	.521
苦手なメンバーとコミュニケーションをとる必要	.051	.097	.436
卒業論文に取り組む必要がある	.010	.075	.428
お小遣いが足りずアルバイトに行く必要がある	.181	-.237	.405
友人の相談事やグチに付き合う必要がある	.267	-.051	.398
就職や進学など将来の進路考える必要がある	.135	-.150	.384
他にしたいのにアルバイトに行く必要がある	.037	-.112	.382
出席，レポート，テストの準備をする必要がある	.239	-.131	.341
因子寄与率（%）	17.52	6.65	5.26
累積率（%）	17.52	24.17	29.44
Cronbachの α	.92	.70	.67

【引用文献】

水澤慶緒里・中澤清（2007）．要求度-裁量度-支援度モデルにもとづく家事ストレス，育児ストレスの研究．臨床教育心理学研究，*33*，43-54.

（みずさわ かおり）

「明るく元気に」病といいたいくらい
ー他人を壊すー

細部　国明
城西　大学

キーワード：「親密関係深性」（サリバン）、　影と補償（ユング）、非医学的-社会心理学的視点

１．［まえがき］近頃世間を騒がせマスコミの注目を浴びた事例でいえば、カバンに惨殺した母親の生首を入れて警察に自首した高校生、短大生の妹を殺した歯科大受験浪人生、少し前ではカッターで親友殺害の佐世保の小６少女、そこ迄行かなくても多くの非行や犯罪等がある。ＴＶ、週刊誌、新聞沙汰に迄なる事件ではほとんど決まって本人（本論で位置づける第三者）の真の動機(motivation)が解明されなければと、本人の性格や生育環境や捜査過程等がある程度公になった形で記事になり、それに伴い世間も本人の真の動機へと関心が引っ張られていくが、やがて真の動機という所がはっきりせぬまま、他の記事へと移っていく。壊れた第三者の中に真の動機を見出すという視点だけでは複雑過ぎるものを含んでいるからでもあろうか。

２．［目的］本論文の主旨は、動機解明の視点からいうなれば、第三者の動機ではなく、むしろ第三者が壊れるまで作用し続けていたと考えられる、第三者と濃密な対人関係を持っていた人（集団）に属している動機である。その動機が直接的にであれ間接的にであれ第三者が壊れる迄、ほとんど決定的に作用し続けていたと思われる動機である。第三者が壊れた動機はその下位動機に位置づけられる。これを示す方法として本論文では個々の事例というよりも、比較的共通していると考えられる理論的背景の大枠を描く事を目的とする。

３．［方法］①サリバン ,H.S. の「少数者親密関係時」：理論的に考えていく方法として、大いに役立つのは、サリバン H.S. 学派がわれわれ集団（ギャング・エイジ）に続くプレ青年期(pre-adolescence)と名づけた時期に現れる、少数者の同性間の友情の中に見出される「より親密な深い関係を形成できる」能力である。この時期は単なる青年期の一時期を超えて真の愛へ向けて心的力動が現れる、人格発達に決定的な意味を持つ時期である、とサリバンは重視した。まだ成員の個性や差異を深く尊重し合う能力は普通発達していないわれわれ集団とは明らかに異なった他者との関係を形成できる能力が備わる時期である。生まれてからこのかた対人関係に恵まれなかった子がこの時代の親密関係を経験することにより人間への信頼を劇的に回復する事もある。自分よりも大事だと思える人間との信頼関係は今迄の不幸な人生を修正し得るものを有している。他者との関係をそれほど深い所から形成し直し過去をも覆せる能力を発達させ得る時期である。その能力を本論文では一先ず「親密関係深性」と呼ぶ。

深い所から形成し直せるという事は、この時期の裏切りの心理の発生等もその１例であり、「退行現象」をも伴っていて、一方で強い現実自我を体得してないと現実社会では「自立のつまづき（壊れ）」が起こり得る。ものごとを学習する最適期は、そこに裏腹に含まれる危険性をも予知してか敏感期(sensitive period)とも呼ばれる。前述の第三者の諸事例では、ある対象、例えば、或る活動、目差している職業、対人関係、何であれ、その対象への「親密関係深性」が形成されている。その形成が深ければ深いほど、後に生じる回復にしろ破壊にしろその効果は大きい、と思われる。

②ユングの「影」との交流を厚い防衛城壁で切断する現実主義的自我：「ユングの影（shadow）の内容は、その個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が容認し難いとしている心的内容である。」それは文字通り、その人の暗い影の部分をなしている。一流のアスリートは立ち止まって過去を振り返らない、プラスイメージを追う事を体得している人が多い様に、本論文の表題は、言わば一流の「明るさと元気さ」に執りつかれた精神的アスリートで、自分を前向きに出来ない過去は振り返らない事を体得している。我々の意識は一種の価値体系を持っており、その体系と相容れないものは無意識下に抑圧しようとする傾向がある。まして、振り返えり難い暗く悲しい過去に負けずに、明るく元気に生きている場合はその傾向が強くなる。マイナスイメージに立ち止まる事に神経症的嫌悪さえ覚え、あらゆる防衛機制が活用される。『明るく元気に』に生きる事へは過敏に反応し、それに見合う心身反応も起こってくるだろう。このまま進めば壊れるものがあるかも知れないという「グレイゾーン」的な、影の片鱗が漏れ入る可能性の世界などは考えられない、内界への思考停止は易い。現実主義的価値あるものはしっかりした出入り口から入れるが、影に関係するものは、それを撥ね返せる厚い防衛城壁が構築される。「日本文化の今、ここに」は現実主義に通じ、戦後の経済復興はそのたまものであり（加藤周一「日本文化における時間と空間」岩波）、そこから排除され壊されたものと対になっている。構図的にはこれと類似していて、日本文化への過剰適応は、文字通り『明るく元気に』病といいたいくらいであるが、これは非医学的ー社会心理学的視点からである。

③グレイゾーンのない対立補償：ここで３つの世界を整理しておく。第一の世界、即ち硬い現実主義的自我を持つ意識界。そこから追放され交流を断たれた第二の世界、即ち無意識的な影の世界。第一の世界から切り離されたものは、複雑な無意識界でどのような出口を見出すのであろうか。一つ目は身近なところで繰り返される「意識と対立的な補償夢」ないし「対立補償的影（の投影対象の形成）」であり、その内容は具象的なメッセージに絞られてきて現実味を帯びてくる。しかし、それは今まであらゆる手段を使って交流を切断してきたもので、そのような理念的なものを当てにするような自我ではない。二つ目の出口は第三の世界、即ち第三者（前述）や自然界へ継続的に作用する。それらの内、影との重なりのない遠くに抽象的に存在する大部分のものへは、影のない『元気な明るさ』と『豊かな同情心』で自己犠牲もいとわない善い人（集団）で居れる。しかし、身近で具象的に起きている「対立補償的影」となると話は別である。

問題は第三の世界に属する身近な親、兄弟、親友、我が子等の存在や活動が、その具象的な「対立補償的影」と重なった場合、それは「対立補償的影」を活性化する。『太陽の火がソドムとゴモラを焼き尽くしてしまった』ように「対立補償的影」が重なっている第三者を執拗に拒絶し焼き尽くす。相手への責任感覚は無きに等しく壊れた相手が悪いからと。この執拗さは、影のない『元気な明るさ』と屈託のない『豊かな同情心』に釣り合うほど対立補償的な酷薄さを持つ。

４．［考察］上記のような重なりが現実で起きた場合、第三者を巻き込まないで、事が収まるにはどんな道筋があるだろうか。一つは、明るさを放つ光源自体、自我が何かに憑依された如く自ら「燃え尽き」るまで待たねばならないだろう、それは第一の世界の自我の責任の取り方ともいえる。二つ目はそれらの過程を洞察している第四者の取る対策であろう。

状況の現実感尺度の検討：

—仮想世界ゲームの実施条件とシナリオ条件の比較—

柿本　敏克
（群馬大学社会情報学部）

キーワード：状況の現実感尺度，仮想世界ゲーム，シナリオ条件との比較

【研究の目的】 柿本（2005）に続き，状況の現実感尺度（柿本,2004）の妥当性の検討作業を報告する。状況の現実感とは，特定の状況におかれた当事者（たち）が，どの程度その状況にリアリティを感じるのかという主観的感覚をさす。これを測定するために構成されたのが状況の現実感尺度である。今回は仮想世界ゲーム（広瀬,1997）を検証場面として取り上げ，ゲーム実施条件（実際にゲームに参加した条件）と，シナリオ条件（ルールを学習しただけで実際にはゲームに参加していない条件）との間で，尺度得点の比較を行なう。シナリオ条件よりも実施条件でより強い「現実感」が観測されることが期待される。

【方法】 仮想世界ゲームは2006年7月上旬に関東地方の国立大学で実施された。

条件　同じ参加者がゲーム実施とシナリオの両条件に参加した。ゲーム実施条件では，仮想世界ゲームの第6セッション終了直前の「世論調査」の一部として，ゲーム参加者に状況の現実感尺度への回答を求めた。当該尺度に関しては「あなたが仮想世界ゲームについてどう感じるかを，お尋ねします。以下のそれぞれの意見について，最も適当と思う数字に○印をつけて下さい。1は『全くあてはまらない』を，7は『とてもあてはまる』を指します。」と文中で教示し，状況の現実感尺度12項目に対する回答を求めた。

シナリオ条件では，ゲーム開始前に，同じ参加者にルールを説明し終わった直後に，次の教示とともに同尺度に回答を求めた。「あなたは今，仮想世界ゲームに参加しているところであると想像して下さい。この仮想世界ゲームについてどう感じるかを，お尋ねします。（以下，実施条件教示と同じ）」

参加者　参加者は大学生46名であった。ゲーム実施条件では，いくつかの理由でこのうち合計5人から状況の現実感尺度への回答が得られなかった。

質問項目　柿本（2004）と同じであり，「1. 私が今参加している仮想世界ゲームは，簡単にやり直しがきくものであると感じる。」「2. 私が今参加している仮想世界ゲームに，私はとても注意を引きつけられている。」などの12項目を用いた。

【結果】 柿本（2005）に基づき，状況の現実感尺度12項目から主観的関心尺度，一回性尺度（柿本(2005)の講義場面データの3因子解の結果に基づき元の項目1もここに含めた），参加者の現実感尺度の3つの下位尺度得点を算出した。クロンバッハのαはゲーム実施条件においてはそれぞれ順に0.75，0.21，0.86，シナリオ条件については同じく，0.82，0.10，0.74であった。なお全12項目が1つの尺度を構成するとみなした際のクロンバッハのαはゲーム実施条件で0.73，シナリオ条件で0.70であった。Table 1に条件ごとの各下位尺度得点の平均値と標準偏差を示した。

3つの下位尺度のいずれにおいても，ゲーム実施条件での得点がシナリオ条件での得点よりも大きくなっている。条件を繰り返し要因とする多変量分散分析の結果，繰り返し要因が有意であった $F(3, 38)=3.10$，$p<0.05$（単変量のF検定では主観的関心尺度の繰り返し要因 $F(1, 40)=9.13$，$p<0.01$，一回性尺度 $F(1, 40)=0.88$　*n.s.*，参加者の現実感尺度 $F(1, 40)=3.19$ $p<0.10$）。なおこの分析にあたっては，両条件に参加した41名分のデータを使用した。

Table 1. ゲーム実施条件とシナリオ条件の下位尺度得点の平均値(標準偏差)

下位尺度名	ゲーム実施条件 (N=41)	シナリオ条件 (N=46)
主体的関心	4.97　(0.88)	4.48　(1.16)
一回性	4.16　(0.73)	3.99　(0.79)
参加者の現実感	4.91　(1.04)	4.63　(1.09)

【考察】 全体として，状況の現実感を構成する各下位尺度の得点は予想通りで，ゲーム実施条件においてシナリオ条件でよりも大きかったと言うことができる。実際にゲームに参加するゲーム実施条件では，単にルールを学習し，ゲームに参加していることを想像するだけのシナリオ条件でよりも，人は主観的にその状況にリアリティを感じるはずであろう。このような違いが，尺度得点の差としても現れたというこの結果は，状況の現実感尺度が期待通りに「状況の現実感」を測定し得ていることを示唆する。当該尺度の妥当性が示された結果であると言うことができよう。

ただし，今回の研究にもいくつか問題が残されている。まず2条件が繰り返し要因であったことから，後の条件に前の条件の影響が残った可能性がある。また下位尺度のうち「一回性」を構成する4項目のα値が，極端に低かった。柿本（2004）では問題とされた項目1を除外すると0.72とそれなりの値になったが，今回のデータでは項目1を除外しても満足のいく値にならなかった。また「一回性」の下位尺度得点は，条件間の比較で差が統計的には有意でなかった。

柿本（2006など）は，状況の現実感が集団間関係研究における理論と実証データの間の齟齬を結びつける隠された要因であることを提唱しているが，そのための道具として，残された問題を検討し，状況の現実感尺度をさらに研ぎすましていくことが重要となろう。

【引用文献】

広瀬幸雄(編著) 1997 シミュレーション世界の社会心理学—ゲームで解く葛藤と共存— ナカニシヤ出版.
柿本敏克 2004 状況の現実感尺度構成の試み—電子的集団間コミュニケーション研究に向けて— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集
柿本敏克 2005 状況の現実感の場面間比較 日本社会心理学会第46回大会発表論文集
柿本敏克 2006 状況の現実感が集団同一視と内集団バイアスの関係に及ぼす影響についての一考察 群馬大学社会情報学部研究論集,*13*, 83-91.

（かきもと　としかつ）

ユーモア測定尺度の作成（4）

― 因子構造の再検討 ―

宇惠　弘
（関西福祉科学大学　社会福祉学部臨床心理学科）

キーワード：ユーモア、信頼性、妥当性

【研究の目的】 宇惠は、2003年から2005年一連の研究（以下、先行研究）によってユーモア（sense of humor）を測定する尺度について検討をしている。先行研究では、1990年以降に欧米での研究で採用頻度が比較的多くみられた5種類の尺度それぞれについて信頼性や妥当性を調べている。

先行研究の結果から、各尺度で測定されるユーモアには類似した構成概念が含まれていることがわかった。

そこで本研究は、先行研究の結果を踏まえて、5種類のユーモア測定尺度の長所をまとめ1つの尺度を作成し、この尺度の信頼性と妥当性を検証することが目的である。

【方法】 調査対象者：大阪府下と奈良県下私立大学生576名（男子学生213名、女子学生363名、平均年齢19.84歳、SD=2.03、年齢範囲18歳～29歳）。分析した資料は3期に分けて収集した。各期の対象者数は以下の通り。2002年：244名（男子学生80名、女子学生164名）、2003年：157名（男子学生56名、女子学生101名）、2004年：175名（男子学生77名、女子学生98名）。

測定方法：以下の5種類の尺度を日本語に翻訳し使用した。Sense of Humor Questionnaire（Svebak, 1974; 以下SHQ）は17項目に対して5件法で回答を求めた。Coping Humor Scale（Martin & Lefcourt, 1983; 以下CHS）は7項目に対して4件法で回答を求めた。Humour Initiation（Bell, McGhee, & Duffey, 1986; 以下HI）は6項目に対して5件法で回答を求めた。Humor Orientation Scale（Booth-Butterfield & Booth-Butterfield, 1991; 以下HOS）は17項目に対して5件法で回答を求めた。Multidimensional Sense of Humor Scale（Thorson & Powell, 1993; 以下MSHS）は29項目に対して5件法で回答を求めた。

第3期（2004年）にユーモア志向尺度(上野, 2003）を施行した。ユーモア志向尺度は,「攻撃的ユーモア」「遊戯的ユーモア」「支援的ユーモア」の3因子（各8項目）で構成されている。回答は,「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で求めた。

【結果】 (1) 因子構造の再検討　5種類の尺度それぞれについて、項目困難度（通過率）と項目識別度（項目・尺度間相関）を調べた後、尺度毎に探索的因子分析（主因子法、promax回転）を行った。この分析を3期（2002年～2004年）毎に行い、先行研究の結果も踏まえ、3期に共通してみられた7因子28項目を選び出した。

次に、3期の資料をまとめたデータに対して、探索的因子分析（主因子法、promax回転）を行った。因子パターンが単純構造を示していること、項目表現や選択肢などを考慮し、「ユーモアへの好悪」（MSHSより）、「ユーモアへの気づき」（SHQより）、「ユーモアの表出（頻度）」（HIより）、「ユーモアの表出（意識）」（MSHSより）、「ユーモアのコーピング利用」（CHSより）の組み合わせによる5因子20項目（各因子4項目）を続く確認的因子分析の候補として選んだ。

探索的因子分析の結果抽出された5因子について確認的因子分析を行った。3期の資料をまとめたデータを対象に分析した結果、適合度指標は、GFI=.928、AGFI=.906、RMSEA=.055であった。

(2) 因子間相関、信頼性と妥当性　因子毎に合計得点を求め、因子間の関連、各因子の内的整合性（Cronbackのα係数）、再検査信頼性（2002年の資料より5ヶ月間隔、22名）、ユーモア志向尺度との関連をそれぞれ検討した結果をTable1に示した。Table1の数値はα係数を除き相関係数の値である（「気づき」と「攻撃」、「気づき」と「支援」は5%水準で有意、その他は1%水準で有意）。

Table1　因子間相関、信頼性と妥当性に関する統計量

	意識	頻度	coping	気づき	好悪	5因子合計
頻度	.570	―	―	―	―	―
coping	.338	.436	―	―	―	―
気づき	.466	.509	.380	―	―	―
好悪	.246	.312	.296	.238	―	―
α係数	.902	.835	.716	.709	.615	.878
再検査	.705	.615	.671	.593	.711	.703
攻撃	.239	.225	.335	.173	.188	.325
遊戯	.455	.466	.449	.188	.539	.580
支援	.454	.467	.556	.158	.428	.585

(3) 性差と年齢差　性別による差を調べたところ、「ユーモアの表出（意識）」と「ユーモアへの好悪」の因子には差がみられず、残る3因子と5因子合計には有意水準1%で差がみられた（全て、男子学生平均＞女子学生平均）。年齢による差については、先行研究と同様に便宜的に18歳（165名）と23歳以上（40名）の2つのグループをつくり調べた。その結果、「ユーモアの表出（頻度）」、「ユーモアのコーピング利用」、5因子合計に有意水準5%で差がみられた（全て、18歳＜23歳以上）。

【考察】 本研究で提案した20項目の尺度の信頼性と妥当性は、概ね認められたと思われる。但し、因子毎にみると、内的一貫性が低い因子や、ユーモア志向尺度の3因子との関連が他の因子と比べて低い因子がみられる。

性差について先行研究と同様の結果が得られたのは、ユーモアのコーピング利用だけであった。宇惠（2004）が述べているように、性差の有無については、ユーモアの内容によって異なることが予想される。

【引用文献】

宇惠弘 2003 ユーモア測定尺度の作成(1) 日本応用心理学会第70回発表論文集.
宇惠弘 2004 ユーモア測定尺度の作成(2) 日本応用心理学会第71回発表論文集.
宇惠弘 2005 ユーモア測定尺度の作成(3) 日本応用心理学会第72回発表論文集.
上野行良 2003 ユーモアの心理学 サイエンス社.

（うえ　ひろし）

友人サポートおよび母親の養育態度と大学生の共感性との関係

福岡　欣治
（静岡文化芸術大学文化政策学部）

キーワード：友人関係、ソーシャル・サポート、養育態度、共感性、大学生

問題と目的

他者との安定した関係を築くうえで、相手に共感できることは重要な要素である。現代青年の対人関係が希薄化しがちであることが一般によく指摘される中、青年期の共感性と関連する要因について検討することは意義があると思われる。

共感性の発達を促す条件として、母親の愛着的かかわり（Kestenbaum et al., 1989）、および誘導的なしつけ（行動が他者に与える結果や責任を指摘するしつけ方略；山岸, 1980）の重要性が指摘されている。また後者の例として、青年期においては友人関係が発達的にみて非常に重要である（松井, 1990）。吉岡（2001）は互恵的な友人関係が高い満足感をもたらすことを示唆している。なお橋本（1994）は、大学生を対象とした研究で、重要な他者からの安定した情緒的サポートが共感性と関連することを指摘している。

本研究ではこれらをふまえ、女子大学生における共感性と、母親の愛着的および誘導的なしつけ、そして友人とのサポート授受との関連について検討することにした。

方　法

対象者

大学生 230 名を対象に調査をおこない、不備なく回答した 195 名（全員女性；男性１名および社会人入学等を除く）のデータを有効回答とした。平均年齢は 19.05 歳。

調査内容

共感性（視点取得、共感的配慮）　桜井（1988）によって翻訳された Davis（1983）の多次元共感測定尺度から「視点取得」「共感的配慮」の二尺度を使用。前者は「他人の立場に立って、物事を考えることは困難である」など計７問、後者は「自分より不幸な人たちには、やさしくしたいと思う」など計７問。評定は４段階。

母親の養育態度（愛着的しつけ、誘導的しつけ）　「愛着的しつけ」は Parker（1983）の Parental Bonding Instrument（PBI）の「愛着」因子（竹内他, 1989）より選抜した 10 項目、「誘導的しつけ」は、大学生 78 名を対象とした予備調査をふまえて選抜した 6 項目を使用。子どもの頃から現在までの記憶をもとに本人が回答。評定は４段階。

友人サポート（入手・提供）　福岡（2000）で用いられた 16 項目（「サポート入手可能性」「サポート提供可能性」各８項目）。受領と提供の項目内容は同じであり、前者は「友だちが私にしてくれると思う」程度、後者は「私が友だちにしてあげられると思う」程度を測定。評定は４件法。

手続き

２つの大学における心理学関連科目において、授業中に調査票を配布し、その場で回収した。回答は無記名とした。

結　果

尺度構成

各尺度で Cronbach の α 係数を求め、不適切な項目を一部削除した。共感性、しつけ、サポートのそれぞれについて下位尺度間の相関を調べたところ、サポートでは受領－提供の相関が非常に高く、全体での α 係数も 0.91 であったため、両者の合計点を指標として用いることとした。表１に平均値、ＳＤと合わせて結果を示す。

表1　下位尺度の α 係数（項目削除後）と記述統計量

尺度	項目数	α 係数	相関係数	平均値	SD
視点取得	7	0.67		18.97	0.23
共感的配慮	5	0.64	0.45	16.67	0.16
愛着的しつけ	10	0.89		34.45	0.39
誘導的しつけ	5	0.76	0.47	14.92	0.24
友人サポート入手	8	0.86			
友人サポート提供	8	0.84	0.71	58.8#	0.39#

#入手可能性と提供可能性を合わせた数値

養育態度、サポートと共感性との関連

養育態度（２尺度）、友人サポートのそれぞれについて人数が均等になるように３群（高・中・低）に分け、クロス表を作成した。愛着的しつけとサポートには関連があり（$\chi^2[4]=12.71$, $p<.05$）愛着的しつけの得点が高いほど友人サポートも得点も高かったが、各セルには最低でも 12 人（全体の 6.2 %）が該当していた。誘導的しつけとサポートの間には有意な関連性は見られなかった（$\chi^2[4]=3.04$, n.s.）。

そこで、これら養育態度（愛着的しつけ、誘導的しつけ）と友人サポートをそれぞれ独立変数とする３×３の 2 要因分散分析を、共感性の２尺度についてそれぞれおこなった。

視点取得　愛着的しつけ×サポート、誘導的しつけ×サポートとも、交互作用はみられずサポートの主効果が１%水準で有意であった。養育態度の主効果は、愛着的しつけで 10 %水準、誘導的しつけで 5 %水準であった。サポートに関する多重比較（LSD 法）では、低群のみ中・高群より視点取得の得点が低かった（図１）。

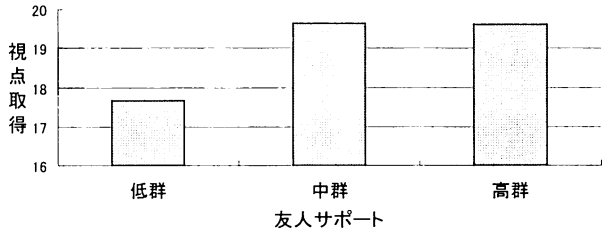


図1　友人サポートの3群における視点取得得点

共感的配慮　愛着的しつけ×サポート、誘導的しつけ×サポートとも、両要因の主効果が１%水準で有意であり交互作用は有意ではなかった。サポートに関する多重比較（LSD 法）の結果も視点取得の場合と同様であった。

考　察

本研究の結果は、母親の養育態度（愛着的／誘導的しつけ）と友人サポートが、それぞれ独立して共感性の高さと関連していることを示唆する。特に友人サポートについてはそれが低いレベルであると共感性に悪影響を及ぼすようである。今後縦断的な検討が何より必要である。（ふくおかよしはる）

補：本研究は筆者の指導のもとでおこなわれた古木直子さん（2005 年３月本学卒業）の卒業研究データにもとづくものです。

課題遂行コストの効果を利用した違反行動誘発プログラムの開発

○和田一成[1)]　臼井伸之介[2)]　篠原一光[2)]　太刀掛俊之[3)]
([1)] 平安女学院大学短期大学部保育科　[2)]大阪大学大学院人間科学研究科　[3)]大阪大学安全管理部)

キーワード：違反行動、課題遂行コスト、実施順序

【研究の目的】和田・臼井・篠原・神田・中村・太刀掛（2005）では、課題遂行にかかるコストが増大すれば、その課題についての違反行動が起こりやすくなることを示している。本研究では、この現象を利用してパーソナルコンピュータ上で動作する違反行動誘発プログラムを作成した。本プログラムでは、課題遂行にかかるコスト量を大小二つの設定しており、和田ら（2005）に従えば、コストの大きい条件では、小さい条件に比べて違反行動をより誘発すると考えられる。このプログラムでは、コストなどの課題状況によって本人の自覚を越えて違反行動が起こりやすくなることを体感させることができ、不安全行動についてのより深い理解が期待できる。このプログラムの有効性について、二つのテストを行った。

【テスト 1】テスト参加者　看護師 10 名であった。

プログラム概要　説明用プログラムと本試行用プログラムの二つを作成した。

課題　一つの試行が二種類の課題により構成されていた。

知覚判断課題では、参加者は、先行して提示される属性（「偶数」など）と続いて提示されるターゲット（アルファベットまたは 1 桁の数字）が合致しているかどうかの判断を行った。課題遂行中は画面下部にその試行の試行数が出ていた。

試行数確認課題では、参加者は、知覚課題が一つ終了するたびに試行数の確認を要求された。半分の試行では、画面に「第○○試行終了」というメッセージが提示され、その下に「次へ」というボタンが同時に提示された（同時提示試行）。残りの半分の試行では、「次へ」ボタンが先に提示され、数秒遅れて「第○○試行終了」と提示された（遅延提示試行）。いずれの場合も、メッセージの有無にかかわらず、「次へ」をクリックすると次の試行に進むことができた。参加者の課題は、メッセージの試行数を確認してから「次へ」ボタンをクリックして次の試行に進むことであった。したがって、メッセージ遅延中に「次へ」をクリックして次の試行に進むことは、確認を省略しており、違反行動となる。「次へ」ボタンが提示されてから「第○○試行終了」のメッセージが提示されるまでの時間が操作され、2 秒遅延（コスト小条件）と 5 秒遅延（コスト大条件）の 2 種類が設定された。従属変数として、確認段階での確認省略数と「次へ」がクリックされるまでの時間を測定した。

手続き　二つの小集団に分けてテストを行った。課題の説明は、説明用プログラムを用いて実験者が口頭で行った。続いて練習試行を行い、その後本試行用プログラムを起動して本試行を行った。本試行は、24 試行を 1 ブロックとして、2 つのブロックで構成されていた。1 ブロック目はコスト小条件、2 ブロック目はコスト大条件であった。2 ブロックを終了すると結果を知らせる画面になり、各ブロックでの違反率や確認時間が提示された。

結果　1 ブロックにつき 12 回の遅延提示試行のうち、どれだけ違反したかの割合を違反率とする。二つの条件の違反率を t 検定で比較すると、有意な差はなかった（58.34% vs. 58.33%; $t(9) = -0.03$, ns）。また、1 ブロック 12 回の同時提示試行の確認時間について t 検定を行った（4 秒以上は除外）。その結果、1 ブロック目より 2 ブロック目の方が有意に確認時間が短くなっていた（1.37s vs. 1.33s; $t(9) = 2.36$, $p < .05$）。

【テスト 2】テスト参加者　大学生 31 名（男 10 名、女 21 名）であった。

プログラム概要・課題内容　テスト 1 と同様であった。

手続き　説明用プログラムでは、口頭説明の補足をできるだけ減らし、三つの例題による説明と練習（6 試行）を行った。本試行用のプログラムでは、24 試行を 2 ブロック行った。また、条件の実施順序をカウンターバランスした（コスト小先行群 17 名、コスト大先行群 14 名）。テスト 1 と同じく、最後に各ブロックの違反率や確認時間が提示された。

結果　各参加者の違反率を逆正弦変換し、順序（被験者間；コスト小先行・大先行）×コスト（被験者内；大・小）の 2 要因分散分析を行った結果、有意な効果は得られなかった。

確認時間については、3 秒以上のデータを除外して対数変換をし、順序×コストの 2 要因分散分析を行った（*Figure 1*）。その結果、交互作用が得られた（$F(1,28) = 11.03$, $p < .05$）。下位検定の結果、コスト大先行条件においてコスト要因の単純主効果が有意となり（$F(1,56) = 13.08$, $p < .05$）、コスト大条件の方が確認時間が長くなることが示された。

【考察】テスト 1 では、課題遂行コストが大きくなると確認時間が短くなり、違反準備状態になることが示された。一方で、テスト 2 では、課題遂行コストよりも順序の効果が大きく、特に、コスト大条件が先行した場合に、コスト大条件で確認時間が長くなることが示された。この結果は、予想と反対の傾向であるが、参加者が 2 秒遅延の練習試行によく順応したために、5 秒遅延の本試行にとまどったためとも考えられる。つまり、手続き上の問題であり、コストの効果を直接否定するものではない。今後も、コストの効果を中心に、安定した違反行動の誘発手続きを検討していきたい。

Table 1　各条件の違反率（%）

		コスト条件	
		小	大
コスト小先行	*M*	16.7	15.2
n = 17	*SD*	24.4	25.0
コスト大先行	*M*	18.5	29.2
n = 14	*SD*	27.8	32.2

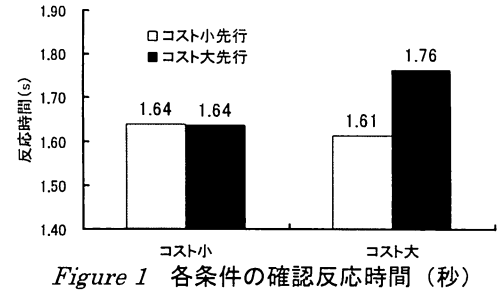


Figure 1　各条件の確認反応時間（秒）

【引用文献】　和田一成・臼井伸之介・篠原一光・神田幸二・中村隆宏・太刀掛俊之　2005　課題遂行コストとリスク教示が違反行動に及ぼす効果　日本応用心理学会第 72 回発表論文集, 51.

＊本研究は平成 17、18 年度厚生労働科研費補助金労働安全衛生総合研究事業により実施された一連の研究の一部である。

（わだ かずしげ・うすい しんのすけ・しのはら かずみつ・たちかけ としゆき）

障害者に対する意識調査に関する試み（1）

○豊村　和真[1)]，高澤　昌代[2)]
([1)] 北星学園大学社会福祉学部，[2)] 北星学園大学福祉学研究科)
キーワード：障害，意識，調査

【目的】

昨年度の報告（豊村,2006)で，「視覚障害児学生（生徒)」と「聴覚障害児学生（生徒)」および３つの健常対照群のイメージの発達的変化について報告した。しかしながら，イメージに関連する用語を事前に設定し，健常児者との相対的な変化について検討する方法（評定法）は数値化する場合には有利であるが，用語により生起されるイメージに偏りが生じるおそれがある。これに反して被験者に直接記述させる自由連想法は，分析が恣意性を持ちやすいというというデメリットはあるものの，より正しいイメージが得られるというメリットも捨てがたい。そこで今回の報告は，自由連想法の調書を生かしつつ，この欠点を克服し，分析も自由連想法よりは容易である方法を工夫し（制限連想法～接続詞法)，先行する２つの報告（豊村，2007a,2007b）にさらに被験者を追加し，この手続きをより洗練することを試みた。

【方法】

調査で使用する質問紙の項目を決定するため，以下の２つの予備調査をまず実施した。まず大学生 103 名に対して実施した予備調査１で，４名からなる選定者により順接接続詞には「だから」と「というのは」を，逆接接続詞には「だけど」と「にもかかわらず」を採用した。次に大学生 34 名に対して，「イメージが良いと思われる社会的地位」と「イメージが悪いと思われる社会的地位」のそれぞれについて自由記述させ，「医者」と「犯罪者」を採用した（予備調査 2)。

本調査の被験者は大学生 69 名（男 16 名，女 53 名)，福祉系専門学校生 102 名（男 38 名，女 64 名）である。彼らに対し，予備調査１で選定した接続詞４つと，予備調査２で得られた社会的立場に「障害者」を加え，「障害者だから」等の３×４項目からなる質問紙を作成し，文章を完成させた。回答の文章を形態素解析ソフト「茶筅」により品詞ごとに分類し（基本系使用)，オリジナルの回答と見比べて用語をまとめた。今回は可能な限り機械的な処理を行った。順接接続詞項目による回答を順接法，逆接接続詞による項目を逆接法とした。

【結果と考察】

まず全回答について，「茶筅」により区分された名詞語幹と形容詞語幹のみを取り出し，第一次の出現頻度の比較を行った。これを社会的立場別にまとめ，多いものから５個を表示した（表１)。

表１　社会的地位別イメージ用語出現頻度順結果

順位	障害者	医者	犯罪者
1	人間_	病気_	人_
2	差別_	頭_	罪_
3	健常_	人_	人間_
4	人_	金持ち_	怖い_
5	大変_	人間_	反省_

表１より，共通しているのが人間（または人）であり，「○○者も同じ人間である」等の回答が多くあげられた。これを除くと，医者では，「病気」，「頭」（がよい)，「金持ち」が，犯罪者では，「罪」，「怖い」，「反省」があげられ，障害者については，「差別」，「健常」，「大変」があげられた。「健常」は「健常者と変わらない」，「健常者と同じ事ができる」等の回答から抽出した。

次に障害者についてのこれら５項目を順接法の結果と逆接法の結果に分けて集計した（表２，表３)。その際に文意を確かめつつ合成をした。また回答のうち，無意味なもの（例：障害者だから障害がある)，意図がよみとれないもの（障害者というのはどういうの？)，特殊なもの（医者というのはドクターコト）は除外した。なお，「人」「人間」については，「人」と「人間」は同じと考えるが，意味的には主として「(他）人と同じ」（＝「人_同じ」）と「同じ人（間）だ」（＝「人」）という２つに集約した。それ以外の「人として素晴らしい」等のものは別に分類し，３つ以上のものを表に示した。

その結果「大変」は順接法のみに見られ，「差別」は１例（障害者だって差別する)を除いて，全て順接法で見られた。表２は「人」に関する回答結果であるが，圧倒的に逆接法で多かった。これ以外の「人」に関する回答は逆接法では偉い，元気，明るい等肯定的な回答で占められていた。表３の「健常」に関しては，「健常_同じ」（健常者と同じ）は「人_同じ」と意味的には同様であるが，結果も同じように逆接法で多く見られた。さらに逆接法で「健常_より_優れる_ある」などの肯定的な結果が多く見られた。

表２　接続形態別「人」回答結果

	逆接	順接
人_	41	8
人_同じ	24	1
人_助け_必要_		6
人_目線_気_		4
人_痛み_理解_		3

表３　接続形態別「健常」回答結果

	逆接	順接
健常_同じ_	17	3
健常_生活_	4	1
健常_より_優れる_ある	3	
健常_	1	3
健常_異なる		5
健常_ハンディキャップ_		4

全体として，用語のみを単純に機械的に分析をすることだけで処理をすることは，二重否定文などの存在のため，無理な感じがあるが，意味を考慮した豊村(2007a,2007b)の報告と類似の結果になっており，大まかな傾向を早く把握するという点で意義はあった。

なお，本研究は非学会員の大西美季子，小林雄太氏との共同研究である。

【引用文献】

豊村(2006)，「視覚・聴覚障害学生に対するイメージの意味的構造に関する研究(1)」，日本応用心理学会７２回大会発表論文集
豊村(2007a)，「障害者に対する大学生と専門学校生の意識(1)」，日本教育心理学会第４９回大会発表論文集
豊村(2007b)，「障害者に対する大学生と専門学校生の意識(2)」，日本心理学会第７１回大会発表論文集

（とよむら　かずま，たかざわまさよ）

障害者に対する意識調査に関する試み（2）

○高澤　昌代[1)]　豊村　和真[2)]
([1)] 北星学園大学大学院 社会福祉学研究科　[2)]北星学園大学 社会福祉学部)
キーワード：障害，意識，調査

【目的】

障害者のイメージを扱う際にイメージに関連する用語を事前に設定する方法を用いると，得られるイメージは調査者側の用意した用語の中に回答の範囲が限られるので，調査対象者が抱くイメージを完全に表しているとは言い難い。その問題点を克服するために制限連想法，接続詞法を用いて調査を行った結果，被調査者の中で共通するイメージ用語の存在が確認されたほか，多岐にわたる内容のイメージが得られた。しかし文章を完成させることに執着したあまり，イメージとは関連しない回答や意味のない回答も多々見られ，分析する際の負担も大きくなるという新たな問題が生じてしまった。

そこで本研究では，先の研究の制限連想法，接続詞法を継承し，さらに語尾に決まった語を使用することで体言止めなどで終わる無意味な回答を少なくする方法を用いて，より簡単に「障害者」という対象から生起されるイメージを明らかにすることを目的とする。

【方法】

● 調査対象

市内在住の大学生 67 名(男性 14 名，女性 53 名)。

● 質問紙構成

「障害者だから」という書き出しの順接の文と，「障害者だって」という書き出しの逆接の文に対して文章が完成するように，思いつく個数だけ自由記述させた。その際，文の語尾に「できる」，「できない」，「する」，「しない」，「したい」，「したくない」，「されたい」，「されたくない」，「してほしい」，「してほしくない」という 10 個の結びの言葉のいずれかを使用させた。さらにこれらの結び語は，文章の内容によっては自由に変化させてもよいこととした。

● 分析方法

回答された文章を形態素解析ソフト「茶筅」を使用して品詞ごとに分類し，必要のない品詞を落とした上で元の回答と照らし合わせて用語をまとめた。

【結果と考察】

全回答を茶筅にかけ品詞に分解したのち，そこから名詞，動詞，形容詞を取り出して意味的に同じであると見なせるものは一つの語にまとめた。調査対象者の回答が 30 を越えるイメージ用語とその回答数を表 1 に示した。

表1　回答数30以上のイメージ語とその回答数

イメージ用語	回答数
生活	52
出来る	48
理解	46
差別	45
する	41
援助	35
特別	33

「出来る」及び「する」はそれぞれ「出来ない」，「しない」も含めた回答数である。これは，「出来ない」は「出来る＋否定の“ない”」，「しない」も「する＋否定の“ない”」の形で考えられるので，イメージとしては肯定形から派生したものと捉えられるからである。

表 1 より，否定，肯定には関わらず最も多かった回答は「生活」に関するものであった。生活は自分にとっても非常に身近なものであるので，その距離感の近さゆえに多くの人が回答したと思われる。

次に，語尾の違いによるイメージ用語の回答数について表 2 にまとめた。このとき，より解釈がはっきりするようにイメージの行為者が障害者のもの(例えば“健常者と同じ生活がしたい”)と，行為者が自分のもの(例えば“支援したい)に元の文の内容から分けた。障害者主体については回答数が 10 以上のものを，自分主体の順接法については回答数が 10 以上は一つしかないので上位 5 つのものを，自分主体逆接法については該当するものがあまりに少なかったので割愛する。

表2　語尾別，行為の主体・接続詞別のイメージ用語の内訳

	用語	語尾 ①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	合計
障・順	理解	1				7				2	23	33
	差別		11				6		3			20
	援助	2	2			12	1		1		1	19
	出来る		1	1		1	1		1	10	3	18
	特別		11		1		6					18
	生活			5		1		1		5		12
	優しい	6		1		2	1				1	11
障・逆	生活			15					6		16	37
	する	2	1	11	9		1	3	4			31
	出来る									6	23	29
	差別		14				4					18
	恋愛			7					5		1	13
	特別	1	6			1	2		1			11
自・順	援助			7					4			11
	差別				4			2		1		7
	理解			2		3				1		6
	無理						4					4
	特別			3					1			4

障・順:障害者・順接，障・逆:障害者・逆接，自・順:自分・順接

表 2 の①～⑩は順に，①されたい，②されたくない，③したい，④したくない，⑤してほしい，⑥してほしくない，⑦しない，⑧する，⑨できない，⑩できる，である。

まず，障害者主体・順接では②，⑥の否定的願望において「差別」が，⑤においては「援助」が，そして⑨では「出来る」ことについて多く回答されていた。そして逆接の方でも③や⑩では「生活」，「する」，「出来る」といった回答が得られた。また，②では「差別」がもっとも多く得られた。そして，自分主体・順接では②や⑧で「援助」という回答がなされていた。加えて元の回答では特にこの「生活」，「する」，「出来る」といった用語には「一人で」や「普通に」，「健常者」という修飾語が用いられていた。

これらのことから，障害者には「一人でものごとや生活をすることが困難な存在」，「援助を必要とする」，「差別が付きまとう」というイメージが想起されると思われる。

（たかざわ　まさよ・とよむら　かずま）

手書きひらがな文字の分類

関 陽子

(科学警察研究所)

キーワード：ひらがな、筆跡、筆者識別、クラスター分析

[目的]

ひらがなは、多くの日本語筆者にとっては、最初に習得する文字である。このため、ひらがなは、かたかなや漢字に比べて書字技能を身につける期間が長く、その人らしい書字行動が最も身についていると考えられる。

法科学で行われる筆者識別では、筆跡に見られる個人特徴を鑑定資料の筆跡（筆者が不明な筆跡）と対照資料の筆跡（筆者が既知の筆跡）で比較して、鑑定資料の筆跡の筆者が対照資料の筆跡の筆者と同一かどうかを識別している。このため、ひらがなは、漢字やかたかなに比べて識別に用いる文字に適していると考えられるが、法科学における筆者識別では、漢字を用いて識別が行われることが多い。これは、犯罪鑑識で証拠となる資料には、住所氏名など漢字で表記される文字が多いことにもよるが、ひらがなは漢字に比べて字画構成が単純であり、字画が曲線で構成されているので、漢字に比べて筆跡個性の抽出や文章化が困難であると考えられていることにもよる。そこで、ひらがな文字を数値化することにより特徴抽出および文章化の困難が解決されるのではないかと考えた。ひらがな文字のストローク座標を測定することにより文字の数値化を行い、クラスター分析結果から、ひらがな文字が筆者識別資料として適切かどうかを検討した。

[方法]

６名の成人男性（すべての被験者は通常の筆記を右手で行っている）が記載した一筆で構成されるひらがな７文字（く、し、つ、の、へ、ろ、ん。各筆者は各文字を６回ずつ記載した）を使用して、類似したものどうしに分類するタスクを、各字種ごとに、３通りの方法で行った。

分類１：各字種ごとに、20箇所の計測箇所を定め、計測箇所の（x, y）座標を測定した。各筆跡ごとに重心を求め、重心を原点に規格化して測定値を変換した後に、被験者６名×繰り返し６回＝計36文字について、規格化後の座標値を用いてクラスター分析を行った。

分類２：各字種ごとに被験者６名×繰り返し６回＝36文字を、鑑定人１名が、目視により似たものどうしに分け、計６グループになるように分類した。また、鑑定人は、分類の根拠を回答した。

分類３：鑑定人が指摘した分類の根拠を各筆跡の特徴とみなし、特徴値を算出し、特徴値を用いてクラスター分析を行った。

クラスター分析結果は、６グループが形成された時点での分類結果により、評価した。

また、４画の漢字（木、今、心）のストローク座標を測定し、分類１と同様の方法で座標を企画化し、クラスター分析を行った。分類結果をひらがな文字の分類結果と比較した。

[結果および考察]

３つの分類方法について、分類の正しさを比較した。分類の正しさは、分類された各グループに属するデータが一番多い筆者をその筆跡グループの筆者とみなし、各グループに正しい筆者の筆跡が含まれる個数とした。グループごとに正しい筆者の筆跡の個数を計上し、全サンプル（＝36個）に占める正しい分類結果の総数の割合を求め、分類の正答率とした。

分類の正答率は、全体で72％、それぞれの分類方法による正答率は、座標値は56％、目視は96％、特徴量は63％であった。正答率が高い文字は、「の、ろ、ん」のような構成が複雑な文字であった。３通りの分類方法では、目視による分類結果の正答率が最も高く、「つ」以外の文字では正答率は100％であった。「つ」では正答率が約75％であったが、「つ」はいずれの分類方法でも正答率が低かった。

目視による分類の根拠には、文字の大きさ、縦横比、傾き、文字の構成要素間の構成比、転折角度などがあげられた。

座標値による漢字の筆者識別では、字画数が少ない（４画程度）漢字であっても、分類の正答率は約70％であった。ひらがなでは、全体の正答率は約70％であったが、座標値による分類では正答率が56％であったことから、座標値による分類では、漢字の方がより筆者識別に適しているといえる。一方、目視結果では、漢字、ひらがなとも正答率がほぼ100％であった。また、目視による分類では、局所的な特徴よりむしろ文字全体の構成に関する特徴が多く指摘された。このことから、目視による特徴抽出は、局所的な特徴よりもむしろ文字全体の構成に関する特徴を抽出していると考えられる。目視結果を数値化した分類結果が、座標値に比べて少ない変数でありながら正答率が座標値とほぼ同程度であることから、ひらがな文字の筆跡個性の文章化を工夫することにより、筆跡個性の把握が期待できることが示唆された。

（せき　ようこ）

犯罪不安感に関する研究

― 地域防犯プログラムの試作―

○高橋美奈　松田睦代　桐生正幸
（関西国際大学大学院人間行動学研究科　関西国際大学人間学部　関西国際大学大学院人間行動学研究科）

キーワード：犯罪不安感、防犯心理、安全・安心

【研究の目的】近年、子どもが被害者となる犯罪事件が多く報道され、身近な環境での犯罪に対する不安感も増加している。しかしながら、いまだ地域における効果的な防犯プログラムが作成されていない。そこで、本研究では、今後の防犯活動に有効な地域防犯プログラムの試作を目的とする。

【方法】先行研究をふまえた地域防犯プログラムを試作し、三木市立Ｊ小学校区内で試みた。

①　打ち合わせ

実施日時：平成18年10月24日　13：30～14：30，場所：関西国際大学，参加者：Ｊ小学校PTA本部役員，関西国際大学学生，内容：アンケート調査・フィールド調査の説明とスケジュール等の打ち合わせ

②　アンケート調査

犯罪の被害にあった経験、犯罪の被害にあう不安に関する小学生児童の保護者の意識についてのアンケート調査である。実施時期：11月初旬～中旬，場所：Ｊ小学校区，対象：Ｊ東小学校の小学生児童の保護者，質問項目：「子どもが実際にあった被害」，「子どもが身近な環境で犯罪や危険な目にあうのではないかという不安感」，「子どもが犯罪にあうのではないかと感じる場所について」

③フィールド調査

実施日時：平成18年11月28日　15：00～17：00，場所：Ｊ小学校区，参加者：Ｊ小学校の児童の保護者，PTA，Ｊ小学校教員，防犯ボランティアのメンバー，関西国際大学学生，内容：アンケート調査の結果をもとに、犯罪発生場所・犯罪不安喚起場所のＪ小学校区の犯罪発生箇所・犯罪不安箇所等の確認をする。アンケートによって、明らかになった「犯罪発生なし－犯罪不安なし」(A地点)，「犯罪発生あり－犯罪不安あり（B地点)，「犯罪発生なし－犯罪不安あり」(C地点)，「犯罪発生あり－犯罪不安なし」(D地点)の4箇所(Fig.2～5　参照）をルートに設定し、参加者に、それぞれの地点で7つの項目について評価してもらった。7つの項目は、「交通量が多い」，「見通しがよい」，「明るい」，「人通りが多い」，「地域の目がある」，「民家が多い」，「子どもをよく見かける」である。

④フィードバック

実施日時：平成18年11月28日　17：00～18：00，場所：Ｊ小学校，内容：フィールド調査でのチェック項目の評価や、各箇所についての意見交換など。

【結果】A，B，C，Dの各地点での各項目ごとに「非常に思う」を4点，「やや思う」を3点，「あまり思わない」を2点，「思わない」を1点とし、全員の平均得点を求めた。その結果、交通量の多さ・見通しの良さ・明るさ・人通りの多さ・地域の目があるかという項目に関しては、「犯罪発生なし－犯罪不安あり」は得点が高く、「犯罪発生なし－犯罪不安あり」は得点が低かった。民家が多いという項目に関しては、「犯罪発生なし－犯罪不安あり」は得点が高く、「犯罪発生なし－犯罪不安なし」は得点が低かった。(Fig.5 参照）よく子どもを見かけるかという項目に関しては、「犯罪発生あり－犯罪不安なし」の得点が高かった。

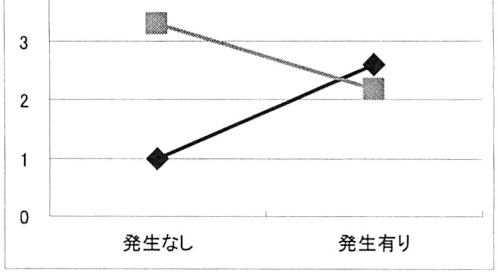


Fig.5　民家の多さに関する評価

【考察】本結果から、今回試作した地域防犯プログラムが実践的であると考察される。これまでの防犯活動においては、子どもだけがフィールド調査するものや、地域住民が犯罪以外のリスクを想定するものなど様々であった。本試作のプログラムは、地域の実際を充分にふまえながら、各分野の人達により進められるものである。今後も、このプログラムの効果を検討していきたい。

【文献】

小野寺理江・桐生正幸・羽生和紀「犯罪不安喚起に関わる環境要因の検討－大学キャンパスを用いたフィールド実験－」MERA Journal，8(2)，11-20.

小野寺理江・桐生正幸　2003「空間に関する情報が犯罪不安に及ぼす影響」犯罪心理学研究，41(2)，53-62.

谷岡一郎　2004年3月，『こうすれば犯罪は防げる環境犯罪学入門』(新潮選書)，新潮社.

岡本 拡子，桐生 正幸　2006「幼い子どもを犯罪から守る!―命をつなぐ防犯教育」　北大路書房

Fig.1　A地点

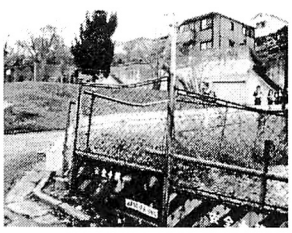


Fig.2　B地点

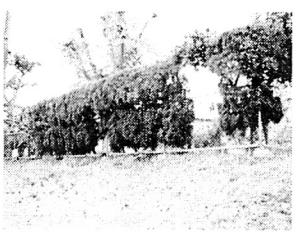


Fig.3　C地点

Fig.4　D地点

大学生による犯罪者プロファイリングの検討

○桐生　正幸　高橋　美奈)
(関西国際大学大学院行動科学研究科)
キーワード：犯罪者プロファイリング、推定過程、教育プログラム

【目的】日本の犯罪捜査場面にて、活用が期待されている「犯罪者プロファイリング」の手法には、FBIによる方式とカンターらによる方式がある。FBI方式は、精神医学や臨床心理学などをベースにした個人的技量に重きを置く手法であり、カンターらの方式は、社会心理学や統計学などをベースにした客観的で再現性のある技法をめざすものである。日本では、両方式の併用が捜査場面に効果的であると考えられ、捜査場面にて使用されている。

さて、この「犯罪者プロファイリング」における分析者の推論過程を明らかにしておくことは、分析者の教育プログラムを構築して行く上で重要である。分析対象となる事件情報や、過去の類似事件に関する統計資料を用いて、分析者が、いかなるプロセスで有効な推定内容を導き出すか、といった問題は、「犯罪者プロファイリング」の科学性を高めるためにも解決していかなくてはならない問題である。

横井と久保（1999）は、現役捜査員62名に対し仮想事件情報を呈示して、犯人像について何らかの推論が可能か、それはどのような内容かについて、といった調査を行っている。その結果、性別、犯歴、性格は比較的推定しやすいものの、年齢、職業、人相着衣の推定は困難であるようだ、との報告を行っている。また、捜査員としての経験年数が短い方が、推論可能と回答した項目数が多い、という傾向も指摘している。その理由として、経験の少ない捜査員の方が、少ない情報から大胆に推論を行ったのではないかと考察している。

桐生と長澤(2001)は、捜査経験と推定の難易度との関係は対象となる罪種や推定すべき事柄によって違ってくる、との可能性を示している。例えば、捜査員にとって放火と車上狙いは推定が難しい感じられることを示している。加えて、長澤と桐生(2001)は、模擬強姦事件の内容を捜査員に呈示し、犯人について自由な推論を求めたところ、犯人と被害者、現場との関連に関する推論が比較的多く見られたと報告している。長澤らは、土地鑑や面識を重視した捜査対象の絞り込み、という推論プロセスが反映されたものと解釈しているが、このことは前述の横井と久保(1999)の結果とも合致している。

以上、これら先行研究では、犯罪捜査の経験がある捜査員や警察関係者に対する研究結果が示されているものの、捜査経験のない素人の推定については言及されていない。そこで本研究では、捜査に関して全くの素人である大学生が、いかなる推論過程を行うかを検討するため調査を行うものである。

【方法】

調査１：犯罪者プロファイリングに関する講義中に、横井らの模擬事件（横井・久保、1999）に対する分析を、調査協力者である学生に依頼した。回答した学生は、54名（女性26名、男性28名）である。まず、調査に関する説明を行った後、模擬事件を印刷した用紙を配布し、推定する９項目について回答を求めた。模擬事件の概要は　67歳の無職の独居女性が、自宅寝室にて死んでいた殺人事件である。この事件概要を読んだ後、推定項目の内容である、①性別、②年齢、③職業、④居住地、⑤犯歴、⑥性格、⑦人相・着衣、⑧再犯性、⑨現場・被害者との関連性、について、回答を求めた。また、なぜそう思うのかについての理由も求めた。

調査２：約２ヶ月後、同講義中に再度、同じ模擬事件に関する分析を求めた。調査協力者の学生は前回と同じである。彼らは、犯罪者プロファイリングに関する講義、演習を８～９回受講している。

【結果】

本報では、調査１の結果について報告する。

・性別：「男性」が46、「女性」が5、「推定困難」が3であった。男性であると推定した根拠としては、「バールでこじ開けた」「被害者の頭部が陥没骨折した」といった事件内容から力がある者の犯行と考えた、というものが多かった。・職業：「無職」が28、「不明」が13、「会社員・セールスマン」が9、「主婦」が2などであった。無職であると推定した根拠としては、「お金目当て」「昼間の犯行」といった事件内容から推定したものが多かった。・居住地：「近所・近く」が43、不明や推定困難が10であった。近所であると推定した根拠としては、「土地勘があるから」といった推定からのものが多かった。・犯歴：「あり」が27、「なし」が20であった。ありと推定した根拠としては、「指紋や足跡が残っていない」「部屋を荒らしていない、手慣れている」といった事件内容からの推定が多かった。・現場や被害者との関連性：「顔見知り」が44（そのうち「親族」が10、「顔見知り程度」が6)、「無関係」が8であった。顔見知りと推定した根拠としては、「被害者が抵抗していない」「現場を荒らしていない」といった事件内容からの推定が多かった。

【考察】

まず、横井らの模擬事件（横井・久保、1999）の分析結果と、同じ模擬事件を使用して行った今回の結果との比較を行いながら考察したい。捜査員が推定しやすい内容と評価した「性別」「犯歴」の比較である。性別では双方の男女比がほぼ等しいが、犯歴では捜査員は「犯歴有り」が多いが、大学生は「有り」と「無し」は同等であった。この違いは、犯罪捜査の経験の有無が影響したものと考察される。次に、捜査員が推定しにくい内容と評価した「職業」の比較であるが、大学生の推定もばらつきが見られた。

居住地の推定では、「近所・近く」が多かったこと、また現場や被害者との関連性では、「顔見知り」が多かったことから、この模擬事件に対する大学生の犯人像推定においては、被害者とは無関係である者のイメージが少ないと思われる。経験の少ない捜査員の方が大胆な推論を行う、といった先行研究と比較すると、豊かな犯人像推定には、ある程度の捜査経験が必要であると考察される。今後は、犯罪者プロファイリングの教育による効果も含め検討していきたい。

【引用文献】

長澤秀利、桐生正幸　2001　捜査員の犯罪観に関する調査(2)－捜査員の犯人推論内容の分析－　犯罪心理学研究、39(特別号)、24－25.
桐生正幸、長澤秀利　2001　捜査員の犯罪観に関する調査(1)－推定難易－　犯罪心理学研究、39(特別号)、22－23.
横井幸久、久保孝之　1999　捜査員の犯人推定　犯罪心理学研究、37(特別号)、6—7.
久保孝之、横井幸久　1999　捜査員から見たプロファイリング、警察公論、54(5)、68－76.

（きりうまさゆき・たかはしみな）

PC 版 VAS および Face スケールの妥当性の検討

○木村友昭[1)2)]　津田康民[1)]　内田誠也[1)]　山岡　淳[1)]
([1)] 財団法人 MOA 健康科学センター　[2)] 広島大学医歯薬学総合研究科)

キーワード：質問紙、妥当性、パーソナルコンピュータ

【背景・目的】演者らは、地域保健や産業衛生において、対象者の QOL やストレスの測定を行っている。通常、紙と鉛筆（ペン）を用いて、質問紙に回答する方法で行われるが、演者らはパーソナルコンピュータ（PC）のタッチパネルを利用した方法で、自覚ストレス調査票（JPSS）のデータを収集している[1]。PC 版の利点は、a)欠損値が発生しない、b)その場で対象者に結果を知らせることができる、c)データの入力・集計の手間が省けるなどがあげられる。PC になじみのない高齢者などでは、拒否反応が出ることも予想されたが、これまでの調査では、高齢者を含めて、信頼性のあるデータの収集を行うことができている。

一方、自覚症状の測定に、visual analogue scale（VAS）や face scale（FS）がしばしば使用される。VAS は、連続量のデータを得ることができるという利点があるが、とくに高齢者にとって、測定法の理解が難しいという欠点もある。本研究では、PC 版の VAS と FS を新たに開発し、その妥当性を検証するため、紙版との比較を行った。

【方法】2006 年 11 月、静岡県で行われた「健康啓発に関する行事」の参加者に研究趣旨を説明し、同意を得た対象者が以下の尺度に回答した。使用した調査票は、PC 版の VAS、FS および JPSS、並びに、紙版の VAS、FS および SF-8 である。VAS は、3 項目からなり、全体的 QOL、健康度およびストレスの状況を質問している。直線の両端を 0 点と 100 点とし、その間の得点で表される。FS も同様に 3 項目からなり、それぞれの質問に、5 つの選択肢を設定してある。その選択肢には、顔の表情だけでなく、言葉による説明も付してあり、1-5 点を与える。VAS および FS とも得点の高いほど、QOL および健康度が良好で、ストレスが大きいことを示す。

JPSS は 14 項目で、それぞれ 5 つの選択肢からなり、0-4 の得点を与える[2]。すなわち、取りうる得点の範囲は、0-56 点であり、得点が大きいほどストレスが大きいことを示す。また、SF-8 は、包括的な健康関連 QOL を測定する尺度で 8 項目からなる[3]。それぞれの回答を基に、日本人の標準データを使用して、身体的健康度（PCS）と精神的健康度（MCS）を偏差値で表すことができる。得点が大きいほど健康度が良好であることを示す。

それぞれの尺度のデータを集計し、Spearman の順位相関、級内相関（ICC）、および一致率（κ）によって分析した。統計処理は、SPSSv13.0 を使用した。

【結果】研究への参加者は、293 人であった。PC 版のデータは全員有効であったが、紙版のデータがすべて有効な対象者は 279 人（95.2%）で、全データの有効なサンプルを解析対象とした（男性 101、女性 178）。年代は、20 代以下が 37 人、30 代が 46 人、40 代が 28 人、50 代が 69 人、60 代が 63 人、70 代以上が 36 人であった。

VAS による全体的 QOL の平均値は PC 版 67.8（紙版 68.0）、同様に、健康度は 60.7（60.8）、およびストレスは 47.9（46.6）であった。FS による全体的 QOL の平均値は PC 版 3.8（紙版 3.7）、同様に、健康度は 3.4（3.4）、およびストレスは 3.0（2.9）であった。JPSS の平均値は、22.2 であった。SF-8 の PCS および MCS の平均値は、ともに 47.7 であった。

表 1 に VAS データの相関を示す。同じ項目の相関は、0.677～0.827 であった。ICC は 0.680～0.834 であった。

表1. PC版および紙版のVASデータの順位相関

	PC VAS全体	PC VAS健康	PC VASストレス
PC VAS健康	0.495		
PC VASストレス	−0.303	−0.326	
紙 VAS全体	**0.822**	0.486	−0.278
紙 VAS健康	0.515	**0.827**	−0.339
紙 VASストレス	−0.395	−0.331	**0.677**

表 2 に FS データの相関を示す。同じ項目の相関は、0.738～0.845 であった。ICC は 0.747～0.836 で、一致率 κ は 0.545～0.707 であった。

表2. PC版および紙版のFSデータの順位相関

	PC FS全体	PC FS健康	PC FSストレス
PC FS健康	0.487		
PC FSストレス	−0.416	−0.396	
紙 FS全体	**0.797**	0.433	−0.377
紙 FS健康	0.441	**0.845**	−0.391
紙 FSストレス	−0.398	−0.406	**0.738**

PC 版の VAS と FS との相関は、全体的 QOL で 0.547、健康度で 0.720、およびストレスで 0.633 であった。JPSS の自覚ストレスにおいて、PC 版 VAS によるストレスとの相関は 0.491、FS によるストレスとの相関は 0.575 であった。SF-8 の PCS において、PC 版 VAS による健康度との相関は 0.392、FS による健康度との相関は 0.438 であった。SF-8 の MCS において、PC 版 VAS によるストレスとの相関は-0.412、FS によるストレスとの相関は-0.536 であった。

【考察】PC 版と紙版のデータは、強い相関があり、高い一致率を示した。また、同じ概念の VAS と FS のデータの相関も高かった。これらの結果から、PC 版の VAS および FS が、紙版と同様に高い信頼性をもっていると考えられる。また、全体的 QOL、健康度、およびストレスとの間に中程度から弱い相関が見られた。VAS と FS は、JPSS や SF-8 とも中程度の相関があった。以上のことから、測定項目の概念が妥当であることが示唆された。

【結論】PC 版の VAS および FS は、紙版と高い相関があり、PC でデータを収集することは妥当である。これらの尺度は、QOL やストレスの測定に役立つものである。

【謝辞】本研究を行うに当たり、「健康啓発に関する行事」のスタッフの方々にデータ収集のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

【引用文献】

1. Kimura T, et al. 2005 Computer-assisted measurement of perceived stress: An application for a community-based survey. Hiroshima J Med Sci 54: 61-5.
2. 岩橋成寿 他 2002　日本語版自覚ストレス調査票作成の試み　心身医 42: 459-466.
3. 福原俊一・鈴鴨よしみ 2004　SF-8 日本語版マニュアル NPO 健康医療評価研究機構、京都.

（きむら　ともあき　・　つだ　やすたみ　・
うちだ　せいや　・　やまおか　きよし）

自己認知からの適応力の把握４

― SCT（文章完成法テスト）の応用 ―

○玉井　寛[1)]　澤田　正康[2)]　三浦　公一[3)]
([1)] 福島学院大学　[2)] (株)ニコンシステム　[3)]キャリアダイナミックス研究所)

キーワード：適応、自己認知、SCT（文章完成法テスト）

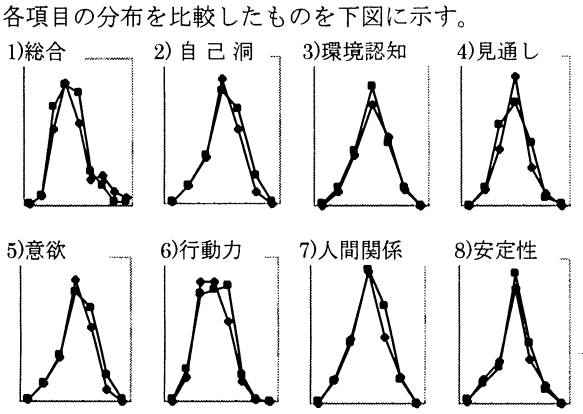
【研究の目的】 この研究の目的はこれまでの報告[1) 2)]で述べられているように、簡易なＳＣＴとその診断の手助けとなる標準尺度検査の開発にある。特にＳＣＴは被験者と判定者の双方にとって負担が大きい。刺激文の数を減らせば被験者の負担は減るが、判定者にとっては情報が減り必ずしも負荷の軽減とは言えないし、判定精度にも影響する。判定する情報をある程度限れば、我々がこれまで使ってきた精研式よりも、刺激文の数を減らすことが可能であると考えて簡易版のＳＣＴ（以下Ｎ－ＳＣＴと記述）を先行して開発中である。今回は、我々が知ろうとしている特性について、実績のある精研式ＳＣＴとＮ－ＳＣＴから得られる情報を数値化して比べることによって妥当性を検討しているので、その過程を報告する。

【方法】 被験者に精研式ＳＣＴとＮ－ＳＣＴの両方を記入してもらう。記入は同時ではなく、少なくとも２週間以上の間隔が空けられている。それらを精研式ＳＣＴで充分なトレーニングを積んだ１１名の評定者が両方のＳＣＴを読み、下記の８項目について、被験者が持っていると思われる度合いを数値で評定する。その際、評定者が同一被験者の書いた２種類のＳＣＴを特定できないようにそれぞれ異なる識別番号が振られている。またその２種類の評定には１週間程度の時間差を設けてもらった。さらに１つのＳＣＴに対して２人が別々に評定をし、各ＳＣＴに対し２つの評定結果を得た。同じ評定者の組み合わせで同じ被験者の２種類のＳＣＴを評定した場合とそうでない場合もあるが、偏りがないように配分をコントロールしてある。

数値化した特性は、１）総合評価、２）自己洞察、３）環境認識の確実さ、４）将来の見通し、５）意欲、６）行動力、７）人間関係能力、８）安定性、についてである。評定は７段階で数値化したが、総合評価だけは精研式で慣れ親しんでいるという理由で１１段階とした。

【結果】 分析に使用したデータは大生３年生５７名と企業の大卒入社試験の場面での２３名を合わせた８０名分である。

各項目の分布を比較したものを下図に示す。



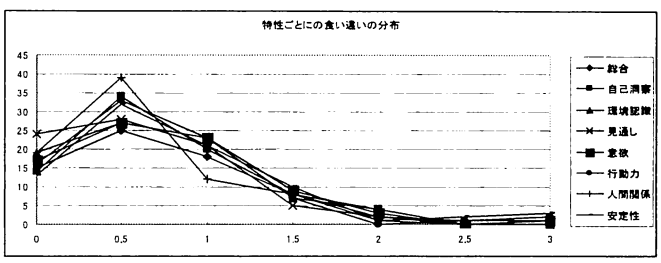
順番は左上が１）で右下が８）である。全体としてみると両方の分布の一致度は良く、同じ母集団であることを窺わせる。１）総合評価は精研式が平均 4.59、標準偏差 1.55、Ｎ－ＳＣＴがそれぞれ 4.39、1.34 で、２）から８）の項目は両方で平均が 3.88 から 4.21、標準偏差が 0.90 から 1.12 の間にある。

被験者ごとの２つのＳＣＴの評価の一致度であるが、ここでは評定者の点数そのもので比較を行った。考察に述べるように、点数そのもので比較することには問題もあるが、大まかな傾向はつかめるし、詳細な分析に先立ってまずはやらなければならい処理である。１人の被験者に対し２人分の評定があるので、その平均を評定点とした。各特性について精研式とＮ－ＳＣＴとの点数の相関係数を下に表に示す。

総合	0.60	意欲	0.52
自己洞察力	0.41	行動力	0.56
環境認識の確実さ	0.44	人間関係能力	0.56
見通し	0.49	安定性	0.44

この数値から強いとは言えないが有意な相関が認められる。

各被験者について、精研式とＮ－ＳＣＴでの点数の食い違いがある。その程度は、全項目についての平均で 0.72、分布は下図のようになっている。



ほとんどは１以下の食い違いに収まっているが、２以上の食い違いも見られるので、そのケースについては個別に分析してみる必要がある。

【考察】 この結果には、大きくはないが小さくもない食い違いが存在する。今回の評定では、評定者間で点数付けの基準合わせをしていないし、評定者もＳＣＴを詳しく分析した上でというよりは、ＳＣＴを読んだ印象で感覚的に点数化をしている。それを考慮すると、この程度食い違いが出ることは想定できる。素点の分析段階で２つの結果にこの位の関係があれば、点数そのものではなく、個人の傾向を補正したり、カテゴリカルな変数として使うなど、より精密な分析を行えばＮ－ＳＣＴの妥当性が明らかになると考えられる。

【今後の展開】 より詳しい分析を行って、データの意味を考察しつつ、評定数を増やしたり、評定法を改良するなどしてデータの質の向上を図っていく。その分析から得られる情報を参考にして、Ｎ－ＳＣＴを補完する標準尺検査を開発していく。

【引用文献】 １）三浦公一・玉井寛 2005 –自己認知からの適応力の把握- 日本応用心理学会第 72 回発表論文集
２）三浦公一・玉井寛 2006 –自己認知からの適応力の把握２および３- 日本応用心理学会第７３回発表論文集
３）玉井寛・三浦公一　2005 –自己認知からの適応力の把握-福島学院大学研究紀要第 37 集

（たまい ひろし・さわだ まさやす・みうら こういち）

ピアノ演奏時における心拍数の変化

― 呼吸法の効果について ―

藤田　勉
（長野県短期大学幼児教育学科）

キーワード：心拍数，ピアノ演奏，演奏不安，呼吸法，短期大学生

【研究の目的】

幼児教育学科に在籍する短期大学生のピアノ演奏時の心拍数を測定した。幼稚園教諭や保育士を育成する多くの養成校では「ピアノのレッスン」が必修科目となっており，保育の現場でも保育者のピアノ演奏技能を重視する幼稚園・保育所は多い。人前でピアノを演奏する際に感じる強い不安や緊張を演奏不安（performance anxiety）というが，ピアノの演奏に際してこの演奏不安を訴える学生は多く，演奏不安が演奏内容に悪影響を及ぼしている可能性もあると思われる。本研究では，ピアノ演奏時の心拍数を演奏不安の指標とし，演奏不安を軽減する手段としての呼吸法の効果について検討した。

【方法】

被験者　幼児教育学科に在籍する７名の女子短期大学生（被験者 A～G）を被験者として用いた。

実験器具　POLAR 社製のスポーツ心拍計（S810i）を用い被験者の心拍数を測定した。このスポーツ心拍計では，センサーとトランスミッター（送信機）がついたチェストストラップを被験者の胸に装着した状態で５秒ごとの心拍数を測定する。測定された心拍数のデータは被験者の腕につけられた腕時計型のリストレシーバー（受信機）に無線で送信され，実験終了後に赤外線通信で PC に取り込むようになっている。実験場面は，デジタル・ビデオカメラ（Canon IXY DV）で撮影・録画した。

手続き　実験は短期大学の音楽教室内で行われ，ピアノ演奏の直前２分間，演奏中（約２分間），演奏直後２分間における被験者の心拍数を５秒ごとに記録した。実験は後述の３つの条件で行われたが，すべての条件に共通する手続き（基本手続き）は，①別室で心拍計を装着する，②ビデオ撮影を開始，③心拍計を作動し心拍数の記録を開始，④ピアノの前の椅子に座った状態で２分間待つ，⑤ピアノ演奏（約２分間），⑥椅子に座った状態で２分間待つ，⑦心拍計を停止し心拍数の記録を終了，⑧ビデオ撮影を終了，⑨別室で心拍計を取り外す，である。④と⑥でピアノ演奏の前後に２分間待つ手続きを加えたのは，ピアノがある位置まで移動する際に増加した心拍数を安定させ，演奏中と演奏前後の心拍数の変化を明確にするためである。演奏するピアノ曲は被験者ごとに異なるが，被験者内ではすべての条件で同じものとした。ビデオ撮影，心拍計の操作は被験者自身が行った。

各実験条件の手続きは以下の通りである。

〈条件Ⅰ〉上記基本手続きの②から⑧の手続きの間，音楽教室内には被験者の他に誰もいない状況で実験を行った。

〈条件Ⅱ〉被験者の他に学生６名と教員１名が音楽教室内にいる状況で実験を行った。つまり，被験者は７名の観客の前でピアノを演奏することになる。

〈条件Ⅲ〉条件Ⅱと同様，被験者は観客の前でピアノを演奏するが，④の手続きの際に丹田呼吸法を２分間行った。丹田呼吸法とは，臍下丹田（臍の下約３～４cm ほどのところにある下丹田）に意識を集中し，腹式呼吸を行う呼吸法である（藤田・藤田, 1999）。実験は，条件Ⅰを平成 18 年９月 13 日と 15 日の２日間，条件Ⅱを 10 月 23 日，条件Ⅲを 11 月 27 日に実施した。

【結果と考察】

Fig.1 に各実験条件における被験者７名の平均心拍数の推移を示す。Fig.1 の横軸には時間経過（ピアノ演奏の直前，演奏中，演奏の直後），縦軸には１分間あたりの心拍数がとられている。観客がいない状況でピアノ演奏をした条件Ⅰの１分間あたりの平均心拍数は，演奏直前が 100.61 拍，演奏中が 105.92 拍，演奏直後が 91.43 拍であった。７名の観客の前で演奏する条件Ⅱにおける平均心拍数は，演奏直前が 97.70 拍，演奏中が 117.01 拍，演奏直後が 92.34 拍であり，条件Ⅰと比較すると，演奏の直前と直後ではさほど違いはみられなかったが，演奏中の心拍数は条件Ⅱが約 11 拍上回っていた（$t(6)=2.14, .05<p<.1$）。また，演奏直前の２分間に丹田呼吸法を行った条件Ⅲの平均心拍数は，演奏直前が 89.44 拍，演奏中が 104.97 拍，演奏直後が 88.04 拍であった。条件Ⅰ，条件Ⅱと比べ，条件Ⅲでは全体的に心拍数が低くなっているように思われたが，統計的に有意な差はなかった。平均値の差の検定では，条件Ⅰの演奏中と演奏直後，条件Ⅱおよび条件Ⅲの演奏直前と演奏中，演奏中と演奏直後の心拍数の差が統計的に有意であった（$p<.01$）。以上の結果をまとめると，次のようになる。(a) ピアノ演奏中は演奏直前に比べ心拍数が増加し，演奏直後には心拍数は急減する，(b) 観客の有無はある程度演奏者の心拍数に影響する，(c) ピアノ演奏の直前に呼吸法を行うことは，心拍数を軽減させるのに統計的に有意なほどの効果はみられなかった。

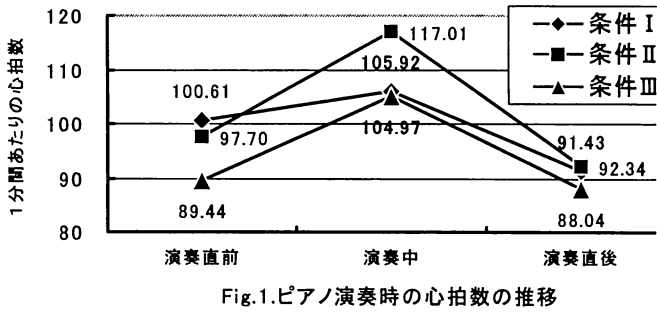


Fig.1.ピアノ演奏時の心拍数の推移

本研究では，ピアノ演奏の直前に行う呼吸法が学生のピアノ演奏時の心拍数にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。本研究は予備実験であり手続き上の不備も多い。たとえば，呼吸法の習熟度，ピアノ曲の練習効果，実験事態に対する慣れ，実験時の演奏内容等が本研究の実験結果に影響していた可能性も考えられる。このような点も考慮に入れ，今後より厳密に再検討する必要がある。前述のように，ピアノ演奏にともなう演奏不安を訴える学生は多いが，そうした学生に対して演奏不安を軽減させる簡便な方法を提供することは，教育的な意義も大きいと思われる。

【引用文献】

藤田勉・藤田直子　1999　IX. リラクセーションと健康　前橋明（監修）　健康概論　pp.224-237.

《付記》本研究のデータは，長野県短期大学専攻科幼児教育学専攻の平成 18 年度「幼児教育学専修研究（心理学）」の実験で得られたものである。

（ふじた　つとむ）

多変量解析法を用いた筆者識別

― 二筆跡間の筆者識別 ―

○三井　利幸[1)]　菅原　博嗣[2)]　若原　克文[2)]　関　陽子[3)]
([1)] 数値解析研究所　[2)]愛知県警察本部科学捜査研究所　[3)] 科学警察研究所)

キーワード：筆跡、多変量解析、重回帰分析

【研究の目的】

筆者識別は、筆者の明らかな複数の筆跡と筆者不明の筆跡間との共通した特徴の有無を検査し判定する方法である。共通した特徴の有無の検査方法には、現在でも経験的に筆跡を観察する方法が主流であるが、この方法では共通した特徴を抽出するときに検査者の主観が混入する危険性を排除することができない。著者らは、検査者の主観の混入を排除する目的で多変量解析法を用いたコンピュータによる筆者識別法について報告してきた。実際の筆者識別では、検査筆跡と筆者の明らかな筆跡が各１筆跡しか入手できない場合があり、従来の最低でも３筆跡以上を必要とする多変量解析法では対応が不可能であった。そこで、筆者識別の信頼性を損なうことなく２筆跡のみで筆者識別を行なう方法を研究した。筆跡は従来の多変量解析法の場合と同様の方法で数値化した。

【２筆跡間の前処理】

重回帰分析：あらかじめ同一の筆者によって記載された２筆跡｛既知資料（グループ１）｝と、異なった筆者によって記載された２筆跡｛既知資料（グループ２）｝について、各カテゴリー間の差の二乗和が最小となるように作成した重回帰式（$y = ax + b$）を作成した。このとき、２筆跡の目的変数と説明変数は常に重相関係数が 1.0000 未満となるように指定した。さらに、２筆跡間のユークリッド距離も計算した。重回帰分析から得られた重回帰式の係数、切片、係数と切片の標準誤差、重相関係数(R)、決定係数｛寄与率(R^2)｝、自由度修正済決定係数、標準誤差と２筆跡間のユークリッド距離の９カテゴリーを計算で求め、データベースとして保存した。筆者識別目的資料（未知資料）についても同様の方法で９カテゴリーを計算した。筆者識別は、筆跡を数値化したときに得られるカテゴリー数によって重回帰式から得られる８カテゴリーとユークリッド距離の数値が異なるので、未知資料の筆跡のカテゴリー数と近似した既知資料グループ１，２の各５資料を無作為に選択して行なった。

【筆者識別】

１．KNN 分析

判別分析の一種である KNN 分析で未知資料が帰属するグループを判別した。方法は、未知資料のカテゴリー数と近似したグループ１，２の既知資料の各５資料に対して、未知資料に近似している 3/5 以上を占めた既知資料グループに未知資料が帰属すると判断する 5NN で判別した。筆者識別は未知資料がグループ１に帰属していれば同一の筆者によって記載された筆跡、グループ２に帰属していれば異なった筆者によって記載された筆跡と判断した。しかしながら、この方法は判定が困難な場合でも強引にいずれかのグループに帰属させてしまうので、誤判定を誘導する危険性が排除できない。従って、選択した既知資料の各５資料に未知資料を加えた 11 資料を用いて、クラスター分析、主成分分析、SIMCA 分析を行い、得られた結果を総合的に判断して未知資料が同一の筆者によって記載された筆跡か否かを判定した。

２．クラスター分析

3NN で選択した 10 個の既知資料と未知資料で計算し、明確にグループ１に帰属していれば同一の筆者によって記載された筆跡、グループ２に帰属していれば異なった筆者によって記載された筆跡と判定した。未知資料がいずれのグループからも離れた状態でデンドルグラムを形成した場合は判定不可能とした。

３．主成分分析

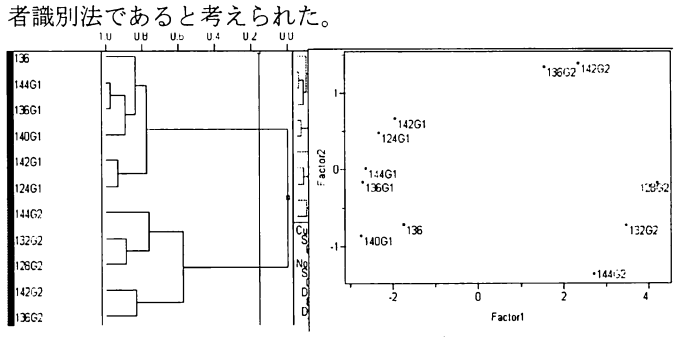
クラスター分析と同一の 11 資料を用いて計算し、得られた主成分得点を二次元か三次元の図で示した。得られた分布状態から、未知資料がグループ１の塊内に分布していれば同一の筆者によって記載された筆跡、グループ２の塊内に分布していれば異なった筆者によって記載された筆跡と判定した。未知資料がいずれのグループからも離れた状態で分布した場合は判定不可能とした。

４．SIMCA 分析

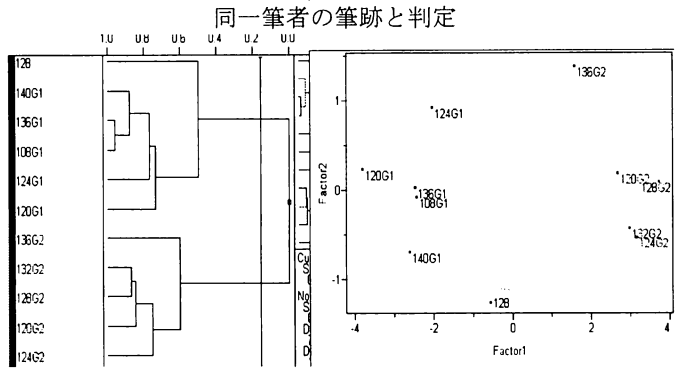
KNN 分析の場合と同様に、最初に同一の筆者によって記載された５資料をグループ１、異なった筆者によって記載された５資料をグループ２に指定して各グループの SIMCAbox を作成後、未知資料がいずれのグループの SIMCAbox に帰属しているかを図で示した。得られた分布状態から、未知資料がグループ１の SIMCAbox 内に分布していれば同一の筆者によって記載された筆跡、グループ２の SIMCAbox 内に分布していれば異なった筆者によって記載された筆跡と判定した。未知資料がいずれの SIMCAbox にも帰属していない場合は判定不可能とした。

【筆者識別結果】

未知資料を 3NN で判断及び、クラスター分析、主成分分析、SIMCA 分析で判定した結果を示した。この方法を、筆者の明らかな 200 資料に応用したところ、明確な誤判定は２資料であった。このことから、本方法は極めて精度の高い筆者識別法であると考えられた。



同一筆者の筆跡と判定



判定が困難な筆跡

いずれも KNN ではグループ１に帰属した。

（みつい　としゆき・すがわら　ひろし・わかはら　かつふみ・せき　ようこ）

筆跡の特徴マッピングに基づく筆者識別に関する研究

○菅原　博嗣[1)]　若原　克文[1)]　三井　利幸[2)]
([1)] 愛知県警察本部刑事部科学捜査研究所　[2)]数値解析研究所)
キーワード：筆跡、特徴マッピング、筆者識別

【研究の目的】

これまでに筆跡を数値化し、多変量解析法を用いることで、筆者識別が十分に可能であることを報告してきた。

また、これまでの研究成果から、筆跡の数値化に際し、大きさを揃えるための基線の決定、字画の始筆、転折、終筆等を測定点とする方法（以下、特徴マッピングとする。）は、筆跡の安定した字画のバランスを表現する方法として、実務鑑定における手法とも整合している。

そこで本研究では、実務鑑定に対応した手法として、筆跡の特徴マッピングによる測定点の座標に加え、字画相互のバランスや位置関係を要素とすることで、筆者識別精度の向上を目指す。

【実験方法】

1．試料

実務鑑定で使用された「山内志」、「松岡」字を検査筆跡とし、問題となる筆跡（sam.）は１回、対照する筆跡(ref.)は５回記載したものを用いた。

筆跡の数値化は、各筆跡をスキャナで取り込んだ後、各文字の特徴マッピングを行い、クラスタ分析、主成分分析を用いて筆者識別を行った。

各文字の特徴マッピングを以下に示す。

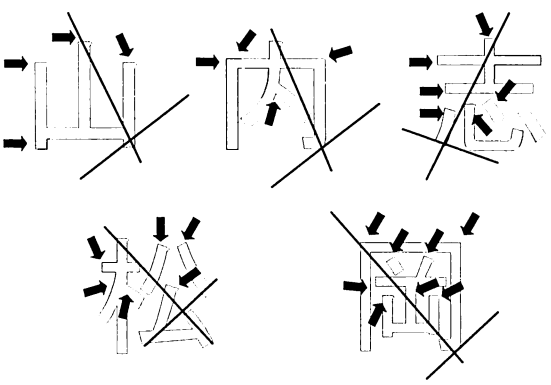


図１　各文字の特徴マッピング

これらの筆跡は、筆跡鑑定により同一筆者による筆跡と判断している。

2．特徴マッピング

①　各文字の外郭となる測定点を結び、その内側をクモの巣状に結束して、測定点間の角度をファクタとする。

②　各文字の始筆や転折を結束して、測定点間の角度をファクタとする。

上記の２つの方法により得られたファクタを用いて、クラスタ分析、主成分分析を行った。

筆跡の特徴マッピングから得られた測定値は、原点に近い測定点はゼロに近く、原点から離れた測定点の数値は大きくなり、このままでは大きな測定点に重みがかかった状態で解析が行われる可能性が高い。そのため、本研究では各測定値が同様の重みで筆者識別を行うように、オートスケーリング処理を行った後、クラスタ分析、主成分分析を実施している。

これらの解析は、ジーエルサイエンス社製の多変量解析ソフト「ピロエット」により行った。

【実験結果】

・　①の外郭を結び、内側をクモの巣状に結束し、点間の角度をファクタとする特徴マッピングでは、「山内志」字、「松岡」字のいずれの文字も、クラスタ分析、主成分分析において問題となる筆跡と対照する筆跡が分離した。

・　②の字画の始筆、転折を結び、点間の角度をファクタとする特徴マッピングでは、「山内志」字、「松岡」字のいずれの文字も、クラスタ分析で問題となる筆跡と対照する筆跡が混合した（クラスタ分析結果を図２に示す）。

主成分分析では、いずれの文字も第１、２主成分の平面状に分布しており、問題となる筆跡と対照する筆跡が混合すると判断した。

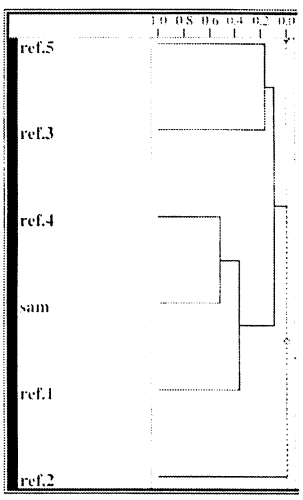


図２　クラスタ分析結果（特徴マッピング②）

【考察】

これまでに報告してきたコンピュータを用いた筆者識別では、基線や測定点の選択に客観性が保たれるように行うことが原則であるが、特徴マッピング①で設定した記載条件の影響により変動が生じやすい終筆の位置、運筆をトレースするようなファクタでは誤判断を招きかねない。

これに対して、特徴マッピング②の字画の始筆や転折のみを選択するファクタは、字画相互のバランスの安定性を表現できるものと判断され、これまでの報告を支持する結果となった。

さらに、筆跡鑑定の基盤である字画構成や字画相互のバランスの恒常性を客観的に示すことができた。

また、今回の特徴マッピングでは、データのばらつきも少ないことが確認できた。この手法により筆者識別精度の向上につながることが予測でき、今後も検討を加える。

（すがはら　ひろし、わかはら　かつふみ、みつい　としゆき）

同一筆者の書字意識が異なる筆者識別

○若　原　克　文　　菅　原　博　嗣　　三　井　利　幸
（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）　（数値解析研究所）
キーワード：筆者識別　書字意識　多変量解析

１．はじめに

筆跡は、同一筆者が同一の文字を記載してもパターンが完全に一致することはなく、近似した条件下で記載した筆跡は一定の範囲の中で変動すると考えられ筆者識別の重要な根拠となっている。

同一筆者の記載変動の要因は種々考えられるが、変動の幅は人によって違いがあり大きく変動する人もいれば極めて小さく変動する筆者も存在することを経験的判断ではなく、筆跡の数量化による分析手法で客観的に証明することによって筆者識別の可能性について論じてきた。

今回、同一筆者の書字意識が異なる筆跡について分析を試みた。

２．手続

検査筆跡　住所氏名で使用された筆跡中「藤」「雄」「豊」「成」の４文字、「８８４」「９００」の数字列計６字種について分析

疑問筆跡　１回記載　　対照筆跡　１０回記載

測定部位

「藤」基線　第１画終筆部と第５画終筆部を結ぶ直交座標を原点

第１，２，３，４画始筆部、第４画終筆部、第５画転折部、第８，９，１０画始筆部、第１０画終筆部、第１１画始筆部、第１１画終筆部、第１２，１３画始筆部、第１３画終筆部、第１４画始筆部、第１４画終筆部、第１８画終筆部

合計１８測定部位　３６カテゴリー

「雄」基線　第４画終筆部と第５画終筆部を結ぶ直交座標を原点

第１画始筆部、第１画終筆部、第２画始筆部、第２画終筆部、第３画始筆部、第５画終筆部、第６画始筆部、第６画終筆部、第７画始筆部、第８画終筆部、第１２画終筆部

合計１１測定部位　２２カテゴリー

「豊」基線　第４画始筆部と第１３画始筆部を結ぶ直交座標を原点

第１画始筆部、第１画終筆部、第２画転折部、第３画始筆部、第７画始筆部、第７画終筆部、第８画始筆部、第９画転折部、第１１，１２画始筆部、第１３画終筆部

合計１１測定部位　２２カテゴリー

「成」基線　第１画終筆部と第４画始筆部を結ぶ直交座標を原点

第２画始筆部、第２画終筆部、第３画始筆部、第３画転折部、第３画終筆部、第４画終筆部、第５画始筆部、第５画終筆部、第６画始筆部、第６画終筆部

合計１０測定部位　２０カテゴリー

「８８４」基線　２文字目「８」の上部最高部左最外郭部と下部最下部左最外郭部を結ぶ直交座標

１文字目「８」の最高部左最外郭部、１文字目「８」の最下部右最外郭部、２文字目「８」の最高部右最外郭部、「４」第１筆始筆部、「４」第１筆転折部、「４」第１筆終筆部、第２筆始筆部、第２筆終筆部

合計８測定部位　１６カテゴリー

「９００」基線　１文字目「０」の最高部左最外郭部と最下部左最外郭部を結ぶ直交座標を原点

「９」ループ最下部左外郭部、「９」ループ最高部右外郭部、「９」終筆部、１文字目「０」最高部右最外郭部、２文字目「０」最高部右最外郭部、２文字目「０」最下部左外郭部

合計６測定部位　１２カテゴリー

分析方法

「藤」「雄」「豊」「成」「８８４」「９００」「藤、雄」「藤、豊」「藤、成」「雄、豊」「雄、成」「豊、成」「８８４，９００」「藤、雄、豊、成」「藤、雄、豊、成、８８４」「藤、雄、豊、成、９００」「藤、雄、豊、成、８８４，９００」の１７通りについてクラスタ分析、主成分分析を行った（使用ソフト ジーエル サイエンス社製「ピロエット」）。

３．分析結果

「藤」「雄」「豊」「成」の各文字においては単独４通り、２文字組６通り、４文字組１通り計１１通りのクラスタ分析で被検文字と対照文字間が混合し、３文字組の分析は行わなかった。従来からカテゴリー数が増加すれば分析精度が向上することが明らかになっており今回の分析でも同様の結果が得られた。また、主成分分析の第１主成分得点は被検文字が対照文字間に内包され同一筆者の変動範囲と認められた。

数字列については、単独２通り、組合１通り計３通りのクラスタ分析はいずれも分離した。主成分分析の第１主成分得点は被検文字が対照文字間との大きな隔たりが認められ、数字列の分析は今後検討が必要である。

また、文字と数字列の組合せでは、４文字と「８８４」、４文字と「８８４」「９００」の組合せは分離し、４文字と「９００」の組合せは混合した。分離したグループはいずれも第１主成分得点で被検文字と対照文字の全てにおいて大きな差が認められる。混合した１例は被検文字が第１主成分得点の最大値であるが対照文字にも近似した値の資料が認められた。

４．考察

現在の筆者識別は目視判断による筆者識別が主流で、筆跡の数量化による筆者識別は未だ十分に行われていない。これは、数量化による筆者識別では、筆跡情報の中で文字の形態のみの判断で筆跡の運筆上の細部情報が欠落し十分とはいえないとの批判がある。他方、数量化による筆者識別は、誰が行ってもほぼ一定の結果が得られ客観的な判断ができるが、目視判断では、判断基準に主観的要素が介入する余地が大きいとの意見もある。

今回の分析データは筆者が認知している資料であるが記載状況に種々の違いがあるデータで、目視判断では同一人筆跡の可能性が認められるとの結果が導き出されている。しかし、資料間で連続運筆の程度が大きく異なり、一部運筆方向の異なる筆跡も含まれる資料で、目視判断では相違点が記載状況の違いに起因し出現した可能性があると結論し結果を得ている。この相違点を合理的に判断するには、数量化による筆者識別を導入し、相違する運筆の判断を客観的に筆者の記載変動範囲内の違いであることを証明する手段として活用を図るべきで、いずれの方法が優れていると考えるのではなく併用した筆者識別法の導入が望まれる。

（わかはらかつふみ、すがはらひろし、みついとしゆき）

がん終末期に求められる精神的ケア

—ケア提供のタイミング—

○幸野　里寿[1)]
([1)] 京都大学人間・環境学研究科)

キーワード：がん終末期、精神的ケア、マネジメント

【研究の目的】 がん終末期患者の症例を検討する。面接を行った結果浮かび上がった問題点に焦点をあて、精神的ケアの有るべき姿についての一考察を試みる事を目的とする。

【方法】 面接法。対象を家族・本人とした。面接時間は一回に付き一時間以下。場所は病室（個室）で行った。面接の結果はカウンセリング記録に残し、同時に病棟スタッフへのフィードバックも行った。

症例紹介

病名　：悪性リンパ腫
年齢　：70 歳代
性別　：男性
職業　：会社社長（一代で会社を築き、現役であった）
面談時期　：2005 年 4 月
転帰　：他院へ転院後、死亡

【結果】

本人：　本人への病名告知は 2004 年 12 月に行われているが、それ以降の説明はほとんどなし。リツキサン療法・化学療法の副作用と腫瘍再発に伴う諸症状による身体的苦痛があった。精神的な援助の必要性が顕在化してきたのは 2005 年 2 月に入ってからであった。当初リエゾン外来にて、「患者は一代で会社を築き、入院時も現役の社長として職務をこなしていた。今までの人生で、患者にとって自己決定するという事が重要な位置を占めてきたと思われる。本人に予後を含めた告知を行っていないため、自己決定ができないジレンマがある。これを解決する事が必要である。」とのこと。一週間後に再来予定であったが、数日後に不安神経症・不眠とのことにて精神科より抗不安薬が投薬される。その後、傾眠傾向と衰弱が顕著となった。3 月末より精神的に落ち着いてきたのと、寝たきりながらも小康状態であったため、他動的理学療法も開始された。この時点よりカウンセリングが開始。

家族：　当初より『リンパ球輸注療法』『抗がん剤の局所投与療法』を希望していた。予後についてははっきりと聞かされており全身的な化学療法など、苦痛を伴う積極的な治療は望まれていないようであった。カウンセリングを始めた時点で妻は「精神科から沢山の薬を頂いている。こうなる前にカウンセリングが必要だったと思う」と感じており、精神科の薬剤によって体力が低下したと考えているようであった。患者の容態の変化に対応できないことへの困惑もあった。患者の訴える諸症状への緩和を強く望まれており、この点で医療に不満をお持ちであった。

【考察】

2005 年 4 月にカウンセリングが開始されたが、患者の体力温存が優先されたことと、終末期が後期に入っていたため、患者本人の希望や訴えを充分に反映する機会を逃していた。患者の精神的要援助状態が顕在化する前にリエゾン外来によるフォローが必要ではなかったかと考えられる。患者本人へは予後を含めた告知がされておらず、自分の今後の人生に対して考える機会を与えられなかったのは問題とされる点である。終末期という時期を患者自身が乗り越える力を持つことへの信頼が欠けていた。また、精神科受診の経過が緊急性を帯びており、そのために急激な投薬が必要になったことも注目する点である。

まとめとして、本症例の特徴は、患者・家族・また患者を取り巻く医療従事者が各々の立場からみた最善の方法をおこなったが、互いの希望に対して意識のズレが生じていた為に、身体的苦痛を伴う状況においての精神的援助が後回しになってしまった症例であったといえる。

1. 患者には早期の時点から精神的援助を始めること、がん終末期の諸症状や薬の副作用による身体的苦痛の緩和を徹底する事が必要である。その上で、患者自身の人生を考える機会を提供し、患者を主体とした終末期を過ごせる環境を提供されることが望ましい。
2. 家族には病状に対する十分な説明と情報を提供するべきである。また、患者の行動の意味を家族に教えること、つまり、患者への援助の方法を教えるプロセスが患者家族へのケアにつながると考えられる。
3. 医療従事者は各々の専門に偏りがちである。患者をとりまく様々な状況を総合してケアマネジメントする能力を身につけるか必要があり、今後その分野の人材が必要とされることもありえるであろう。

（こうのりじゅ）

実習直前に感じる不安感への介入

― 感情表出とアドバイスの影響 ―

○山本　勝則[1)]　吉田　一子[2)]　内海　滉[3)]
([1)] 獨協医科大学看護学部　[2)]熊本保健科学大学保健科学部看護学科　[3)]千葉大学)

キーワード：精神看護実習、不安感の表出、介入方法

【研究の目的】 看護教育研究として、学生が実習について抱く不安の実態はよく調べられている。これまでの研究は、実習開始前後の不安が最も強いこと、不安の内容としてコミュニケーションや人間関係があることなどを指摘している。

ところが、どのように指導するのが望ましいかという実証的研究は多くない。これまでの実態に関する研究から、想定できる介入研究を分類すると、二種類ある。一つは、最も不安が強い実習開始前後の不安に対する介入である。もう一つは、実習中に生じるケアに伴う不安に対する介入である。

実習中に生じるケアに伴う不安は、患者側の要因やその場の要因など、状況の個別性が高い。したがって、介入方法も多様である。これに対して、実習開始時点での不安は、学生側に個別性があるとしても、不安を引き起こしている状況は、実習に直面しているという特定の状況である。したがって、指導介入方法を絞り込むことができる可能性がある。

実習開始直前の不安は、介入をしなくても多くの学生が乗り越えるが、無駄な時間や労力を費やしたり、時には実習への積極的な取り組みを妨害したりする。効率的な学習を支援するために、介入方法を明らかにする必要がある。

【方法】 調査場面は、精神看護学実習のオリエンテーションを受けるために、実習グループ全員が集まった最初の場面である。指導教員が、「これから始まる実習について、'不安に思っていること'、あるいは自分が学びたいと思っていることや計画していることを、順番に述べてもらいます」と告げた。その後、学生を指名して発言させ、学生が述べたことに対して、そのつど、コメントを返した（以下、これら一連の出来事をインタビューと呼ぶ)。

学生全員のインタビューが終了した直後に、不安に関する調査用紙を配布した。その際、回答するか否かは自由であり、実習指導や成績などにまったく影響しないことを口頭で伝え、さらに、回答してもそれを研究に利用することを拒否する権利を保証するために、研究への利用の可否を問う質問項目を配置した。また、記載した文字の特徴によって個人が特定される可能性をなくすために、自由記載欄を設けなかった。

調査対象は四年制大学の三年次看護学生 98 名である。調査期間は、2006 年 6 月から 10 月末までである。

調査項目は①「学生が、不安感情を表出することによって、その感情がどのように変化するか」ということと、その②「表出した不安に対して教員がアドバイスをすることによって、どのように変化するか」ということである。

用語の定義：この調査は、学生が自分で'不安だ'と自覚する感情について調査するものであり、心理学用語としての不安の調査ではない。そこで、以下、"不安感情"と表記する。なお、看護学生の"不安感情"とスピールバーガーの STAI との相関は、以前の我々の調査では、0.5 強であった。

【結果】 98 名全員から回答を得た。また、98 名全員が研究への利用に承諾した。「インタビュー直前の不安はどの程度でしたか」という質問に対する回答と、(インタビュー終了後の)「現在の不安はどの程度ですか」という質問に対する回答とを、表 1 に示した。表中の棒グラフの高さは、回答した人数を示している。「まったくなし」を 0 とし、「非常に強い」を 4 として、五段階評価で数量化した場合（調査用紙には数字を記入してあった)、インタビュー前の不安感の平均は 1.97±.95 であり、インタビュー後の不安感は 1.44±.66 であった。

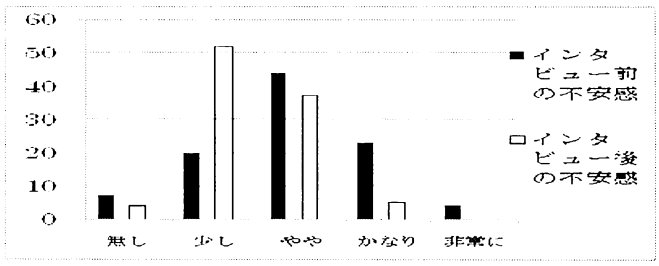


Fig.1.　インタビュー前後の不安感

インタビュー中に不安感を表出した学生数は 80 名であった。この 80 名について、インタビューで不安感を述べたことによる感情の変化を表 2 に示した。「不変」を 0 とし、「非常に減少した」を-2、「非常に増強した」を+2 として、五段階で数量化した場合、インタビューで不安感を表出したことによる不安感情の増減の平均値は-.65±.65 であった。

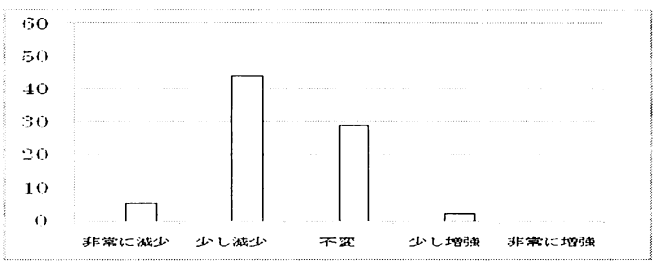


Fig.2.　不安感を述べたことによる変化

教員によるアドバイス後の不安感の変化を表 3 に示した。上記同様に五段階で数量化した場合、インタビューで不安感に対するアドバイスを受けたことによる不安感情の増減の平均値は-.96±.58 であった。

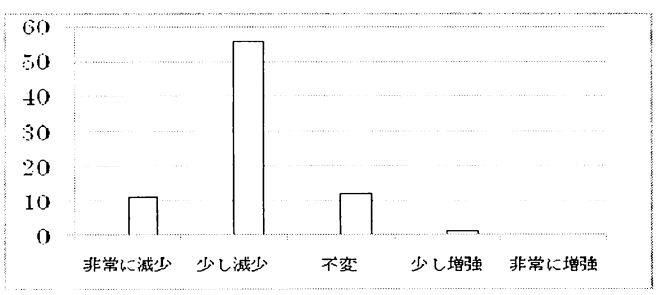


Fig.3.　アドバイスによる変化

【考察】 実習オリエンテーションにおける介入により、学生の不安感の軽減を図ることができた。不安感の軽減は、学生が不安感を表出するだけである程度達成された。アドバイスによっても不安感は軽減された。

この研究は、教育実践中に、目安としての教育効果を調査したものである。そのため、教育の実際を反映している。反面、調査方法としては厳密さに欠ける。したがって、調査結果を解釈するに当たっては、「大まかに言って、実習開始時点で学生が感じる不安感に対して教員が介入することによって、軽減することができる」という程度に止めるべきである。

（やまもと　かつのり・よしだ　いちこ・うつみ　こう）

看護師の蓄積的疲労について

― 年代別の比較検討―

○多久島　寛孝[1)]　山本　勝則[2)]
([1)] 熊本保健科学大学保健科学部　[2)]獨協医科大学看護学部)

キーワード：看護師、疲労、年代別比較

【研究の目的】 我々は、グループホームの職員の蓄積的疲労の実態を調査した（多久島、2006)。その結果、20 歳代の職員が身体的、精神的、社会的側面の全ての特性において 70%タイル値を超えていた。このことより 20 歳代職員は、心身の負荷が高いことに加えて、職場や現在の仕事について満足できていない社会的疲労の状況にあると判断した。

そこで、こうした若い年代の就労の実態について、明らかにする必要があると考え、今回、若者の就労の実態について検討を行った。

【方法】 A 県にある B 病院の看護師を対象にアンケート調査を行った。全調査対象数は 4 部署合計 74 名（全員女性）であるが、人数の少なかった 50 歳代の 5 名を除く 69 名のデータを分析対象とした（20 歳代：21 名、30 歳代：31 名、40 歳代：17 名)。調査は平成 18 年 3－4 月に行った。調査内容は、越河らによって開発された蓄積的疲労徴候インデックス調査用紙（以下、CFSI）を用いて行った。この CFSI は、「一般的疲労感」「慢性疲労徴候」「身体不調」の身体的側面 3 特性、「抑うつ感」「不安感」「気力の減退」の精神的側面 3 特性、「イライラの状態」「労働意欲低下」の社会的側面 2 特性の全 8 つの特性からなるものである。

この CFSI の判定は、各特性別に訴え率を算出しレーダーチャート化したものをパターンとし、CFSI の基本パターンと比較して 8 特性のパターンの大きさと歪み度合いから、視覚的に身体的（右側)、社会的（中央)、精神的（左側）負荷の特徴を判定するものである。

本調査では、部署別および年齢別に集計を行い CFSI の 8 つの特性別に平均訴え率を算出し、男女別の基本パターンとの比較及び、70%タイル値と比較を行った。倫理的配慮として、本学の疫学・行動科学倫理審査委員会の承認を受けた後、対象者には参加の自由とプライバシーの保障を行い実施した。

【結果】 部署別および年代別の平均訴え率を、レーダーチャートに示す（Fig. 1, 2)。

1. 部署別

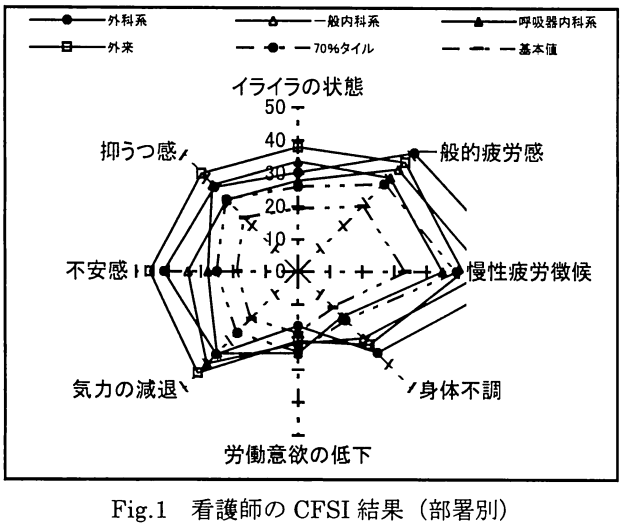


Fig.1　看護師の CFSI 結果（部署別）

全ての部署において、3 つの側面の 8 特性全てにおいて基本値を上回っていた。また、外科系病棟及び外来では、「労働意欲の低下」以外の 7 特性で 70%タイル値を上回り、一般内科系病棟では、「労働意欲の低下」「抑うつ感」以外の 6 特性で 70%タイル値を上回った。呼吸器内科系病棟では、「慢性疲労徴候」「身体不調」以外の 6 特性で 70%タイル値を上回った（Fig. 1)。

2. 年代別

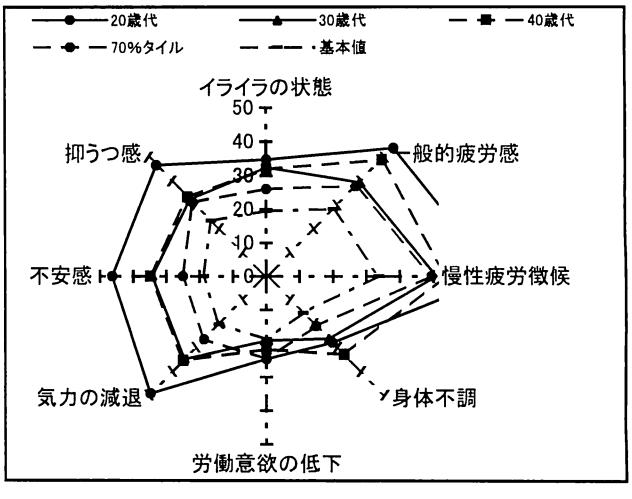


Fig.2　看護師の CFSI 結果（年代別）

20 歳代の職員は、身体的、精神的、社会的側面の全ての側面で 70%タイル値を超えていた。30 歳代以降は社会的側面の「労働意欲の低下」以外の 7 特性で 70%タイル値を越えていた（Fig.2)。

【考察】 看護職の新規採用者の離職率は、15.9%である（2001、日本看護協会)。そして、この率は年々増加の傾向にある。その離職理由は明らかではないが、病院や病棟という環境や若い年代特有の特徴が関係しているものと思える。今回の 4 部署別の調査結果をみると、越河が示した一般女性の CFSI の基本値、70%タイル値と比べ、看護師が精神的、身体的、社会的疲労感が強い職場環境にあることが伺えた。さらに年代別の比較では、20 歳代の若者の疲労が他の年代に比べ際立っていた。これは、グループホームの結果（多久島、2006）と同様であり、20 歳代の職員が心身の負荷が高いこと、職場や現在の仕事について満足できていない状況にあることが伺えた。つまり対人援助職である看護や介護分野における若い年代が、蓄積的疲労が強い状態にあることは明らかであり、今後、職場環境や若い年代の持つ特徴との関係についての検討が必要である。（この研究は、平成 17－18 年度熊本保健科学大学特別研究費の助成を受けたものである。)

【引用文献】多久島寛孝、山本勝則、床島正志（2006)「高齢者ケアにおける職員の疲労-グループホームにおける調査－」日本応用心理学会第 73 回大会発表論文集，60.

（たくしま　ひろたか・やまもと　かつのり）

国家試験学習における友達仲間の意義

—コミュニティ感覚の探索—

村山　正治[1)]　○石井　紀子[2)]

([1)] 九州産業大学院付属臨床心理センター　[2)]東京都立北多摩看護専門学校)

キーワード：国家試験、友達仲間、コミュニティ感覚

【研究の目的】看護専門学校における友人は、実習などストレスの高い学習環境に適応し、自己実現していく為に、重要な存在である。昨今、孤立し、学業低迷や不適応等の問題を生じる学生がいる。それに反し、友達仲間と共に在る者は、国家試験迄、活気があり、学習を継続している。

友達仲間の在り様には、コミュニティ感覚が存在し、人間が変化・成長し、学習する機能をもっていると考える。共に学ぶ、場の重要性を証明し、教育環境醸成に活かしたい。

【方法】半構造化面接法実施

1．質問項目の作成：John. C. Bucknerのコミュニティ感覚尺度（1988）を用い、看護学生用の質問項目を作成。対象者：国家試験学習をグループで行っている看護専門学校3年生から無作為抽出。倫理的配慮の基に承諾を得られた学生を対象とした。

2．データ収集：半構造化面接によるインタビュー。ノート・テープレコーダー使用。国家試験後 4 名。卒業式後 6 名。学内の個室で、面接実施。

3．データの分析：カテゴリー化：(1)コード一覧表(2)サブカテゴリの形成と命名（2回分析）(3)カテゴリーの形成と命名(4)コミュニティ感覚4要素に当てはめ、考察。

4．倫理的配慮：書面と口頭で説明し、研究の主旨に賛同いただける学生の協力を得た。

調査期間：2007年2月26日・3月5日・3月7日（3日間）

【結果】1．対象者の概要：女性9名　男性1名　。女性20代前半8名、後半1名。男性20代前半。学習仲間の人数2～4名（5～12名)。(　) 内は、流動的に集まる人数。

2．内容分析の結果

5つのコアカテゴリーと関連する28のカテゴリーを抽出

○精神的支え：楽しみとストレス発散、信頼感、相互協力、仲間意識、親近感、安心感、つながり感、3年間の学習・実習体験の共有

○仲間の傾聴と癒し：学んだ看護の基本姿勢の影響（傾聴・共感)、自尊感情の満足、自己肯定感、配慮と洞察、感情の交流、互恵性

○共通の目的：過密なカリキュラム・実習への対処、価値観の共有

○学習効果:多角的でリアルタイムな情報収集、刺激し合う、ネットコミュニティ機能、学習方法の開発、新たな視点の提供、相互協力と積極的な介入

○自己及び仲間の成長：看護学校のカリキュラムを乗り越えた、欠点・短所の克服、精神的な強さの獲得、新たな発見、共に成長する、仲間間の摩擦の調整

【考察】コミュニティ感覚とは、「他者との類似性の知覚、他者との承認的相互依存、人が他者に期待するものを他者に与えたり他者に対して行ったりすることによって、この相互依存を進んで維持しようとする気持ち、自分はある大きな依存可能なそして安定した構造の一部分であるとの感情」である。(Sarason1974)

1．メンバーシップ：『自分のコミュニティへの所属の感情の経験』精神的支え・仲間意識・信頼感に関しては、全員から回答を得た。複数学生から、「実習について、共に支え合い、乗り越えてきた。」という意見があった。帰属意識は、コミュニティの必須条件である。(安梅)

しかし、4名は、「相手の事を全部分かる自信はない。だから共感と配慮が必要。」と述べており、これも、真意を得ている。3年間という時間経過と実習体験を通し、学生は仲間と共に、帰属意識や人間性を成長させたと考える。

2．影響力：『自分のコミュニティのなかに差異をつくれると感じる事』「信頼感があるから、本音で言い合える。視野を広げてくれるようなアドバイスをくれる。」等の回答があった。

コミュニティの能力を引き出すには、メンバーの「主体的な関わり」と「連帯感（組織性）」が必要であり、これらは、互いに影響し合いながら拡大する。友人仲間は、信頼を基に、環境の挑戦を受け、自らを変化発展させていったと考える。

3．統合：『コミュニティのなかで、自分たちのニーズに役立つ資源に出会えると信じる事』「各々が、主体的に参加し、相互に助け合う。傾聴・共感を皆してくれる。」等の回答を得た。

社会システムの中の力と自治の許可、個人の側の支配的行動との間には対応が存在すると言われる。仲間単位による学習の場を、学校の協力により得、場を創れた意義は大きい。

看護学校というメゾシステムの影響。つまり、学習された傾聴・共感姿勢、問題解決思考が友達仲間に影響し、エンパワメントした可能性も考えられる。

4．情緒的結合：『メンバーが歴史や時間、場所、経験を共有する』傾聴と癒しについては、全員が回答された。

「本当に困った時は助けてくれる。」など、根底に基本的信頼が築かれていることもわかった。現実体験に基づく、感情交流は、友達仲間の中に共感に基づくプラスのイメージを浸透させ、国家試験のストレスから、学生を支えたと考える。

【研究の限界】面接者が学年担当であり、バイアスの可能性は否定できない。

【引用文献】

1）K. G. Duffy&F. Y. Wong植村勝彦監訳
2001　コミュニティ心理学　ナカニシヤ出版

2）村山正治
2005　コミュニティ心理学特論　放送大学院教材

看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究

－最高と思う授業に含まれるガニエの９教授事象と ARCS 動機づけ理論－

○森田　敏子　　松永　保子
熊本大学医学部保健学科　　信州大学医学部保健学科

Key Words：インストラクショナルデザイン，ガニエの９教授事象，ARCS 動機づけ理論，看護教育

【研究目的】

看護学教育においては，学生の看護実践能力を高めることが課題であり，看護教員の教育力の向上が求められている。教育力を高める一方法としてインストラクショナルデザイン（Instructional Design ）（以下，ID）がある。ID は，授業の効果と効率と魅力を高めるためのシステム的なアプローチに関する方法論である[1)]。ID は，授業案の作成のみならず，授業の構成をデザインすることであり，その構成要素には，授業の入口（学習者の前提条件）と出口（学習者の到達目標）の明確化などが含まれている[1)]。

看護教員の ID を高める研究の取り組みの第一段階として，ワークショップを開催し，質のよい授業をするための重要な視点に着目して報告した[2)]。今回は，最高と思われる授業について，ID の視点から検討した。

【研究目的】

看護教員あるいは現任教育の研修を企画する立場にある看護師が過去に受けた授業や研修の中から，最高と思う授業に ID の視点が含まれているかどうかを明らかにした。

【研究方法】

対象：ID に関するワークショップに参加した看護教員と現任教育の研修を企画する看護師。

調査期間：平成 19 年 2 月 1 日～3 月 10 日。

方法：ID に関するワークショップ（講師およびインストラクターは ID の専門家）を開催し，自記式調査用紙を用いてワークショップ前に参加者に郵送し回答を求め，ワークショップ当日に投書箱に入れる方法で回収した。調査項目は，「これまで受講した授業・研修で最高と思う授業や研修とその理由」である。ワークショップは，講義と演習で構成され，講義内容は，ID の基礎知識（ADDIE モデル，ガニエの９教授事象，ARCS 動機づけ理論）である。

分析：記述内容を最小の意味のある用語で整理し，ガニエの９教授事象と ARCS 動機づけ理論，講師の人間性等でカテゴリー化した。カテゴリー化は，研究者間で討議を重ね，一定期間をおいて一致を確認し，信頼性を確保した。

【倫理的配慮】

研究対象者に研究目的を説明し，研究は自由意思で参加できること，参加しなくてもワークショップにおいて不利益を被ることはないこと，いつでも辞退できること，得られたデータは研究目的にのみに使用すること，プライバシーおよび個人情報は保護され，匿名性を保障し，個人または教育機関あるいは施設が特定されないように配慮することを説明し，同意を得た。

【結果】

回収率は 84.6%（22 人）で，職種としては看護教員 72.7%（16 人中，専門学校教員 13 人，大学教員 1 人，高校教諭 2 人），看護師 27.3%（6 人）であった。

最小の意味のある用語は，63 件が得られた（表）。

表　ガニエの９教授事象と ARCS 動機づけ理論分析

ガニエの９教授事象 １７件	学習者の注意を喚起する	0
	授業の目標を知らせる	3
	前提条件を思い出させる	0
	新しい事項を提示する	0
	学習の指針を与える	2
	練習の機会をつくる	4
	フィードバックを与える	4
	学習の成果を評価する	2
	保持と転移を高める	2
ARCS 動機づけ理論 １７件	注意：面白そうだ	4
	関連性：やりがいがありそうだ	3
	自信：やればできそうだ	2
	満足感：やっていてよかった	8
講師 １２件	人間性	8
	話術	4
内容・方法 １６件	内容：わかりやすさ	9
	構成・教育方法など	１０
その他１件	最良・最悪の評価は難しい	1

【考察】

今回の調査結果は，ガニエの９教授事象のうちの６項目と ARCS 動機づけ理論に整理された。このことから ID についての基礎知識はなくても，その構成要素が含まれると最高の授業と認識していることが推察された。最高の授業をするには教師の豊かな人間性と話術力が求められ，内容の分かりやすさと教育方法の工夫が期待され，システム的な思考に基づいてデザインする力の具備が必要であると考えられる。今後，最高の授業ができるように，看護教員の ID 力を高める必要性が示唆された。

文献　1）鈴木克明：e ラーニング・ファンダメンタルテキスト（PDF ファイル），メディア教育開発センター，2003.　2）森田敏子，松永保子他：良い授業・研修をするために重要と認識していること，第 38 回日本看護学会―看護教育，2006.

（本研究は，平成 18 年度文部科学省科学研究費（基盤研究（C）の助成による。）

（もりたとしこ，まつながやすこ）

看護教員のインストラクショナルデザインの開発に関する研究

－インストラクショナルデザイン・ワークショップ参加者のIDへの理解－

○松永　保子　　森田　敏子
信州大学医学部保健学科　　熊本大学医学部保健学科

Key Words：インストラクショナルデザイン，看護教育，ワークショップ

【研究目的】

近年，教育のシステム的なアプローチに関する方法論としてインストラクショナルデザイン（Instructional Design，以下，ID）が注目されている[1)]。IDは，授業の効果と効率，魅力を高めるための方法論である。ID は，授業案の作成のみならず，授業の構成をデザインする力であり，その構成要素には，授業の入口（学習者の前提条件）と出口（学習者の到達目標）の明確化などが含まれている[1)]。したがって，看護教員の教育力を高めるためにIDを活用することは有意義なことと考え，看護教員のIDを高める研究に取り組んだ。今回は，ワークショップ（以下，WS）を開催し，WSに参加した人の反応からIDの理解度について検討した。

【研究目的】

看護教員あるいは現任教育の研修を企画する立場にある看護師が，過去に受けた授業や研修の中から最高と思う授業を例にして，WS後のIDの理解度を明らかにした。

【研究方法】

対象：ID に関するWSに参加した看護教員と現任教育の研修を企画する看護師。

WS実施・調査時期：平成19年3月10日。

方法：ID の専門家の助言により研究者が作成した自記式調査用紙をWS後に参加者に配布し，投書箱に入れる方法で回収した。調査項目は，（1）ID について，「授業や研修が面白くなる，授業や研修が魅力的になる，目標分析が必要である」など17項目と，（2）「IDについて感じたこと」である。

分析：（1）については「そう思う」「違うと思う」「どちらとも言えない」「分からない」の4件法で集計し，（2）の記述内容は最小の意味のある用語でカテゴリー化した。カテゴリー化は，研究者間で討議を重ね，一定期間をおいて一致を確認し，信頼性を確保した。

WS：講師およびインストラクターはIDの専門家が担い，講義と演習で構成された。講義内容は，IDの基礎知識（ADDIEモデル，ガニエの9教授事象，ARCS動機づけ理論）である。

【倫理的配慮】

研究対象者に研究目的，研究は自由意思で参加できること，参加しなくてもWSにおいて不利益を被ることはないこと，いつでも辞退できること，得られたデータは研究目的にのみに使用すること，プライバシーおよび個人情報は保護され，匿名性を保障し，個人または教育機関あるいは施設が特定されないよう配慮することを説明し，同意を得た。

【結果】

回収率は76.7%（23人）であり，職種としては看護教員69.6%（16人中，専門学校教員13人，大学教員1人，高校教諭2人），看護師30.4%（7人）であった。

（1）IDについての集計結果は，表の通りである。

（2）についての記述内容は，「内容の理解・興味」「目標の明確化」「今後の活用」「重要・価値」「未消化」の5つにカテゴリー化できた。

表　集計結果　　（N＝23，単位＝人）

項　　目	①	②	③	④
授業や研修が面白くなる	22	0	1	0
授業や研修の目標分析が必要	21	1	0	1
教育の質が高まる	21	0	1	0
授業や研修が魅力的になる	21	0	1	1
双方向授業が可能となる	20	0	2	1
ID と略される	20	1	1	1
学習者の復習が可能になる	19	0	2	2
教育が個性的になる	18	0	3	0
学習者参加型の授業になる	17	5	0	1
教育が均一になる	15	2	5	1
教材の見た目が美しくなる	14	1	4	4
e ラーニングで使うものだ	8	2	4	9
学習者もパソコン環境整備が必要	6	6	7	4
使うのは難しい	5	11	7	0
使うのにパソコンが必要だ	4	12	5	1
CAI と同じである	2	7	2	11
使うのは面倒だ	0	11	11	1

①そう思う，②違うと思う，③どちらとも言えない，④わからない

【考察】

IDについては，「授業が面白くなる」と回答した者が最も多く，以下が「目標分析が必要」「教育の質が高まる」「授業が魅力的になる」「双方向授業が可能となる」の順であったことから，WSによりIDへの理解が深まったと推察される。一方で，2～3割ではあるが，「e ラーニングで使うものだ」「パソコン環境整備が必要」「使うのは難しい」との回答もあり，このことは，ID の十分な理解には至っていないことを示すものと思われる。

授業を魅力的で効果的なものとするために，今後も看護教員のID力を高めていく必要性が示唆されたと考える。

文献　1）鈴木克明：e ラーニング・ファンダメンタルテキスト（PDFファイル），メディア教育開発センター，2003.

（本研究は，平成18年度文部科学省科学研究費（基盤研究（C）の助成による。）

（もりたとしこ，まつながやすこ）

研究発表(ポスター発表)

看護師が自己認識の力を獲得する要因

～卒後３年目の看護師の意識～

石井　裕美
（埼玉医科大学短期大学）

キーワード：自己認識　卒後３年目看護師　自己評価

動機・目的　臨床現場の多重課題に対応していくためには、基礎的な知識・技術に裏づけされた看護実践を重ねて専門性を高めていく必要があり、そのためにも卒後３年間は重要な時期である。看護における学習は単に知識を得るだけではなく、日常の看護行動の変容につながることが必要で、そのためには体験を意味づけ自覚する自己認識の力が重要となる。そこで卒後３年目の看護師が日常の看護の場で、どのように自己の看護を振り返り意味づけるのか、その要因を明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

Ⅱ．研究方法　**1.**対象：A病院（リハビリ専門病院）に勤務する看護師のうち、研究の主旨に賛同し倫理的配慮を行い口頭と紙面で同意の得られた、卒後３年目看護師５名・４年目看護師１名　**2.**調査期間：平成18年10月から12月　**3.**調査方法：事前にインタビューガイド（「３年間の成長をどのようなときに感じるか」「自分自身を見つめるきっかけとなった他者評価」「現時点での自己目標や理想、そのために頑張っていること」の３つの質問）を配布し、対象者１人に対し1～2回の半構成面接を行い、テープへの録音は了解を得て行った **4.**分析方法：対象者の語り内容をそのまま逐語録におこした。意味内容を損なわないようにカードに記述し、個々の対象者の経験の意味を把握した。（現象学的アプローチの中でもGiorgiの４段階の分類を参考に行った）

Ⅲ．結果

対象者の教育背景や経験領域、卒後から現在までの体験は異なり固有のものであるが、同時に共通する意味も確認された。この対象者の語る体験から【今の自分が作られたベース：Ⅰ】、【今の自分を見つめるもの、支えるもの：Ⅱ】、【他者への感情：ⅱ】、【今の自分として語られるもの：Ⅲ】【目指す自分の姿：Ⅳ】の５つのカテゴリーと、そのカテゴリーの内容を表す20のサブカテゴリーが抽出された。自己認識の力を獲得していく影響要因として過去の対人関係・現在の対人関係、その対人関係の中で抱く感情があり、「他者」とは先輩・上司・スタッフ・患者であった。（カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを《　》として表す。）

Ⅳ．考察

対象者は【Ⅰ】【Ⅱ】の対人関係や、その場で他者へ起こる感情【ⅱ】を通じて自己を自覚していくプロセスがあった。そしてこの他者との関わりの中で、理想の自己・現実の自己を描き、【Ⅲ】【Ⅳ】を見出していた。その関係性について以下に考察する（図１）。

【今の自分が作られたベース：Ⅰ】は過去の対人関係の場で「自己」に影響を与えたものである。学生から専門職業人への移行の時期である新人時代は、自信喪失や混乱など危機的状況を体験する。そこでの《先輩・上司からのフォロー》は精神的支援であると同時に、仕事のやり方・価値観の形成など看護師として働く上での土台となっていた。このことから先輩・上司の支援のあり方が体験の意味づけに大きな影響を及ぼしていることが伺える。共通して見られたのは《新人時代の印象的なケース》であり、患者との関わりの中で感じた喜びや手ごたえ、逆に知識や技術不足で十分関われなかった後悔・不全感などであり、成功体験であっても不足を感じる事例であっても、今の自分の《価値観》や【目指す自分の姿】につながっていた。

【今の自分を見つめるもの、支えるもの：Ⅱ】は現在の対人関係の場で「自己」に影響を与えたものである。自己を知る手がかりは他者からの直接的な言葉だけではなく、相手との関係性の中での振り返りや自分を介さない他者の行動の客観視からも行われていた。このような他者との行動の比較は自己点検につながり、自己の価値観の自覚・行動特性の再認識、出来ている部分の承認や成長を感じることにつながっていた。《モデルの存在》《担う役割》《共感できる環境》の中で「こうありたい」という理想自己が作られるが、同時にそこに達していない現実自己も語られ、そのギャップは自分を見つめることにつながっていた。また研修や面接などで自分を振り返るという《自己を語る機会》は、自分自身から一度離れ外側から自己を見つめる機会となり、自己像の自覚となっていた。

対人関係の中で抱く**【他者への感情：ⅱ】**は、他者評価の認知・受け止めに影響を与えるものである。相手の価値観や仕事への姿勢に共感や尊敬がある場合、相手の言葉・行為が自己へ及ぼす影響力は大きい。逆に《マイナス感情》は自己と相反する価値観に対する怒りや批判といった形で現れ、自己の価値観の反映といえる。また他者評価と自己イメージとのズレで生じる《ギャップ・納得いかないこと》は、「私とは違う」という不一致や違和感として自覚され、これは再度自分を見つめなおすきっかけでもあった。

【今の自分として語られるもの：Ⅲ】【目指す自分の姿：Ⅳ】は対人関係を通じて感じる現実と理想の自己である。この中には看護をする上で大切にしていること」という看護の言語化や、「力の抜けた自分」「表面しか見えていなかった自分」「巻き込まれてしまう自分」など、患者との関わりの場で感じる《自己評価・自己イメージ》が表現されていた。さらにこれは現状維持や課題として【目指す自分の姿】となっていた。また、チーム医療の中での看護の専門性の模索から「看護の役割」「看護とは何か」が語られていた。このように日常の看護が看護になりえていたか自分で振り返り確かめる能力を培い、「看護とは何か」を言語化し、またそれを問い続けることが看護師の成長につながると考える。

対象者は印象的なケースという経験を通して看護の意味・やりがいを感じ、そこに自分がどのように関わっていたか意識化することで、「看護観」として看護を概念化していた。つまり経験に裏づけされた看護観があり、経験を通して看護観を形成・深化させていた。看護の場で積み重ねる経験から学んでいくことが臨床現場での学習として重要であると考える。

（いしい　ひろみ）

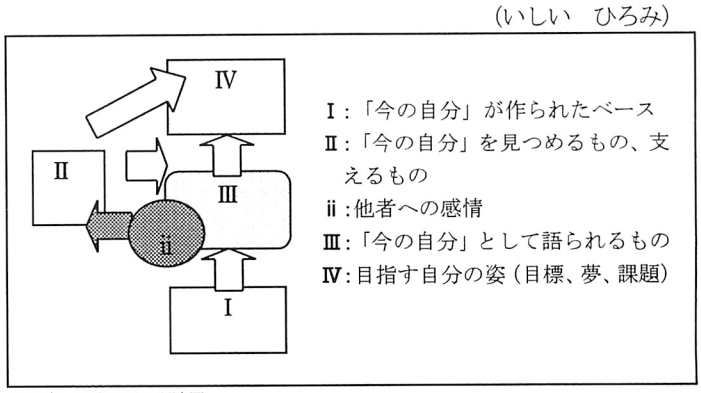


図１自己認識の要因関連図

看護学生の看護技術修得度に影響を及ぼす要因

○宮﨑素子[1)] 玉木ミヨ子[1)] 蒲生澄美子[1)] 関口恵子[1)] 今野葉月[1)] 佐藤敬子[2)] 三宅郁子[2)] 村田和美[2)] 本多和子[3)] 西土泉[1)] 石井裕美[1)]
([1)]埼玉医科大学短期大学　[2)]毛呂病院看護専門学校　[3)]帝京大学)

キーワード:看護技術・看護学生・学習スキル・日常生活行動

【はじめに】 看護学生の看護技術修得には自己教育力や日常生活行動などの学生個々の様々な要因が影響をしていると考えられ、この要因のうち学習スキルについては、すでに「自分でおこなう力（第１因子）」、「やりとおす力（第２因子）」、「効果的に練習する力（第３因子）」、「前向きな姿勢（第４因子）」、「要点をとらえる力（第５因子）」の５つの因子があることを報告した。[1)] 今回は、この因子間の関係と、各因子と看護技術修得度との関係を追究し、さらに日常生活行動と看護技術修得度との関係についても調査を行った。

【研究方法】 １．調査対象：研究の主旨に賛同し倫理的配慮を行い同意が得られた看護学生（①学習スキルの質問紙調査：648名）（②技術修得度と学習スキル・日常生活行動の調査：31名）。 ２．調査期間：平成18年５月～12月

３．調査方法：１）看護技術修得のための学習スキルに関する調査用紙（5段階で回答できる73項目）を作成し、648名を対象に調査を行った。 ２）４つの看護技術（体位変換・足浴・皮下注射・一時的導尿）の評価表（評価項目は各技術10項目）を作成し、評価基準の統一を図った。そして、看護技術修得度の調査（４つの看護技術を実施してもらい点数化する）を、事前調査後に31名を対象に実施した。さらに同じ対象に、学習スキルに関する質問紙調査（73項目の調査項目のうち、因子分析の結果５つの因子に含まれない項目を除いた44項目からなる調査用紙）と、日常生活行動に関する質問紙調査（独自に作成した生活行動の実施頻度と生活行動への意識についての68項目からなる調査用紙）を行った。

４．分析方法：１）主因子法による因子分析後、共分散構造分析を行った。分析にはAmos7.0J for Windowsを用いた。２）看護技術修得度（４つの看護技術の合計得点）と学習スキルの各因子得点および日常生活行動の実施頻度・意識（安全・安楽・自立・効率性に対するもの）との相関関係係数を算出した。分析には、SPSS12.0J for Windowsを用いて解析を行った。

【結果・考察】 １．調査方法１）の調査用紙の回収率は76.1%、有効回答率は62.0%だった。

２．看護技術修得のための学習スキルの因子間の関係

看護学生の看護技術修得のための学習スキルとして抽出できた５因子間の関係について、共分散構造分析を行い複数の因子構造モデルを作成し検討を重ねた。その結果、最終的には「自分でおこなう力（第１因子）」、「効果的に練習する力（第３因子）」、「前向きな姿勢（第４因子）」の３つの因子で構成され、第３因子から第１因子、第１因子から第４因子へパスをひいたモデル（図１）において、GFIが0.925, ROMが0.056, RMSEAが0.062であり，AICが最も低く，適合度が最もよいと判断できた。

学習スキルの因子間の関係は、「効果的に練習する力（第３因子）」の項目には「実際に物品を使って練習できない時でも、イメージトレーニングをしていますか。」などがあり、この力を持っていると、自己学習を行動に移しやすくなるために，「自分でおこなう力（第１因子）」に向けてパスが得られたと考える。さらに、「自分でおこなう力（第１因子）」の項目には「講義や学内実習時に、わからない用語があったら、その後すぐに調べますか。」などあり、自分で実施することに対して達成動機が高まりやすく、「前向きな姿勢（第４因子）」に向けて、パスが得られたと考える。

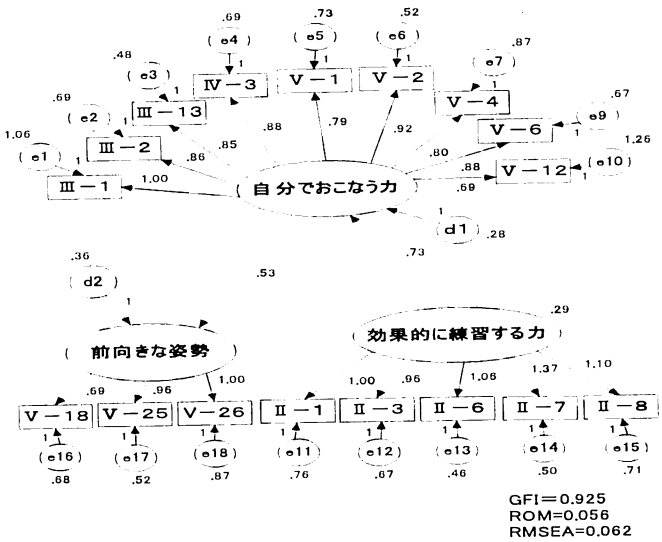


図１　学習スキルの因子のうち3つの因子のモデル

３．看護技術修得度・学習スキル・日常生活行動の関係

１）看護技術修得度と学習スキルとの関係

看護技術修得度と学習スキルの各因子得点の関係について分析した結果、相関関係は認められなかった。これは、今回の調査では看護技術修得度を動作のみで評価しており、知識や態度の評価は含まれていなく、学習スキルとの関係を見出せるような評価基準ではなかったためと考える。

２）看護技術修得度と日常生活行動との関係

看護技術修得度と日常生活行動の実施頻度および意識との関係について分析した結果、看護技術修得度と日常生活行動の実施頻度では相関関係係数0.457(P<0.01)であった。また、日常生活行動における効率性に対する意識とでは相関関係係数0.363 (P<0.05)で、安楽に対する意識とでは相関関係係数0.375(P<0.05)であり、いずれも、正の相関関係が認められた。これは、自分の日常生活の中で効率性や安楽について意識している学生は、看護実践においても自分の動作の効率性や対象の安楽を意識して行動することができ、看護技術修得度が高くなったのではないかと考える。さらに、看護技術は反復練習することによって身に付くため、日常生活行動の実施頻度が多い学生は、看護技術修得度も高かったのではないかと考える。

３）学習スキルと日常生活行動との関係

看護技術修得のための学習スキルと、日常生活行動の実施頻度および意識との関係について分析した結果、相関関係は認められなかった。これは、調査方法等の問題も考えられるため、今後さらに検討する必要がある。

【終わりに】

本研究で、看護学生の看護技術修得のための学習スキルの因子間の関係と、看護技術修得度と日常生活行動の実施頻度および効率性・安楽に対する意識との関係が認められた。しかし、その他においては関係性が認められなかった。今後、調査方法等を検討し、さらに追究していきたい。

（みやざきもとこ、たまきみよこ、がもうすみこ、せきぐちけいこ、こんのはづき、さとうけいこ、みやけいくこ、むらたかずみ、ほんだかずこ、にしどいずみ、いしいひろみ）

看護学生の老年者対象職場選択への関連要因

前田　恵利
（鳥取大学医学部保健学科）

キーワード：看護学生　老年職場　臨地実習体験　FSA

【研究の目的】看護学生の看護職志向性への関連要因として、臨地実習で基本的作業、指導者の指導性、成長した実感、患者に対する感情が肯定的に上昇した学生の志向性が高まり、自己効力感の高い学生が自己能力に自信を持ち、看護職への情緒的コミットメントが高いことがいわれている。また看護学生の8割が主体的な判断に基づいて看護職を選択し、大学入学後に保健師・助産師等の専門分野を選択する学生も多いともいわれ、看護学生は高校卒業前に大まかな進路を選択し、大学入学後に専門分野を決めることが推測される。

では看護学生が将来老年者職場を選択しようと考えるには、どんな要因が関連するだろうか。幼少期からの老年者との関わりの体験、老年者を対象とした臨地実習での体験、老年者に対する知識と理解、自己効力感、エイジズムなどの要因が推測される。

本研究では上記を独立変数とし、看護学生が「将来老年者を対象とした職場で働きたい」という意思に関連する要因を探ることを目的とする。

【方法】自記式質問紙による横断調査。対象は東京都内の看護学校4校に在学する3年生305名中調査の協力の得られた240名（回収率78.6%）である。調査期間は2004年11月30日～12月16日で3年間の授業および臨地実習がすべて終了した時点。調査に当たっては対象校の倫理規定に従い、学生には文書及び口頭で説明し協力を得た。質問紙は、老年者を対象とした臨地実習での体験項目、及び「日本語版Fraboni エイジズム尺度（FSA）短縮版」（原田2004）「加齢の事実についてのクイズ(FAQ)」（Palmore　: The Facts on Aging Quiz, 1998)、「特性的自己効力感尺度(SE尺度)」(成田他1995)で構成した。FAQは25項目中22項目採用し正解した項目の合計を得点とし、臨地実習での体験項目およびFSA、SE尺度は5件法で測定し、いずれも得点が多いほど肯定的方向になるように変換した。

【結果】回答者の属性は、女性224名、男性16名、年齢は20歳から43歳まで平均23.5歳であった。

FSA短縮版の回答結果は70点満点で平均値58.21（SD=6.72）α=.836、FAQは22点満点で平均11.04（SD=2.39)、GSESは115点満点で平均77.54(SD=11.48) α=.835であった。

まず、各項目の相関を見た。「将来老年者を看護する職場で働きたい」という項目に有意な相関を示したのは、「同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた」がr=.167(p=.010)、「老年者受持ち時の臨地実習は成功した」がr=.132(p=.041)、「老年者とのうれしい体験があった」がr=.249(p=.000)、「老年者に自分を受け入れてもらえた」がr=.127(p=.049)、「老年者は生活暦を語ってくれた」がr=.143(p=.027)、「老年者は思いを語ってくれた」がr=.135(p=.036)、「老年者への理解が深まった」がr=.315(p=.000)、「看護を進路として選んで良かった」がr=.310(p=.000)、「老年者に頼りにされる自分でありたい」がr=.457(p=.000)、「社会は自分を必要としている」がr=.191(p=.003)、「FSA短縮版」がr=.267(p=.000)の11項目であった。

「将来老年者を看護する職場で働きたい」の項目に有意な相関が見られなかったのは、「老年者に合った援助の実施ができた」がr=.090(p=.135)、「FQA」がr=.024(p=.715)、「SE尺度」がr=.056(p=.390)の3項目であった。

学生の職場選択にどの要因が影響しているのかを推測するために、「将来老年者を看護する職場で働きたい」の項目を従属変数にし、相関値が.20以上で因果関係を推測できる2項目を独立変数として重回帰分析・強制投入法を行った。「臨地実習で老年者とのうれしい体験があった」は、β=.089(p=.186)、「臨地実習で老年者への理解が深まった」は、β=.226(p=.001)、「看護を進路として選んで良かった」は、β=.197(p=.002)、「FSA短縮版」は、β=.069(p=.331)で、調整済み R^2=.159、F=12.273(p=.000)であった。即ち、「臨地実習で老年者の理解が深まった」こと、学生が「看護を進路に選んで良かった」、と思っていることが「将来老年者を対象とした職場で働きたい」という意志に影響していることが示唆された。

【考察】学生が老年者を看護する職場で働きたいとする意志に影響する要因を探ったが、相関が有意であった項目を見ると、「幼児からの老年者との交流」「臨地実習での情緒的交流や理解の深化」「進路への確信」「老年者に頼りにされる自分でありたい」が関連を示し、「理解の深まり」「進路選択の確信」の2要因が影響要因として推測できる。看護師志望意志に与える要因として「存在価値の実感」「感謝」が言われているが、「老年者に頼りにされる自分」が、老年看護者としての「存在価値の実感」に通じるといえる。老年者を対象とした職場選択とエイジズムの関連が予測されたが、「FSA」では、否定的エイジズム傾向を持つものは老年者職場を選択しないという相関が見られたものの、因果関係は検証されなかった。「FAQ」は老年者に対する知識を測定するクイズで、相関がみられなかったのは、看護学生3年生は授業等で知識を習得しているという対象の特性と考えられる。

表1.「老年者職場選択」と要因との重回帰分析

独立変数	r		標準化係数 β	p	
老年者との嬉しい体験	0.249	**	0.089	0.186	
理解が深まった	0.315	**	0.226	0.001	**
看護を選んで良かった	0.310	**	0.197	0.002	**
FSA	0.267	**	0.069	0.331	

強制投入法　調整済み R2=.251, F=16.915(p=.000)

（まえだ　えり）

看護学生のストレス因子構造（その５）

－全日制と定時制の比較－

○　小竹　久実子　今留　忍　内海滉
（埼玉県立大学保健医療福祉学部）（杏林大学保健学部）（千葉大学）

キーワード：看護学生，ストレス，全日制，定時制

はじめに

我々は学習を主としている看護学生（全日制）と仕事と学習を両立している看護学生（定時制）では、ストレス内容が異なり、全日制では「自己と学校を中心としたストレス」、定時制では「社会的関係と学業との葛藤によるストレス」であることを見出した（2004,2005,2006）。本研究では、今回の対象となる学生全体のストレス因子構造と全日制と定時制の違いを明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 対象：A看護専門学校看護学生 240 名のうち同意が得られた 185 名（全日制 89 名、定時制 96 名）
2. 期間：H16 年７月
3. 調査方法・内容：郵送調査法で自由記述方式にて、「最近ストレスと感じた状況の中で、それが強かった事柄」を上位３位まで記載してもらった。
4. 分析方法：ＫＪ法にて 31 項目に分類した項目を、１位３点、２位２点、３位１点と点数化し、因子分析（主成分分析プロマックス回転）を行った。因子負荷量.40 以下を１因子ずつ除外し、因子分析を繰り返した。

結　果

1.　基本的属性

年齢は平均 25.3±6.49 歳（全日制 23.0±5.8 歳，定時制 27.8±6.3 歳）で、全日制と定時制の間に有意差がみられた（p <.0001）。性別は女性 143 名（全日制 69 名，定時制 74 名）、男性 37 名（全日制 20 名，定時制 17 名）で性差はみられなかった。

2.　全体のストレス因子構造

全体では６項目（満員電車、親子関係、新しい環境、プレッシャー、講義・内容・勉強、時間・遅刻）が除外され８因子が抽出された。累積寄与率は 61.1%であった。因子構造は第１因子「実習」、第２因子「実習上の人間関係」、第３因子「職場の人間関係」、第４因子「経済的ゆとりのなさ」、第５因子「学習課題と試験と友人関係」、第６因子「学校の体制と教員」、第７因子「健康状態」、第８因子「周囲の環境と将来の進路」であった。

3.　全日制のストレス因子構造

全日制では７項目（講義・内容・勉強、回顧・自責、友人関係、ゆとりと自由の欠如、親子関係、新しい環境、学業・仕事・家事の両立）が除外され、８因子が抽出された。累積寄与率は 65.0%であった（表１）。

因子構造は第１因子「実習」、第２因子「実習上の人間関係」、第３因子「職場の人間関係」、第４因子「学習課題と試験と同級生の態度」、第５因子「健康状態」、第６因子「周辺の人の態度や教職員」、第７因子「学校の体制と将来の進路」、第８因子「通学の大変さと経済面」であった。

２．定時制のストレス因子構造

定時制では６項目（過食、新しい環境、疲労・体調不良・睡眠不足、親子関係、満員電車、周辺の人の態度）除外され、８因子が抽出された。累積寄与率は 67.5%であった（表２）。因子構造は第１因子「実習」、第２因子「学校の体制と学習課題及び教職員との関係」、第３因子「実習上の人間関係」、第４因子「経済的ゆとりのなさ」、第５因子「職場の人間関係」、第６因子「学業と仕事の両立と将来の進路」、第７因子「回顧と自責」、第８因子「試験とプレッシャー」であった。

考察

全日制と定時制ともに第１のストレス因子は実習であった。全日制は第３因子まで人間関係のストレス因子が挙げられていた。学習課題に関するストレスは第４因子にみられ、健康状態のコントロール不足に対するストレスが第５因子に挙げられた。定時制は第２因子に学校の体制と学習課題及び教職員との関係が挙げられ、第４因子に経済的ゆとりのなさに関するストレスが挙げられていた。健康状態に対するストレスは見られなかった。

表1. 全日制ストレス因子構造

	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	共通性
f1.実習									
実習記録・課題・評価	.880	.028	-.086	-.010	-.105	-.046	-.017	-.017	.787
実践・実習場所	.875	.276	-.055	.050	-.043	.010	-.019	.011	.800
ゆとりの欠如	.866	.115	-.065	-.036	-.088	-.037	-.047	-.021	.755
f2.実習上の人間関係									
教職員との関係	-.057	.837	-.012	-.097	-.102	.005	.060	-.186	.760
実習グループ・患者関係	.328	.751	-.018	-.068	-.118	-.022	.060	-.069	.629
教員・指導者・スタッフ	.143	.524	.004	-.082	.039	.478	-.090	-.046	.531
プレッシャー	.120	.521	-.045	.143	-.018	-.054	.013	.082	.322
f3.職場の人間関係									
職場の上司・同僚の態度	-.070	-.005	.961	.016	-.053	-.032	-.031	.006	.930
アルバイト・職場関係	-.095	-.032	.952	-.040	-.064	-.062	-.027	-.037	.928
f4.学習課題と試験と同級生の態度									
試験	-.090	-.085	-.052	.745	.089	-.073	-.076	-.087	.625
学習課題・事前学習	.133	.041	-.041	.739	-.018	.020	.027	-.044	.592
同級生・恋人の態度	-.226	.334	.352	.440	-.115	-.067	-.148	.031	.492
f5.健康状態									
疲労・体調不良・睡眠不足	-.011	-.061	-.063	.054	.907	-.030	-.021	.096	.834
過食	-.177	-.141	-.048	-.005	.889	-.064	-.047	.022	.812
f6.周辺の人の態度や教職員									
迷惑・慣慨	-.068	-.055	-.070	.078	-.075	.819	-.060	-.049	.687
教職員	-.035	.039	.007	-.107	.011	.719	-.015	.017	.553
周辺の人の態度	-.026	-.228	-.062	.348	-.209	.431	-.025	-.102	.391
f7.学校の体制と将来の進路									
将来の見通し・進路	-.023	.138	-.043	-.058	-.018	-.104	.919	-.124	.866
学校の体制	-.045	-.059	-.012	-.036	-.044	-.013	.885	.008	.798
f8.通学の大変さと経済面									
時間・遅刻	.019	-.110	-.053	-.106	.018	-.094	-.058	.762	.628
満員電車	-.061	-.037	-.027	-.106	.089	-.050	-.009	.678	.494
生活費・学費	-.044	.056	-.030	-.402	.094	-.247	.162	-.435	.394
収入・貯金	.008	-.031	-.125	-.370	-.152	-.116	-.119	-.401	.351
寄与率	12.25	9.15	8.44	8.20	7.58	7.17	6.26	5.99	
累積寄与率	12.25	21.40	29.84	38.02	45.61	52.78	59.04	65.03	

因子抽出法: 主成分分析　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

表2. 定時制ストレス因子構造

	f1	f2	f3	f4	f5	f6	f7	f8	共通性
f1.実習									
実践・実習場所	.942	-.059	.132	-.033	-.119	-.026	.099	-.098	.906
実習記録・課題・評価	.878	-.098	.030	.022	-.159	.111	.043	-.072	.796
ゆとりの欠如	.871	-.063	.047	.008	-.146	-.068	.077	-.157	.788
f2.学校の体制と学習課題及び教職員との関係									
学校の体制	-.056	.737	.086	-.169	-.027	.211	-.182	.217	.634
教職員	.023	.660	.234	-.148	-.124	.024	-.177	.096	.543
学習課題・事前学習	-.090	.649	-.086	-.001	.043	-.140	.481	.144	.686
講義・内容・勉強	-.035	.629	-.138	-.147	-.046	.303	.426	.059	.666
時間・遅刻	-.191	.553	.035	.033	-.024	-.355	.035	-.166	.528
教職員との関係	.086	.520	.410	-.054	.122	-.286	.067	-.104	.494
f3.実習上の人間関係									
同級生・恋人の態度	-.077	.082	.811	-.059	.171	-.062	-.152	.068	.717
友人・同級生関係	-.128	.256	.743	.122	.062	-.029	.043	-.013	.679
教員・指導者・スタッフ	.428	.120	.696	-.157	.149	-.023	-.108	-.128	.627
実習グループ・患者関係	.299	-.075	.665	-.121	.230	-.232	.160	-.242	.611
f4.経済的ゆとりのなさ									
生活費・学費	-.155	-.120	-.051	.866	-.164	.006	-.006	-.020	.774
収入・貯金	-.047	-.169	-.022	.824	-.173	-.195	-.040	.041	.727
ゆとり・自由の欠如	.314	-.119	-.013	.621	-.098	.095	-.004	-.241	.549
f5.職場の人間関係									
職場の上司・同僚の態度	-.162	-.048	.172	-.171	.931	-.015	-.067	.034	.885
アルバイト・職場関係	-.171	-.077	.162	-.176	.925	-.078	-.073	-.027	.883
f6.学業と仕事と家事の両立と将来の進路									
学業・仕事・家事の両立	-.082	-.091	-.182	-.104	-.049	.646	-.022	-.069	.485
迷惑・慣慨	-.241	-.193	-.043	-.058	-.224	-.590	.209	-.229	.576
将来の見通し・進路	-.098	-.018	.063	.051	-.206	.542	.350	-.145	.553
f7.回顧と自責									
回顧・自責	.146	-.026	-.004	-.053	-.045	.014	.821	-.029	.723
f8.試験とプレッシャー									
プレッシャー	-.056	-.060	-.057	.129	-.038	-.085	.151	.762	.723
試験	-.118	.280	-.038	-.235	.046	.075	-.202	.749	.642
寄与率	13.58	12.59	10.18	8.60	6.19	5.73	5.45	5.13	
累積寄与率	13.58	26.17	36.36	44.96	51.15	56.88	62.33	67.47	

統合失調症の人についてのビデオ視聴による偏見低減の効果

― AMD 尺度と SDSJ 社会的距離尺度による患者談話条件と医師説明条件との比較 ―

○小平朋江[1)]　伊藤武彦[2)]　松上伸丈[2)]　井上孝代[3)]
([1)] 聖隷クリストファー大学　[2)] 和光大学　[3)] 明治学院大学)

キーワード：統合失調症、スティグマ、ビデオ

【問題と目的】 本研究では、大学生を対象として、日常生活で人々が見る機会の多いテレビの教育番組を編集したビデオを視聴させる実験により、質問紙を用いて統合失調症という病気の人に対する大学生の態度の変化を測定し、教育的効果を明らかにし、具体的な教育方法や教材の開発のための示唆を得ることである。今回は、小平・伊藤・松上（2007）の実験計画に SDSJ 社会的距離尺度を従属変数として加えた。

【方法】 **被験者**：大学生 67 名（男子 31 名、女子 36 名）で、これを、「患者談話」条件 33 名（男子 16 名、女子 17 名）、と「医師説明」条件 34 名（男子 15 名、女子 19 名）の刺激の異なる 2 条件に無作為に配分した。

手続き：本実験のための刺激として NHK の教育番組から次のような 2 つのビデオを編集し作製した。①精神科医が統合失調症について一般的な知識を講義形式で話しているもの。②当事者（統合失調症）が素顔で出演し病む体験を語っているものにビデオ①の一部分を加えたもの。まず、ビデオ視聴前に全員の被験者に 1 回目の質問紙を実施した。それから、被験者を 2 つに配分し、2 条件ともビデオ①②のどちらかを視聴させた後、2 回目の質問紙を実施した。

質問紙：北岡（2001）が作成した「精神障害に対する態度（Attitudes toward Mental Disorder: AMD）測定尺度」および、牧田（2006）が作成した「統合失調症に対する社会的距離尺度（The Japanese language version of Social Distance Scale: SDSJ）」を事前・事後のテストで用いた。この質問紙は、下位尺度として AMD の社会的距離尺度 10 項 目とイメージ尺度 10 項目、SDSJ 社会的距離尺度 5 項目からなるものである。2007 年 6 月の授業内で実施した。

【結果】（1）AMD の社会的距離尺度と SDSJ 社会的距離尺度、イメージ尺度それぞれの事前・事後の結果を信頼係数では、①事前の AMD の社会的距離尺度 10 項目は α =.820 と充分高かった。②事前の SDSJ 社会的距離尺度 5 項目は α =.692 とそれほど高くなかった。③事前の AMD のイメージ尺度 10 項目は α =.863 と充分高かった。④事後の AMD の社会的距離尺度 10 項目は α =.794 と高かった。⑤事後の SDSJ 社会的距離尺度 5 項目は α =.665 とそれほど高くなかった。⑥事後の AMD のイメージ尺度 10 項目は α =.900 で、充分高かった。

（2）次に、性別、統合失調症患者への接触経験によって①から⑥の平均値に差があるかをみる。男子 31 人女子 36 人において、①から⑥に性別に差はなかった。次に当事者との接触経験の有無で見ると、有（13 人）無（54 人）で①から⑥に有意差はなかった。2 条件間の平均値の差では、事前テストの平均値の差をみると、$t(66)<1$　でいずれも①②③に有意差はなかった。したがって、2 条件の被験者は等質であるとみなして良い。

（3）事後－事前の効果を、実験条件のグループは問わず全体的傾向として、平均値の差をでみると、①AMD の社会的距離尺度は、事前=1.50±.53 事後=1.43±.52 r=.767 $t(66)=1.736$ p=.087 で有意差がなかった。②SDSJ 社会的距離尺度は、事前=1.27±.56 事後=1.17±.55 r=.656 $t(66)=2.303$ p=.024 で有意だった。③イメージ尺度では、事前=1.46±.49 事後=1.16±.53 r=.537 $t(66)=4.952$ $p<.001$ と有意な効果があった。

（4）患者談話条件（33 人）と医師説明条件（34 人）の間に差があったかどうかを分散分析でみると、①AMD の社会的距離尺度の全体の事前事後 は $F_{(1,65)}=3.069$ p=.085　で有意差が無かった。事前の結果から事後を減算した結果では、患者談話条件（.12±.35）と医師説明条件（.03±.37）での事前事後テストの交互作用 $F_{(1,65)}=1.027$　p=.315　は有意差が無かった。②SDSJ 社会的距離尺度の全体の事前事後の主効果は $F_{(1,65)}=5.250$ p=.025 と有意だった。患者談話条件（.15±.41）と医師説明条件（.11±.50）との事前事後テストの交互作用は $F_{(1,65)}=.090$ p=.765 と有意差が無かった。③AMD のイメージ尺度の全体の事前事後の主効果は $F_{(1,65)}=30.676$ $p<.001$ と有意だった。患者談話条件（.52±.45）と医師説明条件（.08±.44）における事前事後テストの交互作用は $F_{(1,65)}=15.816$ $p<.001$ となり、患者談話群の効果が医師説明群説明群より有意に大きかった。

【考察】（1）本実験のような 15 分前後のビデオ視聴でも偏見低減に効果があることが示された。（2）社会的距離の短縮よりも当事者の悪いイメージの改善に特に効果があった。それは特に患者談話群すなわち当事者の語りを聴くことの効果であった。（3）患者談話群にのみイメージ尺度での偏見低減効果が認められたことから、ビデオ媒体をとおしてではあれ接触仮説が意味を持つ有効なものであることが示された。（4）今回の実験方法およびその結果から、具体的な教育方法や教材の開発のためには、効果があり（効）、内容が楽しく（楽）、誰でも実施でき（安）、教材の入手が容易（近）で、時間がかからない（短）、という 5 点の要件を満たすような教材開発の必要性を示唆するものである。

【引用文献】●北岡（東口）和代 2001 –精神障害者への態度に及ぼす接触体験の効果– 精リハ誌, 5 (2), 142-147
●小平朋江・伊藤武彦・松上伸丈 2007 ビデオ視聴による統合失調症の人への偏見低減のための教育の効果　第 49 回教心総会発表論文集（印刷中）
●牧田潔 2006 –統合失調症に対する社会的距離尺度（SDSJ）の作成と信頼性の検討– 日社精医誌,14, 231-241

（こだいらともえ/ いとうたけひこ/ まつがみのぶたけ/ いのうえたかよ）

健康食品のイメージに関する研究

－看護学科学生と栄養学科学生の比較－

○關戸　啓子　　内海　滉
（徳島大学医学部）　（千葉大学）

キーワード：健康食品，イメージ，看護，栄養，学生

【研究の目的】

健康に関する意識が高まり，健康食品は多くの人に利用されている。しかし，なかには不適切に用いられる場合もあり，健康食品に関する指導の必要性が言われている。

その指導の役割を期待されている職業である，看護者や管理栄養士を目指している学生は，どのようなイメージを健康食品に持っているのか調査した。

【方法】

健康食品のイメージ27項目と健康食品の利用状況等を，アンケートによって調査した。対象とした学生は，看護系大学の3年生（本研究では看護学科学生とする）と，大学の栄養学科3年生（本研究では栄養学科学生とする）で全員女子学生である。調査は，2007年5月から6月に行った。

学生には，研究の趣旨を説明し，全員にアンケート用紙を配付した。アンケート用紙は無記名で，提出は自由とし，研究協力に合意した学生は，提出用の箱にアンケート用紙を入れるように依頼した。研究への協力の有無は成績とは無関係であること，また，データは個人が特定されることのないように処理されること，研究成果は学会発表や論文として発表する旨を説明した。

イメージは，対をなす質問とし，項目ごとに5選択肢について回答を求めた。それぞれの回答ごとに，健康食品をより肯定的にとらえているイメージから順に5点～1点を配した。

調査結果は因子分析法により解析した。

【結果】

看護学科学生には，80人に配付し，76人から提出（回収率95.0%）があった。有効回答は76（有効回答率100%）であった。

栄養学科学生には，38人に配付し，36人から提出（回収率94.7%）があった。有効回答は35（有効回答率97.2%）であった。

1）健康食品の利用状況についての回答結果

看護学科学生では，「常に利用する」と回答した学生は9人(11.8%)，「良く利用する」又は「たまに利用する」と回答した学生は39人(51.3%)，「利用したことはない」と回答した学生は28人(36.8%) であった。栄養学科学生の回答も同様に，7人(20.0%)，18人(51.4%)，10人(28.6%) であった。

学科間で有意差は認められなかった。

2）自分の健康について気をつけている方だと思うかという設問への回答結果

看護学科学生では，「思う」「やや思う」と回答した学生は29人(38.1%)，「どちらとも言えない」と回答した学生は6人(7.9%)，「あまり思わない」「思わない」と回答した学生は41人(54.0%) であった。栄養学科学生の回答も同様に，19人(54.2%)，1人(2.9%)，15人(42.9%) であった。

学科間で有意差は認められなかった。

3）自分の健康管理に関してメディア等の意見を参考にする方だと思うかという設問への回答結果

看護学科学生では，「思う」「やや思う」と回答した学生は32人(42.1%)，「どちらとも言えない」と回答した学生は4人(5.3%)，「あまり思わない」「思わない」と回答した学生は40人(52.6%) であった。栄養学科学生の回答も同様に，14人(40.0%)，1人(2.9%)，20人(57.1%) であった。

学科間で有意差は認められなかった。

4）健康食品のイメージに対する回答結果

健康食品のイメージへの回答を因子分析した結果は表1に示すとおりである。4因子が抽出された。

第1因子を「健康食品に対する信頼」，第2因子を「健康食品の用いやすさ」，第3因子を「健康食品の科学的側面」第4因子を「健康食品の感覚的側面」と解釈した。

学科別に因子得点の平均値を比較した。第3因子において看護学科学生の因子得点の平均値は0.152，栄養学科学生の因子得点の平均値は-0.331で有意差($p<0.01$)が見られた。

表1　「健康食品のイメージ」因子分析結果

質問項目：対語		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
【配点】5点 ←→ 1点		健康食品に対する信頼	健康食品の用いやすさ	健康食品の科学的側面	健康食品の感覚的側面
安心	― 不安	0.829	-0.032	-0.036	0.019
安全	― 危険	0.825	0.046	-0.146	0.081
健康的	― 健康的でない	0.717	0.048	0.124	0.094
好ましい	― 好ましくない	0.700	-0.176	-0.020	0.058
自然	― 不自然	0.680	-0.270	-0.197	0.026
副作用はない	― 副作用がある	0.600	0.156	-0.064	0.210
調和	― 不調和	0.585	0.139	0.072	0.005
安定	― 不安定	0.524	0.124	-0.064	-0.079
食品	― 薬品	0.474	0.186	-0.311	0.291
効果的	― 効果的でない	0.456	0.013	0.437	-0.075
手軽	― 手軽でない	-0.015	0.726	0.059	0.163
便利	― 不便	0.020	0.706	0.021	0.139
安易	― 安易でない	0.006	0.548	0.156	-0.137
先端技術	― 先端技術ではない	-0.130	0.101	0.609	-0.064
科学的	― 科学的でない	-0.199	-0.034	0.555	0.027
都会的	― 都会的でない	-0.291	0.096	0.488	0.085
現代的	― 現代的でない	0.012	0.339	0.459	0.100
陽気	― 陰気	0.392	0.135	-0.023	0.619
明るい	― 暗い	0.376	0.179	0.069	0.552
派手	― 地味	-0.180	-0.029	-0.020	0.512
カラフル	― カラフルではない	-0.140	0.155	0.039	0.474
因子の寄与率（%）		19.46	7.62	6.58	5.67
累積　寄与率（%）		19.46	27.08	33.66	39.33

注）主因子法，バリマックス回転後の因子負荷構造因子数は固有値1.00以上とした。因子負荷が0.45以上を因子ごとに枠で囲った。

【考察】

健康食品の利用状況や，健康に気をつけているか否か，メディアの意見を参考にするか否かの設問においては，看護学科学生と栄養学科学生に違いは見られなかった。しかし，健康食品のイメージにおいて，看護学科学生の方が栄養学科学生よりも，健康食品をより科学的であるととらえていることがわかり，学科の特性が認められた。これには，生化学の学習範囲の差や食品分析の実習体験の有無等の学習要因や，職業意識に関する要因などが考えられる。今後の検討課題としたい。

（せきど　けいこ，うつみ　こう）

看護経験の有無と行為手順の記述

― 清拭手順の記述をもとに ―

○星　薫[1)]　及川　理恵[2)]
([1)] 放送大学教養学部　[2)] 千葉県立野田看護専門学校)

キーワード：スクリプト　看護学生　清拭

【研究の目的】看護師が患者に対して行う清拭といった看護行為では、それを過不足なく行うために、その手順について熟知している必要がある。看護学生は清拭の手順を授業で習い、さらに実習で実施経験を経た後、実技試験を受ける。それらの経験を通して実施法がどの程度「身についた」かを知る一つの方法として、ある特定の事例について、どのような手順で清拭を行うかを、看護学生に書き出してもらった。

人は日常当たり前のように行っている行為（例えば買い物をする、歯医者に行くなど）については、求められればそれを複数の行為の連続として書き出すことが出来る（Bower et al.,1979)。清拭は日常行為とは呼べないが、看護師にとっては、重要な日常業務の一つであり、それを熟知していれば、手順を書き出すことが出来ると考えられる。清拭の実技試験を上位の成績で通過した看護学生たちは、手順書きも過不足なく書くことが出来るのかどうかを知ることが、本研究の目的の１つ目である。

さらに看護学校進学課程には、准看護師として看護経験を持つ者と、看護経験なしで、学んでいる者とが混在している。手順書きの内容に、両者で差が現れるのかどうかを見ることも本研究の目的である。

【方法】被験者：看護学校（2年制）2年生13名。清拭の技術テストに1度で合格した17名の学生のうち、今回の調査への協力を承諾した13名。この中には、准看護師としての臨床経験を持つ者が6名あった(平均年齢34.7歳)。彼らの経験年数は2年7ヶ月から15年であった。残り7名の学生（平均年齢29.1歳）は看護経験を持っていなかった。

手続き：被験者に紙上事例を提示し、全身清拭の手順を記述してもらった。この紙上事例は、学生たちがこの記述を行う5ヶ月ほど以前に受けた、技術テストの際に用いられたものと同じものであった。記述の際には、手順を準備、実施、後片付けの3段階に分け、それぞれについて記述するよう、被験者に求めた。記述は、授業時間外に、調査者の立会いのもとで行われた。さらに、参考のために看護教員1名も、同じ手順記述を行った。用いられた紙上事例は以下のようなものであった。

紙上事例：Aさん、65歳、女性。食欲不振で入院。倦怠感が強く、体動困難。主治医よりベッド上安静と説明されている。時折眩暈を訴えるが普通に会話は出来る。「身体がだるくて動くのが辛い」と訴えている。今、Aさんはとても汗をかいている。

【結果】被験者の書いた手順書きはまず、1つの動詞のみを含んだ単文に分解された。また、手順書きの適切さかを判定するために、準備、実施、後片付けの3段階それぞれに関して、清拭手続き上必要と考えられる項目を抽出し、それらの項目が、被験者の手順書きに盛られているか否かを判定した。必要項目として列挙したものは、全部で61項目であった。いずれも、看護技術に関する複数の文献の中で、共通に指摘されているものを用いた。各被験者が、61項目中、何項目を記述しているかによって、その被験者の清拭手順の妥当度を判定した。

必要項目として挙げた61項目の中には、例えば、「必要物品を準備(ワゴンに乗せる)」、「拭く部位をバスタオルで覆う」、「バスタオルや古い寝衣を片付ける」といった項目が含まれていた。

各被験者について、必要項目61個のうち、いくつの項目に言及しているかをまとめたものが、表1である。なお、表には参考として看護教員が行った記述についても、同じ基準で評定した結果を示してある(経験あり群の被験者G)。

表1　必要61項目の言及数　　(　)内は記述率

被験者	A	B	C	D	E	F	G
経験なし	36 (59%	21 (34%)	28 (46%)	31 (51%)	30 (49%)	25 (41%)	30 (40%)
経験あり	41 (67%)	29 (48&)	26 (43%)	46 (75%)	38 (60%)	32 (52%)	49 (80%)

表で見ると、必要項目61項目のうち、半分以下の30～40%程度しか言及できていない者が、特に経験なし群に目立つ。今回の紙上事例は、実技試験で用いられたものを、そのまま利用しており、被験者たちは少なくともこの事例に関しては、実技練習を繰り返し行っているものと思われるし、その結果実技試験を1回でパスしているのではあるが、試験から時間が経って、既にその手順に関しては忘れてしまっているのかもしれない。まだ、「身についた」技能とは呼べない段階なのだと考えられる。これに対して、経験あり群は、経験なし群に比べて、いくらか必要項目に言及できているように思われる。確かに、両群を平均記述率で比べると、経験なし＝４７％であるのに対して、経験あり＝５８％であった。ただし、両群の成績の相違について、順位和検定を行ってみたところ(R=53)、両群の差は有意差には至らなかった。

【考察】人は日常動作に関するスクリプトをある程度詳細に書き出すことが出来るが、同様に看護師にとっての日常的な業務である清拭に関しても、少なくとも看護教員は必要事項を８０％盛り込んだ手順書きを行うことが出来た。一方、まだ臨床の場での経験が充分でない看護学生の場合は、その記述内容には、漏れが多く、必要な項目のうちの半分程度しか、記述できていなかった。このことから、手順書きによって、ある程度その人の技能的熟達の度合いを知ることが出来る可能性があると考えられる。

また、臨床経験を持った進学課程の学生は、経験が妨害要因となって教育効果が上がりにくいと指摘されることが少なくないが、今回の手順書きに関して言えば、少なくとも経験のない学生よりは、多少必要事項を盛り込んだ記述が出来ているようであった。

【引用文献】 Bower,G.H.,Black,J.B.,&Turner,T.J.(1979) Scripts in memory for text. Cognitive Psychology,11,177-220.

(ほし　かおる・おいかわ　りえ)

窃盗犯のプロフィールと犯行手口の質的分析

○福本　純一[1)]　　小杉　考司[2)]　　福田　廣[2)]　　松野　凱典[3)]
([1)] 山口県警科学捜査研究所　　[2)]山口大学教育学部　　[3)]追手門学院大学心理学部)

キーワード：窃盗犯プロフィール、犯行手口、数量化Ⅲ類

【研究の目的】 刑法犯の中で窃盗は、最も多い犯罪であり(警察白書、2006)、犯罪に対する不安感等に関する世論調査(社会安全研究財団、2002)によれば、市民が不安に感じる犯罪として、空き巣、侵入強盗、ひったくりが上位を占めている。近年、凶悪犯罪を中心に、犯行情報を類型化し、犯人像の特徴を推定し、捜査に活用する研究が多くみられるようになった。窃盗に関する報告は、高村・徳山による民家対象の侵入窃盗に関する一連の研究(2003, 2006)がみられるが、窃盗犯罪者に対する多角的・総合的研究が多いとは言い難い。

窃盗犯は、空き巣に代表される「侵入盗」とひったくり等の街頭犯罪と呼ばれる「非侵入盗」に大別される。ひったくりは、①犯行場面に加害者・被害者が存在し、被害者が被害事態を即座に認知し得ること、②手口にそれほどの技術性を伴わないことなどが特徴である。窃盗の一般型からはずれ、恐喝や強盗等の粗暴犯に近い犯罪行動型であり、状況が犯行に走らせる手口と考えることもできる。

そこで、本研究では、侵入・非侵入に焦点を絞り、空き巣犯とひったくり犯では被疑者属性や犯罪行動に違いがみられるかについて検討した。

【方法】 平成9年から18年の間に、X県内で発生した侵入盗および非侵入盗犯罪を対象として、質問紙等によって200件（侵入盗97件、非侵入盗103件）を分析データとした。

データから、犯人のプロファイル変数として、(1)職の有無、(2)学歴、(3)生活形態、(4)共犯の有無、(5)土地鑑の有無、(6)敷き鑑（犯罪現場の建物についての予備知識）の有無、(7)動機、(8)余罪の有無、(9)前科の有無、といった情報をピックアップした。これらのデータを、表1のような形で分類した。

【結果】 上記9変数をもちいて、サンプル×分類の数量化Ⅲ類を施した。そこで得られた座標布置に侵入・非侵入盗の別を付け加えたものを図1に示す。第一・第二次元の累積寄与率は約20%である。なお、分析にはWord Minerを用いた。

図より、第二象限に侵入盗、第四象限に非侵入盗があり、プロファイルに関する変数は原点付近を中心に布置される。さらに、第10次元までの解(累積寄与率66%)の座標データをもちいてクラスター分析を行い、プロファイル変数同士の分類を行った。7つのクラスターに分類した結果、【施設出身、生活形態その他、その他の余罪あり】、【大学卒、動機は飲食費】、【無職、高校中退、独居あるいは住所不定、動機は生活費、余罪・前歴とも非侵入罪】、【高卒、動機は借金返済】、【有職者、中卒、敷き鑑あり、余罪・前歴とも侵入罪】、【学歴不明、家族親族と同居、共犯あり、土地鑑あり、動機は遊興費】、【学生・生徒、在学中・動機その他】、という分類になった。

表1.分類コード

(1)職の有無	:有職、無職、学生・生徒
(2)学歴	:不明、施設、中卒、高卒、高校中退、大卒、在学中
(3)生活形態	:家族親族と同居、独居、不定、その他
(4)共犯	:共犯あり、なし
(5)土地鑑無	:土地鑑あり、なし
(6)敷き鑑	:敷き鑑あり、なし
(7)動機	:飲食費、遊興・交遊費、借金返済、生活費、その他
(8)余罪	:侵入盗、非侵入盗、その他
(9)前歴	:侵入盗、非侵入盗、その他

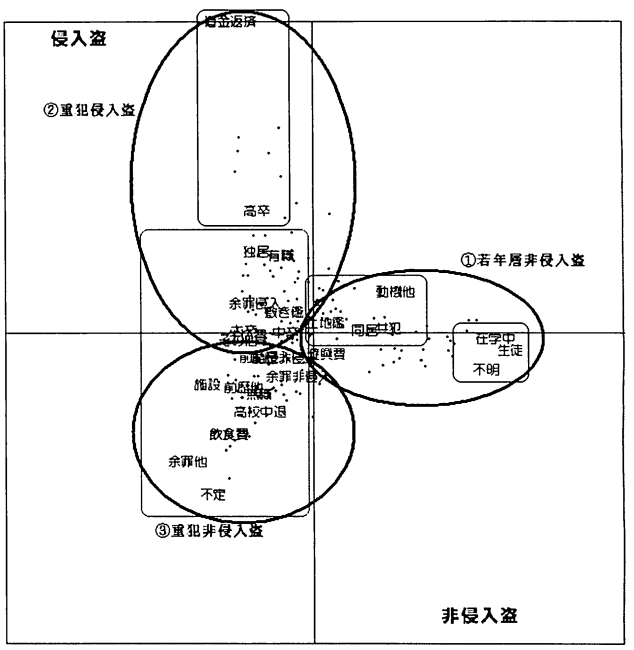


図1. 犯行プロファイルとサンプル、罪種のマッピング
中央左のクラスターはいくつかのクラスターが混在している

【考察】 図1および7つのクラスター分類結果から、被疑者のタイプを大きく三つに分けることが出来ると考えられる。まずは【学生・生徒、在学中】と【家族親族と同居、共犯あり、土地鑑あり、動機は遊興費】のクラスターにまたがる、①若年層による非侵入盗群である。これはひったくり犯罪が、状況が整えば簡単に実行できることなどから、大金をねらうというより一時的な遊興費を求めての犯行タイプといえるだろう。次に、前歴・余罪として侵入盗を犯している②累犯・侵入盗群と、前歴・余罪共に非侵入盗を犯している③累犯・非侵入盗群である。基本的に一度うまくいったことを繰り返すという傾向に加え、侵入盗は経験や技術を要するという側面があることが推察される。今後は被疑者の性格特性など、変数を増やすことでより明確なプロファイルを描くことが望まれる。

【引用文献】

高村茂・徳山孝之 2006　多変量解析を用いた犯罪者プロファイリング研究–侵入窃盗犯の類型化に着目して－ 犯罪心理学研究 No43(2)　29-41

（ふくもと じゅんいち・こすぎ こうじ・ふくだ ひろし・まつの かつのり）

近隣地域における犯罪被害リスク認知に対して知覚された環境が与える影響の検討

○玉井航太　池田満
（国際基督教大学大学院　教育学研究科）

キーワード：地域，犯罪被害リスク，環境要因

【研究の目的】近年において犯罪への関心は高まり，そして犯罪不安が問題視されている．このような現状の中，窓割れ理論（Wilson & Kelling, 1982）や環境設計による犯罪予防（e.g., Newman, 1972）が注目され，防犯と共に安心の形成が地域で図られている．その中でもコミュニティの規範や価値観の侵害を示す低レベルの違反（LaGrange, Ferraro & Supancic, 1992）である無作法性は地域にある環境要因として注目されている．無作法性がより凶悪な犯罪の被害者になる可能性の象徴的環境であり（Hunter, 1978），治安への関心の欠如と問題に対する公の対処能力の欠如を示す指標となるため（Taylor & Hale,1986），無作法性を多く知覚することによって犯罪不安が高まると仮定される．しかしながら，地域に無作法性があったとしても，良い環境がないわけではなく，地域の凝集性や犯罪被害者になる可能性の減少を示す象徴的環境も同様に存在するだろう．例えば，近所付き合いにより相互監視性が高まり，地域の防犯性が高まるという領域仮説（e.g., Shaw & Gifford, 1994）からも社会的交流を促進ような環境は地域の凝集性や監視性を想起させ，犯罪不安を低めると考えられる．また，犯罪や犯罪不安に対してコミュニティの行政的・社会的な資源は主たる媒介力を構成するものであり（Lewis & Salem, 1986），地域防犯活動という社会的環境は，犯罪に対する地域の抵抗性の存在として犯罪不安を低めると考えられる（e.g., Roh & Oliver, 2005）．本研究は，犯罪不安の重要な側面である犯罪被害者になることへのリスク認知を暴力犯罪と財産犯罪の領域（LaGrange et al., 1992）で分けた上で，それらに対する地域の環境要因の影響を検討した．

【方法】*調査参加者と手続き*　2006年11月に東京都内にある2つの公立中学校に匿名形式での質問紙を配布し，生徒と中学生以上の家族415名から回答を得た．そのうち410名（男性40.2%，女性59.8%）のデータを分析に用いた．

質問紙の構成　調査に使用した尺度は以下のものである．個人特性に関する項目を除き，全て6件法で回答を求めた．

1）犯罪リスク認知：LaGrange et al. (1992)の尺度をバックトランスレーション法により和訳して用いた．LaGrange et al. (1992) による分類に沿って「暴力犯罪」と「財産犯罪」の2領域でのリスク認知を尋ねた．

2）無作法性：LaGrange et al. (1992)の尺度をバックトランスレーション法により和訳して用いた．下位因子に「社会的無作法性」と「物理的無作法性」が含まれる．

3）社会的交流を促す環境：小俣（1999）の研究で用いられた4項目が地域においてどの程度存在するか尋ねた．

4）地域防犯活動：小林・鈴木（1998）の研究を参考にして選定した7種類の地域防犯活動が地域においてどの程度行なわれているか尋ねた．

5）個人属性として性別，年齢，居住年数，犯罪被害経験の有無を尋ねた．

【結果】各尺度の平均値，標準偏差，信頼性係数を表1に示した．犯罪被害リスク認知の平均値からは財産犯罪の方が暴力犯罪よりも高い値を示しており，被験者内 t 検定を行なった結果，財産犯罪リスク認知の方が暴力犯罪リスク認知よりも有意に高かった（t = -12.60, df = 409, p<.001）．

表1．各尺度の平均値，標準偏差，信頼性係数

	n	M	SD	α
暴力犯罪	410	2.88	1.30	.91
財産犯罪	410	3.32	1.23	.90
無作法性	410	2.33	1.07	.91
良質環境	407	3.16	1.19	.82
地域防犯活動	410	3.03	.94	.89

Note: α =Cronbach 信頼係数.

暴力・財産犯罪へのリスク認知に対する環境変数の影響を検討するために性別，年齢，犯罪被害経験の有無を含めた階層的重回帰分析を行ない，表2の結果が得られた．

表2．階層的重回帰分析の結果

予測変数	暴力犯罪リスク β	暴力犯罪リスク ΔR^2	財産犯罪リスク β	財産犯罪リスク ΔR^2
1		.03*		.01
性別	.17***		.08	
年齢	.02		.12**	
犯罪被害	-.00		-.00	
2		.28***		.29***
無作法性	.34***		.27***	
良質環境	-.04		-.09*	
地域防犯活動	-.35***		-.39***	

Note: *< .05, **< .01, ***< .001

階層的重回帰分析の結果において，良質環境は暴力犯罪リスク認知との相関が有意であったにも関わらず（r =-.23, p<.001），有意な効果は見られなかった．また，財産犯罪リスク認知への分散説明率は環境要因のみが有意であった．

【考察】本研究の結果からは，近隣地域においての暴力・財産犯罪リスクを査定する上で環境要因が影響していることが示された．そして，無作法性が犯罪の危険性の象徴であるという仮説を支持する結果であった．また，地域防犯活動の知覚に効果があり，地域における犯罪への抵抗性の象徴も住民の犯罪被害リスク査定に影響していることが示された．これらの結果からは，安心の形成のために無作法性を減らすと同時に犯罪への抵抗性の象徴的環境を増やし，住民に明確に提示することが必要であることが示唆される．その一方で，地域交流を促す環境が地域の連帯性・凝集性を想起させ，リスク査定に関わっているように仮定されるが，その影響は極めて小さいものであると考えられる．これには無作法性や地域防犯活動の存在とは違い，犯罪に関する直接的なメッセージではないことが関わっていると考えられる．そして，犯罪被害リスク認知の軽減には，地域の連帯性や凝集性の中に犯罪への抵抗性といった意味合いが必要であると示唆される．

本研究では個人属性に偏りもあり，サンプリングや犯罪被害経験の定義は今後の課題として検討する必要がある．

【主要引用文献】

LaGrange, R. L., Ferraro, K. F., & Supamcic, M. (1992). Perceived risk and fear of crime: Role of social and physical incivility. *Journal of Research in Crime and Delinquency, 29*(3), 311-334.

Roh, S., & Oliver, W. M. (2005). Effect of community policing upon fear of crime: Understanding the causal linkage. *Policing: International Journal of Police Strategies & Management, 28*(4), 670-683.

（たまい　こうた・いけだ　みつる）

酒気帯び運転で取締りを受けた運転者の飲酒・運転パターン

― 質問紙調査結果 ―

○岡村　和子[1)]
([1)] 科学警察研究所)

キーワード：飲酒運転、飲酒行動、交通違反

【目的】飲酒運転および飲酒運転による交通事故が近年大きな社会的関心を呼び、飲酒運転に対する諸対策が議論されている。2002年に道路交通法が改正され、酒気帯び運転の取締り基準が厳しくなったことを契機に、微量であっても飲酒と運転を分離しなければならないという考え方は、多くの国民に浸透したと解釈できる。その一方、酒気帯び運転で取締りを受ける人の抱える問題の所在は明らかでない。飲酒行動そのものの治療を要するのか（ｱﾙｺｰﾙ依存が疑われる場合）、飲酒自体は制御可能であるが、飲酒と運転を切り離すことができないのかが整理されていない。後者の場合、飲酒と運転を分離できない理由がどこにあるのか、その心理的背景も説明されていない。酒気帯び運転で取締りを受けた者に対する諸対策が長年研究されてきた他の先進国では、近年、飲酒運転に対する誤った認知・思考ﾊﾟﾀｰﾝを正すことを目的とした飲酒運転者のﾘﾊﾋﾞﾘに関する研究報告が目立つ。以前は運転免許証の効力停止のみを行っていた国においても、免許効力の制限とﾘﾊﾋﾞﾘを組み合わせることによって、より高い再犯防止効果を発揮するとの報告が増えている。

本研究は、酒気帯び運転で取締りを受けた運転者の飲酒ﾊﾟﾀｰﾝ、運転行動および飲酒運転行動等を調べ、同地域に居住する一般運転者と比較することにより、飲酒運転者の特徴と問題の所在の端緒を記述する。

【方法】2007年1～5月の間、次の2群に質問紙調査と運転適性検査を行った。①酒気帯び運転で免許停止処分を受け茨城と神奈川の免許ｾﾝﾀｰを訪れた者のうち、調査協力に同意した男性(飲酒群;n=158)、および②茨城、神奈川、千葉、埼玉に居住し、有効な運転免許証を持つ男性(統制群;n=196)。②は免許ｾﾝﾀｰでの勧誘の他、ﾌﾘｰﾍﾟｰﾊﾟｰに広告を掲載し参加者を募集した。①の協力率は72.7%であった。

Table 1　飲酒群、統制群の運転および飲酒に関する記述統計

	飲酒群(n=159)		統制群(n=196)		統計テスト(p)	
	Mean	*SD*	Mean	*SD*		
年齢 (years)	44.0	13.7	40.7	13.3	t=2.32	*
走行距離 (km/年)	18483.0	25765.7	9042.0	10698.0	t=4.28	***
運転目的(複数回答。「はい」の%)						
業務(職業ﾄﾞﾗｲﾊﾞｰ)	10.1%		4.1%		$\chi^2(1)$=5.0	*
業務(仕事に運転が必要)	48.4%		33.7%		$\chi^2(1)$=7.9	**
通勤・通学	54.7%		30.1%		$\chi^2(1)$=22.0	***
買物	41.5%		76.0%		$\chi^2(1)$=43.8	***
訪問	7.5%		10.2%		$\chi^2(1)$=0.8	*ns*
送迎	4.4%		18.9%		$\chi^2(1)$=15.2	***
レジャー・観光	26.4%		63.8%		$\chi^2(1)$=49.2	***
飲食	8.2%		24.5%		$\chi^2(1)$=15.4	***
自家用車への主観的依存度[a]						
11の生活場面全体平均	2.2		2.7		t=-4.7	***
通勤・通学	2.0		3.2		t=-7.0	***
日常的な買物	2.1		2.7		t=-3.9	***
レジャー・観光(近距離)	2.0		2.4		t=-2.9	**
飲酒を伴わない外食	2.3		2.7		t=-2.8	**
飲酒を伴う外食	3.1		3.8		t=-4.1	***
[a] 5件法による。数値が小さいほど、各々の生活場面での自家用車依存度が高いことを示す。						
過去3年間の事故経験						
ありの%	20.3%		26.5%		$\chi^2(1)$=15.4	*ns*
過去3年間の違反(被取締り)経験						
ありの%	57.3%		44.9%		$\chi^2(1)$=5.4	*
最高速度違反(ありの%)[b]	6.5%		12.8%		$\chi^2(2)$=4.9	+
駐停車禁止違反[b]	9.6%		18.4%		$\chi^2(3)$=8.4	*
シートベルト装着義務違反[b]	14.8%		10.7%		$\chi^2(4)$=3.9	*ns*
通行禁止違反[b]	1.3%		6.6%		$\chi^2(1)$=6.1	*
酒気帯び運転[b]	29.0%		0.5%		$\chi^2(2)$=61.8	***
[b] 取締りを受けていない場合は0、受けた場合はその回数を集計した。						
1日あたりの平均飲酒量[c]	72.3	64.1	36.6	40.3		
[c] 参加者が報告した様々なｱﾙｺｰﾙ飲料が含むｴﾁﾙｱﾙｺｰﾙ重量(g)に換算した。						

+ p<0.1, * p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

【結果】①両群の特徴比較、②飲酒群の取締り時のｱﾙｺｰﾙ検知量を予測する回帰分析、③統制群のうち最近飲酒運転したと報告した者を予測する回帰分析、④運転適性検査結果の順に報告する。①Table 1 に示すとおり、飲酒群は統制群と比較して、走行距離、飲酒量ともに平均値が約2倍であった。過去の事故経験(自己報告による)は両群間で差はみられなかった。違反経験からは、飲酒群には酒気帯び運転以外の違反は統制群よりむしろ少ない傾向がうかがえた。飲酒群は統制群と比べて、通勤通学や仕事で車を使うと回答した者が多く、買物やﾚｼﾞｬｰ目的での車使用は少なかった。自家用車への主観的依存度を生活場面別に質問したところ、飲酒群は統制群よりも自家用車への高い依存傾向を報告した（11の生活場面中9場面で有意差あり）。なお、飲酒がもたらす心理的社会的影響の自覚を報告させるｽｸﾘｰﾆﾝｸﾞﾃｽﾄKASTの結果によると、飲酒群の38%が重篤問題飲酒群（ｱﾙｺｰﾙ依存症の可能性あり）に分類された。

②飲酒群のうち取締り時の呼気中ｱﾙｺｰﾙ濃度の数値を記入した者(n=102)を対象に、呼気中ｱﾙｺｰﾙ濃度を従属変数、飲酒（KAST ｽｺｱ・飲酒頻度・飲酒量）及び運転（走行距離・主観的自家用車依存度）の合計5変数を説明変数とし、変数減少法により重回帰分析を行った。主観的自家用車依存度、KAST ｽｺｱ、飲酒量の3変数による予測ﾓﾃﾞﾙを検出したが、分析に必要な有効n数が少ないこともあり(n=75)、ﾓﾃﾞﾙの有効性には課題が残る結果となった(R^2=0.22, AdjustedR^2=0.18)。

③統制群の約1割(n=20)は、過去1年以内に飲酒運転したと報告した。統制群を対象に、過去1年以内の飲酒運転経験を予測するため、②と同じ5説明変数を用いて変数減少法によりﾛｼﾞｽﾃｨｯｸ回帰分析を行った。その結果、主観的自家用車依存度とKAST ｽｺｱの2変数が最終ｽﾃｯﾌﾟに残った(Hosmer-Lemeshowのﾓﾃﾞﾙ適合度 p=0.24)。

④酒気帯び運転を含む免許停止処分者講習で用いられている運転適性検査を実施した。下位検査の粗点を両群で比較したところ、動作の速さ(斜線引き等の単純作業)と精神的活動性(計算問題等)で飲酒群は統制群より成績が低い半面、衝動抑止性と性格検査のうち神経質傾向、感情高揚性、協調性で飲酒群のほうが統制群より好ましい結果となった。

【考察と今後の課題】

飲酒群の飲酒・運転ﾊﾟﾀｰﾝを統制群と比較して記述するとともに、飲酒と運転への主観的な依存度が、飲酒後運転してしまう行動に影響している可能性が示唆された。本研究に引き続き、本研究参加者の過去5年間の交通事故違反歴を警察庁保有のﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽから抽出・分析するとともに、2007年中に別途飲酒群参加者を募り、認知行動療法の一種であるTranstheoretical ﾓﾃﾞﾙに基づき飲酒運転の心理的背景の説明を試み、研究結果を補強する予定である。なお、本研究は、平成18年度文部科学省科研費補助金（若手研究Ｂ）を受けて実施した。

（おかむら　かずこ）

心理会計

—3つの商品の前払い・後払いの一対比較（2）—

蜂屋　真

（流通科学大学　サービス産業学部）

研究の目的

心理会計(mental accounting)とは、心の中の口座、すなわち心理的口座(mental account)の違いが、お金の支払いの意思決定に影響を及ぼすという現象を指す。

心理会計が関わる課題に、前払い・後払い課題がある。Prelec & Loewenstein (1998)は、ある一群の被験者に家電の代金を前払いするかそれとも後払いするか、また別の一群の被験者に旅行の代金を前払いするかそれとも後払いするかを選択させた。その結果、両場面でお金の支払い条件が同一であるにもかかわらず、60%の被験者が旅行の前払いを選択し、わずか16%の被験者しか家電の前払いを選択しなかった。この結果は、家電と旅行の心理的口座が異なっていることを示唆している。

蜂屋（2005）は、被験者に、旅行、家具、スーツの前払い・後払いを選択させ、被験者内の支払いパターンを検討した所、最も頻繁に見出された支払いパターンは、すべての商品を前払いする、旅行だけを前払いにし他を後払いにする、すべての商品を後払いするであり、それぞれ39.2%、26.2%、18.0%の被験者がこれらの支払いパターンを選択した。

蜂屋（2006）は、旅行と家具、家具とスーツ、スーツと旅行の対を設け、いずれを前払いするかの一対比較を行った。その結果、旅行、家具、スーツを最も前払いする被験者の割合は、それぞれ 65.0%、14.6%、13.8%であった。さらに、旅行の代わりに資格講座あるいは高級料理を用いて同様な一対比較を行った所、これらの商品を前払いする被験者が最も多かった。このことは、商品の耐久消費性がお金の支払い方に影響を及すことを示している。

本研究は、旅行、家具、スーツの一対比較をさせ、さらにこれらの商品の支払いに対する心理的痛みを評定させた。この心理的痛み得点を用い、旅行に対する価値及び選好が、旅行の前払いにどのような効果を及ぼすかを検討した。

方法

日時：2006年10月

被験者：平均年齢20.1歳の大学生293名（男子188名、女子 105名）、

実験手続：心理学1･2の授業中に、旅行、家具、スーツの前払い・後払いを尋ねる一対比較の質問紙を配布し回答を求めた。旅行と家具の一対比較では、「あなたは6ヶ月後に1週間の東南アジア旅行と家具の購入を予定している。旅行と家具にはそれぞれ 12 万円かかるが、あなたは次のどちらの支払い方法をとるだろうか。」という教示文の下、被験者に以下の選択肢AとBのいずれかを選択させた。

A. 旅行代を毎月2万ずつ6ヶ月間支払い、支払い終了後旅行に行く。旅行の前後に家具を配達してもらい、その後家具代を毎月2万ずつ6ヶ月間支払う。

B.家具代を毎月2万ずつ6ヶ月間支払い、支払い終了後家具を手に入れる。家具の取得の前後に旅行に行き、その後旅行代を毎月2万ずつ6ヶ月間支払う。

さらに、家具とスーツ、スーツと旅行の対を設け、被験者に同様な一対比較を行わせた。用いられた質問紙には商品提示の順序効果を相殺するため12種類の質問紙が作成され、各質問紙にほぼ同比率の男女学生が回答した。さらに、1週間後に、東南アジア旅行、家具、スーツを含む 15 個の商品をごく標準的な価格で購入した場合の心理的痛みを、全然イタイと思わないから非常にイタイと思うまでの6段階で評定させた（全然イタイと思わないを1点、非常にイタイと思うを6点に配点した）。心理学3の授業では、まず心理的痛みの評定を行い、1週間後に旅行、家具、スーツの一対比較を行った。

結果及び考察

図1は一対比較における商品の前払いパターンを示す。図には、首尾一貫した6つの選択パターンと、2つの三竦みを合算したものが示されている。図の上段は被験者全体の、中段は高価値群（旅行の心理的痛み得点が3点以下の被験者）の、下段は低価値群（旅行の心理的痛み得点が4点以上の被験者）の結果を示す。被験者全体では、旅行、スーツ、家具を最も前払いする被験者の割合は、それぞれ59.0%、14.0%、17.7%であり、旅行を最も前払いする被験者の割合が大きかった。高価値群と低価値群でも、被験者全体の結果とほぼ同様な結果が得られた。

さらに、選好群（家具とスーツの心理的痛み得点より、旅行の心理的痛み得点が小さい被験者）と非選好群（家具とスーツの心理的痛み得点より、旅行の心理的痛み得点が大きい被験者）を抽出し、両群の前払いパターンを比較した所、両群で旅行を最も前払いするという同様な結果が得られた。

このことは、旅行に対する価値及び選好が、旅行の前払い・後払いに影響を及ぼさないことを示している。

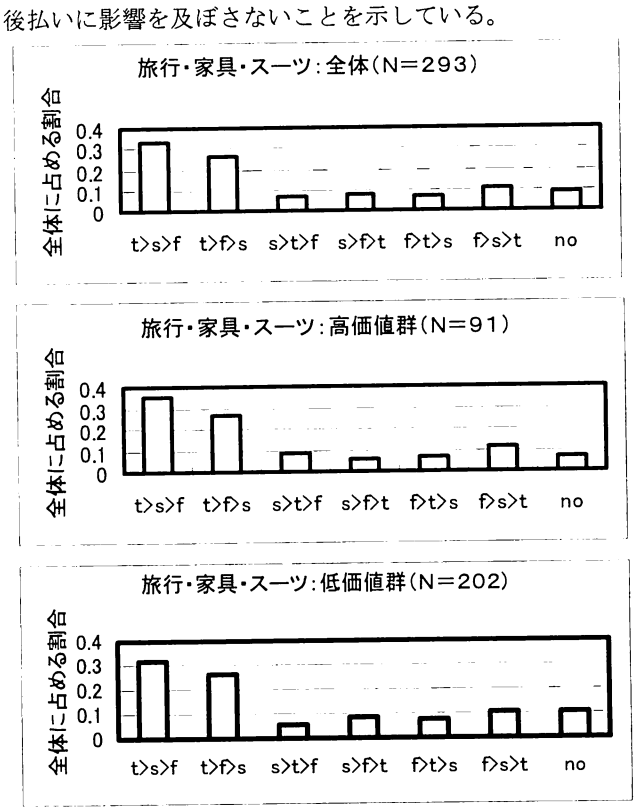


図1　一対比較における商品の前払いパターン（t：旅行、s：スーツ、f：家具、no：三竦み）

（はちや　しん）

中高年齢求職者のための自己理解支援ツールの開発

長縄久生
（労働政策研究・研修機構　労働大学校）
Key words: 中高年齢者　職務遂行能力　情報処理能力

少子高齢化の進展とともに、いったん退職した中高年齢者に再び労働市場に参加することが求められている。中高年齢者は若年者と異なり長い職業経験を持ち、豊富な業務知識を蓄積している一方で、加齢とともに経験のない職務を新たに学習することは難しくなる。若年者は教育や訓練によって将来どのような職務が果たせるようになるかという学習可能性に基づいて就職するのに対して、中高年齢者は今どのようなことができるかという職務遂行能力に基づいて即戦力として就職することになる。そこで、中高年齢者の職業指導・紹介においては、これまでに経験した職務、得意な職務は何かを明らかにし、これに適合する求人を探すことになるが、①職業を業種として捉えがちなため、職業経験を職務の水準で把握することが難しい、②精神的身体的老化から、これまでと同じように職務を遂行することができないことがある、③経験にこだわるあまり、新たな職務や職場に挑戦することができない、という問題がある。そこで、これらの特性について客観的に測定・評価するテストを新たに開発し、職業相談の過程で中高年の求職者がこれからの働き方や自分にできる仕事について考える材料として提供することとした。各特性についての測定プログラムを作成し、「中高年のための自己理解ツール集」として統合してパーソナルコンピュータに搭載した。プログラムを起動するとメニュー画面が開き、「管理機能行動目録」、「作動記憶」、「短期記憶」、「心の硬さ尺度」各テストの紹介とアイコンが示され、アイコンを選択するとそれぞれのテストにジャンプする。各テストはマウスないしキーボードによって被験者ペースで実施され、回答が終わるとただちに結果の評価がフィードバックされる。

1．職務遂行能力

「管理機能行動目録」(島田, 2007)によって、具体的な問題解決場面での行動の仕方から職務遂行水準を予測する。18の問題解決場面のそれぞれについて、いくつかの対処行動があげられている。これらの対処行動にはどれが正しいという唯一の選択肢があるわけではなく、どれも取りうる行動である。仕事における問題解決には正解があるとは限らないし、あったとしても1つとは限らないからである。被験者がこれらの対処行動をどの程度採用するかを5件法で回答すると、それぞれの問題解決場面での行動特徴として、さまざまな職務の遂行において機能する管理機能の評点に換算される。評価される管理機能は、①仕事の段取り、②情報の変換、③数的情報処理、④個人に関わる意思決定・判断、⑤業務に関わる意思決定・判断、⑥機器・装置の使用、⑦口頭コミュニケーション、⑧文書によるコミュニケーション、⑨監督・指示、⑩教示、⑪調整、⑫アドバイス、⑬緊張した対人関係、⑭対人葛藤、⑮倫理・道徳性、⑯適応性、⑰相談、⑱監察、である。回答が終わると各管理機能の得点が算出され、偏差値が図示される。続いて各管理機能について偏差値に対応した職務の水準が示され、さらに管理機能のそれぞれについて高い職務水準、低い職務水準の職業が例示される。

2．認知的課業の遂行能力

ホワイトカラーの職務のような認知的課業は、長期記憶から呼び出した業務知識などの情報を用いて入力情報に対して何らかの処理を施すことである。経験を活かすとは長期記憶に蓄積した知識を利用することに他ならないが、その処理は作動記憶および短期記憶に支えられていると考えられるので、これらの機能が低下すれば経験を活かすことはできない。そこで、「作動記憶」の容量から注意の制御能力、「短期記憶」の容量から記憶能力を測定し、加齢によって低下していないかどうかを評価する(長縄, 2006)。

作動記憶容量は二重課題パラダイムを応用して測定する。一次課題として、四則演算の式の検証を行うと同時に、二次課題として式に含まれている数を記憶するオペレーションスパンテストである。情報の処理と貯蔵を同時に行う二重課題となっており、短期記憶ばかりでなく注意の制御という機能が働いている。簡単な加減乗除の式と答をコンピュータの画面に提示する。被験者は答があっているか否かを判断してマウスの対応するボタンを押し(式の検証)、同時に式の中で下線の引かれた数字を記憶する。式の数は2式から6式までとし、すべての式の検証が終わると、被験者は各式で下線の引かれた数字を思い出して式を再生する。各式数条件について5試行のうち3試行ですべての数字を再生できたときその式条件をパスしたこととする。パスしたもっとも大きな式条件数をオペレーションスパンとし、2未満、2〜3.5、3.5〜5、5.5以上の4水準についての評価をモニタに表示し、プリントアウトする。

短期記憶容量は、Sternberg(1966)の短期記憶走査パラダイムにより測定する。画面上部にトランプのカードを2〜6枚裏返しに並べ、1枚ずつ表にし、また裏返す。すべてのカードの表を提示した後、画面下部の1枚を表にする。被験者はこのカードの数字と同じ数字のカードが上部にあったか否かをできるだけ速く判断してマウスのボタンで答える。記銘項目を正しくあったとこたえるHit率と非記銘項目を誤ってあったと答えるFalse Alarm率からえられる親近性の距離d'を短期記憶の正確さの指標とする。d'について、1.5未満、1.5〜2.5、2.5〜3.5、3.5以上の4水準についての評価をモニタに表示しプリントアウトする。

3．就業態度

「心の硬さ尺度」によって心の硬さの質と程度を測定し、そのプロフィールとタイプに応じたアドバイスをフィードバックする。中高年齢者の再就職を困難にしている心理的要因として、今までの経験に固執し、再就職の選択を自ら狭めていることがある。そこで、自分の心の硬さがどのような性質で、どの程度のものであるのかを、行動特徴についての25項目の質問文に「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5段階で回答することで測定する。各項目の得点から、①非順応性、②応用力の欠如、③固執性、④想像力・創造性の欠如、⑤過度の規律遵守の5つの下位尺度の得点が算出され、プロフィールとして表示される。心の硬さのそれぞれの構成特性は、強すぎると新しい可能性の発見や新しい経験へのスタートを困難にさせることがある。男女別の各下位尺度平均値よりも高い得点を示す下位尺度があるとき、これに対してアドバイスを表示する。　（ながなわ　ひさお）

【文献：島田睦雄(2007)中高年求職者の職務遂行能力の評価,産組心23回大会論文集；長縄久生(2006)中高年齢者の作動記憶,日心70回大会論文集,pp854.】

ＥＡＰにおける復職支援プログラムの効果評価

― ストレスマネジメントスキルの習得を中心に ―

○矢野優人[1)]　大野太郎[2)]
([1)] 関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科　[2)] 関西福祉科学大学健康福祉学部)

キーワード：EAP（Employee Assistance Program），復職支援プログラム，うつ病休職者，ストレスマネジメント

【問題と目的】近年，勤労者の抱える「ストレスの増加」，それによって引き起こされる「休職者の増加」などの問題が指摘され，職場のメンタルヘルスへの取り組みの強化が国の重要な政策課題となってきており，特にうつ病休職の職場復帰支援は重要な取り組みの一つとして取り上げられている。しかし，小規模事業所や個人事業の場合には，職場復帰支援を支える十分な人材が確保できないなどの問題点も多い。その解決策の一つとして，近年事業場外資源としての「従業員支援プログラム（Employee Assistance Program：EAP)」が注目されてきており，産業保健スタッフが十分に配置できない事業所では，EAP などの事業場外資源による職場復帰支援プログラムの活用が必要となってくる。ここ数年では，病院やクリニック，障害者職業総合センターや民間団体などで，うつ病休職者を支援するためのプログラムが用意され出しているが，まだ十分に普及していないのが現状である。さらに，職場復帰支援のためのプログラムも確立されているとはいえず，プログラムの効果を測定している実証的な研究も報告されていない。

よって本研究では，KF 大学付属の研究所として EAP 活動の実践と研究を行っているＡ研究所の復職支援プログラムの効果評価を行い，特にストレスマネジメントスキルの習得を中心にプログラムの効果を検討することを目的とする。

【方法】プログラムの構成　グループカリキュラムとして週に 9 コマ，1 コマ 50 分のカリキュラムが行われた。以下に基幹カリキュラムを示す。1）グループミーティング，2）認知療法，3）ストレスマネジメント，4）ボディワーク，5）アサーション・トレーニング，6）リラクセーション，7）キャリアセミナー，8）生活習慣チェック。個別カリキュラムとして，随時ワークエクササイズが行われた。なお，リラクセーションは週に 2 コマ，1 コマ 30 分で行われた。

対象者　2006 年 10 月から 12 月の間にプログラムに参加した 7 名（すべて男性）を対象者とした。対象者のうち，すべてのカリキュラムを受けている 4 名（20 代～40 代，平均年齢 33.0 歳，SD11.3）を介入群，一部のカリキュラムのみ受けている 3 名（20 代～30 代，平均年齢 31.3 歳，SD5.5）を対照群とした。対象者はすべて会社員であるが，抑うつ状態を主症状とされ休職中であった。

手続き　プログラムに参加する前（pre），プログラムを終了した後（post）の時点で自記式調査を行った。また，介入群にはプログラム終了後に半構造化面接を実施した。

測定尺度　1) DACS（福井，1998），2) JIBT-R（福井，2003），3) SMSE-20（山田・大野他，2001），4) AMS（伊藤，1998），5) KiSS-18（菊池，1988）。なお，1）2）においては，得点の減少が改善を，3）4）5）においては，得点の増加が向上を意味する。

半構造化面接　面接は筆者によりプログラム終了後 3 週間以内に行われ，面接時間は約 20 分であった。面接内容は主に「復職支援プログラムに参加してどのようなことを学んだか」,「自分のどのようなところが改善できたと感じたか」,「ストレスを感じたときどのように対処するようになったか」,「今後のプログラムに期待することは何か」であった。

【結果】本研究では，A 研究所の復職支援プログラムの効果を，特にストレスマネジメントスキルの習得を中心に検討した。1）DACS において，介入群ではプログラム参加後に得点の減少が見られたのは 3 名，増加が見られたのは 1 名であった。対照群では得点の減少が見られたのは 1 名，増加が見られたのは 2 名であった。2）JIBT-R において，介入群ではプログラム参加後に得点の減少が見られたのは 2 名，増加が見られたのは 2 名であった。対照群では得点の減少が見られたのは 1 名，増加が見られたのは 2 名であった。3) SMSE-20 において，介入群ではプログラム参加後に得点の増加が見られたのは 4 名であった。対照群では得点の増加が見られたのは 1 名，減少が見られたのは 1 名，変化なしが 1 名であった。4）AMS において，介入群ではプログラム参加後に得点の増加が見られたのは 3 名，減少が見られたのは 1 名であった。対照群では得点の増加が見られたのは 2 名，残り 1 名には回答に不備が見られたため，対象より除外した。5）KiSS-18 において，介入群ではプログラム参加後に得点の増加が見られたのは 3 名，減少が見られたのは 1 名であった。対照群では得点の増加が見られたのは 2 名，減少が見られたのは 1 名であった。

半構造化面接においては，「認知療法やアサーション・トレーニングが非常に役に立った」，「自分の考え方の癖がわかった」，「合理的な考え方ができるようになった」，「アサーションを意識すればうまく自己主張できるのだということを学んだ」，「ストレスと付き合う方法について，頭ではわかってきた」，「ストレスを感じたときに，今までは自分の中で溜めていたが，誰かに相談できるようになってきた」などの回答が見られた。

【考察】結果より，1）認知療法は，否定的な自動思考の改善に効果的であることが推測される，2）ストレスマネジメントは，ストレスマネジメントに対する自己効力感の向上に効果があることが推測される，3）アサーション・トレーニングは，アサーティブ・マインドの向上，ソーシャルスキルの向上に効果があることが推測される，といった諸点が窺えた。よって，今回の対象者において，プログラムは認知療法，ストレスマネジメント，アサーション・トレーニングのカリキュラムを通し，参加者の否定的な自動思考の改善，ストレスマネジメント自己効力感の向上，アサーティブ・マインドの向上，ソーシャルスキルの向上といったストレスマネジメントスキルの習得に効果が期待できると考えられる。

以上，A 研究所における復職支援プログラムのストレスマネジメントスキルの習得に関する効果の評価を試みた結果，うつ病休職者を対象とした復職支援プログラムの有用性が窺えた。しかし，復職支援プログラムにおけるストレスマネジメントスキルの習得は，症状の再発予防を目的に実施されているため，本研究の効果評価では十分とはいえない。つまり，フォローアップ期間を設け，プログラム効果の持続性を検討することが，ストレスマネジメントスキルの習得における効果評価には不可欠である。よって，今後は対象者の人数を十分に確保した上で，追跡研究を行う必要があるだろう。

（やの　まさと）

職業-家族生活の調整に関するPAC分析

—専門的スキルを有する既婚女性のパートタイム労働者としての再就職—

○石橋里美　　内藤哲雄
（ 株式会社市場価値測定研究所 ）　（信州大学人文学部）

キーワード：ワーク・ライフバランス，キャリア・カウンセリング，PAC分析

【目的】近年、「ワーク・ライフバランス」、「雇用の多様性」への必要性が高まり（平成18年版労働経済白書）、民間企業組織等においても制度の構築が検討されるようになった。一方、個人の側においては、所属企業組織の変革や社会的変化等、外部環境要因に拘わらず、仕事と仕事以外の生活をどのように調整していくかが問題となる。とりわけ、既婚女性の再就職においては、家族成員としての役割に加え、職場での役割を持つようになることから、調整が順調でない場合は役割葛藤が起こりうる。大和（2005）は、既婚女性の再就職における、職業と家族生活の調整は「家族的要因（経済的要因・育児にどの程度手がかかるか）」と「女性個人のキャリア追及の要因」でなされることを明らかにし、時代背景に規定されることを示唆した。しかし、両要因の影響の強さは、一個人の職業的経験の中でも変化していくと考えられる。個人の職業的キャリア開発支援の場面では、クライエントにこのような節目を自覚的に捉えるような援助が必要であり、職業能力開発を促進していく上でも重要な課題である。

本研究では、個人内部の変容に焦点をあてた。PAC分析（内藤,1997）の手法を用い、家族と職業生活の調整に及ぼす、「家族的要因」と「女性個人のキャリア追及の要因」の影響を検討することを目的とした。

【方法】 被検者：研究の趣旨に同意したパートタイム従事者女性、30 代後半、薬剤師の資格を取得し、製薬会社に入社、5 年間勤務後、結婚を機に退職。子供は二人（第一子：小学校1年生、第二子：5 歳）。1年前より、人材会社登録直後の紹介により、調剤士として復職。勤務条件は週 3 日、1日 4 時間（9:00～13:00）。手続き：「再就職する前と後では、あなた自身にどのような変化がありましたか。また、現在の再就職先で働くことが、あなたのライフサイクル、これからの人生、将来にどのような意味を持つと感じますか。あなたの家族とのかかわりについてもイメージしてください。思い浮かんだ順に、一つ一つカードに記入してください。」と教示しPAC分析をおこなった。

【結果と考察】 重要順位（項目の番号）、クラスター及び単独イメージの結果は表1の通りであった。（+）が 25 項目、（−）が 4 項目、（0）が 7 項目で構造全体ではプラスのイメージが強い。

《被検者によるクラスターの解釈：抜粋》

クラスター1：働く意味、意義が現れている気がする。（ウーン）実際に働いてみたときの利点。

クラスター2：今後、自分がどうしたいのかが、ちょっと見えてきている、自分が現れている感じ。

クラスター1～2間の比較：上はあくまでも家族にとって私が仕事をすることの利点、家族との関わりは実際どうなったか、仕事を続けていく上で、どうしたらいいのか、どうすれば、より家族にもいい意味で、仕事を続けることができるかな、ということ、……下は完全に家族をとっぱらって、私個人の意見。

補足質問「仕事内容をどこまでステップアップさせるかは今後の状況次第」：管理薬剤師になっていくのか、調剤でとどまるのか、その先、どうするのかということ、……①レベルが低い調剤業務のままか、もっとステップアップして任せられるところに移るかは、家族の状況しだい……。**「今の職場のイメージは白・緑」**：②薬局の入り口の看板なのかな……大きいパネル…空間が緑っぽく感じるような、床が緑で白衣が白だから白（↑）……私が白・緑をイメージしたことは、職場の居心地がいいからかも……。

《被検者についての総合解釈》

クラスター1は、仕事と家庭の調整や、職場適応後に感じた家族への利点でまとまっており、*<家族的要因による職業と家族生活の調整>*と命名した。クラスター2は、*<職業的キャリア形成願望への気づきと将来的展望>*と解釈した。クラスター構造から全体を検討すると、クラスター1と 2 は「仕事内容をどこまでステップアップさせるかは今後の状況次第」と「今の職場のイメージは白・緑」とで結節している。補足質問での下線部②から、白は薬剤師（仕事）を、緑は薬局（職場）を象徴し、その象徴物（パネル）は被検者の目の前に大きく存在していることが示されている。連想項目、「学生時代の勉強をもう一度やってみたい」等の反応を合わせて考えると、被検者は仕事そのもの、職場環境の両方に適応し、「働く」ことがアイデンティティ確立のための重要な要素となっていると解釈できよう。

これらの結果から、「家族的要因による調整」を経て、職場適合し、次いで「自己のキャリア追及による調整」へと、被検者の優先する要因が移行していく過程が示されたといえよう。また、下線部①の自己開示から、被検者は、職場適応後の一つの節目にあると解釈することができる。キャリア開発においては、新たな目標の設定への支援を開始する時期にあると予測することができる。本研究結果は、実際のキャリア・カウンセリング場面でも応用可能であり、PAC分析の有効性を示すものといえよう。

表1. クラスター・重要順位・単独イメージ

	連想内容
クラスター1	1.今現在は家庭が上手くまわるようにするのが一番大切だから差しさわりない程度に働くように調整するのに気を使っている（0）
	2.外で働くことは総合的に見て楽しいと感じる（+）
	8.私は外で働くことが自分のバランスをとるのに役立つ要素の一つだと思っている（+）
	16.夫が働くことにとても理解があるので助かっている（+）
	5.子供にも「母親」も母以外の顔があるということをいつか or 次第に理解させていくのにいいと思っている（+）
	9.今の職場はこれからの仕事の基となる場所（+）
	10.人は誰でも働くもの（専業主婦でも）親が働いている姿を子供に見せ伝えたい（+）
	3.仕事内容が生活にすぐ役立つものだったので家族にも利益がある（+）
	6.身内をサポートできる仕事でいいと思えるようになりたい（+）
	4.私自身、子育てが一段落したときの生活のペースを築けそう（+）
	7.働くことが家族に役立って欲しい（+）
	15.働くべきタイミングと条件はくる時はくる。それを見逃さないようにしないと（+）
	19.家庭、ご近所さんの他にもう一つ居場所が増えた感じ（0）
	18.主婦業に行き詰った時、別の角度から考えられるようになった（+）
	21.仕事内容をどこまでステップアップさせるかは今後の状況次第（0）
クラスター2	13.今の職種で私は満足しているが、このままではいけないと思う（+）
	24.状況が整えばもっと働きたい（+）
	14.色々な人がそれぞれの事情で外で働いたり働かなかったりしていると思う（+）
	37.私の親は私が働くことはいい事だと言っているが、夫の親は興味がないようだ（−）
	29.収入は使わないで、今のところ貯金したい（+）
	30.働けない事情がない限りずっと働きたい（+）
	27.友人も働いている人が多い。励みになる（0）
	11.考えているだけではいつまでもダメなんだと思った。ほんのわずかでも行動しないと。（+）
	35.相変わらず色んな患者さんがいるな、と。（+）
	34.職場の改善点はあるが、それは言えない
	32.案ずるより産むが易し（+）
	12.以前より、時間のやりくりはキツくなったが、できちゃうもんだな—と発見（+）
	26.ブランクがあるとこんなにもついていけなくなるのかよく自覚できた。（0）
	31.子供が生まれる前とは職場を選ぶ基準が違う（−）
	33.一体、いつまで働けるか（−）
	17.子供にどんな仕事をしているのか分かりやすい仕事だった（+）
	25.収入そのものは少しだし、仕事の話をダラダラと話すことも多いとか、色々夫にフォローしてもらうときも多いが、逆に感謝されて意外な分、嬉しかった（+）
	28.学生時代の勉強をもう一度やってみたい（+）
	20.ブランクがなかったら得るものと得られないものどっちもあった（0）
	22.もっと勉強するべきことがあるのでちょっとしたことでもすぐ調べるようになった（+）
	23.外で「働く」体の感覚がよみがえった（0）
	36.今の職場のイメージは白・緑の大きいパネルが思いつく（0）

（いしばし さとみ ・ ないとう てつお）

障害者雇用拡大のための地域環境支援の方策（1）

― 障害者を雇用している事業所の諸条件の確認 ―

吉光　清
（九州看護福祉大学）

障害者雇用　地域環境支援　郵送調査

【研究の目的】　障害者の雇用促進、就業（労）支援は社会福祉施設への「就労移行支援事業」の導入などによって、地域レベルにおける急務となっている。そうした情勢の下では、地域に現存する事業所が障害者雇用に取り組む際の隘路を探り、どのような働きかけや支援が有効かを確かめてゆくことが必要になる。それとともに、事業所を“地域環境”の中で捉え、地域環境への支援を通じて、事業所の障害者雇用の拡大に結びつけようとするアプローチも重要になってこよう。

ここでは、そうした視点に立って、地域内事業所の障害者雇用の現状や関連する状況や現在に至る端緒や経過を、調査を通じて把握して、今後、地域の自然地理的条件、経済産業的条件、社会文化的条件、地方行政的条件などと重ね合わせて、障害者雇用拡大のための地域環境支援の方策を検討することを狙いとした。

【方法】　隣接する二つの市（T市、A市）に所在する事業所を対象に郵送調査を実施した。両市を合わせた人口は 13 万人程度であり、既存の調査報告と対照させ易く、障害者の雇用・就業支援を推進するための圏域としても好適なサイズと考えられた。

調査項目は近接地域で既に実施された調査を踏襲しながら、項目を若干追加した。試みた工夫として、「障害者を雇用中の事業所用」「障害者雇用の経験のある事業所用」「障害者雇用の経験がない事業所用」を色を違えた（それぞれクリーム、ピンク、薄いブルー）独立した調査票（設問数は各 21、22、18）とした。回答者はフェースシートの他に、いずれか一つの調査票を使用することになるが、質問構成が複雑になり、回答者が混乱することを避け、現在状況に応じて質問を深めることが狙いであった。調査票とともに、「ご存知でしたか？」と題した、障害者雇用の法的義務と援助制度を簡単に解説したパンフレットを同封した。回答されなくても、パンフレットを目に触れさせることが郵送調査を行う目的の一つであった。事業所への郵送に当たっては、両市の商工会議所の協力を得た。調査は 2007 年 2 月から 3 月初めにかけて実施した。

【結果】 郵送したのは 958 通、返送されて分析に耐える回答が得られたのは 256 通（26.7%）であった。障害者の雇用義務が生じる「5 人以上の従業員規模」では 194 事業所から回答が得られた。それらの事業所のうち、40 社（21%）が「障害者を雇用中」、25 社が「障害者雇用の経験がある」、129 社が「障害者雇用の経験がない」であった。(Fig.1.)

ここでは「障害者を雇用中」の 40 社の結果を総括する。雇用中の障害者数は「1 名」が 22 社（55%）と最も多く、「2 名」が 6 社、「3 名」が 5 社であった。「10 名－19 名」が 1 社、「20 名以上」が 1 社であった。障害種類について見ると、「身体障害者のみ」が 29 社（73%）、次いで「知的障害者のみ」が 4 社（10%）、「身体障害者と知的障害者」が 2 社、「3 種類の障害者」、「精神障害者のみ」などの他の組み合わせはそれぞれ 1 社であった。障害者を雇用している理由としては Fig.2. に見られるように、21 社（53%）が「社会的責任」を掲げ、「労働力」を 18 社、「法律遵守」を 16 社が掲げた。

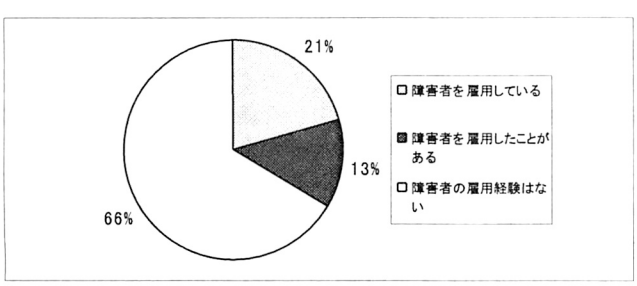


Fig. 1. 障害者雇用の状況

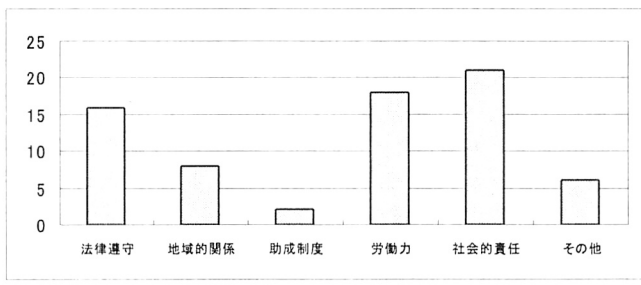


Fig. 2. 障害者雇用の理由

障害者を雇用した契機については「ハローワーク」が 15 社（38%）で「養護学校」「親戚・知人」「施設」「実習を通じて」などは 3 ～ 4 社であった。そのときの障害種類は「身体障害者」が 30 社（75%）、「知的障害者」が 7 社（18%）、「精神障害者」が 1 社（3%）となっていた。その際に、重視した点は「特になかった」が 18 社（45%）、次いで「スピード・能率に問題がない」が 12 社（30%）であった。何らかの制度を利用したのは 30 社（75%）、配慮した事項で最も多かったのは 18 社（45%）が挙げた「社員の理解促進」であった。

【考察】 地方都市では規模の小さい事業所がほとんどであり、複数の障害者を雇用している割合は少ない。多数の障害者を雇用しているとの回答は実のところ、他地域に所在する本社や工場での雇用者数を合わせて回答したものと考えられた。

雇用開始時から現在の雇用まで、「身体障害者」だけの例が多く見られた。したがって、職場の中で一人あるいは少人数の障害者が就業することを前提に、障害特性が異なる障害者の雇用にも踏み込めるように、事業所と本人の双方を支援するシステムやノウハウの提供が求められよう。

障害者雇用の理由として、「社会的責任」や「法律遵守」と並び、「労働力として」を重視することも見られた。規模が小さい事業所ほど従業員 1 人分の働きがより重さを増すものであることを窺がわせる。また、障害者雇用を開始したきっかけが公的機関で、その際に何らかの制度が利用された割合も高まってきている。その周知と拡充に加え、一般従業員を取り巻く“地域”に対する啓発の工夫が重要と考えられる。

【文献】

吉光清・甲斐正法 2006　障害者雇用に係る地域環境支援に関する調査から－新たな調査計画を目指して－、職業リハビリテーション研究発表大会論文集 328－331

（よしみつ きよし）

産業組織の安全文化レベルに関する調査研究

― 同一企業内事業所間の比較 ―

○奥村 隆志[1)] 余村 朋樹[1)] 細田 聡[1,2)] 施 桂栄[1,3)] 井上 枝一郎[1,3)]
([1)] 財団法人 労働科学研究所 [2)] 関東学院大学文学部 [3)] 関東学院大学人間環境学部)

キーワード：産業組織、安全文化、事業所間比較

【研究の目的】 安全文化を醸成するのが組織事故の防止・減少へと繋がると言われて久しい。ここ数年、我々は安全文化を組織の従業員が自己診断するツール（以後、SCAT と呼ぶ）を開発した。これを、原子力発電業界、製造業、病院関連、建設業等、幅広い業種に適用することでデータを取得し、ツールの妥当性に関する調査を実施してきた（余村,2005)。

今回はある１つの産業組織を調査対象とし、同一企業内事業所間に安全文化のレベルに差があるか否かを検討する。これは、不祥事や事故等が発生すると産業組織には対策が求められるが、果たして企業内で同一の対策の効果的であるのか、それとも事業所毎の独自の文化に合った対策を講じる必要があるのかという視点から試みるものである。

【方法】 調査対象は製造業の１企業とし、全 10 事業所のうち、7 事業所で実施した。その内、比較的、設備や生産体制が類似している 1,500～2,800 名規模の 4 事業所（A,B,C,D 事業所）の結果を比較検討した。各事業所には安全部署が存在し、安全に関しての運用・管理をある一定程度、独自で行い、本社の安全部署は各事業所のメタ管理の役割を担っているという特徴を有する。調査方法は安全部署の構成員に SCAT の主旨を説明した後、調査票を安全部署に送付し、全従業員への送付、回収をお願いした。結果、4 事業所の全従業員数 9,987 名中、有効回答数は 8,130 名（有効回収率 81.4%）であった。

【結果】 表１に各事業所の SCAT 結果を示す。まず、表に示す４つの属性について説明する。SCAT は２つの評価指標により組織の安全文化を評価する仕組みとなっており、その１つが評定値得点（得点の高低)、もう１つが共有性得点（自己評価と他者評価とのギャップ）である。両指標とも偏差値で示し、評定値得点が平均を上回るものを E 型、下回るものを e 型とする。また、共有性得点が平均を上回るものを S 型、下回るものを s 型とする。これにより、両指標の型を組み合わせ、SE 型、Se 型、sE 型、se 型の４つの型に分類できる。

表１ 各事業所の SCAT 結果

事業所	A	B	C	D
総合評価	SE	SE	SE	SE
安全声明	SE	se	SE	SE
安全と生産性	SE	SE	SE	SE
規則・文書類	se	SE	sE	SE
責任・権限・役割	SE	SE	SE	SE
不具合処理	SE	SE	SE	SE
教育・訓練	SE	SE	SE	SE
情報経路	SE	SE	SE	SE
作業条件	SE	SE	SE	SE
制度・活動	se	SE	SE	Se
外部との協力	SE	SE	SE	Se

結果、各事業所の総合的な評価は両得点とも高いことから、体制や制度に対して従業員が積極的に働きかけ、かつ自己と他者の評価が一致し、良好な結果であると言える。ただし、内容（分野）毎に結果を整理すると、A 事業所は「規則・文書類」、「制度・活動」が両得点とも低い se 型、B 事業所は「安全声明」が両得点とも低い se 型、C 事業所は「規則・文書類」が共有性得点の低い sE 型、D 事業所は「制度・活動」、「外部との協力」が評定値得点の低い Se 型となっており、安全管理上、脆弱点と考えられる型（Se 型、sE 型、se 型）および分野は事業所によって異なることが示された。

これら４つの分野について、分散分析を行った結果、各分野とも事業所間の有意差が認められ、多重比較（Scheffe 法）を行った（表 2)。その結果、A 事業所の「規則・文書類」、「制度・活動」、B 事業所の「安全声明」、C 事業所の「規則・文書類」、D 事業所の「制度・活動」、「外部との協力」は他の事業所と比較し、有意に低い評価であった。これは事業所間で有する安全上の内包する問題に差が認められたと考えられる。

逆に、4 事業所とも SE 型（両指標とも高い評価）であった分野に対して分散分析を行った結果、各分野とも事業所間の有意差が見られた（表 2)。共に SE 型に属するが、「作業条件」の評定値得点は 4 事業者間に有意差が認められた。一方、「安全と生産性」は A 事業所が他事業所より有意に評価が低い傾向は見られたが、B,C,D 事業所には有意差は認められず、安全と生産のバランスの図り方は事業所によって大きく異なるとは言えない結果であった。以上より、各事業所が同様に安全部署を有する産業組織であっても、「安全と生産性」のように共通している側面も存在すれば、「規則・文書類」のように独自の様態を有しており、両者が混在している結果であった。

表 2 分散分析および多重比較結果

SCAT 結果	評価指標	分野	分散分析結果 F値	多重比較結果 (α=.05)
SCATの結果がSE型以外を含む	評定値得点	安全声明	713.13***	C>A>D>B
		規則文書	296.34***	B>D>C>A
		制度活動	402.96***	B>C>D>A
		外部協力	193.89***	B>A>C>D
	共有性得点	安全声明	266.13***	C>A>D>B
		規則文書	241.03***	B>D>C>A
		制度活動	145.00***	B>C、D>A
		外部協力	118.79***	B>A>C、D
SCATの結果がSE型のみ	評定値得点	安全生産	99.41***	C,B>A、B,D>A
		責任権限	15.70***	D>B,C、A>A,C
		作業条件	129.18***	B>C>A>D
	共有性得点	安全生産	58.93***	B>C,D>A
		責任権限	36.57***	D>A,C>B
		作業条件	23.06***	B>A,C、B>A,D

*** : p<.001

【考察】 同一企業内でも事業所によって異なる安全の側面を有することを示したのは有益であった。不祥事、事故の対策を講じる上では、産業組織で共通した対策を講じることが必要であるが、各事業所の特徴に合わせた対策を立案する必要があると考えられる。言うまでもなく、今回は製造業の１企業を対象に限定したものであり、今後、他の業種および複数の企業において検証していく必要がある。

【引用文献】 余村朋樹・細田聡・施桂栄・井上枝一郎 2005 安全文化評価ツールの妥当性の検証-現場実態面接調査- 日本心理学会第 69 回発表論文集

（おくむら たかし・よむら ともき・ほそだ さとし・し ぐいろん・いのうえ しいちろう）

健康・美容関連商品の効果に対する推論と購買の傾向(1)

－消費者は本当に健康に効果があると思って買っているのか－

○花尾　由香里[1)]　岡村　一成[1)]
([1)] 東京富士大学経営学部)

キーワード：消費者心理，推論，広告表現

【研究の目的】 消費者が商品を購入する際には，常に合理的に商品の品質や機能を推論し，意思決定を行っているわけではない。広告や表示等で訴求されている以上に過剰な効果を期待したり，関連のない商品属性から品質を推論することがある(Brown&Carpernter,2000;花尾・岡村,2005;吉川・菅原・岡本,1993)。これまでの研究から，消費者が商品の品質や機能を推論する際の傾向や推論の類型については徐々にわかりつつあるが(Meyvis&Janiszewski,2002;Muthukrishnan&Kardes,2001)，それらの推論の傾向が，商品の購買とどのような関わりがあるのかということについてはまだよくわかっていない。そこで本研究では，消費者の商品の効果に対する推論と購買の傾向に焦点をあて，どのような関連がみられるか探索的に調査を行った。

【方法】 「健康・美容関連商品の表示に関するアンケート」と題し，大学生 168 名(男性 117 名,女性 46 名,不明 5 名)を対象に質問紙調査を行った。調査の題材に健康・美容関連商品を選んだ理由は，多様な商品が販売されており，消費者が広告や表示等に接触する機会が多いと思われるためである。質問紙の内容は，健康・美容関連商品の購入に対する考え方と傾向(9 項目)，健康・美容関連商品の表示に対する考え方(9 項目)などから構成した。回答は，6 段階の評定尺度を用いた。調査時期は，2007 年 6 月である。

【結果】 健康・美容関連商品の購入に対する考え方と傾向(9 項目)と表示に対する考え方(9 項目)の計 18 項目について因子分析を行った。因子負荷が 0.34 に満たなかった 3 項目を削除し，再度，最尤法，プロマックス回転による因子分析を行った。因子数は，固有値 1.0 以上を基準として決定した。因子分析の結果と各項目の平均値を Table1 に示した。

第 1 因子は，科学的な証明や政府機関から認可されている商品を信用する傾向をあらわしたものだと考えられるため，「科学証明重視因子」と名づけた。第 2 因子は，科学的な証明よりも効果が期待できるかどうかを重視する傾向をあらわしたものだと考えられるため，「科学証明軽視因子」と名づけた。第 3 因子は，実際に効果が得られるかに関係なく購入する意向をあらわしたものだと考えられるため，「効果無関心購入因子」と名づけた。第 4 因子は，継続的に購買や使用をすることによって効果が得られることを期待する傾向をあらわしたものだと考えられるため，「継続的購入意向因子」と名づけた。第 5 因子は，広告や表示の表現内容に対する不信感を表しているものだと考えられるため，「表示不信感因子」と名づけた。

【考察】 健康・美容関連商品に関して，消費者は，表示に対する不信感をもっていたり，効果が科学的に証明されているかどうかを重視する傾向がある一方で，科学的証明をあまり重視しない傾向や効果が本当ではなくても試してみるという傾向があることがわかった。このことは，効果に対する確信を得なくても，購入し試してみることによって自身で効果を確かめようとする意図や実質的な効果があるかどうかは購入の重要な要因ではないとする意図が反映されたものだと考えられる。長期的・継続的に使用しなければ，健康・美容関連商品の効果は得られないという考えもあることがわかった。

【引用文献】

Brown, C. L. & Carpenter, G. S. (2000) Why is the trivial important? Journal of Consumer Research, 26, 372-385.

花尾由香里・岡村一成 (2005) 消費者の商品便益の推測 (1) 産業組織心理学会第 21 回大会発表論文集, 103-106.

吉川肇子・菅原康二・岡本真一郎 (1993) 広告表現からの推論 (1) 日本社会心理学会第 34 回大会発表論文集, 246-247.

Meyvis,T.&Janiszewski,C.(2002)Consumers' beliefs about product benefits. Journal of Consumer Research, 28, 618-635.

Muthukrishnan, A. V. & Kardes, F. R. (2001) Persistent preferences for product attributes. Journal of Consumer Research, 28, 89-104.

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	平均値	SD
厚生労働省が認可した商品であれば信用できる	**1.00**	-0.13	0.02	-0.13	-0.03	4.00	1.35
特定保健用食品という表示やマークが付記されていれば信頼できる	**0.90**	-0.08	-0.04	-0.11	-0.01	3.93	1.29
臨床実験などで効果が確認されたものは信用できる	**0.45**	0.06	-0.10	0.26	0.06	4.05	1.29
科学的に証明された商品を購入したい	**0.38**	0.15	0.17	0.05	0.23	4.26	1.33
科学的に証明されていなくても効果が期待できるのであれば購入したい	-0.07	**1.07**	-0.02	-0.15	-0.06	3.69	1.42
科学的に証明されていなくても効果が期待できる商品はある	-0.09	**0.56**	0.05	0.05	-0.03	3.42	1.34
表示されている内容が本当かわからなくても試したい	-0.06	-0.02	**1.06**	-0.07	0.13	3.94	1.32
実際に購入した後に効果が感じられなくても再び購入したい	0.05	0.08	**0.40**	0.10	-0.15	2.43	1.37
健康美容商品は長期的に使用することで効果が出る	0.06	0.05	0.01	**0.74**	0.09	4.37	1.14
健康美容の効果が出なければ商品購買を止める	0.25	0.23	-0.03	**-0.62**	0.13	3.61	1.44
健康美容商品は毎日続けなければ効果が得られない	0.12	0.15	-0.07	**0.54**	0.13	4.67	1.22
健康美容商品には表現が過剰であるものが多い	0.01	-0.06	0.12	0.06	**0.56**	4.90	1.17
実際に販売されている商品であれば表示されている内容に間違いはない	0.25	0.07	0.07	0.06	**-0.54**	3.46	1.05
健康美容商品には科学的に証明されてない効果を表示してるものがある	0.15	0.00	-0.02	0.00	**0.44**	3.93	1.26
広告や商品に表示されている内容を信頼してしまう方である	0.12	0.04	0.28	0.18	**-0.34**	3.58	1.27

Table 1.　健康・美容関連商品の効果と購買の傾向についての因子分析結果

在職者のストレスに関する研究

― 研究の取り組みと方向性について ―

森下高治
（帝塚山大学大学院臨床社会心理学専攻　同大学心理福祉学部）

キーワード：ストレッサー、ストレス反応、コーピング行動

【研究の目的】　ストレスについて、これまで多くの識者によって考え方が提示されているが、Lazarus, R. ら（1984）のモデルは非常にわかりやすいことで知られている。在職者にとって、日常生活で惹起されるストレスの多くは、職場、仕事での心理的ストレッサーがその原因であると考えられる。本研究は、ストレスの原因変数の①ストレッサーと結果変数の②ストレス反応、それを結びつける媒介変数の③ストレスコーピングの問題を取り上げる。

問題１．在職者男女によるストレッサーとストレス反応の関連について

問題２．個人がストレス事態で対処する行動スタイル（問題焦点型、情動焦点型の積極的コーピング、回避・逃避の消極的コーピング）により、ストレス反応が異なるかを検討する。

問題３．対ひととの関わりのある共感コーピングについて、職場や仕事の悩みや不満などのストレス源を女性は周囲に打ち明ける傾向がある。そのためにストレス反応と共感は、男性より関わりがあることが予想される。

【方法】対象：建築・資材関係、印刷関係（営業・事務）、宅配関係　（配達・分別・事務）などに所属する合計 94 名の在職者を対象とする。調査実施日：2006 年 4 月から 5 月にかけて実施。分析対象者数　男性 62 名、女性 26 名の合計 88 名。調査票は、尾関（1993）の大学生用ストレッサー（在職者用に改訂）、ストレス反応尺度、コーピング尺度を用い、加藤（2002）が作成した共感的コーピング尺度も加えた。

【結果および考察】

問題1. 在職者男女によるストレッサーとストレス反応の関連　まず男女込みで両者の相関を求めたところ、ストレッサー全体とストレス全体では、R＝.643, 下位尺度の情動ストレスとではR＝.604, 認知とはR＝.532, 身体とはR＝.463 情動がストレッサー全体と最も相関が高く、認知、身体の順であった。ここでは、ストレッサーが高ければストレス反応も高くなることが確認されたが、次にストレッサーの 5 つの下位領域では仕事・職場に関するストレッサーに着目したところ、仕事のストレッサーは男女ともに他の群に比べ数値が高く、ストレス反応も高かった。男性は認知・行動的反応以外の全ての群に有意な差がみられ、女性も男性同様、認知・行動的反応以外の全ての群に有意な差がみられた。有意でなかった認知・行動的反応は、話や行動に落ち着きがない、人と話すことがわずらわしいなどが含まれるため、在職者にとって話すこと、人と接することは必要不可欠であるゆえ有意な差がみられなかったと考えられる（Tab.1 参照）。

Tab.1　ストレッサー（職場・仕事）上位群と下位群にみられるストレス反応

男性		全体		情動		認知		身体	
	N	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
仕事　上位群	31	0.73	0.45	0.78	0.60	0.68	0.46	0.68	0.55
下位群	31	0.45	0.39	0.45	0.48	0.38	0.41	0.53	0.51
t値		11.56 ***		12.86 ***		0.74		5.11 ***	

問題2. ストレス事態でどのような対処行動をとっているか、各群の抽出方法として、積極的コーピングは一項目あたりの得点に換算し、消極的コーピングとの差が大きいものを 22 名（全体の 1/4）取り出した。消極的も同様な方法で抽出した。その結果、積極的コーピングと消極的コーピングの両群における男女のストレス反応の違いはみられなかった（Tab.2 参照）。

次に、高ストレッサー事態におけるそれぞれの対処行動にみるストレス反応について検討すると、高ストレッサー群（N＝44）の対処行動の違いは、問題、情動焦点型の積極的コーピングは平均値がほぼ 1.65 に対して、回避型は 1.35 である。逆の低ストレッサー群（N＝44）は情動焦点が 1.41 で一番高く、問題焦点と回避型はほぼ 1.25 で低かった。

そこで、本研究では対象人数の制約から①問題焦点行動を中心とする対処タイプ、②積極的（問題、情動）対処行動を中心とするタイプ、③3 つの混合対処行動にみるタイプから今後の方向性を見ようとする。

問題焦点対処タイプのストレス反応は、積極的なコーピング行動のためにストレス反応は比較的低い。

情動 0.69、認知 0.70、身体 0.83　全体 0.73

また、二つを含む問題及び情動の積極的対処タイプは、

情動 0.72、認知 0.38、身体 1.00　全体 0.70　特に、このタイプは情動が含まれるため対ひととの認知ストレス反応が低い。さらに、3 つの混合対処タイプでは、

情動 0.89、認知 0.67、身体 0.80　全体 0.80　このタイプは、すべての対処行動をとるため比較的低い。

これに対して、情動、回避の積極的、消極的対処タイプは、

情動 1.48、認知 1.03、身体 0.92　全体 1.19　当該タイプは、いずれの対処タイプに比し最もストレス反応が高く表れている。

Tab.2　積極的コーピングと消極的コーピングにみるストレス反応結果

男性		全体		情動		認知		身体	
	N	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
積極群	22	0.60	0.29	0.61	0.45	0.45	0.38	0.73	0.48
消極群	22	0.52	0.42	0.56	0.53	0.46	0.50	0.52	0.41
t値		0.72		0.33		0.07		1.52	

問題3. さらに、対人的なコーピングとストレス反応について、男女による相関係数を求めた。その結果、男性のストレス反応の総得点と共感的コーピングの総得点、下位尺度の認知・情動的、行動的コーピングの相関、ストレス反応の情動的、認知・行動的、身体的反応とコーピングの相関はすべて低く、両者の関係はなかった。一方、女性のストレス反応の総得点と共感的尺度の総得点は関わりがなかったのに対して、下位尺度の認知・情動的コーピング尺度とストレス反応総得点の相関は r ＝-.246 になった。情動とは r=-.263、認知とも　r =-.295（P＜.10）で相関があったが、行動的尺度とは相関がなかった。しかし、男女それぞれの数値を比較すると、女性の数値の方が高く出ていることから、女性の方が共感的コーピングの数値が高ければストレス反応が低くなるという傾向が示された。実際、コーピングに関わるストレスについて、どのようなことにストレスを感じるかの記述は、仕事・職場以外の事柄もみられた。

【引用文献】

・尾関友佳子　1993　大学生用ストレス自己評価尺度の改訂 ―トランスアクショナルな分析に向けて― 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1 ,95-114.

・加藤司　2002　共感的コーピング尺度の作成と精神的健康との関連性について　社会心理学研究　第 17 巻第 2 号, 73-82.

本研究のデータは、井上史子氏（流通科学大学 2007 年 3 月卒業）から提供を受けた。感謝の意を表します。

（もりした　たかはる）

日本における介護支援者としてのFOWの社会心理学的研究（1）

—高齢者介護支援者としての比国人の心理的適性の研究—

○荻野　七重[1)]　齊藤　勇[2)]　山田　竜平[3)]
([1)] 白梅学園短期大学心理学科　[2)] 立正大学心理学部　[3)] 立正大学大学院心理学研究科)

キーワード：介護支援、FOW、比較文化

【研究の目的】急速な少子高齢化社会を進みつつある日本において高齢者介護の問題は緊急な事案である。特に高齢者介護に当たる介護支援者の数的不足は多くの有識者やマスメディアから大きな懸念を示されている。この不足を補う一つの方法として、外国人介護支援者の受け入れが提案されているが、政府も介護関係者もまた、国民も文化の異なる外国人介護支援者の受け入れは日本にはなじまない、治安が悪化するなどの理由で、積極的ではない。しかし、国内だけでは介護支援者の不足は明らかで、問題が深刻化するだけといえる。先進諸国を見ても、介護サービスに当たる人的資源は外国から求めている例が多い。この介護サービスの人的資源の主要な供給国が隣国比国である。比国人はこのような人的サービス部門において、世界の 50 カ国で働いており、比国人の海外就労者（Filipino Oversea Worker）は比国政府の海外雇用庁によると約800万人とされる。そうした中で、比国の若者、特に女性は、日本の介護職への関心が高く、就労意欲が極めて旺盛である。介護者不足が深刻化するこれからの日本において、不足分を補うに足る人的資源が隣国比国に待機していると考えることができよう。しかし、介護サービスは意欲だけではできない。適性と相応のトレーニングが必要である。

本論で問題とするのは、比国人の介護サービスへの適性であるが、世界各国からの比国人介護者やホームヘルパーなどの人的サービスへの需要は大きく、それも増加傾向にある。このように多くの諸国がサービス関係の人的資源として他の国よりも、より多くの比国人を受け入れていること、それ自体が、比国人が人的サービスに適性があることを示しているといえよう。また、供給側の比国も看護師やケア・ギバー（介護支援者）の養成に力を入れ、多くの大学が看護学部をもち、またケア・ギバーを国家資格として多くの専門校でケア・ギバーを養成している。

本研究は、高齢者介護サービスにおける人的資源としての比国人の受け入れについて、比国人が性格的に、あるいは社会－心理的にも、介護サービスに適性があるのではないかとの仮説を論証していくことにする。その方法として比国人の性格特性と介護サービスに当たる人に必要な社会－心理学的特性とを対応させながら、双方の一致度を検討してそれらのデータをもとに比国人は、介護特に老人介護のサービスに携わる人として、適性があることを明らかにしていきたいと思う。

具体的な研究方法としては、以下に記述するようにケア・ギバーの社会－心理的特性を選び出し、その社会－心理的特性と比国人の社会－心理的特性とを対応させることにより、比国人のケア・ギバーとしての適性をみていくことにした。

【方法】1．ケア・ギバーの適性　ケア・ギバーの適性については、比国のケア・ギバー養成校でテキストとして多用されている Zucker（2003）の『The caregiver's resource book』を参考にし、(1)友好性 (2)敬老性 (3)家族の絆 (4)順応性 (5)勤勉性の５特性をケア・ギバーの適性としてとり上げた。加えて、比国人は英語が流暢で、意思疎通に困難を生じず、コミュニケーション能力に優れているとの指摘が多いので、コミュニケーション能力としての英語力を加えて、６特性とした。

2. 比国人の社会－心理的特性

比国の比国大学、アテネオ大学、ミンダナオ大学などの大学図書館およびマニラ市、ミンダナオ市、セブ市等の市中の書店およびウェブにおいて、比国人の性格特性、価値観などに言及している比国人著者の書籍と比国人の特性に関する記事を 16 件収集し、収集した文献や記事の文中に触れられている比国人の性格特性や価値観を取り上げ、上記のケア・ギバー適性に照合し、言及文献率を算出した。結果の数値はこの 16 文献中、各特性についての言及が見られた文献数の比率を示したものである。

【結果と考察】　(1)友好性　友好性は 11 文献でとりあげられており、言及率 68.75%で二番目に高い。この結果、比国人は人に対して基本的に友好的であり、親和的といえる。比国人の特性として知られるパキキサマは人と仲良くする、友好的にするという対人関係的特性である。この特性は、特に高齢者の孤独感をいやし、不安をなくするのに役立つといえる。

(2)敬老性　16 文献中 37.50%の６文献が比国人の特性として高齢者への敬意をあげている。比国人が介護において発揮する適性の一つは、高齢者に対する比国人の深い敬意、敬老性という特性である。この特性は高齢者の世話をするときに表わされるので、介護支援者としては極めて適切な社会－心理的特性といえる。それは、次の比国人の親密な家族の絆とも関連する。

(3)家族の絆　比国人の家族への思い、家族の絆は極めて強い。16 文献中一番多い 12 文献、75.00%がこの点を記述している。

(4)順応性　外国人での介護サービスには文化が異なるので人間関係に柔軟な対応、つまり順応性が求められる。この特性について 16 文献中 43.75%の７文献が記述している。比国人は原則指向というよりも、状況指向であるとされている。このため、比国人は外国人と仲良くでき、機会に敏感で、柔軟性があるとされている。

(5)勤勉性　介護者となることは十分な忍耐と勤勉性を要し、責任も伴う。しかし、前述したように比国人は家族の絆が強く、故郷にいる家族や兄弟のために働き送金するように強く動機づけられている。そのことが、比国人を勤勉に努力するようにさせていると推察できる。16 文献中 43.75%の７文献が比国人の勤勉性について記述している。

(6)英語力（コミュニケーション能力）　比国人が、海外での介護サービスに歓迎されているのは、比国人のもつ上記のような社会・心理的要因が大きいが、それと同等に比国人の英語能力が高いことが受け入れを容易にしている大きな要因といえよう。現在の比国人にとっては、英語は外国語ではなく、ほぼ母国語と認識されている。16 文献中 31.25%の５文献が比国人の英語力について記述している。

これらの結果は、比国人は６特性いずれにおいてもその特性を有していることを示している。

本研究は、ミンダナオ国際大学、日本フィリピンボランティア協会の協力を得ている。 記して網代正孝氏に感謝する。

（おぎのななえ・さいとういさむ・やまだりゅうへい）

気まずい内容伝達にメールはどの程度有効なのか

濱　保久
（北星学園大学文学部　心理・応用コミュニケーション学科）
キーワード：メールコミュニケーション，気まずさ，対人不安傾向

【目　　的】

メールは日常的に多用されるコミュニケーション手段であるが，その性質上言いにくい内容を伝える場合に有効であろうと思われる。本報告はメールコミュニケーションに関する一連の研究の最初のものである。ここでは、まず，メールの気まずさ低減効果を電話および対面コミュニケーションとの比較を通して明らかにしたい。また，対人不安傾向との関わりについても検証を試みる。

【方　　法】

被調査者：北星学園大学学生 47 名。

質問項目：予備調査で収集した，伝達するのが気まずい内容をつたえる状況を１５場面提示し，それを対面で伝える場合とメールで伝える場合と電話で伝える場合に感じる気まずさの程度をそれぞれ５件法（１：全く感じない～５：とても感じる）で回答させた。いずれの場合もそれほど親しくない同性の友人に伝える場面を想定させた。また，Leary（1983）の尺度を岡林・生和（1991）が翻訳・修正した修正版対人不安感尺度の 14 項目にも回答させた。

【結果・考察】

１．因子分析結果

気まずさの評定値に基づき３伝達手段それぞれについて因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った結果，対面伝達では「対人・集団因子」「不履行因子」「相手身勝手因子」「単純拒否因子」「厚顔依頼因子」の 5 因子を，電話伝達場面では「対人・集団因子」「厚顔依頼因子」「ケチ因子」「不履行因子」「単純拒否因子」の５因子を抽出した。また，メール伝達では「謝罪・お願い因子」「忠告因子」「単純拒否因子」「相手原因損害因子」「簡単解決因子」の５因子を抽出した。対面伝達と電話伝達は若干の違いはあるもののほとんど類似している一方で，メール伝達は独特の因子構造を示していることから，やはりメール伝達は気まずさの低減に関して他の二つの伝達手段にない効果をもつことが示唆される。

表１．メール伝達の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
雑誌購入失敗	.76	.13	-.13	-.01	-.10	.62
借用依頼	.65	.09	.00	-.03	.21	.47
幹事の代役依頼	.61	.19	.16	.13	.22	.51
借物破損	.56	.10	.23	.08	.12	.39
連絡係の依頼拒否	.50	.07	.24	.07	-.22	.36
図書の返却依頼	.47	.38	.34	.18	.35	.63
遅刻への注意	.22	.76	.30	-.05	-.03	.71
態度への注意	.17	.65	.11	.22	.06	.51
友人のノート返却催促	.10	.61	-.04	.37	.06	.53
自転車貸し出し拒否	.06	.19	.80	.09	.30	.78
宿泊依頼拒否	.41	.18	.55	.36	-.05	.63
アドレス不快	-.04	.20	.02	.83	.16	.75
けんかの謝罪	.14	.14	.26	.56	-.20	.47
借金返済催促	.18	-.11	.03	.00	.47	.27
サークル勧誘拒否	-.04	.15	.10	.00	.43	.22
固有値	2.46	1.74	1.39	1.39	.86	
寄与率(%)	16.42	11.58	9.27	9.25	5.74	52.26

２．分散分析結果

伝達手段の違いと伝達者の対人不安傾向が伝達に伴う気まずさに与える影響を明らかにするために，気まずさ評定値に基づき，３（伝達手段：対面伝達，電話，メール）×２（対人不安傾向：高，低）の分散分析を行った。なお，対人不安傾向については，まず，修正対人不安感尺度の 14 場面の評定を合計し，それを被調査者の対人不安得点とした。対人不安得点の平均値は 44.87（*SD* =14.73），最大値は 68，最小値は 15 であった。そして，対人不安得点の最大値から 30%を高対人不安傾向群（以下は HAS 群:High Social Anxiety，*N* =14），最小値から 30%を低対人不安傾向群（以下 LSA 群，*N*=14）とした。

分散分析の結果，「幹事の代役依頼」「連絡係りの依頼拒否」「宿泊依頼拒否」「自転車貸し出し拒否」「サークル勧誘拒否」「雑誌購入失敗謝罪」「借金返済催促」「アドレス未承諾伝達不快表明」「けんか謝罪」「借用依頼」「対先輩態度の忠告」「友人ノートの返却忠告」の 12 場面で伝達手段の有意な主効果が認められた。そこで，多重比較を行った結果，すべての場面で，電話伝達よりもメール伝達の方が気まずくないこと，また，「連絡係りの依頼拒否」「宿泊依頼拒否」「自転車貸し出し拒否」「サークル勧誘拒否」「借用依頼」の５場面で対面伝達よりもメール伝達の方が気まずくないことが明らかとなった。また，「連絡係りの依頼拒否」「借物破損」「借用依頼」「図書の返却依頼」の４場面で対人不安傾向の有意な主効果が認められた。いずれも HAS 群がより気まずいと回答していた。さらに，「幹事の代役依頼」については伝達手段と対人不安傾向の間に有意な交互作用が認められた。そこで単純主効果の検定を行ったところ，HAS 群においては対面伝達，電話伝達，メール伝達の間に有意な差が認められなかったが，LSA 群においてはメール伝達と対面伝達の間とメール伝達と電話伝達の間に有意な差が認められ，いずれもメール伝達の方が気まずくないという結果を示した（図１参照）。対人不安傾向が高い者はいずれの伝達手段でも気まずさを感じる一方で，低い者はメールによって気まずさを低減させることができるようである。

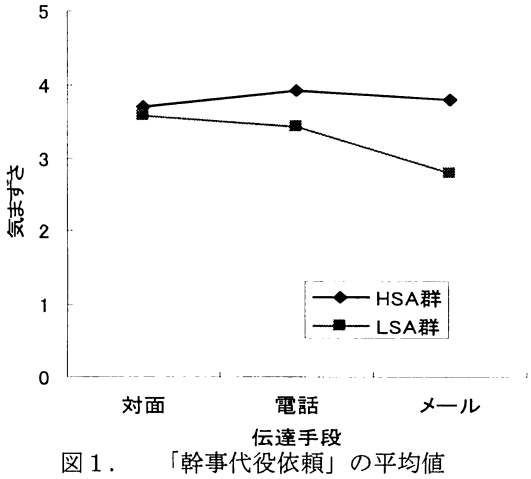


図１．　「幹事代役依頼」の平均値

本研究の遂行にあたって高橋実希氏（現，明治安田生命保険相互会社勤務）の多大なる貢献を得た。ここに記して謝意を表す。
（はま　やすひさ）

日本における介護支援者としてのFOWの社会心理学的研究(2)

― 援助欲求・行動の日比比較文化的研究 ―

○山田竜平[1)]　齊藤勇[2)]　荻野七重[3)]
([1)]立正大学大学院心理学研究科　[2)]立正大学心理学部　[3)]白梅学園短期大学心理学科)

キーワード：援助欲求・行動、介護適性、比較文化

【研究の目的】「日本における介護支援者としてのFOWの社会心理学的研究(1)」の高齢者介護支援者としての比国人の心理的適性の研究で言及したように、日本にとって介護支援者の不足は今後さらに深刻な問題になると考えられる。外国人介護支援者の受け入れは急務の課題といえよう。他方、世界の介護サービスで中心的役割を担っているのが、比国人のFOW であることを指摘した。その理由として、比国人の社会-心理的特性が介護に適しているといえることを既に指摘した。一連の研究では比国人がいかに介護支援者として社会-心理的適性を有しているかを実証的に証明していくことを目的としているが、本研究では積極的に介護をしたいとする援助欲求に焦点を当てて、比国人の援助欲求とそれに基づく援助行動の高さを実証することを目的とした。本研究では、同様の調査を日本人にも行い、援助欲求と援助行動の日本と比国との比較も行っている。本調査においては単に欲求調査だけでなく、実際に行っているかという行動調査も欲求調査と並行して行っている。それは齊藤(2006)に指摘されているように、日本人には特に、欲求はあるが行動はしていないという欲求と行動の間に大きなギャップが見られるからである。介護現場において実際に重要なのは、単に欲求の高い人ではなく、行動を伴う人であろう。その点を明確にするために、欲求と行動という2層の心理を調査できる質問紙で調査を行い、両者を比較している。予測として、近年の日本人は控え目で、抑制的であるという実証的研究に沿えば、それに比べ、比国人の方が、欲求と行動のギャップが少なく、より援助行動を行うことが仮定される。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は比国人大学生190名、日本人大学生134名で、調査は、2007年1月から3月にかけて行った。このうち回答に不備のあった13名を除いた311名(比国男性93名, 女性96名, 平均年齢20.3歳, 日本男性55名, 女性66名, 平均年齢21.5歳)を分析対象者とした。

質問紙　荻野・齊藤(2002)の欲求行動調査表の援助に関する10項目を用いて、それぞれについて欲求と行動という2層の心理について5件法で回答を得た。

【結果】 因子分析と信頼性分析　援助欲求・行動の下位構造を確認するために、全10項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.3前後で2因子にまたがる1項目を削除し、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、欲求段階では1因子構造が、行動段階では2因子構造が確認された。項目内容の検討の結果、2因子を採用した。第1因子は全5項目で、社会全体を意識した援助に関する項目が含まれていたので、「社会的援助」と命名した。第2因子は全4項目で、個人に対する援助を意識した項目が含まれていたので、「個人的援助」と命名した。信頼性分析(Cronbachのα係数)の結果、尺度全体ではα=.89、「社会的援助」はα=.90、「個人的援助」はα=.75であった。因子分析と信頼性分析の結果はTable.1に示す。

援助欲求・行動の日比比較　因子分析によって得られた社会的・個人的援助を構成するそれぞれの項目の平均値を因子得点とした。それぞれの因子ごとの平均値はFigure.1,2に示す。社会的・個人的援助について、欲求・行動と日比で2要因の分散分析を行った。社会的援助では、欲求・行動($F(1,309)=300.88, p<.001$)と日比間($F(1,309)=85.48, p<.001$)の主効果、および交互作用($F(1,309)=174.28, p<.001$)が認められた。個人的援助でも、欲求・行動($F(1,309)=219.33, p<.001$)と日比間($F(1,309)=2.10, p<.001$)の主効果、および交互作用($F(1,309)=65.23, p<.001$)が認められた。社会的・個人的それぞれの援助得点を比較すると、日本人は比国人に比べ、欲求と行動で大きな差があることが確認された。特に社会的援助においてその差は顕著である。また、社会的・個人的のいずれにおいても、比国人は日本人より援助行動得点が高いことが確認された。

Tab.1　援助志向の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)、因子間相関およびα係数

項目	社会的援助	個人的援助	α係数
11_住みよい社会をつくるために努力したい	.87	-.05	α=.90
15_安心して住める社会をつくりたい	.87	-.03	
3_社会が発展し、豊かになることにつくしたい	.82	-.06	
7_社会をよりよくするために努力したい	.79	.02	
19_社会の人みんなが、健康で幸せな生活ができるようにしたい	.78	.05	
9_人から何か頼まれたら、できる限りの援助や協力をしたい	-.15	.68	α=.75
13_困っている人がいたら、さびしい思いをしないよう、一緒にいてあげたい	.06	.68	
17_悩んでいる人や困っている人から助けを求められたら、全力で助けたい	.03	.68	
1_弱い立場にある不幸な人を、できるだけ助けてあげるようにしたい	.33	.42	
因子間相関		.66	

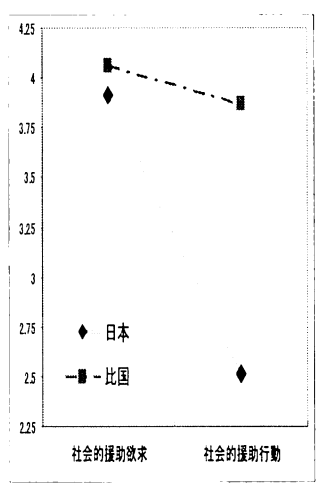


Fig.1. 社会的援助得点

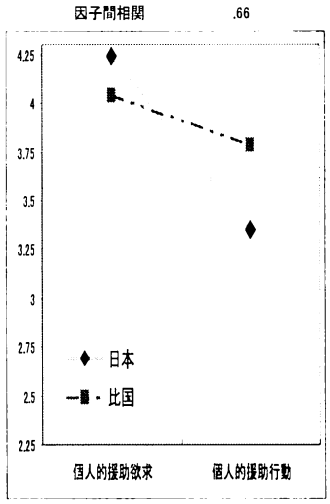


Fig.2. 個人的援助得点

【考察】 以上の結果により、比国人は積極的に援助行動を行うことが示され、介護支援者としての社会-心理的適性を有していることが示唆された。日比を比較すると、比国人日本人両者とも援助欲求は高いが、比国人は援助欲求と援助行動のギャップが少なく、実際に援助行動を行うことが証明された。このことは比国人が介護支援者としての心理的適性があることを示唆しているといえよう。今後は更に、比国人の介護支援者としての多方面の社会-心理的適性を実証的に証明していく必要があろう。

(やまだ　りゅうへい・さいとう　いさむ・おぎの　ななえ)

室内と屋外によるパーソナルスペースの変化についての研究

- 明るさの影響も含めて -

○雨森雅哉[1)]　中尾彩子[2)]　松尾千尋[3)]　白井清太郎[1)]　山岡淳[4)]

([1)]国士舘大学人文科学研究科　[2)]文京学院大学人間学部　[3)]株式会社ニチイ　[4)](財)MOA 健康科学センター)

キーワード：パーソナルスペース、室内屋外、明るさ

〈はじめに〉

C.D.Cochran, W.Daniel Hale, and Christin P.Hissan(1984)より、屋外と屋内でパーソナルスペースが変化していることが報告されている。Leslie Adams,David Zuckerman(1991)によると、明るさの程度によってパーソナルスペースが変化すると言われている。よって本研究では、室内と屋外また明るさが異なることに伴うパーソナルスペースの差異を検討する。

〈目的〉

○室内条件－屋外条件との比較

仮説 1：室内条件は屋外条件よりパーソナルスペースが大きくなる。

○明るさ(明条件－暗条件)の比較

仮説 2：暗条件の方が明条件よりパーソナルスペースが大きくなる。

〈方法〉

【実験協力者】女子大学生 4 名(19-21 歳)

【モデル】実験協力者と面識の無い男子大学院生 1 名(年齢 26.5 歳、180cm、やせ形、ひげ)であった。実験期間を通して同一服装(黒スーツ、白シャツ、茶色のネクタイ)であった。接近時の目線は協力者の頭部上方に視線をおいた。

【実験場所】

室内：通常、行動観察室として使用される 870cm×684cm×270cm の部屋で 2 本 1 組の蛍光灯が 16 組あった。協力者は部屋の対角線の向きに座り、左前方の壁には 89cm×196cm のマジックミラーが 2 枚あり右前方の壁は白色の壁であった。右後方の壁には 127cm の窓が柱をはさんで 2 枚ずつ設置されており、左後方の壁には 121×450cm のホワイトボードが固定されていた。

屋外：交通量の少ない道路に面した 7087cm×2305cm のスペースを設定した。協力者の左側 370cm には校舎の壁、右側 1925cm には敷地の境界であるフェンスがあり、フェンスの近くには樹木が植えられていた。また、前方 2642cm にもフェンスがあるが、その先を見渡すことが出来た。

【実験条件】

①室内(明)→屋外(明)→室内(暗)→屋外(暗)

②屋外(明)→室内(明)→屋外(暗)→室内(暗)

室内・屋外ともに接近距離は 8m（距離段階 1～5）であり、モデルの出発点から、協力者の座る椅子までは目盛りテープ（1.5m ごと）を貼った。照度は室内(明)が 1220-1410lx、屋外(明)が 48-440lx、室内(暗)が 0.3-4.5lx、屋外(暗)が 0.5-4.2lx であった。

【実験時期】2007 年 6 月、18:00～19:40 の期間に行った。

【生理指標】心電図・瞬目活動(EOG 法)を携帯型多用途生体アンプポリメイト AP1000(株式会社デジテックス研究所製)、及び BIOPAC MP100(株式会社モンテシステム製)にて記録した。心電図は第Ⅲ誘導法により、時定数 0.1 秒、瞬目は垂直 EOG を左目眼窩上下縁部より、時定数 0.3 秒で導出した。

【心理尺度】不安(6 段階)、緊張(6 段階)、モデルの見えの大きさ(7 段階)の評価を、最初の 2 段階と最後の 2 段階にて評定尺度上に記入させた。また、各距離段階にてモデルとの距離を回答させた。

【手続き】協力者に接近する 6 段階を設定し、イスに座った協力者から 8m 離れた位置がモデルのスタート地点であった。モデルはスタート地点から協力者に向かって歩き出し、1.5m ごとに停止した。協力者は実験開始後、閉眼し、モデルが距離段階 1(8m の地点)に立った後に、実験者の合図で開眼した。協力者は、モデルの目の辺りを見続けた(11 秒間)。協力者が心理指標を評定後、モデルは 1.5m 前進し距離段階 2 の位置で停止した。モデルの歩行 3 秒、停止 8 秒であった(合計 11 秒)。再び実験者の合図により協力者は心理指標に回答した。これを距離段階 6 まで繰り返した。協力者は近づいてくるモデルに対して“気詰まり”に感じた地点と“目をそらしたい”地点で合図をした。合図でモデルは止まり、歩き始めてから 11 秒経過するまでその位置に立ち続けた。このため距離段階が協力者によって異なるものとなった。終了後、空間の条件を変え、同様の手続きで実験を行った。その後、明暗条件を変え、同様の手続きで空間の異なる 2 条件を行った。

〈結果と考察〉

各距離段階の心理指標・生理指標に対して、明るさと空間を要因とする 2 要因分散分析を行った。

距離段階 1－2 の緊張、距離段階 2 の見えの大きさ、距離段階 3－4 の瞬目において、明るさの主効果が見られた($F(3,12)=5.40, p<.05$, $F(3,12)=5.00, p<.05$, $F(3,12)=6.23, p<.05$, $F(3,12)=6.10, p<.05$, $F(3,12)=5.19, p<.05$)。全て、明るい条件の値が大きかった。

距離段階 4 までに心理指標・生理指標が明るい条件において高い値が得られたことは、明るい方が緊張し、見えの大きさが大きく見え、瞬きの回数も増えるということである。明るい条件の方が接近されることに対して、不快な反応を示しているようである。

各段階において得られたモデルとの主観的な距離について標準化を行なった。求められた距離の値について距離段階を要因とした分散分析を行なったが、距離段階による主観的な距離の違いは認められなかった。そこで標準化しない得られたままの主観的な距離から考えられることは、どの協力者も距離が近づくにつれ主観的な距離も短くなってゆくが距離段階3から4になる時に他の段階よりも近づいていると判断しているものが見られる。また、距離段階5(2m)になるまえに気詰まりの合図をしている協力者も見られる。このことから距離段階 4(3.5m)から距離段階 5(2m)の間にパーソナルスペースの境界があると考えられる。距離段階 5 以降の心理・生理指標は、部屋や明るさの影響が少なくなると考えられる。このことからパーソナルスペースの境界外においては、明るさが接近者への評価に変化を与えると考えられる。

(あめもりまさや・なかおあやこ・まつおちひろ・しらいせいたろう・やまおかきよし)

日本における介護支援者としてのFOWの社会心理学的研究(3)

― 対人オープナー特性の日比比較文化的研究 ―

○齊藤勇[1)]　山田竜平[2)]　荻野七重[3)]
([1)]立正大学心理学部　[2)]立正大学大学院心理学研究科　[3)]白梅学園短期大学心理学科)

キーワード：対人オープナー特性、比較文化、介護適性

【研究の目的】「日本における介護支援者としてのFOWの社会心理学的研究(1)」の高齢者介護支援者としての比国人の心理的適性の研究で言及したように、日本にとって介護支援者の不足は今後さらに深刻な問題になると考えられる。外国人介護支援者の受け入れは急務の課題といえよう。他方、世界の介護サービスで中心的役割を担っているのが、比国人のFOW であることを指摘した。その理由として、比国人の社会-心理的特性が介護に適しているといえることを既に指摘した。一連の研究では比国人がいかに介護支援者として社会-心理的適性を有しているかを実証的に証明していくことを目的としているが、本研究では被介護者とのコミュニケーションをスムーズにうまくとれることが介護支援者としての重要な適性であるという視点から、対話時に相手の心を開く特性として社会心理学で研究されている対人オープナー特性について日比比較をすることを目的としている。対人オープナー特性についてはMiller,ら.(1983)により研究され、日本では小口(1989)により研究されている。対人オープナー特性とは自己開示の一個人的特性として研究され、自己開示を受けやすい人の特性である。介護現場においては介護支援者と被介護者とのコミュニケーションはきわめて大事であるが、介護支援者が性格的に相手から話しかけられやすい、自分のことを開示しやすい相手であることは両者の関係を良好にするきわめて重要な要因の一つと思われる。そこで、世界の介護現場から歓迎されている比国人はこの特性を特に有しているのではないかと考え、本研究では対人オープナー特性の調査を行い、このことを実証的に研究することを目的とした。研究(2)同様に、日本人にも、同様の調査を行い、日比の比較文化的研究とした。

【方法】調査対象者および調査時期　調査対象者は比国人大学生190名、日本人大学生134名で、調査実施期間は、2007年1月から3月にかけて行った。このうち回答に不備のあった13名を除いた311名(比国男性93名，女性96名，平均年齢20.3歳，日本男性55名，女性66名，平均年齢21.5歳)を分析対象者とした。

質問紙 Miller,ら.(1983)と小口(1989)を参考に対人オープナー・スケールを作成した。評点尺度は、各項目にどれほど当てはまるのかを5件法で回答を得た。

【結果】因子分析と信頼性分析　対人オープナー・スケールの下位構造を確認するために全10項目について主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40に満たない2項目を除き、再度因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った結果、2因子構造が確認された。それぞれの因子を構成する項目内容を検討した結果、小口(1989)の結果とほぼ似た2因子構造であることが分かった。ただ、負荷量の違いと自己開示との関連性をより明確するために、2つの因子は「共感傾聴因子」と「開心容易因子」と命名した。信頼性分析(Cronbachのα係数)の結果、尺度全体ではα=.81、「共感傾聴」はα=.74、「開心容易」はα=.74 であった。因子分析と信頼性分析の結果はTable.1に示す。

対人オープナー特性の日比比較　因子分析によって得られた共感傾聴、開心容易因子に含まれる項目の平均値を因子得点とした。それぞれの平均値は、共感傾聴因子は日本人(M=3.69,SD=0.65)、比国人(M=3.82,SD=0.80)、開心容易因子は日本人(M=3.38,SD=0.66)、比国人(M=3.82,SD=0.80)であった。両国民とも両因子ともに平均得点が3点以上で、対人オープナー特性を有していることが示されたといえる。次に、日本と比国を比較してみると、共感傾聴因子は比国人の方が日本人よりも得点が高かったが、t検定の結果、日比で差は見られなかった。他方、開心容易因子は比国人の方が日本人よりも得点が高く、有意な差が見られた($t(290)=5.23$, $p<.001$)。両因子の平均の日比比較をFigure.1に示す。

Tab.1 オープナー・スケールの因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)、因子間相関およびα係数

項目	共感傾聴	開心容易	α係数 α=.81
7-8_人の悩みを聞くと同情してしまう	.70	-.05	α=.74
7-9_人に何を考えているのか話すように持ちかける	.61	.03	
7-10_他人がその人自身の話をしているとき話しの腰を折るようなことはしない	.60	-.11	
7-7_人の話を聞くのが好きである	.57	.10	
7-3_私は他人の言うことを素直に受け入れる	.42	.23	
7-5_人は気楽に心を開いてくれる	-.16	.92	α=.74
7-6_私といると相手はくつろいだ気分になれる	.04	.62	
7-4_人は私に秘密を打ち明け信頼してくれる	.20	.52	
因子間相関		.65	

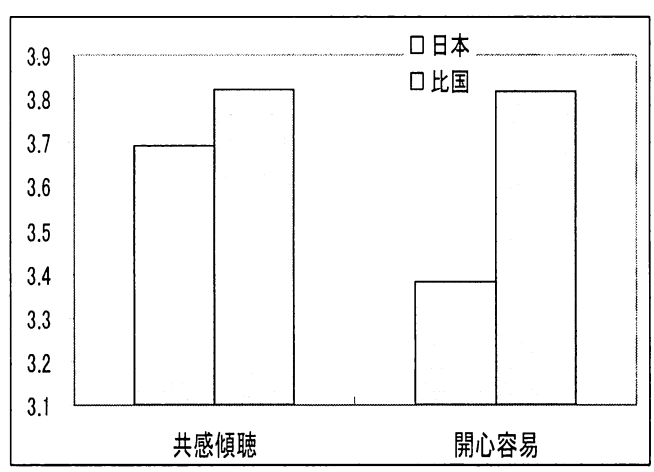


Fig.1　共感傾聴・開心容易の日比比較

【考察】以上の結果により、比国人は対人オープナー特性を有しており、それは日本人よりも高いことが示された。このことは比国人がより介護支援者としての社会-心理的適性を有していることを示唆しているといえよう。日比を比較すると、開心容易因子で比国人の方が日本人より得点が高く、有意な差が見られたことから、比国人は、自分は開示を受けやすい人であるという意識が高いことが明らかとなった。今後はさらに、比国人の介護支援者としてのより多方面の社会-心理的適性を実証的に証明していく必要があろう。

(さいとう いさむ・やまだ りゅうへい・おぎの　ななえ)

台湾留学生による母国の人間関係スキーマのＰＡＣ分析

内藤　哲雄
（信州大学人文学部）

キーワード：台湾留学生、人間関係スキーマ、ＰＡＣ分析

【目的】 外国人留学生は、日本人との交流の中で人間関係のあり方の違いを感じ、日本人の人間関係スキーマを形成していく。他方、比較によって母国の人間関係スキーマにも気づきやすくなる。本研究は、台湾からの留学生を対象とし、母国の人間関係スキーマをＰＡＣ分析により検討する。

【方法】 **＜被検者＞**台湾からの女子留学生 24 歳。学部 4 年次生。日本語学習歴 10 年。日本滞在 4 年 6 カ月。

＜手続き＞「あなたは、＜母国(出身国)の人間関係＞について、どのようなイメージが浮かんできますか？　＜母国の人間関係＞の特徴として思い浮かぶのはどのようなことでしょうか？」と教示し、文章も提示した。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目の直感的類似度を 7 段階で評定させた。ついで、ウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由、単独の＋－イメージを聴取した。

【結果】 連想項目を重要順にほぼ 1/3 とりあげると、やや伝統的で古く、何でも受け入れ、やや開放感があり、熱いテンションの高いイメージである。全体としては、プラス項目 9、0 項目 4、－項目 1 で、＋イメージが強い。

＜被検者の解釈：抜粋＞

クラスター１は、「やや伝統的な」と「やや古い」の２項目：昔のようなつき合いかな。だから伝統的、古いイメージがするんだと思います。伝統的なという言葉については、すごくやさしい、ちょっと好きかな?!　わからないけど、落ち着く。伝統的でも、古くても、長く続く。年を重ねると古いものが好きになっちゃって、友達も古い方がいい。物も古い方がいい。新しいものが良くないんじゃなくって、古い方がいろいろ想い出があるんじゃないかな？　ヨーロッパの古い伝統の建物とか、家具とか服装とか、優雅であってすごく落ち着く感じがします。時間の流れがすごくゆっくりで。昔住んでいたおばあちゃんの家にあった、珍しい黒い木と貝殻でできた椅子とテーブルのセット。私が 18(歳)ぐらいの時に、おばあちゃんではなく、おばさんに捨てられた。もったいないと思います。子どもの頃の想い出がなくなったような気がします。昔の歴史大嫌いな私ですが、歴史は昔のことだし、どっちが正しいかわからないし、学校の勉強もあまりしないし、台湾の歴史もよくわからないし。でも年を重ねたら、歴史はすごく大事だと思います。ちっちゃい頃は古いことは汚いイメージがしました。古い＝汚い。だから古い物は捨てたいとか、新しいものに変えたい。今はそうじゃなくて、古い物にはさまざまな歴史があるし、大切にしないといけないなー。

クラスター2 は、「やや開放感あり」～「近い」の 12 項目：楽しい生活ができそう。私のことですが、昔は知らない人と会った時は話さなかったんですけど、昨年台湾に帰った時、私と友達より、友達の友達との会話が多くなって、「昔から知り合い？」とびっくりされた。自ら相手のことに興味を持って接することが、二人の距離を縮める原因だと思います。よく笑うこと、楽観的な性格は多くの友達を作ることができる第一歩だと感じました。いくら奇麗な女性でも、笑わない人は周りの人は「暗い人だな」と感じる。でもこれは、明るい人と、積極的に接する人だと思うんですけど、人見知りの人もいるんですけど、1 回目じゃなく、何回も何回も接した後に、友達ができるようになりそう。今の例は友達だけど、恋人になるにはずいぶん時間がかかると思います。日本人は、この人いいなあと告白して、付き合ってから、お互いのことを知るように、少しずつ距離を縮める。でも、台湾では、最初は友達として、友達同士で一緒に会って、だんだん距離を縮めて、お互いに「この人いいなあ」と思ったらつき合う。昔は男の人からだけ告白。今は、いい人だと思ったら女性からも告白する。友達同士なら、手を組む、肩を組む。みんな違和感がないです。台湾では、友達とは、自分のこと、たとえば最近何を観たとか、経験したとかを話す。恋愛のこととか。日本では、相手の人のことを聞くチャンスがない。周りのことは話してくれるが、その人のことを知らない。何を考えているかあまりわからないと思うけど、年上の人は私の話を聞いてくれる。同じ年齢の人(日本人)だったら、私が話さないと相手も話さない。私が聞いても、興味がないと話さない。若い人は経験がないから冷たい。逆に年上の人だったら何でも話せるし、聞いてくれるので、ちょっと楽。台湾だと同年齢でも楽。でも台湾の年上の人と友達になったことがないので、(年上については)わからないです。日本人は人見知りが強いのじゃないか。日本人は、知らない人とは常に距離を置く。1 回目とか、1 回しか会わない人とは距離を置く。台湾ではやさしく感じるんだけど、自分の母国だからかな？

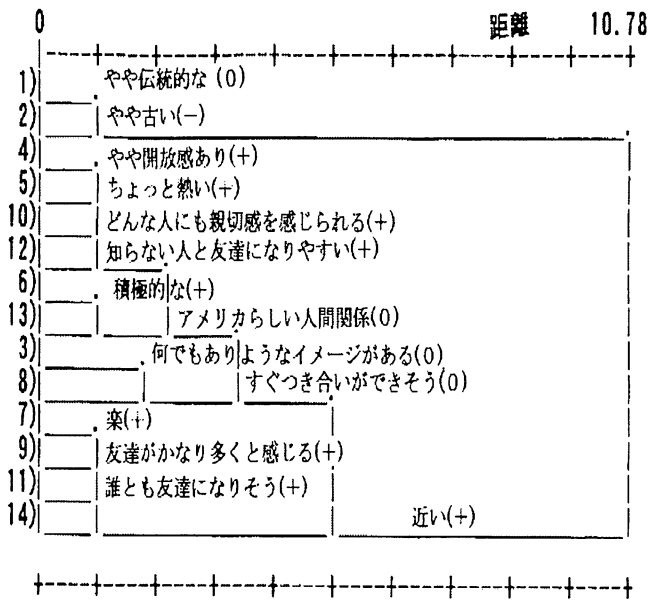


Fig. 1 母国の人間関係についてのＰＡＣ分析
左の数値は重要順位

クラスター１と２との比較：上の方が暗い、下ほうが明るいと感じる。上の方が悲観的、下の方が楽観的。下があるから上がある。具体的に言うと、友達がたくさんできるからいろんな想い出ができる。似ているところはあまりない。

【結論】 クラスター1 は*＜互いの交流の歴史、想い出を大事にする伝統文化＞*、クラスター２は、恋愛などの深い関わりには時間とプロセスが必要だが、一般には距離を取らず段階的な接近を必要としない*＜開放的な人間関係＞*と解釈できる。

（ないとう　てつお）

日本人中高年女性の化粧行動に関する研究

—自意識との関係分析の結果から —

○八田　武俊
(岐阜医療科学大学保健科学部)

キーワード：化粧行動、中高年女性、自意識

【研究の目的】 本研究では，中高年女性の自意識や社会的状況と化粧行動との関係について検討した。一般的に化粧をする人の多くは女性であることから、女性に特徴的な心理特性が化粧行動を促すと考えられる。これまで最も注目されてきた要因は自意識特性で、それは自己に注意を向ける性格特性を指し、公的自意識と私的自意識に分類できる(たとえば、菅原, 1984 など)。公的自意識とは、外見など他者から観察可能な社会的対象としての自己に注意を向けやすい特性で、私的自意識とは態度や感情など他者から観察不可能な自己の内的側面に注意を向けやすい特性である。菅原・山本・松井(1986)は、15 歳から 49 歳の日本人を対象に自意識を調べたところ、女性は男性よりも公的自意識が高いことを示している。また、公的自意識と私的自意識は中程度の正の相関関係にあることが示されている(押見・渡辺・石川, 1986)。それゆえ、中・高年齢であっても女性は男性よりも公的・私的ともに自意識が高いと予想される(仮説 1)。

化粧がもたらす効果として、外見的魅力の増加といった対人的効果と、気分の安寧や生理的な鎮静効果などの個人内的効果が知られている。女性の自意識と化粧行動の関係については、公的自意識が高い人ほど対人的効果を期待して、化粧行動に動機づけられることが指摘されており(Miller & Cox, 1982)、そうした行動は自己の印象管理や美しさの演出に効果的なメーキャップに現れやすいと思われる。それゆえ、中高年齢者を対象とした本研究においても、公的自意識が高い人ほどメーキャップを頻繁にすると予想される(仮説 2)。また、公的自意識が化粧を促すのであれば、他者によって注目されやすい状況ほど、化粧は頻繁であると予想される(仮説 3)。

次に、私的自意識が高い人は感情やストレス状態など自己の内面に注意が向けられやすいため、個人内的効果を期待して、化粧行動に動機づけられ、それはスキンケアに現れやすいと思われる。スキンケアは自己の身体接触が伴うことから、マッサージと同様にリラクゼーション効果を持つことや、感情の調整に効果的であることが示されている(阿部, 2001)。それゆえ、私的自意識が高い人ほどスキンケアをする機会が多いと予想される(仮説 4)

【方法】

対象者と手続き：北海道 Y 町が主催する住民検診(2006 年)の受診者のうち、本調査への参加に同意した 498 名で、有効回答者数は 458 名（男性 144 名、女性 314 名)であった。対象者の年齢 39～91 歳で、平均年齢は 63.62 であった。本調査は、2006 年 7 月 10～27 日の期間に住民検診の希望者に対して調査票を郵送し、8 月 1 日の検診当日に回収した。

質問項目：第 1 の項目は自意識特性尺度(菅原, 1984)で、私的・公的自意識について測定した。ただし、本調査では高齢者を対象とするため回答方法を従来の 7 件法から 3 件法に単純化した。それぞれの自意識に関して 1 項目でも回答した対象者を有効回答者とした。第 2 の項目は化粧行動に関する項目で、「特別な用事がないとき(普段)」「買い物へ出かけるとき（買物)」「友達に会うとき(友人との会合)」「法事や結婚式のとき(法事・結婚)」の各状況において、洗顔・化粧水・乳液による基礎化粧とファンデーション・白粉による下地化粧、口紅・頬紅・眉墨による仕上げ化粧を「する」と「しない」の 2 件法で回答するよう求めた。基礎化粧は「ケア」に相当し、下地化粧と仕上げ化粧は「メーキャップ」に相当する。

【結果】 私的自意識得点と公的自意識得点について、性別を要因とする分散分析を行ったところ、両自意識において女性は男性よりも有意に得点が高かった($F(1, 457) = 11.64, 8.08$, both $ps < .01$)。

状況による化粧行動の違いを検討したところ、法事・結婚状況は、他の 3 状況よりも基礎化粧をすると回答した人数が多く(all $ps < .01$)、友人との会合状況は普段状況よりも基礎化粧をすると回答した人数が多かった($p < .05$)。さらに、買物状況は友人との会合状況と有意な差がなく、普段状況と有意傾向($p = .09$)であった。下地化粧と仕上げ化粧をすると回答した人数は、法事・結婚状況において他の 3 状況よりも有意に多く、買物状況において友人との会合状況や普段状況よりも有意に多く、友人との会合状況では普段状況よりも有意に多かった(all $ps < .01$)。

相関分析の結果、普段状況では、私的自意識と下地化粧は負の相関関係にあり($r = -.12, p = .051$)、友人との会合状況では基礎化粧と正の相関関係にあることが示された（$r = .11, p = .079$)。次に、公的自意識は、友人との会合状況において下地化粧や仕上げ化粧と正の相関関係にあり($r = .11, p = .081$; $r = .11, p = .086$)、買物状況では、下地化粧と正の相関関係にあることが示された($r = .12, p = .053$)。友人との会合状況では、私的自意識が高い人ほど基礎化粧を施し、公的自意識が高い人ほど下地と仕上げ化粧をすることが示された。

【考察】

本研究の結果は、中高年齢においても女性は男性よりも公的・私的自意識が高いことを示している(仮説 1 を支持)。次に、公的自意識が高い女性は他人から見られる可能性が高い状況において下地化粧を施し、個人として特定されやすい状況において仕上げ化粧をすることが示された（仮説 2 と 3 を支持)。ただし、私的自意識が高い女性は友人との会合においてのみ、基礎化粧を施すことが示された(仮説 4 を部分的に支持)。それゆえ、私的自意識と化粧行動の関連については更なる検討が必要である。最後に、本研究の結果は高齢者の心的特性を理解するのに役立つと思われる。

【引用文献】

菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.

菅原健介・山本真理子・松井豊 1986 Self-consciousness の人口統計学的特徴 日本心理学会第 50 回発表論文集, 658.

押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討立教大学心理学科研究年報, 28, 1-15.

Miller, L., & Cox, C. L. 1982 For appearance sake; Public self-consciousness and makeup use. Personality and Social Psychology Bulletin, 8, 748-751.

阿部恒之 2001 スキンケアへの期待の変遷と心理学的効果 大坊郁夫（編）化粧行動の社会心理学:化粧する人間のこころと行動 シリーズ 21 世紀の社会心理学 9, 148-157.

(はった　たけとし)

社会的望ましさ反応傾向と承認欲求との関連の検討

— 賞賛獲得欲求因子及び拒否回避欲求因子との相関分析から —

河内 和直(Kazunao Kawauchi)
(群馬社会福祉大学)

Key Words：社会的望ましさ反応傾向，社会的望ましさ反応への意図性，承認欲求

問 題

「社会的望ましさ(social desirability: 以下，SD)反応」とは，自己記述式の人格検査等の心理測定上で，提示された行動特徴の該当程度ではなく，その一般的な望ましさの程度に応じて回答を歪曲することであり，Edwards(1953)の報告以降，多くの研究が為されてきた受検態度要因である．ところで，こうした反応歪曲には，Edwards(1957)にもあるように個人差があることが知られており，その背景的要因はMarlowe & Crowne(1961)に代表されるように「承認欲求(Approval Motive)」であると考えられてきた．実際，SD反応歪曲の個人差を測定する「SD 尺度」を承認欲求の反映であると解する研究もあり(Ettinger, Nowicki & Nelson,1970; 藤村，1997)，両概念はほぼ同一の概念としての共通理解が成立している様相を伺うことができる．しかしながら，その一方で，この「承認欲求」を測定する尺度も存在しているのである(ex.小島・太田・菅原，2003; 菅原，1986 etc). Marlowe & Crowne のようにSD尺度得点がSD反応への動機づけ的要因の表出を反映しているとするならば，SD 尺度と承認欲求尺度は概念測定の直接・間接の差はあるものの親和的な関連が，言い換えれば尺度間に相関関係があることが考えられる．また，SD 反応が評価懸念生起時に特に問題とされること(堀尾・高橋，2004; 河内，2006b)を考慮に入れれば，より意図的に反応歪曲を行う際にその関連がより鮮明に浮き彫りになることが予測されることになる．

そこで本研究では，SD 反応傾向並びに SD 反応への意図性と承認欲求の関連を尺度間の相関分析を通して検討することにしたい．

方 法

下記の尺度構成から成る質問紙を作成した．

1) 尺度構成：SD 反応傾向の測定には，河内(2006a)による Marlowe-Crowne Social Desirability Scale(Crowne & Marlowe,1960)の邦訳版 22 項目を，承認欲求の測定には，小島・太田・菅原(2003)による賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を用いた．また，SD 反応への意図性は，河内(2006b)と同様に評価懸念状況を挟んでの SD 尺度得点の差異スコアを当該変数の指標として採用した．

2) 被験者：大学生及び専門学校生 129 名(男性 52 名，女性 74 名)，平均年齢 22.37 歳(*S.D.* 7.15)．

3) 手続き：講義時間中に集団実施．前半の SD 尺度並びに承認欲求尺度に対しては「自身に該当する程度を回答せよ」との教示で，就職面接場面をイメージする評価懸念状況を挟んでの SD 尺度への再回答に際しては，「面接官に質問されているイメージで回答せよ」との教示で，それぞれ回答させた．

結 果

下記の Figure 1 と Figure 2 に相関分析の結果を提示する．

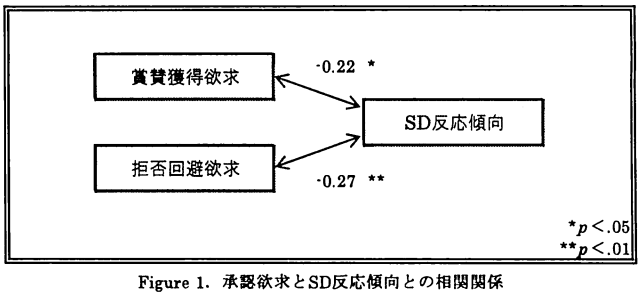


Figure 1. 承認欲求とSD反応傾向との相関関係

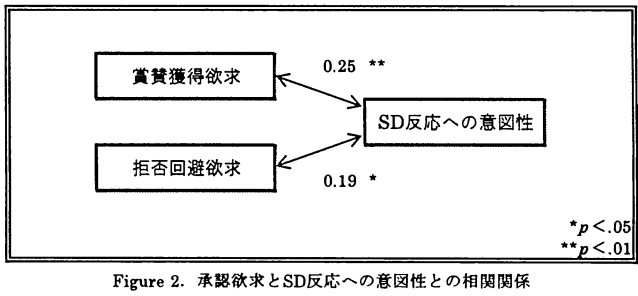


Figure 2. 承認欲求とSD反応への意図性との相関関係

SD 反応傾向と賞賛獲得欲求との相関係数は-0.22(p<.05)，拒否回避欲求との相関係数は-0.27(p<.01)であり，仮説に反して非常に弱い相関関係の確認に止まる結果である．

また，SD 反応への意図性と賞賛獲得欲求との相関係数は 0.25(p<.01)，拒否回避欲求との相関係数は 0.19(p<.05)であり，こちらも先と同様に仮説に反する結果となっている．

考 察

一般的な心理尺度における妥当性の検証では，SD 尺度との相関は低い方が望ましいとされるのが通常である．何故なら，当該尺度との相関はその尺度が社会的に望ましい方向に回答を歪められる可能性を有していることを意味するためである．しかしながら，こと「承認欲求」尺度に関してはどうであろうか．Marlowe & Crowne のようにSD反応が他者からの承認を得ようとする動機づけ的要因に触発されるものであるとするならば，一定の相関関係はありそうなものである．また，河内(2006b)において，SD 反応への意図性と提示場面への評価懸念の程度との間に見られた相関関係が再現されなかったこともう一つの論点であろう．何故なら，承認されたい欲求が強い特性保持者の方が評価懸念状況下においてより顕著な SD 反応を示すことが予測されるためである．SD 尺度が一体如何なる特性を測定しているのか，本知見を含めさらなる多角的・多方法的な検討を要すると考えられる．

※ 他の分析結果並びに文献は当日のポスターに掲載致します

(かわうち かずなお

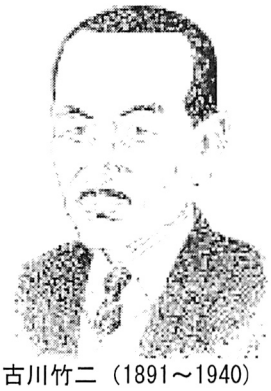
「血液型性格学」は信頼できるか（第24報）I

「お笑い芸人」に血液型の特徴があるのか

○浮谷秀一　大村政男　藤田主一
（東京富士大学）　（日本大学）　（日本体育大学）

お笑い芸人　吉本興業　古川竹二　能見正比古

はしがき　古川竹二が1932年に三省堂から『血液型と気質』を刊行したとき、牛島義友（当時立教大予科教授）と依田新（当時東京文理大助手）が鋭い書評をしている。



古川竹二（1891～1940）
え：木村しゅうじ

牛島：統計的論証は詳細であるが個人における血液型と気質との関係についての研究は少ない。この面に立ち入ってほしい（『心研』7巻2号所載の書評の要約）。

依田：血液型と気質の相関を単なる応用的検証（注：社会集団の差異）ではなくて他の面からもっと考えてほしい（『教心研（東文理大）』7巻5号所載の書評の要約）。

この2人の批判は現代の人格研究にもほとんどそのまま符合するのではないだろうか。さらに現代は少数例統計とコンピュータの時代である。"Psychologie ohne Denkart" の時代といってもいいだろう。

目的　「お笑い芸人」という名称でまとめられる人たちに血液型の特徴があるかどうかを探索する。ただ、「お笑い芸人」とはなにかという定義は判然としていない。ここではきわめて曖昧であるが、「テレビ・ラジオ・舞台などで多くの人たちを端的に笑わせることを職業としている人たち」としておこう。

方法　次の刊行物所載の「お笑い芸人」の血液型が調査の対象になる。『TVスター名鑑』・『新オールスター名鑑』・『タレント名簿録』および各種週刊誌／新聞など。

数量的検定には χ^2 検定や CR による比率の吟味が用いられているが、$p<.05$、あるいは $p<.01$（いずれも両側検定）で抑えられている。しかし、心理学の研究ではかなり以前からいずれも $p<.10$、あるいは $p<.001$ のようなレベルを持ち込む研究者が目立ってきた。なかには $p<.0001$ といったような狂気の危険率を用いる人もいる。かつて増山元三郎は臨床医学では $p<.05$、基礎医学では $p<.01$ といったが、それでも不安と恐怖は残る。あのインフルエンザの特効薬についての問題も推計学的方法の使用にもその一端があるように思われる。

結果（その1）　吉本興業が編集した『よしもと大百科』は古く1987年のものであるが、そこから血液型をまとめてみよう。「吉本」というと即「お笑い」ということばが連想されるから、すでに引退した人もいると思うが冒頭にあげておくことにする。

表1　吉本興業所属のお笑い芸人の血液型（1987年現在）

	A型	B型	O型	AB型	合計
観察値	79	40	58	28	205
期待値	76.5	45.3	64.6	18.6	205.0

吉本興業所属のお笑い芸人205人中、男性は155人、女性は50人。これら2群の血液型分布には日本人の血液型分布（古畑種基の基準）と有意差はなかった。しかし、表1の全体の分布では χ_0^2 の値は $8.54<9.35$（$\alpha.05$）になっている。危険率を $\alpha.10$ にすれば $8.54>7.82$ になり、いちおうのズレを見出すことができるが（AB型の男性にお笑いが多い）、ここでは $\alpha.10$ や $\alpha.001$ などの危険率は使用しない。

結果（その2）　『2007年版　新オールスター名鑑』では珍しく「お笑い集団」というページを特設している。そこには272組のお笑いが載っている。血液型が記載されている人は510人（2人組448人、3人以上の組51人、その他11人）である。表2と表3は2人組の血液型分布であるが、第2表では $\chi_0^2 3.13<9.35$（$\alpha.05$）。第3表では $\chi_0^2 0.06<9.35$（$\alpha.05$）でともに日本人の血液型の分布と有意差はなかった。

表2　お笑い集団（表3の芸人と組んでいる人）の血液型

	A型	B型	O型	AB型	合計
観察値	86	58	60	20	224
期待値	83.5	49.5	70.6	20.4	224.0

表3　お笑い集団（表2の芸人と組んでいる人）の血液型

	A型	B型	O型	AB型	合計
観察値	82	50	71	21	224
期待値	83.5	49.5	70.6	20.4	224.0

表1で見られたAB型の多数も表2と表3では消えている。なお、2人の血液型別組合せは紙幅の制限のため掲載を避けるが大雑把にいえば、A・Aが14.7%、A・Oが11.6%、O・Oが9.8%、A・B、A・Oが9.4%というところである。

結果（その3）　最後に510人の血液型の分布を挙げておくことにする。ここでもAB型の多数は見られないし、χ_0^2 の値は $1.79<9.36$（$\alpha.05$）で、特徴のある血液型を見出すことができない。

表4　お笑い集団（510人）の血液型

	A型	B型	O型	AB型	合計
観察値	188	122	150	50	510
期待値	190.2	112.7	160.7	46.4	510.0

結論　血液型性格学というと、能見正比古と俊賢の血液型人間学を想起する人が多い。正比古は古川竹二のいわゆる血液型気質相関説を面白可笑しく脚色し日本の大衆文化の特色としてしまった。松坂大輔（Dice-K、O型）が「レッドソックス」に入団したときも米国の大新聞は日本における血液型性格占いの実情を報道している。古川も能見も血液型と性格の関連を論証するために集団的処理をしている。ここでは、お笑い芸人集団を取り上げたが、特徴は見出せなかった。しかし、特定個人を能見流の牽強付会の論法で圧せばある血液型が浮揚してくるかも。岡山大学の長谷川芳典は、「やたらに血液型を書くな」といっているが、私たちはそうは思わない。多くの個人の血液型がわかれば矛盾も露呈してくる。

参考文献　能見正比古『血液型人間学』・前川輝光『血液型人間学―運命との対話―』。

（うきやしゅういち・おおむらまさお・ふじたしゅいち）

9か月児の母親のレジリエンスが育児ストレスに与える影響の検討

○小池はるか[1)]　河合優年[1,2)]　山本初実[1,3,4)]
([1)] 科学技術振興機構　[2)] 武庫川女子大学　[3)] 国立病院機構三重中央医療センター　[4)] 三重大学連携大学院)
キーワード：レジリエンス、ストレス、育児

【研究の目的】

少子化や核家族化とともに，母親の育児ストレスを背景とした社会問題が注目を集めている。本研究では，母親のレジリエンス（人が逆境に遭遇した時，精神医学的疾患に抵抗して健康な発達を遂げていくための防衛機能；Rutter，1985）を取り上げ，育児ストレスに与える影響を検討する。

【方法】

対象者　2004年12月より2005年12月までに三重県内で出生した児のうち，「すくすくコホート三重」の9か月児観察に参加した母親177名。うち，データに欠損のない120名を分析の対象とした。

調査方法　9か月児観察に参加協力の同意を得た母親に質問紙を郵送した。記入の上観察日に持参するよう依頼し回収した。

質問紙の構成

・育児ストレス尺度　佐藤・菅原・戸田・島(1994)の母親関連育児ストレス尺度10項目。6件法。

・レジリエンス質問票　佐藤・河合（2004）のレジリエンス質問票。本研究では，佐藤・河合（2004）において使用された項目のうち，因子負荷量の低い項目を削除して得た10因子57項目を使用した。質問票は5つの尺度から構成された。尺度名あるいは因子名の傾向が強いほど，レジリエンスが強いとされている。

1. 有能感尺度：対人関係に関する自己評価を意味する「親和性」と，運動能力に関する自己評価を意味する「身体能力」，自分自身を価値あるものとする自己評価を意味する「自尊心」の3因子15項目。4件法。
2. ストレスへの反応性尺度：ストレスを受けた時に身体的な方向に表出されやすい「身体化傾向」と，心理的な方向に表出されやすい「心理化傾向」の2因子8項目。4件法。
3. ソーシャルサポート尺度：周囲から受けるサポートの量を測定するための項目群。1因子10項目。5件法。
4. コーピング方略尺度：困難に出会った時に，困っていることそのものを何とかしようとする「問題焦点型対処」と，大変だという気持ちを何とかしようとする「情動焦点型対処」の2因子9項目。5件法。
5. 達成動機尺度：人に勝つことで社会から評価されることを目指す欲求の強さである「競争的達成動機」と，人の評価にとらわれず自分なりの達成基準への到達を目指す欲求の強さである「自己充足的達成動機」の2因子15項目。7件法。

【結果と考察】

先行研究に基づき，育児ストレス尺度得点及びレジリエンス下位因子得点を算出した。さらに，レジリエンス下位因子得点を標準得点に変換した。各得点とも，点数が高いほど尺度名あるいは因子名の傾向が強いことを示している。

レジリエンス各下位因子を変数とし，クラスターの数を3に設定し，クラスター分析を行なった。その結果，42名がクラスター1に，40名がクラスター2に，38名がクラスター3に分類された。クラスターによってレジリエンス下位因子標準得点に差異があるかどうか確認するため，一要因分散分析を行なったところ，すべての下位因子で有意差が認められた。Table1はクラスター別の平均値，分散分析の結果（F値）及び多重比較の結果（Tukey法）である。この結果から，クラスター1はストレスへの反応性以外のレジリエンスが高いため「レジリエンス高型」，クラスター2はレジリエンスが全体的に低いため「レジリエンス低型」，クラスター3は有能感・達成動機の一部が低いがストレスへの反応性が強くコーピングをよく行なうため「レジリエンス混合型」と命名した。

クラスターによって母の育児ストレス得点に差異があるかどうか確認するため，一要因分散分析を行なったところ，有意差が認められた（$F(2,117)=9.79$，$p<.001$）。下位検定の結果，レジリエンス高型とレジリエンス混合型との間に0.1%水準の有意差がみられ，レジリエンス高型とレジリエンス低型との間に1%水準の有意差がみられた。（レジリエンス高型 $M=17.52$，$SD=4.40$，レジリエンス低型 $M=20.40$，$SD=3.77$，レジリエンス混合型 $M=21.45$，$SD=4.19$）。レジリエンスが全体的に強いと育児ストレスを感じにくいこと，レジリエンスの一部が強くても一部が弱ければ育児ストレスに対する効果はレジリエンスが全体的に弱い群と同じになることが示された

本研究は，独立行政法人科学技術振興機構の計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」の三重研究グループの研究の一部である。

（こいけはるか・かわいまさとし・やまもとはつみ）

Table1 クラスター別のレジリエンス標準得点平均値，分散分析及び多重比較の結果

	レジリエンス高型		レジリエンス低型		レジリエンス混合型		F値	高−低	高−混合	低−混合
親和性	0.77	(0.66)	−0.75	(0.72)	−0.06	(0.94)	39.55	***	***	***
身体能力	0.49	(1.16)	−0.28	(0.84)	−0.25	(0.76)	8.62	**	**	
自尊心	0.64	(0.86)	−0.21	(0.90)	−0.48	(0.90)	17.77	***	***	
身体化	−0.30	(0.88)	−0.28	(0.83)	0.63	(1.02)	13.18		***	***
心理化	−0.70	(0.95)	0.00	(0.78)	0.77	(0.65)	33.02	***	***	***
サポート	0.64	(0.81)	−0.84	(0.64)	0.18	(0.89)	37.82	***	*	***
問題焦点	0.51	(0.92)	−0.68	(0.82)	0.15	(0.86)	20.3	***		***
情動焦点	0.31	(0.97)	−0.69	(0.94)	0.39	(0.69)	18.4	***		***
競争的	0.43	(0.90)	−0.27	(1.11)	−0.19	(0.83)	6.53	**	*	
自己充足的	0.36	(1.04)	−0.52	(0.94)	0.15	(0.79)	9.97	***		**

カッコ内は標準偏差，***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.0$

「血液型性格学」は信頼できるか（第24報）II

「お笑い芸人」に血液型の特徴があるのか（続）

○大村政男　浮谷秀一　藤田主一
（日本大学）　（東京富士大学）　（日本体育大学）

シャーロック・ホームズ　お笑い芸人　能見俊賢　推測統計学

はしがき　Sherlock Holmes は相棒の Dr.Watson に向かって次のようにいっている。要約してみよう。「個々の人々は解きがたいパズルであるが、集合体のなかにおいては数学的な確実性になる。ある個人がどう行動するかを予測することはできないが、アヴァリヂがどうなるかは的確に当てることができる。個人は変異するかもしれないが百分率は恒常なのである（G.W.Allport 1961 Pattern & Growth in Personality の第1章から）」。

このあと、オルポートは“clinical psychology”について次のように語っている。「臨床心理学の真の目標は集合体の予測ではなく個人の予測である。普遍的・集団的規準は有効かもしれないが、それだけでは十分ではないのである」。熟慮すべきことばである。

Nomothetic* と *Idiographic　法則定立的なスタンスをとるのか、個性記述的なスタンスに立つのかという問題がある。大学や大学院で講義される人格心理学や臨床心理学などは学という文字が付いているかぎり法則定立的なシステムに拠っている。心理臨床に携わる人はそれをベースにして特異な個人の問題に触れていかなければならない。現在、学部時代になにを専攻していても大学院修士課程で、ある協会が指定した臨床心理学の単位を取得し、形式的な臨床実習をし、試験に合格すれば□□心理士の資格が授与される。困った事態である。現在の資格問題は心理学界の命取りになるかも……。

血液型と気質・性格　Voltaire（本名：フランソワ・マリ・アルエ）はかつて「私と議論したいならまず用語を定義しなければならない」といったそうである。そうなると心理学では定義についての論争で沸騰してしまうと思う。気質はともかく性格・パーソナリティ・人格となると諸説粉粉である。私たちは次の図のように考えている。personality は性格（独逸語でいう Charakter）のプロテクタとして考えるのはどうだろうか。気質が生理的体制に根を下ろしていることについては反論する人はそういないと思う。この生理的な体制は即体質であって、そこに ABO 式の血液型を含めてもまずは異見がないと思われる。血液型と気質の連関は原来復や古川竹二によって示唆されたが、能見正比古たちの筆意によって滅茶苦茶に改編されてしまった。そしてついに「女子どもの遊びには手を出さない」といわれるまでに零落してしまった。私たちは能見たちの俗説の出鱈目性を明らかにし、どう結着がつくかわからないが、新しい血液型性格学を構築したいと考えている。

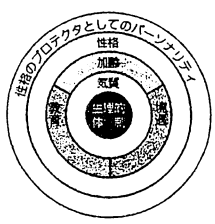


図1　人格の構造
大村『図解雑学 心理学』ナツメ社　2006

研究法の問題　『血液型と気質』に対して牛島義友は、統計的論証は詳細であるが個人はどうか―と批判している。また依田新は、応用的検証だけではなく他の面からも考えたらと批判している。この2人の古川批判は Holmes のことばにも通じているし、現代において行なわれているほとんどすべての研究についてもいえるのである。多くのデータを収積して *M* や *SD* を掘り出そうとする。それが研究の定跡なのである。血液型と性格についても統計的論証、すなわち、集団処理を定跡としている。ある地位の人びとや、ある職業の人びとにある血液型が多いことを期待して研究を出発させている。館淳一（作家）によると大坪ケム太が書いた『世界が100人の AV 女優だったら』（扶桑社）という本があるそうである。それによると彼女たちのほとんどが「ごく普通の家庭に育ったごくふつうの子」だったそうである。館は、詳しくは本を読んでほしいが、どうやら AV 女優になる子は「自分のなかの何かを壊したい、変えたい」と思っているふしがある、とコメントしている。まさに直観的で小気味いい解説である。心理学者はこのような解説を避けて、統計的に論証しようとする。しかし、研究者はせっかく採ったデータなので危険率を緩めてもなんとか思いどおりの結論に引っ張り込もうとする。「あるある―」的な堕落は避けたいものである。

結語　お笑い芸人たち　*NHK* が『爆笑オンエアバトル』を始めてから若手の進出が目覚ましい。審査者が素人で、しかも国民のラチミア（rhathymia）が高まっているので玉石混淆である。『フレッシュスター名鑑 2007』（東京ニュース通信社刊）には末尾にお笑い芸人 448 人の紹介が載っている。かれらのうち血液型がわかっているものが 413 人（うち女性 20 人）いる。表1はその分布と期待値（古畑の基準による）とを示したもので、χ_0^2 は 3.75＜9.35（α.05）になる。新進のお笑い芸人に血液型の特徴は見られていない。

表1　新進お笑い芸人の血液型

	A 型	B 型	O 型	AB 型	合計
観察値	146	107	127	33	413
期待値	154.0	91.3	130.1	37.6	413.0

表1ではなにも掘り出すことができなかった。もしも B 型が 20 人多く 127 人だったらどうなるであろうか。そうすると A 型 136、B 型 127、O 型 117、AB 型 33 になる（AB 型はそのままにしておいた）。これで検定すると χ_0^2 は 17.94＞12.84（α.01）になってしまう。そして、新進お笑いは B 型という能見好みの新説が登場してくる。古川竹二が『血液型と気質』を上梓したころには推計学検定などはなく、目分量統計の時代である。もし、そのような検定があったとしても牛島と依田は同じような批判をしたと思う（牛島と依田の古川批判は他に含むところがあったと考えるのはどうだろうか）。

統計的な検定は心理学では生命にまで関連することはないが、特効薬の効果判定のような場合はさまざまな要因がからまって生命を翫ぶことになってしまう。応用心理学における推計学の使用は果たして人間生活に幸福をもたらしているのだろうか。疑問である。それでは個をとらえたらどうなるだろうか。能見正比古の養嗣子俊賢はかつて次のような記事を『女性セブン』の「血液型人類学」というコーナーに寄せている。その 29 回では、『元気で長持ち！なのは O 型と B 型』とし、プロ野球の有名選手 10 人（野村・王・張本など）を並べている。37 回では「世間の思惑に頓着しないフーテンの寅さんは B 型の典型」とし渥美清を持ち出している。それでも世間の人びとは誤魔化されてしまうのである。

（おおむらまさお・うきやしゅういち・ふじたしゅいち）

性能的性格（6）

－予測の妥当性の検討（1）－

○川島　大司　　久米　稔
（東海学院大学　人間関係学部）　（適合性評価研究所）

性能　作業成績　予測の妥当性

［目的］

これまでの性能的性格の研究（日本応用心理学会大会，2002～2006）[1] や作業態度の研究（日本教育心理学会総会，2003～2005）[2] では、性能的性格や作業態度についての自己評定と実際の作業成績の関連を基準関連妥当性の形で行ったが、両者の間に関連はあまり認められなかった。

本研究では、比較的長期（２～３年）にわたる予測の妥当性を検討する方法で、ワープロに係る資格検定結果（２級・３級合格者、不合格者）と性能的性格検査、作業態度の自己評定値、実際の作業成績との関連性を検討した。

［方法］

被験者：東海の私立女子大学の卒業生

材　料：性能に関する自己評定尺度（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）と作業検査（ＣＥＬ－Ｓ，ワープロ練習検査，数系列完成，鏡映描写）

手続き：ワープロ操作の習熟度（合否）は検定協会が主催するワープロ検定を受験してもらう。練習は、強制的に練習させるのではなく、各自で自由に練習してもらう。この間、性能に関する自己評定尺度（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）で自己評定してもらい、その後、作業検査（ＣＥＬ－Ｓ，ワープロ練習検査，数系列完成，鏡映描写）を実施した。

各検査の処理尺度を以下に示す。

１．ＥＰ－Ｓ　慎重・綿密型５段階点
　　敏捷・てきぱき型５段階点
　　勤勉・こつこつ型５段階点
２．ＳＥＣ－Ｓ　慎重・緻密性５段階点
　　判断・推理力５段階点
　　遵守性５段階点
　　てきぱき・敏捷性５段階点
　　気遣度５段階点
　　根気性５段階点
　　意欲５段階点
３．ＣＥＬ－Ｓ　試行数Ｃ得点
　　見落とし率Ｃ得点
４．ワープロ練習　入力時の作業態度
　　注意の持続度
５．数系列完成　正解数Ｃ得点
６．鏡映描写　はみ出し数Ｃ得点

［結果と考察］

大学へ入学してから卒業するまでの間に、ワープロ検定を受験する機会は１年間に４回ある。特に１年の前期には授業の中で３級のレベルを指導し、ほぼ全員の受講者に３級の試験を受験してもらう。それ以後卒業するまでは、強制的に受験をさせるのではなく、希望すればどのレベルでも受験可能である。また、指導については、定期的な機会を設けるのではなく、質問にくればその都度対処するという形をとっている。

このようにして、４年間でワープロ検定の２級以上を取得した者、３級を取得した者、資格を持っていない者の３グループに分け、各検査の処理尺度について平均値の差の検定を行った。有意差の認められたものについての結果を表１に示す。ＥＰ－Ｓ検査の２級以上と３級だけ、ＳＥＣ－Ｓ検査の３級だけと資格なしは、有意差が認められなかった。

表１．性能的性格検査とワープロ検定の取得級との関連

ＥＰ－Ｓ

比較対照群	慎重・綿密型				勤勉・こつこつ型			
	n	M	SD	t	n	M	SD	t
2級以上取得	82	7.6	2.95	*	82	8.9	3.18	**
対				1.973				3.507
資格なし	175	6.8	3.06		175	7.4	3.23	
3級だけ取得	138	7.5	2.79	*	138	8.2	3.01	**
対				1.841				2.437
資格なし	175	6.8	3.06		175	7.4	3.23	

ＳＥＣ－Ｓ

比較対照群	慎重・綿密性				意欲			
	n	M	SD	t	n	M	SD	t
2級以上取得	93	5.9	1.81	*	93	2.2	0.90	
対				1.897				1.563
3級だけ取得	158	5.5	1.76		158	2.0	0.91	
2級以上取得	93	5.9	1.81	*	93	2.2	0.90	*
対				1.979				1.939
資格なし	218	5.5	1.81		218	2.0	0.85	

ワープロ練習

比較対照群	入力時の作業態度				注意の持続度			
	n	M	SD	t	n	M	SD	t
2級以上取得	77	35	22.5		77	2.4	0.93	*
対				0.551				1.847
3級だけ取得	131	33	22.1		131	2.2	0.83	
2級以上取得	77	35	22.5		77	2.4	0.93	*
対				-0.86				1.837
資格なし	150	37	20.7		150	2.2	0.75	
3級だけ取得	131	33	22.1	*	131	2.2	0.83	
対				-1.72				-0.13
資格なし	150	37	20.7		150	2.2	0.75	

有意水準　*・・・5%　**・・・1%%

ＥＰ－Ｓ検査の慎重・綿密性、勤勉・こつこつ型では、、３級だけと資格なしに差が出ている。特に勤勉・こつこつ型では有意水準が0.5%となっている。またＳＥＣ－Ｓ検査の慎重・綿密性、意欲では２級以上と資格なしに差が出ている。この２つの検査はいずれも性能的性格検査の作業態度の自己評定値である。実際の作業成績では、ＣＥＬ－Ｓ、数系列完成、鏡映描写では差がなく、ワープロ練習の注意の持続度では、２級以上と３級だけ、２級以上と資格なしに差が出ている。これらのことから、実際の作業成績ではワープロに係る検定結果を予測するのは難しいが、性能的性格検査の作業態度の自己評定値からは、ある程度予測が可能ではないかと思われる。

また、これまでの性能的性格、作業態度の研究から自己評定と実際の作業成績の間に関連はあまり認められなかったことからも実際の作業成績では予測するのが難しい。

今後は被験者数を増やすことと、別の資格検定結果についても検討していきたい。

｛文献１｝川島大司等：性能的性格（1）日本応用心理学会第６９回大会発表論文集．２００２～性能的性格（５）日本応用心理学会第７３回大会発表論文集．２００６

｛文献２｝川島大司等：作業態度の研究（1）日本教育心理学会第４５回総会発表論文集．２００３～作業態度の研究（３）日本教育心理学会第４７回総会発表論文集．２００５

（かわしま　だいじ）（くめ　みのる）

首尾一貫感覚（SOC）と5因子性格特性の関連について

銅直　優子
流通科学大学　サービス産業学部　医療福祉サービス学科
キーワード：首尾一貫感覚（SOC）、5因子性格特性、大学生

【目的】

健康を維持する為の能力として、Aaron　Antonovsky（1987）は「首尾一貫感覚（Sense of Coherence；SOC）」の概念を提唱した。SOCは、同じ苦境に立たされても健康を保持できる者と保持できない者の違いはなにか？」という疑問から出発した健康生成論である。近年SOCに関する研究は、育成時期の家庭環境、小学校から高校までの生活経験、個人特性や主観的ソーシャルサポートネットワークなどの要因がSOCにどのように関連しているかの検討が行なわれている。その結果、SOCを高める要因として、自己への原因帰属傾向や主観的ソーシャルサポートネットワークの広さ、支援的家庭環境内での育成、中学・高校の肯定的学校生活体験が関連していると報告されている。これまでの研究において、性格特性を取り扱っているものはない。そこで、本研究では、性格特性として5因子性格特性を用い、性格特性がSOCに及ぼす影響を検討していくこと、また、性差についても検討していくことを目的とする。

【方法】

対象と調査時期：関西私立A大学教職関連講座の受講生114名（男性86名，女性28名）。調査時期は2002年11月。関西私立B大学心理学関連講座の受講生46名（男性20名，女性26名）。調査時期は2006年5月。

調査用紙：

〔SOCスケール〕Antonovskyが作成した13項目を山崎らが日本語に翻訳したものを使用。本調査用紙は、把握可能感、処理可能感と有意味感の3要素から構成。7件法で回答。結果の処理は、3要素と合計得点を算出した。

〔5因子性格検査〕FFPQ研究会(1998)が作成した、Five-Factor Personality Questionnaire(FFPQ)を使用。5件法で回答。計150項目。結果の処理は、5つの超特性と各超特性の5つの要素特性（計25要素特性）の得点を算出した。

【結果】

初めに、SOCとFFPQの超特性の相関関係についてみていく。男女とも愛着性(男：.419，女：.405)、統制性（男：.428，女：.475）との相関が認められ、情動性においてはやや高めの相関(男：-.694，女：-.730)が認められた。しかし、外向性においては男性においてのみ相関（.462）が認められた。把握可能感では、統制性（女：.467）と情動性（男：-.594，女：-.650）で相関が認められた。処理可能感では、統制性（女：.428）情動性（男：-593，女：-692）で相関が認められた。有意味感では、外向性（男：.456，女：.424）、愛着性（男：.575）、統制性（男：.494）と情動性（男：-501，女：-.513）で相関が認められた。

以上の結果より、SOC全要素で情動性との関連が良く見られること、SOCの有意味感は、男女とも比較的性格特性と関連しており、その中でも女性より男性で関連が強いことが分かった。また性格特性の遊戯性は、SOCとは関連のないことが分かった。

次に、性格特性がSOCにどのような影響を及ぼしているのか見るために、SOCの各特性とSOCの合計点を目的変数とし、FFPQの超特性を説明変数とした、男女ごとの重回帰分析（強制投入）を行なった。その結果（表1）、男女とも把握可能感、処理可能感には情動性が負の影響を及ぼしている事が明らかとなった。有意味感では、男性は、愛着性、非情動性、統制性の順で与える影響が強く、女性では、非情動性、統制性の順で与える影響が強いことが分かった。すなわち、有意味感では、性格特性が及ぼす影響の強さとその順番が男女で違ってくることが明らかとなった。また、男女とも、重決定数（R^2）もそれほど低くなく、性格特性がSOCに与える影響が明らかとなった。

表1　重回帰分析の結果

目的変数	把握可能感		処理可能感		有意味感		SOC合計	
性別群	男	女	男	女	男	女	男	女
N	106	54	106	54	106	54	106	54
説明変数 外向性(β)								
説明変数 愛着性(β)					.344			
説明変数 統制性(β)					.224	.302	.185	
説明変数 情動性(β)	-.537	-.631	-.550	-.614	-.255	-.425	-.552	-.661
説明変数 遊戯性(β)								
R^2	.336	.469	.348	.495	.476	.383	.527	.575

＊有意なβ値のみを掲載

【考察】

相関関係の結果から、男女とも、SOCと非情動性の関連の深さが明らかとなった。SOCは精神健康度と正の関係を示すことが報告されており、精神健康度と関連の深い情動性とSOCの関連が認められたと考える。男性の有意味感における非情動性以外の性格特性との関連は、意識の外界への向きやすさ（外向性）、外界への信頼感（愛着性）や責任感の強さや物事への取り組み（統制性）などが関係したのではないかと考えられる。

重回帰分析結果から、性格特性がSOC形成に及ぼす影響性が示唆されたと考える。また、有意味感の性差については、外界理解について、女性は男性よりも情緒的側面に影響されやすさが関与しているのかもしれない。性差については、今後さらに検討していく必要がある。

（どうべたゆうこ）

ＭＳＣ（創造的構え）テスト改訂の試み（11）

因子分析による質問項目の識別度２

○寺澤美彦　　久米　稔　　成田猛　　高野隆一　　伊賀憲子　　内藤美智子
（日本福祉教育専）（適合性評価研究所）（秋田看護福祉大学）　（文化女子大学）（松本短期大学）

keywords：創造的構え、テスト、因子分析、

[はじめに]

創造性の発揮には創造的思考能力のほかにパーソリティ変数である創造的構え（ＭＳＣ）が必要であるとされている。そこで本研究者らはこの創造的構えを測定するための質問紙を作成し、何年かにわたり改訂を試みている。

昨年は2002年に改訂された30項目版を用いて、プロマックス法およびバリマックス法による因子分析を行い、両結果の比較、ならびに、あらかじめ設定された尺度と因子分析結果との関係の考察をおこなった(2006、日本応用心理学会第73回発表論文集)。そこではプロマックス解では６因子が、バリマックス解では８因子が抽出され、双方の第２因子、第３因子、第４因子は、理論的に設定した挑戦性、慎重性、積極性を意味するものとして一致した結果となったものの、客観性、自己信頼性、探究性については、どちらの方法においても、ひとつの因子にまとまらないという結果が得られている。

今回はＭＳＣの最終的な尺度を作成するにあたり、30項目では不安定な項目が含まれることや、実施がやや困難であることから、６因子指定のバリマックス法を用いてあらためて因子分析を行い、各因子４項目ずつの 24 項目からなるＭＳＣテストの作成を試みることにした。

[方法]

被験者：秋田県内公立高校生男女757名。

検査課題：ＭＳＣ（創造的構え）テスト。このテストにはあらかじめ理論的設定した尺度として、自己信頼性、客観性、慎重性（以上性格尺度）および挑戦性、探究性、積極性（以上動機づけ尺度）の６尺度がある。

手続き：ＭＳＣテストを「５・全くその通り」から「０・全くその反対」までの６段階の自己評定法で、集団にて実施し、６因子指定のバリマックス法にて因子分析を行った。

[結果と考察]

表１は因子分析結果（バリマックス法）に基づいて 24 項目版に採用された項目の番号（30項目版での）および因子負荷量である。因子分析では第２因子はすべてが挑戦性となり、第４因子はすべてが慎重性となった。しかも両者とも意図したとおり４項目が該当した。また第３因子もすべてが積極性となったが、５項目が該当したため比較的因子負荷量が低く逆転項目であった１項目を削除した。第５因子では因子負荷量の高いほうから３項目が自己信頼性となり、第６因子でも因子負荷量の高いほうから３つが探究性となった。残る第１因子には多くの項目が該当したが、やはり因子負荷量の高いほうから３つがそろって客観性であった。以上、６因子指定のバリマックス法による因子分析結果はこのようにきわめて安定したものとなった。なお第６因子の項目６は因子負荷量がきわめて低いが、これは第１因子にあった探究性を意図した項目を転用したためであり、第６因子の４番目の項目が自己信頼性を意図したもので、同様に因子負荷量が低かったため代わりとしてやむをえず採用したことをおことわりしておく。

次に各尺度が描く人物像について述べてみる。

客観性は質問項目上の「色々」という語がキーワードであり、「視野が広く、人と意見をかわし、公平な判断のできる」人物を表している。

挑戦性は「型破りで、人のやらないことや、思い切ったことがしたくてたまらない」人物を表すもので、いわゆる変わった人をイメージできる。

積極性は「ひとに言われなくてもできる。あるいはてきぱきと仕事をかたづけられる」人物を表し、単に活動的なだけでなく有能な人物をイメージできる。

慎重性は「行動するより考えるほうが好きであったり、実現可能性や結果を気にしたりする」人物を表している。慎重ではあるが、どちらかというと行動力のないタイプである。

自己信頼性は文字通り「自分の考えや判断に自信があり、緊張することなくものごとに取り組める」人物を表し、自己主張も強いことになる。

探究性は「気分にとらわれずに、また投げ出すことなく考えをまとめる」学究肌の人物を表している。

過去の研究では、このうち創造的思考能力との関係が深いのは挑戦性と慎重性であり、反対に関係が薄いのは積極性と探究性であるとされている(2005、日本応用心理学会第72回大会論文集)。

今後は、あらためて今回採用された 24 項目で創造的構えを測定し、その結果と創造的思考能力との関連を検討することが必要である。

創造的思考能力はＴＣＴ創造性検査によって測定され、被験者は創造性の非常に高い「飛躍的閃き型」から創造性のきわめて貧困な「硬直型」まで６つのタイプに分類される。またさらに６下位検査を通してのタイプの出現傾向をもとにタイプ・グループが決定されるが、このタイプ・グループと創造的構えとの関連を次回の発表より取り上げていくことにしたい。

（てらさわ よしひこ、くめ みのる、なりた たけし、たかの りゅういち、いが のりこ、ないとう みちこ）

表１　因子別、採用された項目の番号および因子負荷量

第１因子・客観性		第２因子・挑戦性		第３因子・積極性	
14	.555	5	.677	25	.611
24	.553	11	.626	27	.586
29	.521	30	.585	3	.516
4	.379	28	.427	10	.369
第４因子・慎重性		第５因子・自己信頼性		第６因子・探究性	
21	.602	9	.535	8	.534
26	.532	13	.479R	1	.430
23	.453	19	.389	7	.317R
2	.375	15	.358R	6	.228

R=逆転項目

バリマックス解：寄与率
Ⅰ=7.781 Ⅱ=5.957 Ⅲ=5.549 Ⅳ=5.028 Ⅴ=3.617
Ⅵ=3.423 累積=31.355

抑うつ，自我構造と，日常生活における成功，失敗経験の認知との関連についての一考察

林　　潔
（白梅学園短期大学）

（抑うつ　自我構造　CFQ　エゴグラム）

目的

日常生活の成功，失敗経験の認知は，事実関係と併せて，それらの現象を認知する個人の認知傾向の条件とも関係すると考えられる。

個人の成功，失敗の認知傾向にどのような個人内条件が関連するのであろうか。このことを明らかにすることが，本研究の目的である。

成功，失敗の経験の認知は，もしその傾向が習慣化すると，その人の生活のなかで条件づけの役割を果たすことになる。そしてその認知様式が固定化すると，人は成功，失敗の経験を強く予測して生きることにもなる。この背景には，その人の一定した情動あるいはパーソナリテイの傾向も，かかわりを持つことが考えられる。

本研究では,日常生活における成功，失敗経験の認知について，2つの変数，すなわち抑うつ傾向と，エゴグラムで表現される自我構造との関連について検討をする。

すなわち，まず抑うつ傾向と，成功，失敗経験の認知の傾向とは関連するであろうという仮説を検討する。そして成功，失敗経験の認知の傾向と関連する，自我構造の特徴について明らかにする。

方法

成功,失敗経験の認知については,大橋・行場・守川(2000)の日本語版 CFQ（Cognitive Failure Questionnaire）を用いた。CFQ は注意や行動に関する，比較的安定した特性を測定していると考えられる（大橋，他，前掲書)。これは 25 項目からなる 5 件法の質問紙である。抑うつ傾向の測定については，BDI（Beck Depression Inventory）を用いた（林・瀧本,1998)。BDI は 21 項目からなる 4 件法の質問紙である。自我構造についてはエゴグラム（杉田,1985）を用いた。これは 50 項目からなる 3 件法の質問紙である。エゴグラムは,自我を 5 つの下位構造に分析し，エネルギー充当の度合いを測定するものである。この 3 つの質問紙を，首都圏の大学生男子 128 人，女子 150 人，合計 278 人に対して実施した（2006 年 11 月)。

結果

これらの 3 つの尺度の結果は，以下のとおりであった。

	男子		女子	
	M	SD	M	SD
エゴグラム				
CP	9.48	3.95	9.51	4.05
NP	13.27	3.90	14.58	3.39
A	11.59	3.32	11.35	3.03
FC	12.95	4.56	14.31	3.75
AC	11.91	4.76	12.61	4.48
BDI	13.79	9.28	15.32	8.27
CFQ	68.96	17.44	72.44	15.09

CFQ の得点と，他の 6 変数の得点との間の相関係数を算出した。

その結果 CFQ の得点と, エゴグラムの AC（$r=.297$ $p<.01$），BDI（$r=.253$ $p<.01$)の得点との間には相関が認められれた。

考察

日常生活における成功，失敗経験の認知と，BDI で示される抑うつ傾向とは低いが相関が見られた。このことによって先の仮説は成立した。

抑うつ傾向が高いと，日常の成功，失敗経験のうち，特に失敗経験を強く意識し，長期記憶の対象としてしまう。そしてこの傾向は，日常生活で負の経験をした際に過剰に強化される。そのようにしてこの過程は，記憶痕跡に影響を与えることになる。その結果 Beck のいう認知の歪みの形成につながる可能性がある。すなわち，選択的抽出，過度の一般化などの反応である。そしてこれらの反応は，さらに次の反応の原因ともなり循環をくり返す。

また成功，失敗経験の認知と関連する自我構造は，AC であった。

自我を構成する FC と AC は，共に精神分析の es に対応する感情的な要因である。しかし，本研究の結果では，感情を表現する傾向である FC(Free Child，自由な子ども)は,この日常生活の成功，失敗の認知には関連するとはいえなかった。それに対して，感情を抑制する傾向である AC（Adapted Child，順応した子ども）のみが成功，失敗の認知に関与した。感情抑制の負の側面のもつ問題である。すなわち AC が高すぎる場合は，過剰適応として理解されている。感情抑制の高い場合は，内部緊張が高まるために傷つきやすくなり，その結果特に負の経験に敏感となる。そのために負の経験を，過度に重大視してとらえることになる。これが自己報告方式である質問紙への回答に反映することにもなると考えられる。

成功，失敗の認知には，情動，パーソナリテイの傾向も関わることが明らかになった。

これらのことから，特に失敗経験の認知傾向が高い場合への対応として 2 つの条件が考えられる。

一つは対処についてのいわゆるノウハウを提示することである。この場合は段階的提示方式が望まれる。しかしノウハウの提示だけでは十分とはいえない。あわせて，抑うつ傾向と感情抑制の傾向を緩和する過程が必要になってくる。これは基本的には，リラクセーションの手続きである。

参考文献

大橋智樹・行場治朗・守川伸一　2000　CFQ によって測定されるエラー傾向と性格特性との関連　日本産業組織心理学会第 16 回大会発表論文集, 104-107.

臼井伸之介・神田幸治 2004　不安全行動の誘発・体験システムの構築とその回避手法に関する研究

（はやし　きよし）

乳癌検診の受診行動意図における影響要因の検討

－年齢階級別での防護動機と期待強化動機の影響関係について－

大森直樹
（大阪医科大学附属病院中央放射部）

キーワード：乳癌検診，受診行動意図，防護動機理論，期待強化動機

【研究の目的】日本人女性の乳癌罹患率は，近年増加傾向を示している．その対策として，マンモグラフィ併用乳癌検診が，各自治体によって実施されている．マンモグラフィ併用乳癌検診には，乳癌死亡率を低減させる効果があることが実証されている．しかし，乳癌検診を有効に機能させていくためには，検診受診率の増加を図ることが重要となる．そのためには，検診対象者に対して，効果的な受診行動の勧告を実施できることが必要となる．大森(2005)は，乳癌検診の受診行動を唱導する説得的コミュニケーションは脅威アピールであるとし，脅威アピールの説得効果を説明する理論的枠組みとして，Rogers(1975，1983)の防護動機理論を挙げている．防護動機理論は脅威評価と対処評価が相乗結合することにより防護動機が喚起し，唱導された対処行動の遂行意図を促進すると説明している．つまり，防護動機理論に基づくと，乳癌検診への受診行動意図は，「乳癌の罹患」という脅威の可能性を前提とし，その合理的な対処行動(乳癌の早期発見)の遂行を目的として受診行動意図が喚起することになる，しかし，「乳癌検診を受診すると，乳癌でないことが証明される」という希望的観測が被検者の信念体系にあり，さらに，希望的観測が受診行動を肯定する認知に整合している場合，受診行動には希望的観測を強化する効用があると被検者が期待する可能性を考えることができる．希望的観測にみられる自己期待に対し，支持的に強化する効用を対処行動に認め，それを肯定する動機(以下，期待強化動機)を仮定すると，乳癌検診の受診行動意図は，防護動機以外に期待強化動機によっても促進的影響を受けている可能性があると予想される．また，受診行動への肯定的評価と受診行動に対する対処評価とは認知的に整合していると考えられる．よって，期待強化動機は防護動機理論における対処評価にも促進的影響を与えることで，防護動機を喚起する可能性も指摘できる．本研究では，年齢階級別に，乳癌検診の受診行動意図に対する防護動機と期待強化動機の影響関係を検証し，乳癌検診の受診行動意図に影響を及ぼす要因間の一般的傾向が明らかになることを目的とした．

【方法】対象：近畿圏内在住の成人女性 271 名に対して質問紙を配布した．有効回答者数 225 名(83.0%)のうち，専門的な医学教育を受けたことのある者 3 名，および乳癌罹患経験者 2 名を除外し，220 名を測定対象として分析をおこなった．調査項目は，個人特性および(1)手がかり情報，(2)罹患率の認識度，(3)防護動機理論の変数，(4)乳癌検診に対する態度（希望的観測，合理的回避認知，期待強化動機，受診行動意図）を設定した．質問項目群の直前に「乳癌検診について」と題した 554 字の情報を説得的メッセージとして提示した．提示情報の内容は提示順に，①乳癌罹患率，②乳癌の脅威，③早期発見による効果性，④乳癌検診の効果性，⑤検診費用，⑥検診内容の解説とした．

【結果】本研究で予測した因果モデルに対するパス解析の結果から，(1)期待強化動機は 20 歳代と 30 歳代で，受診行動意図に対して有効な促進的影響を与え，50 歳代と 60 歳以上には防護動機を促進させる有効な影響を与えていることが示唆された．(2)防護動機は 20 歳代と 60 歳以上で，受診行動意図に対して有効な促進的影響を与えていることが示された．(3) 20 歳代では，防護動機と期待強化動機がともに受診行動意図に対して促進的に作用し，30～50 歳代では，期待強化動機の方が防護動機より促進的に作用し，60 歳以上では，防護動機の方が受診行動意図に対して促進的に作用していることが示された．(4)手がかり情報は受診行動意図に対し，すべての年齢階級で促進的な直接または間接的影響を与え，また，40 歳代～60 歳以上において希望的観測に抑制的な影響を与えていることが示唆された．(5)罹患率の認識度は希望的観測に対して，40 歳代と 50 歳代で促進的に，60 歳以上で抑制的に影響し，防護動機に対しては，30～40 歳代と 60 歳以上で促進的な直接または間接的影響を与えていることが示唆された．(6)希望的観測は，40 歳代と 50 歳代で受診行動意図を抑制し 60 歳以上では促進する影響を与えていることが示された．(7)合理的回避認知は，50 歳代で受診行動意図に，60 歳以上では防護動機に促進的影響を与え，さらに，期待強化動機に対しては，すべての年齢階級において促進的な影響要因となることが示された．

【考察】因果モデルに対するパス解析の結果，20 歳代の若年群では，防護動機と期待強化動機がともに受診行動意図に対して促進的に作用し，30～50 歳代の中年群では，期待強化動機の方が防護動機より促進的に作用し，60 歳以上の高齢群では，防護動機の方が受診行動意図に対して促進的に作用していることが示された．従って，防護動機と期待強化動機は，受診行動意図に対して促進的な影響関係を示しているといえ，受診行動意図を説明する動機要因として，期待強化動機を因果モデルに設定することの妥当性を支持していた．さらに，期待強化動機と受診行動意図との影響関係には年齢依存性のあることが示唆された．また，受診行動意図に対する防護動機と期待強化動機の影響関係は，若年者では従属的な相加的影響関係にあり，中年者と高齢者では独立的な相補的影響関係にあることも示唆された．よって，受診行動意図における影響要因間の影響関係には年齢依存性があること，および，期待強化動機は，年齢階級によって防護動機と相加的・相補的に影響する影響要因であることが示唆された．

【引用文献】

大森直樹　2005 マンモグラフィ併用乳癌検診に対する受診行動意図の世代間比較－防護動機理論に基づく検討　日本乳癌検診学会誌，14(1)，71-80.

Rogers,R.W. 1975 A protection motivation theory of fear appeals and attitude change. *Journal of Psychology*, **91**, 93-114.

Rogers,R.W. 1983 *Cognitive and Psychological Processes in Fear Appeals and Attitude Change. A Revised Theory of Protection Motivation* . In J.T.Cacioppo & R.E.Petty(Eds), Social Psyichopsychology. New York : Guilford Press. 153-176.

（おおもり　なおき）

視覚・聴覚の二重課題における注意の偏りについての研究(3)

○櫻井美由紀，　岩崎祥一
（東北大学・情報科学研究科）

キーワード：二重課題，注意の配分，携帯電話，会話

【研究の目的】自動車運転中の携帯電話の使用に関する先行研究では、携帯電話を手で保持し操作することが運転の妨げになるといった物理的な干渉のほかに、携帯電話での会話そのものが運転に必要な情報である視覚の注意を減らし、視覚の情報処理を完全には出来なくなる状態に陥らせることで、認知的な干渉が生じる(Strayer & J ohnston,2003)ということがいわれており、櫻井と岩崎(2005,2006)の2回にわたる実験でも同様の結果が導き出された。今回の実験では、加齢によって携帯電話の使用に付随する注意の容量の減少がどのように変化するのかについて、事故の起こる危険性を考えたときに問題となりうる反応遅延(2000ms 以上の反応時間)変化の検出の遅れのデータをもとに検証し、また聴覚の入力方向が視覚的注意配分に及ぼす影響を検証することを目的として行った。

【方法】

被験者：若齢者20名（平均年齢19.4歳）,高齢者20名（平均年齢71.2歳)。利き手は全員右手の健常者。

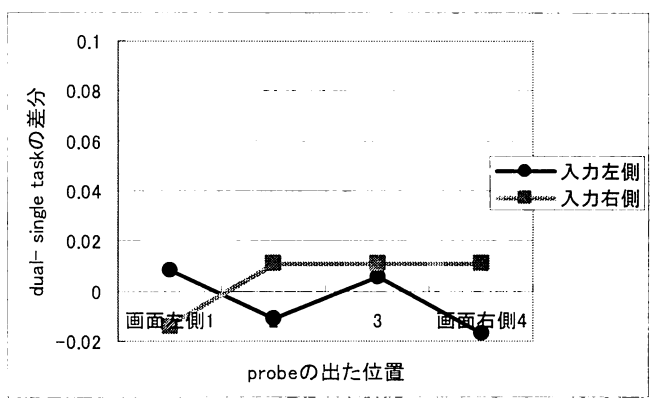
刺激:画面の左2箇所,中央2箇所,右2箇所の合計6箇所の位置にリングが提示された。6 箇所の位置に表示されているリングの周りに probe 刺激と同形の星型を視覚ノイズとして定常的に提示し、singleton による attentional capture の影響を抑えた。また Abrupt onset による attentional capture を抑えるため、画面は全試行において 300ms 表示し、200ms のブランク画面が挿入された。リングが表示されて画面が 3～7 回切替わる間に、星型の probe 刺激が 4 箇所のリングの位置のいずれか 1 箇所の位置に表示された(6 箇所のリングのうち、probe 刺激が出るのは 4 箇所のみであり、左側から 1~4 とした)。

一方、携帯電話による会話を模擬するため感情喚起を伴わない verbal 課題を作成した。具体的には若齢者には最長で 6 秒程度のクイズ問題を作成し被験者にそれが正しいか否かを「マル」か「バツ」かの二者選択で答えさせ、また高齢者には若齢者と同じ課題での解答率が低かったため、質問応答課題(例；「あ」から始まる食べ物を一つ上げてください)を 6 秒程度で出題し、答えさせた。

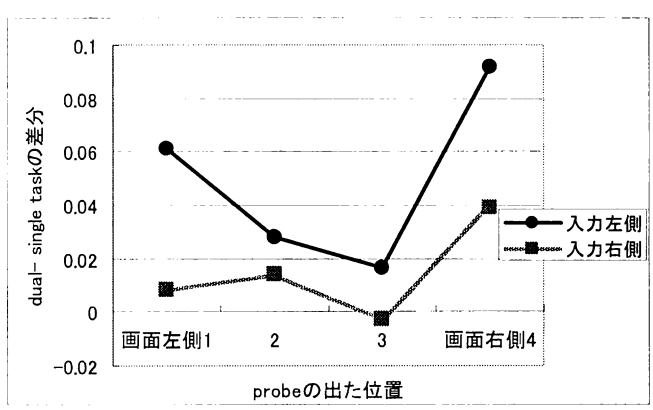
条件：二重課題における主課題は probe 検出であり、probe 刺激（リングのある位置に出現する星型）が現れたら、なるべく早くキーを押すことであった。副次課題は、ヘッドフォンの片側からだけ聞こえてくる問題に口頭で答えることであり、single task は verbal 課題は無視してもらった。Dual task では probe 検出と同時に verbal 課題に回答してもらうこととした。

要因計画：2(聴覚情報の入力方向:右,左)×2(課題:dual, single)×4(probe の提示位置)の被験者内の 3 要因計画。

【結果】反応時間の尚早反応として 200ms 以下は除外し、反応に 2000ms 以上時間がかかった試行を事故の起こる危険性の高い「見逃し」として扱い分析を行った。高齢者では反応に 2000ms 以上時間がかかった試行が全体の 5.27%であったのに対して若齢者の場合は全体の 0.97%しかなかったため、若齢者に限っては 1500ms 以上を見逃しとした。アークサイン変換後に 3 要因の分散分析を行った結果、若齢者では probe の出た位置($F(3,57)=9.985$, $p<.001$）の主効果が見られたが、聴覚入力の方向、課題の主効果およびそれが関連する交互作用はすべて有意ではなかった。図 1 に若齢者の dual と single task の見逃しの割合の差分を、聴覚入力の方向で比較したものを記す。一方高齢者の分析の結果、聴覚入力の方向（$F(1,19)=6.807$, $p<.05$）,課題（$F(1,19)=9.748$, $p<.01$）および probe の出た位置（$F(3,57)=17.987$, $p<.001$）（位置の 2 番と 3 番のペアを除く）の主効果が有意であり、聴覚の入力方向と課題（$F(1,19)=7.350$, $p<.05$）、課題と probe の出た位置（$F(3,57)=3.783$, $p<.05$）の交互作用が有意であった。また、高齢者の dual と single task の見逃しの割合の差分と、聴覚入力の方向との 2 要因の分散分析を行った結果、聴覚入力方向（$F(1,19)=6.167$, $p<.05$）の主効果がみられた(図 2)。このことから、高齢者では視野の位置に関わらず、左耳から聴覚入力を行った場合に右耳から聴覚入力を行った場合よりも変化の検出が遅くなるということが考えられる。



[図 1, 若齢者の見逃しの差分]



[図 2, 高齢者の見逃しの差分]

【考察】　実験では高齢者の場合、課題(dual/single)の効果が見られたことから、話を聞き流すよりも、話を聞かせて答えさせたときのほうが probe の検出を悪くすることが確認され、特に dual task 時に見逃しが多くなることがわかる。また高齢者では、視野の位置に関わらず右耳から聴覚情報を入力した場合に見逃しの割合が左側から聴覚入力した場合と比較して少ないことがわかった。このことは若齢者を対象とした櫻井と岩崎(2005,2006)の実験結果とも一致した。

(SAKURAI Miyuki & IWASAKI Syouichi)

音声の基本周波数の高低が聞き手の感情認知におよぼす影響

永光　優
（文京学院大学大学院人間学研究科）

キーワード：音声　基本周波数　感情認知　快－不快

【目　的】

音声が感情認知に及ぼす影響について，重野(2004)は俳優が感情を込めて発声した音声について分析を行い，基本周波数が感情表出に果たす役割や快-不快の認知との関連を示した．しかしながら，これまで変換した基本周波数によって感情認知の相違を検討した研究は少ない。そこで本研究では基本周波数と感情認知の関連について検討した。具体的には，音声の基本周波数が感情認知に及ぼす影響，そして快－不快の認知への影響を調べた。仮説として以下の3点を想定した。(1)呈示される基本周波数によって感情の認知に差が見られ，より高い基本周波数の場合は幸福や驚きが，基本周波数が低いほど恐れや悲しみ，怒り，嫌悪が認知される。(2)嫌悪は基本周波数が最も低いオリジナル-5%で認知されやすい。(3)快尺度得点は基本周波数が高くなるにつれ上昇し，低いほど不快と認知される。

【方　法】

実験協力者　聴力健全な大学生36名(男性15名・女性21名，平均年齢20.1歳)を対象とした。

刺激　大学院生男女各1名(男性22歳，女性29歳)に発声を求め，16ビット，44.1000Hz で録音した。重野(2004)で使用された“東京”，“11時半”，“そうですか”の3語を用い，基本周波数をオリジナルから±3%，±5% Audacity(Source Forge, A Free, Cross-Platform Audio Editor Version1.2.4)で変換し，オリジナルを含め5段階の音刺激を用いた。

手続き　被験者内要因計画を用いて個人実験を行った。はじめに実験者が気分調査票を音読し，各項目への回答を求めた。すなわち，実験者が項目を音読した後，一定時間以内(3000ms)に現時点での読み上げた項目へ協力者自身の気分について記入をしてもらった。気分調査票への記入が終了した後に，本試行を行った。本試行では実験協力者にヘッドフォンを装着してもらい，なるべく外界の雑音に妨害されないようにして音刺激を呈示した。

ランダムにした音刺激は速度強制法で呈示し，1試行ごとに6感情(幸福，恐れ，驚き，怒り，嫌悪，悲しみ)のうち1つの選択及び7段階の快-不快尺度への回答を求めた。音刺激は1000msの合図音を提示された後，150msのブランクをはさんで600－940msで呈示した。回答時間は6000ms以内とした。実験は20試行ごとに2分間の休憩をはさみ，3刺激×5周波数×2名×2セッションの計60試行を行った。

【結　果】

6感情についてχ^2検定を行った結果，話者の性別($\chi^2(5)=449.6$, $p<.01$)，刺激語($\chi^2(10)=388.0$, $p<.01$)，基本周波数($\chi^2(20)=262.3$, $p<.01$)で差が認められた。幸福は+5%および+3%と周波数増加した時に認知される傾向が見出された。また，-5%の周波数減少の場合は，怒りや嫌悪と認知されやすく，周波数の変換を行っていないオリジナルを含め，マイナス方向に変換した音声については嫌悪と認知されやすいことが示された(図1)。

また，7段階で点数化した快尺度得点について分散分析を行った結果，以下のような結果が得られた。話者の性別では女声の方が「快」と認知されやすく($F(1,1057)=714.1$, $p<.01$)，『東京』に比べ『そうですか』は，「快」と認知されにくかった($F(2,1057)=160.3$, $p<.01$)。また，基本周波数が高いほど「快」と認知され($F(4,1057)=84.3$, $p<.01$)，話者と刺激語($F(2,1057)=67.5$, $p<.01$)，話者と基本周波数($F(4,1057)=17.7$, $p<.01$)，刺激語・基本周波数($F(8,1057)=4.3$, $p<.01$)で交互作用が認められ，周波数が+5%で呈示された女声の『東京』が最も「快」と認知されることが示された。多重比較(Tukey 法)の結果，+5%と+3%の周波数増加，および-5%の周波数減少，そして単語間において有意な差が認められ，オリジナル音声は基本周波数を-3%変換した場合の「快」の認知に差は示されなかった。

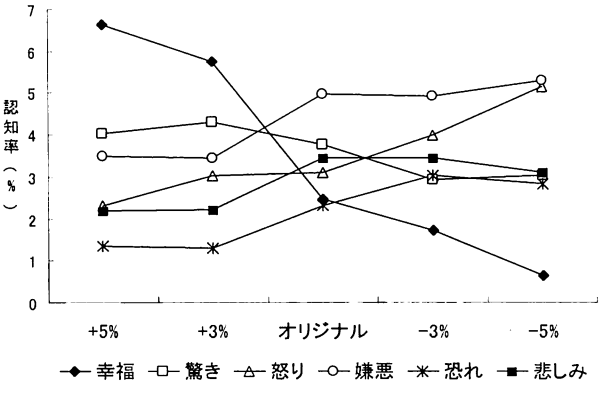


図1　周波数ごとの感情認知(%)

【考　察】

本研究結果から基本周波数によって感情・快尺度得点の認知に差が認められ，基本周波数が高いほど「幸福・快」，低い場合は「嫌悪・不快」と認知された。これらは重野(2004)の研究結果を支持していた。一方で，恐れや悲しみの認知は全体的に低い傾向を示した。この結果は，重野(2004)の研究でも得られている。嫌悪感情の認知には文化的要因の関与が大きく，日本人においては嫌悪感情の認知閾が高いこと，嫌悪，怒り，恐れといった否定的感情は区別しにくいことが知られている(佐野，2001)。したがって，感情それ自体の認知のしやすさが本研究結果に影響を与えたことは否定できない。以上のように，本研究の仮説は全て支持される結果が得られた。しかしながら，全ての要因において交互作用が認められており，オリジナルの音刺激についても嫌悪など感情の認知が示された。さらに実験協力者が刺激語ごとに場面を想定し，そのことが感情の認知に影響を与えた可能性が認められた。したがって，今後は話者の性別や文脈による効果を考慮し，それらの要因が認知に及ぼす要因について再検討する必要がある。

<引用文献>

佐野智子　2001　音声を用いた感情表出と感情認知の研究　青山心理学研究　1，29-35.
重野純　2004　感情を表現した音声の認知と音響的性質　心理学研究　74，6，540-546.

（ながみつ　ゆう）

乳児の泣き声が育児中の女性に及ぼす心理生理的影響

― 育児ストレスとの関連性―

○高橋　有里[1)]　　桐田　隆博[2)]
([1)] 岩手県立大学看護学部　[2)]岩手県立大学社会福祉学部)

キーワード：乳児の泣き声，心拍数，皮膚コンダクタンス反応，収縮期血圧，育児ストレス

【研究の目的】 これまでに行われた質問紙および聞き取り調査によって，乳幼児を子に持つ母親のストレス主要因として，「激しい泣きや泣きやまないこと」が挙げられている．ただし，今のところ，乳幼児の泣き声が母親へ与える心理生理学的な影響についての検討は，主として虐待経験のある母親を対象として行われている．虐待の予防という観点に立つと，一般的な母親の育児ストレス度と泣き声に対する心理生理学的反応傾向との対応関係を明らかにすることも重要と思われる．そこで本研究は，乳児の泣き声が育児中の女性に及ぼす心理生理的影響を，育児ストレスとの関連性から明らかにすることを目的に行った．

【方法】 1）被験者：実験に先立ちT村で乳児健診時に実施した質問紙調査のうち，育児ストレス尺度(平均31.5点)において，32点以上をストレス高群，31点以下をストレス低群として，それぞれの群から10名ずつ，計20名の乳児育児中の女性を被験者として選定した．予め実験の目的及び方法について説明を行い，匿名性を条件に実験参加への同意を得た．2）測定項目：生理指標としては，心拍数（HR），皮膚コンダクタンス変化（SCC），拡張期血圧（DBP），また，主観的評価としては多面的感情状態尺度(短縮版)と乳幼児泣き声不快尺度を測定指標とした．乳幼児泣き声不快尺度は筆者が作成し信頼性を確認した尺度で，社会的に迷惑のかかる状況での「公的状況不快」（5項目）と，社会的には容認される状況での「私的状況不快」（6項目）からなる．これまでの調査で，私的状況不快度は日頃不安や怒りを喚起しやすい特性と強い相関があり，育児ストレスに影響することが示唆されている．3）刺激：生後3ヶ月の女児の空腹時の泣き声を複数用意し，これを今回の被験者とは別の女性10人（平均21.9歳）に評定させて最も不快と判定されたものを刺激として選択した．泣き声の持続時間は2分，音圧はオージオメータにおいて1KHzで85dBHL相当であった．4）手続き：実験は生理心理実験室のシールドルームで行われた．まず，乳幼児泣き声不快尺度に記入後，統制条件（cont）として安静時のHR，SCCを2分間連続測定し，終了直後にDBPの測定を行った．次に，休憩後，実験条件（exp）として泣き声をヘッドフォンを通して被験者に2分間呈示し，この間HR，SCCを連続測定し，終了直後にDBPを測定した．また，被験者は各条件終了後に多面的感情状態尺度に記入した．

【結果および考察】

HR・SCCについては2分間を30秒ごとの4区分（S1～S4）に分け各区分での平均値を算出した．多面的感情状態尺度はcontとexpで各下位尺度得点の平均値の差を求め，有意差のあった抑鬱・不安，敵意，非活動的快，親和，驚愕について，平均値を境界として感情の高群・低群に分けた．また，乳幼児泣き声不快尺度は私的状況不快の平均値を境界として不快高群・低群に分けた．その上で，HR・SCCに関しては，3要因の分散分析（各尺度の高群・低群×cont・exp×時間区分）を，DBPに関しては，2要因の分散分析（各尺度の高群・低群×cont・exp）を行った．以下に主な結果を尺度ごとに示す．

1）育児ストレス度

HR，SCC，DBPともに有意な主効果及び交互作用はなかった．

2）抑鬱・不安，敵意，非活動的快，親和，驚愕度

HRでは敵意の高低とcont・expの交互作用がマージナルに有意となり（$F(1,18)=3.292$, $p<.1$）単純主効果の検定の結果，敵意の低い群はexpでのHRの有意な低下が見られた．また，非活動的快の高低とcont・expの交互作用もマージナルに有意となり（$F(1,18)=3.295$, $p<.1$）．単純主効果の検定の結果，非活動的快の高い群はcont・expでほとんど変化しないのに対し，低い群はexpで有意なHRの低下が確認された．DBPは，抑鬱・不安の高低とcont・expの交互作用が有意となり（$F(1,17)=13.443$, $p<.01$），単純主効果の検定の結果，抑鬱・不安高群はexpで有意に上昇し，低群はexpで有意に低下した（図1）．抑鬱・不安高群はより嫌悪なストレス状態にあったことが示唆された．

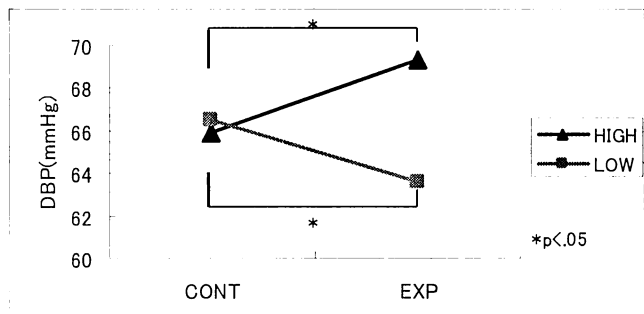


図1　抑鬱・不安と平均DBP

3）泣き声不快度

HRでは，私的状況不快高低とcont・expと時間区分の3要因の交互作用が有意となった（$F(3,51)=4.645$, $p<.01$）．単純・単純主効果の検定の結果，contとexpにおいて不快高群では最初の30秒間に有意に低下した．また，不快低群では全ての時間区分においてcontとexpで有意差があった（図2）．

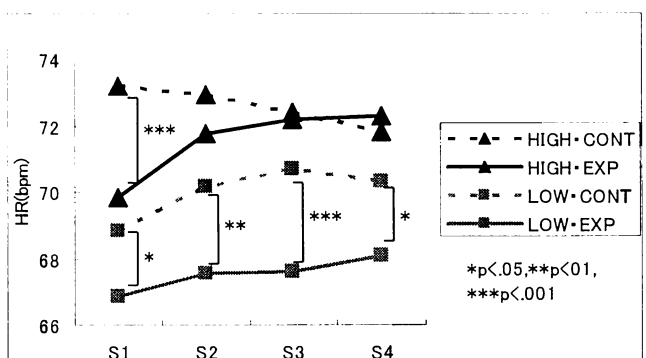


図2　泣き声不快度と平均HR

不快低群では，HRはcontよりexpで一貫して低い．先行研究でも母親が他人の乳児の泣き声を聞くと，注意の集中によりHRの低下が見られることが示されており，今回の不快低群におけるHRの低下はそうした結果と整合する．これに対して，不快高群ではexpにおけるHRの低下は泣き声の聴取直後においてのみ観察され，時間経過とともにcont・expの差がなくなることが明らかになった．このことから，不快高群の被験者は，始めは泣き声に注意を向けようとしたものの，徐々に泣き声に耐えられなくなりストレスが高まった可能性が示唆される．また，SCCは，私的状況不快の高低とcont・expの交互作用がマージナルに有意となり（$F(1,17)=3.188$, $p<.1$），単純主効果の検定の結果，両群ともcontよりexpで有意に高くなったが，特に不快高群において変化の差が大きく，私的状況不快が高い群はストレスを強く感じていたことが分かる．

（たかはし　ゆり　・　きりた たかひろ）

主観的幸福度と仕事の優先度の関係

○事崎由佳　岩崎祥一
（東北大学大学院情報科学研究科）
キーワード：主観的幸福度、仕事、余暇活動

【目的】

昨年、英国の独立系シンクタンク(the New Economic Fondation：nef)が公表した「地球幸福度指標（Happy Planet Index)」、また、Adrian White らが発表した世界初の「世界幸福度マップ（World map of happiness)」をヒントに、学生が日頃どのような生活の満足感や健康意識を持っているのか等を問うアンケート調査を行った。今回はその中から幸福と関連があるといわれている生活の満足感を主観的幸福度として、仕事の優先度との関係について分析した。

【方法】

①対象：大学生 222 名。但し、データに不備があった 13 名は分析から除外した。

②質問紙の内容：NEO-FFI(60 項目：5 件法)、生活の満足度(5 項目：7 件法)、時間の使い方についての 3 テーマ。

③手続き：アンケートを行う前に、記入時にはなるべく無記入箇所が無いよう、すべての項目について回答をするように教示を行った後、アンケートを実施した。

④分析：生活の満足感に関する 5 項目から得られた総合得点から調査対象者を 3 群(high,mid,low)に分けて比較検討した。

【結果】

調査では、『もし、あなたが今日の午後、暇な時間が 4 時間あるとします。その時間を使って 2 つのこと(1 つは前からやりたかったこと：余暇活動など、もう 1 つはやらなければならないこと：仕事など)をやる場合、どちらをどの時間帯で行いますか。』として、提示した 4 時間の枠のどこでどちらを行うかを該当する時間帯に斜線を引いた上で、「やりたいこと」には「P」を、「やらなければならないこと」には「D」を書き入れてもらった。各枠は 30 分単位に区切られており、使える最小の時間枠はこの単位とした。

時間は分析から便宜上、30 分単位を 1 ブロックとして T1(0～30 分)とすると、全部で T8(210～240 分)となる。T1 を選択している場合は 1、T5 を選択していたら 5 というように得点化して分析した。

まず、「やりたいこと」「やらなければならないこと」それぞれがどの時間帯で行われるのかについて、各群の得点平均を見てみると、「やらなければならないこと」では、low 群は 3.014、mid 群では 2.761、high 群は 2.647 だった。一方、「やりたいこと」は low 群で 3.486、mid 群では 3.859、high 群は 4.014 だった。high 群は他の群に比べて早い段階で「やらなければならないこと(仕事など)」に取り組み、low 群は他の群よりも早い時間帯で自分が「やりたいこと(余暇活動など)」を持つという傾向が見られる。なお、分散分析の結果、どちらも有意ではなかった。

次に、「やらなければならないこと」の優先度を見るため、幸福群別に「やりたいこと」から「やらなければならないこと」を引いた差分を算出(Fig. 1)し、分散分析を行ったところ、群間で有意があった($F(2, 206)=8.19$, $p<.001$)。また、多重比較の結果、low-high 群の間で有意差があった($F(2, 206)=8.19$, $p<.001$)。high 群は他の群に比べ、より遅い時間帯に「やりたいこと」を持ってくるという傾向がこの結果からわかる。

「やりたいこと」「やらなければならないこと」どちらを先に行うかでは、「やらなければならないこと」を先に選択した人が low 群では 60%、mid 群で 73.2%、high 群は 72.1%だった。群を問わず、まず先に「やらなければならないこと(仕事)」をやってから、自分が「やりたいこと」を後の方に持ってくるという人たちの割合が多いことがこの結果からわかる。しかし、χ^2 検定の結果、有意差は得られなかった。

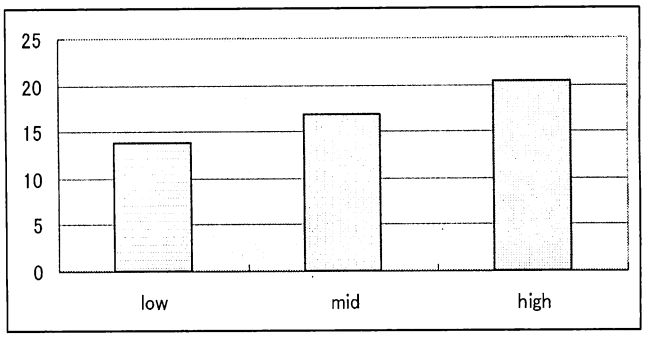


Fig.1　幸福群別の「やらなければならないこと」の優先度

次の行動に移行するまでの間隔については、「やらなければならないこと」から「やりたいこと」への移行間隔に注目した。移行間隔(0～120 分)を得点化し、各群の平均を見たところ、low 群で 44.29、mid 群は 32.31、high 群では 42.24 であった。low・high 群では次へ移行する間隔が大体同じくらいだが、mid 群はやや早い時間帯で次の行動に取り掛かる傾向が見られた。しかしながら、分散分析の結果、有意差は得られなかった。

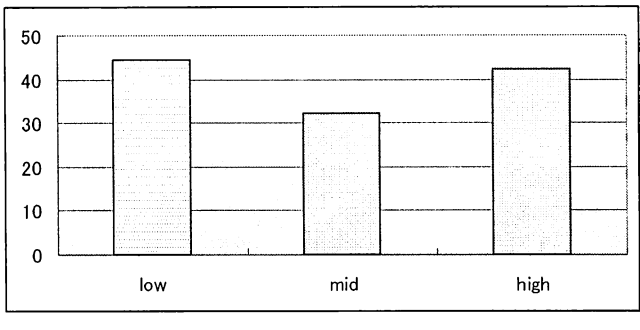


Fig.2「やらなければならないこと」から次に移行するまでの間隔

【考察】

今回の結果から、「やりたいこと」から「やらなければならないこと」の差分と主観的幸福度に関連性が見られ、幸福度の高い群ほど先に「やらなければならない(義務的な)」ことを手早く片付けた後に、ゆっくりと自分が「やりたいこと」をする傾向がみられた。これは、生活上での優先度から考えると、「やらなければいけない」こと(仕事)というのは直接的に生活に影響力を持つものであり、優先度も高いと考えられる。それと比べると、余暇活動は心や生活に潤いを与え、日頃忙しい自分への「ご褒美」的な要素が高いために、後の方に持ってくるのではないかと考えられる。

【謝辞】

本研究は、東北福祉大学感性福祉研究所における文部科学省の学術フロンティア推進（平成 16 年度～平成 20 年度）による私学助成を得て行われた。

（ことざき　ゆか・いわさき　しょういち

スケッチマップ法の信頼性の検討

― 距離や角度の指標を用いて―

○白井清太郎
(国士舘大学大学院人文科学研究科)

キーワード:認知地図、スケッチマップ、大規模既知空間

【序論】空間認知研究におけるスケッチマップ法は個人の認知地図に関する情報が多く,視覚的表象を捉える方法として有用であると考えられる.しかし,どのような指標の計量化が難しいのか,また,その指標の信頼性の検討はなされてこなかったようである.

Blades, M. (1990)は,量的・質的両方の面でスケッチマップの信頼性を確かめている.しかし,彼が行った量的な指標は「道路ネームの数」「ランドマークネームの数」「道路の線分の数」であった.スケッチマップの量的な指標にはこれら以外にもあると考えられる.西應ら(2000)では距離や角度をスケッチマップの指標に用いている.しかし,そこで用いられたスケッチマップでは link が二本線に描かれており,数量化するには距離の測定があいまいであると考えられる.

【目的】以上のような問題から, 本研究では,Blades(1990)の実験に習いつつ,指標は西應ら(2000)におけるスケッチマップの指標を用いることとした.ただし,参加者に定規を補助的な道具として使用させ link を一本線でスケッチマップを描かせた.そして,参加者にとっての既知空間において,時期を空けて同じ経路のスケッチマップを2度収集し,今まで検討されてこなかった指標についての計量化を図るとともに,その検査・再検査信頼性を検討することを目的とする.

【方法】<参加者>都内 K 大学学部生 16 名(平均年齢=20.6歳,SD=1.7),うち男性8名(平均年齢=21.3,SD=1.9),女性8名(平均年齢=19.9,SD=1.3),であった.

<対象地域>K 大学 S 校舎の最寄り駅 U 駅までの経路と対象とした. U 駅への経路は総長約 1050m であり corner は 13 箇所以上あった.参加者によって描かれた経路は 3 種類に分かれていた.

<道具>29.6cm×29.6cm の紙・黒 HB 鉛筆・消しゴム・定規を用いて参加者にスケッチマップを描かせた.

<手続き>第1試行:校舎のある教室に集められた参加者全員に上記の道具を配布し,スケッチマップを描かせることを参加者に求め,室内で集団実施した.スケッチマップを描かせるにあたり,次のような教示が与えた.「今までに東京を訪れたことがなく,U 駅から K 大学まで,一人で歩いて来なくてはならない友達のために地図を描いてもらいます.なお,地図上には,各曲がり角から曲がり角までの距離(10m 単位)と曲がり角の角度(10° 単位)で記入してください.また,3 つの重要な目印となる建物を四角形で記入し,その順位とどのような建物かを簡単に余白に記入してください.」.全員の地図描画終了後,この経路に対しての親しみなどの質問に回答を求めた.この時点では,参加者に第 2 試行を実施することを伝えなかった.

第2試行:第1試行から1週間後に同一の参加者に第1試行と同じ手続きに従って再びスケッチマップを描くように求めた.条件1における参加者は第1試行と全く同じ教示を与えた.しかし,条件2の参加者は異なった教示を与えられた.それは「今までに東京に訪れたことがなく, K 大学から U 駅まで,一人で歩いて来なくてはならない友達のために地図を描いてもらいます.」というものであった.つまり,start 地点と goal 地点とを逆にした.

スケッチマップ描写は,第1・2試行共に同じ建物の1階の部屋を使用し,描画時の参加者の向く方向をそろえた.

【結果と考察】今回用いた指標は参加者がスケッチマップに記入した各 link の距離と corner の角度の数値を基に,第1・2試行のスケッチマップを CAD 上に著者が地図を描きなおしたもの(以下,スケッチ CAD)と実際の地図を CAD 上に作成した図(以下,実際 CAD)を用いて,Table 1 のように計測した.

Table 1 各指標の算出方法

指標名	算出方法
①経路距離誤差	スケッチCADの経路の総長距離を実際CADの経路の総長距離で割った値
②経路距離絶対値誤差	スケッチCADと実際CADの経路の総長距離の差の絶対値を実際CADの経路総長距離で割った値
③経路角度誤差	スケッチCADと実際CADの各cornerの差の合計値
④経路角度絶対値誤差	スケッチCADと実際CADの各cornerの差の絶対値の合計値
⑤直線距離誤差	スケッチCADのstartとgoalとを結ぶ直線の距離を実際CADのstartとgoalとを結ぶ直線の距離で割った値
⑥直線距離絶対値誤差	スケッチCADのstartとgoalとを結ぶ直線の距離と実際CADのstartとgoalとを結ぶ直線の距離の差の絶対値を実際CADのstartとgoalとを結ぶ直線の距離で割った値
⑦ゴール間距離	スケッチCADのgoalと実際CADのgoalとの距離
⑧直線角度誤差	スケッチCADでのstartとgoalとを結ぶ直線と実際CADのstartとgoalとを結ぶ直線の間の鋭角の値(誤差は右回りに+180° から-180° までとした)

今回測定した指標の信頼性を確かめるために,第1試行のスケッチマップと第2試行のスケッチマップの各指標の相関係数を算出し(Table 2),合わせて平均値の差の検定を行った.

Table 2 各指標の平均と標準偏差と相関係数

	試行	平均値 (SD)	相関係数
①経路距離誤差	1	0.72 (0.32)	.950 *
	2	0.74 (0.34)	
②経路距離絶対値誤差	1	0.37 (0.19)	.876 *
	2	0.36 (0.21)	
③経路角度誤差	1	6.8 (17.7)	.645
	2	7.5 (14.3)	
④経路角度絶対値誤差	1	29.3 (10.6)	.017
	2	33.7 (13.1)	
⑤直線距離誤差	1	0.71 (0.32)	.879 *
	2	0.74 (0.34)	
⑥直線距離絶対値誤差	1	0.37 (0.22)	.727 *
	2	0.37 (0.21)	
⑦ゴール間距離	1	369.3 (156.6)	.776 *
	2	382.5 (173.9)	
⑧直線角度誤差	1	−8.7 (12.0)	.340
	2	−12.5 (18.4)	

* p<.01

その結果,距離に関する指標(①②⑤⑥⑦)では第 1・2 試行の間に正の相関がみられ,角度に関する指標は相関がみられなかった.一方,平均値の差の検定の結果では,どの指標でも有意差がみられなかった.このことから,全ての指標で第1・2試行の差はなく信頼性が高いといえる.このように相関係数と平均値の差の検定によって結果に差が出たものの,スケッチマップの指標①経路距離誤差,②経路距離絶対値誤差,⑤直線距離誤差,⑥直線距離絶対値誤差,⑦goal 間距離に関しては検査・再検査信頼性が確かめられたといえる.しかし、今回使用した方法が参加者の認知距離を反映しているとはいえないかもしれない.そのため、今後以下の点について検討していきたい.

(1)実距離と評価された物理的距離のズレの個人内差を検討する.

(2)近い・遠いといった主観的距離の判断と評価された物理距離とを比較検討する.

(3)評価された時間的な距離と認知距離とを個人内で比較検討する.

【引用文献】

Blades,M. 1990 The reliability of data collected from Sketch maps Journal of Environmental Psychology,10,327-339.

西應浩司・材野博司・松原斎樹・藏済美仁 2000 認知地図からみた街路空間の連続的認識 日本建築学会計画系論文集,529,217-223.

(しらい せいたろう)

軽度の一過性運動による感情と圧反射感度の変化(1)

満石 寿
文京学院大学大学院 人間学研究科 心理学専攻

Key words;一過性運動, ストレス, 感情, 圧反射, 迷走神経

問題

運動を行うことは自律神経のバランスを保ち、高血圧など様々な疾患の予防となることや運動を行うことがストレスの解消へと繋がる。エアロバイクやウォーキングなどの有酸素運動と感情の関係についての研究はいくつか行われている。これらの研究では、エアロバイクを用いて中程度の運動を行うことによって、運動前と運動後では高揚感や落ち着き感が増加する(荒井ら, 1998)ことが明らかにされている。また、ストレスという面においても自己ペースのジョギングを行うことでストレス低減効果が得られることも言われている(橋本ら, 1991)。圧反射感度は、迷走神経活動の指標としてストレス研究で使われている。例えば、精神負荷をかけることによって、圧反射感度は安静時よりも小さくなる(長野, 2002)。運動に関しても、運動時に圧反射感度が小さくなることが報告されている(Bristowら, 1971)。しかし、感情と圧反射と共に運動後の時間を追った研究は少ない。また、対象者においてはアスリートや普段運動を行う頻度が高いことが多い。よって、普段の運動頻度が少ない人にも焦点をあて、運動を行うことに対し感情と迷走神経活動に変化があるかを検討する必要がある。

目的と仮説

本研究では, 一過性の軽い運動を行うことで運動前、運動中、運動後で感情と圧反射感度の変化に関する実験を以下の仮説に基づいて行った。

【仮説 1】感情に関しては、先行研究と同様に高揚感、落ち着き感が運動前よりも運動後に増加する。しかし、運動後に時間が経過するにつれて高揚感は減少し、落ち着き感は増加する。

【仮説 2】エアロバイクによる有酸素運動後は、圧反射感度が運動前よりも増加する。また、運動中においては、圧反射感度は運動前や運動後よりも低くなる。

方法

【協力者】男性 5 名, 女性 5 名の大学生・大学院生を対象に予め実験の概要を説明した後、合意を得て行った。

【実験器具】エアロバイク(コンビ社製)を用い、軽度の有酸素運動を行った。感情は、一過性運動感情評定尺度 WASEDA(荒井ら, 2003)を用いて評価を行った。また、主観的運動強度は日本語版(小野寺ら, 1976)を用いて評価を行った。

【運動負荷】運動負荷は、エアロバイクの一定負荷プログラムを用い、男性 80 ワット、女性 60 ワットに設定した。

【実験課題と実験の流れ】実験は、インフォームドコンセントを行い、実験への同意を得た。その後、計測器を取り付け、安静状態を 3 分間計測し、運動を開始した。運動は、ウォーミングアップ 3 分・一定負荷運動 5 分・クールダウン 2 分行った。運動後は安静状態を 15 分計測した。運動前、運動中、運動直後、回復期(2 回)において感情評価を行った。さらに、ウォーミングアップ中・本運動中・クールダウン中に主観的運動強度(以後、RPE)のレベルを評価した(Table 1)。血圧と血流の計測に関しては、実験中は左手に計測器を取り付けたまま行った。

Table 1 実験の流れ

安静	運動			安静
	ウォーミングアップ	本運動	クールダウン	
WAS EDA	RPE	WASEDA + RPE	WASEDA+ RPE	WAS EDA

結果

【運動による感情の変化】高揚感は運動前から運動中にかけて増加し運動後は減少した。落ち着き感は、運動前から運動中にかけて減少し、運動後は運動前よりも増加した。否定的感情は、ほぼ変化が無かったが、わずかではあるが減少が見られた(Fig 1)。

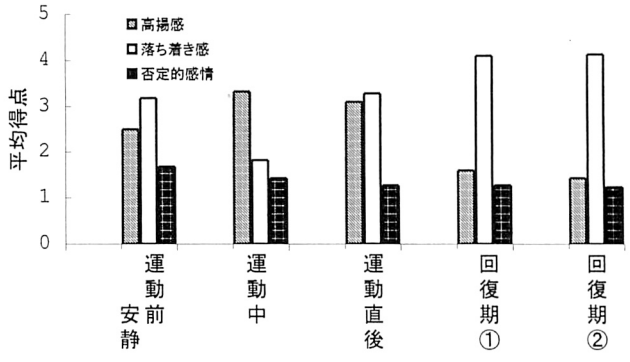


Fig 1 各条件と感情の変化

【運動中の心拍数と RPE の変化】運動中、全体の平均心拍数は、104.55 (男性 105.29、女性 104.19) であった。全体の平均 RPE は、12.22(男性 11.50、女性 12.52)であった。

【圧反射の変化】圧反射感度は、運動前よりも運動中に減少し、運動後徐々に増加した(Fig 2)。

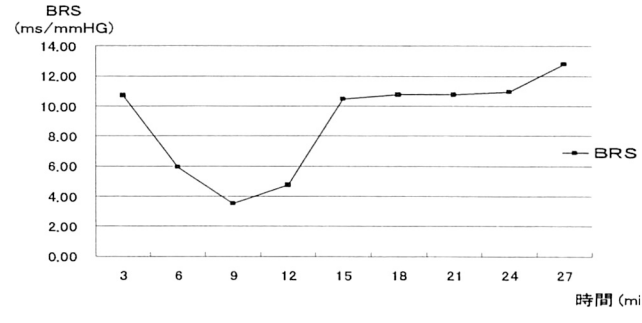


Fig 2 時間毎の圧反射感度の変化

考察

本実験においては, 一過性の軽い運動を行うことで運動前、運動中、運動後で感情と圧反射感度に変化がみられた。感情の変化から、高揚感と落ち着き感が同時に生じるのではなく、高揚した後に落ち着き感が生じることが言えた。また、運動後の圧反射感度が、徐々に上昇し運動前の安静時よりも増加したことから、運動前よりも迷走神経が活性化していたことが言える。これらのことから、運動後は運動前と比較して、感情的、さらに生理的にも落ち着く傾向にあることがいえる。また、運動強度は男女共に「楽である」から「ややきつい」の間であり、心拍数にも大きな差は無かったことから、同じくらいの強度の運動であったことが言えた。

しかし, 本実験では運動を行うことに対し感情と圧反射感度の変化を検討することが目的であった。よって、ストレスやリラックスとの関係を明らかにすることはできない。研究(2)では、ストレスやリラックスに関する尺度を用いて研究を進める予定である。

(みついし ひさし)

性的嫉妬の男女差と加齢による変化

― 高校生・大学生・45歳以上を対象とした探索的研究 ―

本多　明生
いわき明星大学人文学部心理学科

キーワード：性的嫉妬・男女差・加齢

【目　的】

性的嫉妬(Jealousy)は，現実もしくは架空のライバル(恋敵)によって，自分の配偶者や恋人を奪われる，もしくは奪われるかもしれないという脅威によって生起する感情である(Buunk & Dijkstra, 2000; Salovey, 1991)．Djikstra & Bunnk(2002)は，ライバルの特徴によって生起する性的嫉妬を検討した結果，(1)男性は，ライバルが自分よりも主に身体的優位性，社会的地位を有しているときに性的嫉妬が強まること，(2)女性は，ライバルが自分よりも身体的魅力を有しているときに性的嫉妬が強まるという男女差が生じることを明らかにしている．人間の配偶者選択には，男女差が通文化的に示されることが知られており(Buss, 1989)，そのような配偶者選択の男女差が，性的嫉妬の男女差においても反映されていると考えられている．また，このような性的嫉妬は，自分自身の有している特徴とライバルの有している特徴を比較するという社会的比較の過程によって生起すると仮定されている(DeSteno & Salovey, 1996)．本研究は，高校生・大学生・45歳以上の一般群を対象として，性的嫉妬の男女差と加齢による変化を検証した．性的嫉妬が，社会的比較によって生起するならば，自己の有する様々な特徴は発達や加齢に伴って変化するため，それがライバル特徴により生じる性的嫉妬の強さにも反映されると考えられる．

【方　法】

1. 参加者

高校生77名(平均年齢15.7歳 SD0.48:男性22名・女性55名)，大学生78名(平均年齢21.1歳・SD0.97:男性41名・女性37名)，45歳以上の一般成人51名(平均年齢58.91歳・SD8.21:男性16名平均年齢64.0歳・女性30名平均年齢56.2歳)．

2. 質問紙

質問紙は，ライバル特徴項目（全56項目・5件法）(Dijkstra & Buunk, 2002）を翻訳したものなどから構成されていた．先行研究（Dijkstra & Buunk, 2002）では，パーティ会場での恋人の浮気をイメージする教示の後にライバル特徴項目に評定を求めているが，本研究では，文化の違い・年齢による比較等を考慮した結果，先行研究の教示を簡素化して用いた．

3. 手続き

講義・公開講座の一部を利用して質問紙を配布・回収した．

【結　果】

1. ライバル特徴項目評定の類似性検証

先行研究（Dijkstra & Buunk, 2002）で報告されたオランダ人大学生による各特徴項目の平均評定値と本研究で得られた大学生の各特徴項目の平均評定値間の相関係数を算出した．その結果，男女ともに平均評定値間には高い相関係数が示された（日蘭男性間の平均評定値相関係数：$r = .66, p < .001$；日蘭女性間の平均評定値相関係数：$r = .73, p < .001$）．

2. ライバル特徴項目評定値への主成分分析

先行研究（Dijkstra & Buunk, 2002）においては抽出される主成分を五つに設定して分析を行っている．本研究もそれに倣って分析を行った．その結果，類似した五成分「社会的優位性」「身体的魅力」「社会的地位」「身体的優位性」「魅惑的振る舞い」が見出された（累積寄与率59.3%，$\alpha = .96$）．

3. 主成分分析をもとにした性別×年齢要因の検証

五つの主成分ごとに平均評定値を算出し，それぞれの指標に対して，性別（2）×年齢（5）の二要因分散分析を行った．その結果，性別の主効果が「身体的魅力（女性＞男性）」「社会的地位（男性＞女性）」「身体的優位性（男性＞女性）」において示された．性別と年齢の交互作用が「身体的魅力」において示された．下位検定（Ryan法）を行ったところ，大学生において，女性は男性よりも性的嫉妬を強く評定していた．年齢の主効果は示されなかった．

4. 各特徴項目における性別×年齢要因の検証

先行研究（Dijkstra & Buunk, 2002）同様に性別と年齢を要因とし，各特徴評定値を従属変数とした多変量分散分析を行った．その結果，(1) 男女ともにある程度共通する項目において性的嫉妬が強く評定されること，(2) 男性では加齢に伴い性的嫉妬が弱まる傾向があること，(3) 女性においては，いくつかの項目において特徴的な性別と年齢の交互作用が示されたことが明らかにされた．「身体的魅力」に該当するいくつかの項目（「足が美しい」「ウエストが細い」など）においては，女子高校生・大学生は45歳以上女性よりも性的嫉妬を強く評定することが示された．一方「教養が高い（社会的地位)」ならびに「洗練されている（社会的優位性)」という項目においては，45歳以上女性が女子高校生・大学生よりも性的嫉妬を強く評定する傾向があることが示された（**Fig 1.**）．

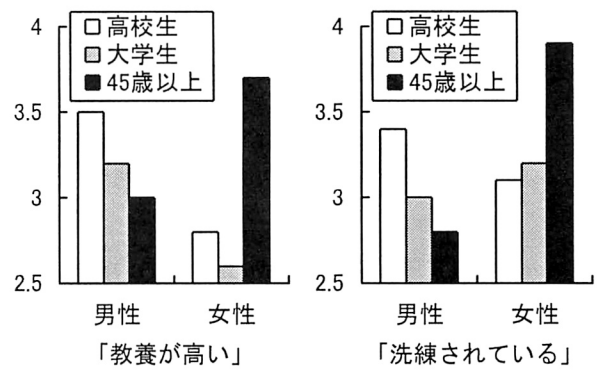


Fig 1. 性的嫉妬の加齢変化該当項目の一部（縦軸評定値）

【考　察】

本研究から，(1) 強い嫉妬を感じる特徴項目は男女ともにある程度共通していること，(2)男性は，ライバルが自分よりも主に身体的優位性，社会的地位を有しているときに嫉妬が強まり，(3)女性は，ライバルが自分よりも身体的魅力を有しているときに嫉妬が強まることが示された．これは，先行研究（Dijkstra & Buunk, 2002）と一致する知見であった．また，主成分分析をもとにした検討では，加齢による変化は観察されなかったものの，個々のライバル特徴項目を詳細に検討してみると，女性において，いくつかの項目に性的嫉妬の変化が示された．

これらの知見は，(1) 性的嫉妬の男女差は通文化的性質が示されること，(2) 性的嫉妬が自己とライバルの特徴の社会的比較によって生起していることを示唆している．

（ほんだ　あきお）

青年期の食態度と精神的健康との関連について

清水美帆
（桜美林大学大学院　国際学研究科　修士課程）
キーワード：青年期、食卓、食態度、精神的健康

【研究の目的】 青年期男女を対象とし、家庭の食卓における食事経験が、現在自ら営む食生活とどのように関係しているのか、さらにその食生活が精神的健康にどう影響するのかを検討した。検討する際に、以下の仮説をあげた。

仮説 1：家庭の食卓で望ましい食態度が形成されていれば、その食態度は現在にも引き継がれ、自ら良好な食生活をおくることができる。

仮説 2：普段から良好な食生活を自ら営んでいる者は、心身ともに健康度が高い。

【方法】 調査時期：2006 年 7 月～10 月

調査対象者：関東圏内 18～31 歳の大学生および大学院生 400 名を対象とし、そのうち 215 名（内、男性 44 名、女性 171 名）を有効回答数とした（有効回答率：54%）。

調査方法：授業時間の前後に質問紙を配布し、後日回収もしくは BOX へ各自投函させる形をとった。

調査内容：質問紙法で行った。質問項目は以下の 4 つであった。

1）フェイスシート：性別、年齢、所属学部・学科、居住状況、一人暮らしの経験の有無、家族構成を尋ねた。

2）食生活全般：過去 6 ヶ月間の食生活を振り返り、朝食・昼食・夕食・間食・外食・お惣菜およびレトルト食品の利用の 6 点について、1 週間における頻度を尋ねた。「1　全く」「2　週 1～2 日」「3　週 3～5 日」「4　毎日」の 4 件法とした。

3）過去の食態度尺度：筆者が作成しており 18 項目からなる。「おおきくなるにつれ、食事中に家族とあまり会話をしなくなった（＊）」「記念日には、家族全員そろって食事をとるようにしていた」などの項目がある（＊印は逆転項目）。「1 全く当てはまらない」「2　あまり当てはまらない」「3　少し当てはまる」「4　よく当てあまる」の 4 件法とした。

4）現在の食態度尺度：筆者が作成しており 6 項目からなる。「自分の手料理を人にふるまうことがある」「時間に余裕があれば、手間のかかる凝った料理を自分でつくってみたいと思う」などの項目がある。3）と同様、4 件法とした。

5）精神健康調査票（General Health Questionnaire-28, 以下 GHQ-28 とする）：GoldBerg(1978)によって、主として神経症者の症状把握、評価、そして迅速な発見のために有効な質問紙調査として開発された。身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向の 4 因子からなり、4 段階評定を求める。

【結果】 1）属性による食事頻度の違い

t 検定を用いた結果、性別の違いによって、朝食を摂取する頻度（$t(213)=-3.12$, $p<.01$）、間食を摂取する頻度（$t(213)=-2.668$, $p<.01$）および外食を利用する頻度（$t(213)=2.49$, $p<.05$）に有意な差が認められた。また、一人暮らし経験の有無によって、朝食を摂取する頻度（$t(211)=-4.84$, $p<.001$）、夕食を摂取する頻度（$t(75.9)=-2.06$, $p<.05$）および外食を利用する頻度（$t(211)=2.72$, $p<.01$）に有意な差が認められた。

さらに、居住状況による食事頻度の平均値の差を見るべく分散分析を行った結果、朝食のみ（$F(3,211)=7.82$, $p<.01$）に有意な差が認められた。

2）過去および現在の食態度尺度の妥当性・信頼性の検証
過去の食態度尺度に関して、因子分析（主因子法・プロマックス回転・因子数 2）を行った結果、負荷量が 0.3 に満たない 3 項目は削除された。第 1 因子を「食卓での豊かな交流」10 項目とし、第 2 因子を「食事内容の充実」5 項目とした。信頼性検証のため α 係数を求めたところ、「食卓での豊かな交流」尺度＝.813、「食事内容の充実」尺度＝.723 となり、信頼性は確保された。また現在の食態度尺度についても α＝.840 となり信頼性は確保された。

3）過去の食態度尺度と現在の食態度尺度の関係　過去の食態度と現在の食態度との間に、有意な弱い正の相関($r=.280$, $p<.01$)がみられた。

4）過去および現在の食態度と精神的健康度（GHQ - 28）との関わり

独立変数を過去および現在の食態度、従属変数を精神的健康度（GHQ - 28）とし、重回帰分析を行った。過去の食態度の「食卓での豊かな交流」は GHQ - 28 の「社会的活動障害」（$\beta=-.187$, $p<.05$）に影響を及ぼしていた。また、現在の食態度は、「身体的症状」（$\beta=.184$, $p<.01$）および「不眠と不安」（$\beta=.190$, $p<.01$）に影響を及ぼしていた。

【考察】 1）1 週間の食事頻度に関しては、男性は外食が、女性は朝食および間食が高かった。また、一人暮らし経験者は外食の、一人暮らし未経験者は朝食摂取の頻度が高かった。さらに、アパート暮らしの者より自宅暮らしの者の方が、朝食摂取の頻度が高かった。

2）過去の食態度が良好である、すなわち家庭の食卓で望ましい食態度が形成されていれば、その食態度は現在にも引き継がれ、現在においても自ら良好な食生活を送ることのできる可能性が高い。

3）過去の食態度が良好であると、精神的健康度が高い可能性がある。すなわち、家族と食卓で豊かなコミュニケーションを育んできた者ほど、現在精力的な日常活動を送ることができていると言える。

4）現在の食態度が、身体的症状と不安・不眠に促進的に作用していた。現在の食態度が良好であるほど、言い換えると食へのこだわりが強いほど、偏った低カロリー・低脂質の食品しかとらず、結果的に心身に不調が生じる可能性がある。

【参考文献】

伊藤暁子・竹内美香・鈴木昌生 2004 –青年期の食行動と親子関係に関する試行的研究- ヒューマンサイエンス・リサーチ

（しみず　みほ）

主観的ウェルビーイングの測度に関する研究

角野 善司
（高崎健康福祉大学　健康福祉学部）

キーワード：主観的ウェルビーイング，人生に対する肯定的評価尺度

＝ 問題と目的 ＝

主観的ウェルビーイング（subjective well-being）は，幸福についての心理学的研究の鍵概念であり，“ある程度の時間的安定性・状況一貫性をもった，知覚された幸福（角野，1995a,b)”と定義される．

主観的ウェルビーイングの認知･判断的要素として挙げられてきた“人生に対する満足（life satisfaction)”は，専ら過去から現在にかけての人生の評価のみを扱ってきたのに対し，角野（1995a,b,1997,1998）は，過去－現在－未来にわたる人生の主観的評価を“人生に対する肯定的評価”という，主観的ウェルビーイングの新たな下位概念としてとらえ直した．そして，大学生・成人を被験者とした研究を行って尺度構成を図り，この尺度が一因子構造をなし，一定水準の信頼性・妥当性をもつことを示した．その後，この尺度を用いて中学生・高校生・大学生を対象に多面的な研究を実施し，本学会を中心に一連の報告を行ってきた（角野,2000a,2000b,2001a,2001b,2002,2003,2004,2005,2006)．

今回の報告では，大学生を対象に行った研究に基づき，既存の QOL や精神的健康の指標との相関関係から，人生に対する肯定的評価尺度の妥当性に更なる検討を加えることを目的とする．

＝ 方法 ＝

被験者　大学生 149 名（男性 93 名　女性 56 名
年齢 19-28 歳　平均 19.68 歳　標準偏差 1.08 歳）

質問紙

1.人生に対する肯定的評価尺度（角野,1995a,b,1997）：
7 点尺度 12 項目．得点が高いほど人生を肯定的に評価している．

2.日本語版 WHO QOL 26（世界保健機関・精神保健と薬物乱用予防部，1997）：
5 点尺度 26 項目．身体的領域／心理的領域／社会的関係／環境の 4 領域と，全般的な生活の質を問う項目群で構成されており，過去 2 週間の生活を振り返って回答する．高得点ほど QOL が高いことを表す．

3.日本版 GHQ 精神健康調査票（中川・大坊，1985）：
4 点尺度 60 項目．この数週間の健康状態について回答する．総得点のほかに，身体的症状／不安と不眠／社会的活動障害／うつ傾向の 4 つの要素スケール得点を算出する．得点が低いほど精神的に健康であることを示す．なお，採点に際しては，Likert 法を用いた．

＝ 結果と考察 ＝

人生に対する肯定的評価尺度と QOL26 および GHQ との相関係数を，Table 1 に示した．QOL26 の総得点とは r=.695（df=144, p<.001），GHQ の総得点とは r=-.572（df=137, p<.001）の値が得られた．これは，人生に対する肯定的評価が高いほど，生活の質が高く，また精神的に健康であることを表しており，この尺度の妥当性を示すものと解釈される．

次に，人生に対する肯定的評価と各領域／要素との相関を検討した．QOL26 では，各領域とも有意な相関が得られたが，偏相関係数を算出したところ，他の 3 領域は r=.2 に満たなかったのに対し，心理的領域のみが r=.454（df=144, p<.001）と中程度の相関を示した．人生に対する肯定的評価が，自分の生活を意味あるものと感じているか，自分自身に満足しているかといった評価を問う心理的領域との間に最も高い相関を示したのは妥当な結果と言える．また，全般的な生活の質を問う項目群との相関は r=.472（df=145, p<.001）であり，他の領域と比較して決して高くなかった．これは，両尺度とも quality of life の測定を意図しているが，人生に対する肯定的評価尺度は過去－現在－未来にわたる「人生」の主観的評価を問うているのに対し，QOL26 は過去 2 週間を振り返っての「生活」の質を尋ねており，問題としている“life”の時間の幅が異なることによるものと考えられる．

一方，GHQ においては，各要素とも単純相関では有意な値が得られたが，偏相関では社会的活動障害とうつ傾向の 2 要素が有意であった（r=-.350, df=140, p<.001; r=-.427, df=140, p<.001）．社会的活動障害との間に有意な相関が認められたことは，人生に対する肯定的評価の高低が日常の生活行動に影響することを示すものとして注目に値する．また，一般にうつの人は自己評価が低いことから，うつ傾向との有意な相関は，理論と合致したものと言えよう．

＝ 文献 ＝

角野善司　1995a　教心第 37 回総会発表論文集，95.
角野善司　1995b　日心第 59 回大会発表論文集，23.
角野善司　1997　日心第 61 回大会発表論文集，83.
角野善司　1998　応心第 65 回大会発表論文集，149.
角野善司　2000a　日心第 64 回大会発表論文集，1087.
角野善司　2000b　応心第 67 回大会発表論文集，92.
角野善司　2001a　帝京大学文学部紀要(心理学)，6，67-81.
角野善司　2001b　応心第 68 回大会発表論文集，98.
角野善司　2002　応心第 69 回大会発表論文集，130.
角野善司　2003　応心第 70 回大会発表論文集，43.
角野善司　2004　応心第 71 回大会発表論文集，17.
角野善司　2005　応心第 72 回大会発表論文集，30.
角野善司　2006　応心第 73 回大会発表論文集，85.

（すみの　ぜんじ）

Table 1　人生に対する肯定的評価尺度とQOL26およびGHQとの相関

QOL	総得点	全般	身体的領域	心理的領域	社会的関係	環境
	0.695***	0.472***	0.524*** (0.114)2)	0.683*** (0.454***)	0.504*** (0.176*)	0.460*** (0.164)
GHQ	総得点		身体的症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向
	−0.572***		−0.251** (0.085)	−0.374*** (0.001)	−0.502*** (−0.350***)	−0.553*** (−0.427***)

注 1) * p<.05　** p<.01　*** p<.001
2) 括弧内の数値は、他の3つの領域得点／要素スケール得点の影響を排した偏相関係数

児童館・学童保育所指導員と臨床心理士の連携についての面接調査

○渡辺亜紀子　伊藤亜矢子
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科）

キーワード：ニーズ，面接調査，臨床心理的地域援助

【研究の目的】改正児童福祉法により，児童館は子ども・家庭支援のネットワークの一翼を担うことが期待されており，虐待の未然防止・早期発見，発達障害や不登校など様々な事例に対応することが求められている。一方，専門家による支援の手薄さが指摘され，この分野へ心理職が関与していくことが期待されている(武田,2004)。児童館や学童保育所では，子どもと指導員の間に評価の関係が一般的に含まれないため，子どもの自由な面が出やすいことから子どもの心情をキャッチしやすく，保護者と職員との関係性を活かすことにより，潜在的に援助を必要としている人をも対象に予防策がとれる可能性が考えられる。本研究では指導員へのニーズ調査を通して今後，臨床心理士(以下，CP)が児童館・学童保育所に関与する際に現場のニーズに沿った連携・支援を実施するための示唆を得ることを目的とする。

【方法】調査対象：学童保育所併設の東京都内Ａ区 11 児童館（11 名），Ｂ区 7 児童館（7 名）の指導員であった。
調査時期：2006 年 8～12 月
対象児童館・学童保育所の CP による巡回制度の特徴：Ａ区内には中心的な児童館が 3 館あり，そこに勤務する CP が地域の児童館に派遣され，指導員へのコンサルテーションや保護者に対する子育て相談等を行っており，指導員のニーズへの応答性は高いと考えられる。一方，Ｂ区内では，Ａ区のような心理学の専門家による巡回制度は設けられていない。
調査内容：2 区の指導員に対して 1)子どもや保護者と接する際の心理面・行動面でのニーズについて尋ね，CP との連携経験のあるＡ区に対してのみ，2)CP との連携・支援で役立った内容について尋ねた。いずれも 1 対 1 の半構造化面接を用い，所要時間は 30 分から 1 時間半程度(対象者の予定等に合わせ，無理のない範囲で実施)であった。分析方法は要約的内容分析を用いた。結果は複数回答ありとして，調査人数に対する回答の割合を示した。

【結果と考察】
1)子どもや保護者と接する際の心理面・行動面でのニーズ
「発達障害への対応(50%)」，「虐待への対応(40%)」，「不登校への対応(30%)」，「保護者面談の仕方(30%)」，「暴力行動への対応(20%)」等が挙げられた。特に発達障害や虐待ケースの見立てについてのニーズが高く，これは保育士や幼稚園教諭のカウンセリングへのニーズで「学びたい内容」についての先行研究(井上，2006)と一致した結果となった。障害児への対応に関しては，学童保育所における障害児受け入れが徐々に拡大されつつある反面，自治体の多くでは障害児の受け入れを支える指導員の加配，指導員の研修の保障，専門機関からの支援などの条件が未整備との指摘がなされており(伊藤，1992)，指導員は学童保育所で受け入れている発達障害児への対応で専門性の限界を感じていることが示唆された。
虐待ケースに関しては，児童相談所，子ども家庭支援センターへのリファーの必要性を判断し，危険度を見極めることが重要だとの示唆が得られた。「職員が一番揺さぶられる」という虐待ケースに関して，CP が指導員と連携・支援できる可能性が指摘された。

2)CP との連携・支援で役立った内容
Ａ区の指導員から得られた結果を分類した結果，CP との連携や支援で役立ったこととして，「専門知識・情報が得られた(60%)」，「子どもとの関わり方のヒントが得られた(50%)」，「情緒的な支えが得られた(50%)」，「問題の見立てが得られた(30%)」，「客観的視点が得られた(10%)」こと等が挙げられた。専門知識・情報が得られたことに関しては，1)でも挙げたように虐待に関する情報提供が役立ったことが語られた。例えば，虐待を受けた子ども本人や家庭・学校に対して指導員がどのように関わっていくとよいのかという対応方法について CP から具体的に助言されたことが役立ったとされ，具体的な助言が有効であることが示唆された。
また，指導員が虐待に気づいた場合のニーズとして，保護者面接を実施する際の支援への期待が大きな比率を占めており，話の組み立て方や保護者への態度面でのサポートが CP に対して求められていることが示唆された。また，「情緒的支え」については，指導員が子どもや保護者への関わりで迷いつつ対応していることについて背中を押されることで安心して前に進めるという声が多かった。日頃の大変さへのねぎらい，共感が重要だと指摘された。「客観的視点」については，普段の子どもとの関わりで目の前の子どもへの対応に近視眼的になっているところを，第三者的視点で子どもやケースへの関わり方について助言を得られたことがよかったとのことであった。CP の存在により，子どもへの普段の関わり方を振り返るきっかけとなったことが示された。

3)　今後の課題
指導員は症状の見立てをはじめ，子どもや保護者と接する際に様々なニーズをもっていることが示唆された。また，実際に CP と連携経験のある A 区指導員からは CP の連携・支援の有用性が示唆された。今後は，指導員への質問紙調査を実施するとともに，児童館・学童保育所に関与している CP や CP を雇用している自治体への調査を実施していくことが課題として挙げられた。

（わたなべあきこ・いとうあやこ）

【引用文献】
井上清子・石川洋子・会沢信彦　2006　子育て支援とカウンセリング (2) 埼玉県内の保育所の保育者を対象とした調査から

伊藤三枝子 1992 〈報告〉目黒区の学童保育における障害児保育　季刊障害者問題研究 71，Pp223-228

武田信子 2004　心理臨床家による子育て支援の課題　―カナダの多文化主義の視点から―　臨床心理学　4(5)　金剛出版,Pp.616－622.

青年期の自己愛と家族機能について

山本美知子
（桜美林大学院国際学研究科臨床心理学専修）
キーワード：青年期、自己愛、家族機能

【問題と目的】

現代青年の特徴として自己愛が取り上げられることが多くなり近年、自己愛的な傾向が青年の間に増加していると指摘されている(町沢 1998 他)。青年期は必ずしも自己愛人格障害に移行しないまでも、自己愛的な特性の高まりが見られる時期である（小塩、１９９７）。青年期における自己愛と親の養育態度、家族の雰囲気の関係性も指摘されている（宮下１９９１）。このことから家族の機能は自己愛に対して影響を与えていると考えられる。本研究では、大学生を対象として家族全体に焦点を当て自己愛と家族機能の関係性を検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者：神奈川県の四年制大学に在籍する女子大生１２０名

調査方法：二つの測定尺度の質問紙と用紙からなる小冊子を配布し回答を求めた。実施期間は２００５年１２月であった。

①フェイスシート（学部学科、学年、年齢、家族構成）

②自己愛人格目録短縮版（NPI-S）

小塩（１９９９）による自己愛傾向を測定する尺度を用いた。全３０項目であり、５件法。自己愛人格目録短縮版では自己愛得点から対象者を高・中・低で分けた。

③家族機能測定尺度

オルソン（１９９３）による家族機能を測定する尺度。全２０項目であり５件法。家族機能尺度では得点から極端群、中間群、バランス群で分けた。

【結果】

自己愛の高・中・低と家族機能の極端群、中間群、バランス群を詳しくみるためにカイ二乗検定をした。カイ二乗分析した結果、有意差はみられなかった。

表1 ｶｲ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearson のｶｲ2乗	3.744(a)	4	.442
尤度比	3.188	4	.527
線型と線型による連関	.225	1	.635
有効なｹｰｽの数	107		

表2 家族機能 と 自己愛 のｸﾛｽ表

			自己愛			合計
			高	中	低	高
家族機能	極端群	度数	4	8	1	13
		家族機能の％	30.8%	61.5%	7.7%	100.0%
		自己愛の％	22.2%	9.3%	33.3%	12.1%
	中間群	度数	5	29	1	35
		家族機能の％	14.3%	82.9%	2.9%	100.0%
		自己愛の％	27.8%	33.7%	33.3%	32.7%
	バランス群	度数	9	49	1	59
		家族機能の％	15.3%	83.1%	1.7%	100.0%
		自己愛の％	50.0%	57.0%	33.3%	55.1%
合計		度数	18	86	3	107
		家族機能の％	16.8%	80.4%	2.8%	100.0%
		自己愛の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

【考察】

以上の結果から自己愛と家族機能に有意差は見られなかった。本研究からは家族機能と自己愛が関係しているとは限らないということが考えられる。自己愛はこれまでの研究で男女差があるとされているので男性にも同じ調査を行い男女差の検討を行う必要があるであろう。

【参考・引用文献】

浅川潔司・月岡万里子・山田美和　2002　母親の養育態度が青年の自己愛的人格傾向に及ぼす影響　学校教育学心理学第14巻　79－85

大平英樹　1989　自己愛人格と家族関係に対する実証的研究　家族心理学研究第3巻　1－10

小塩　真司　1998　青年心理の自己傾向　教育心理学研究46巻　280―290

清水健司・海塚敏郎　2002　青年期における対人恐怖症と自己愛傾向の関連　教育心理学研究　50巻 54-64

（やまもとみちこ）

大学生の生活不安と自己肯定感との関係

○鴫原　依子
(桜美林大学院国際学研究科臨床心理学専修)
キーワード：大学生、不安、自己肯定感

【問題と目的】

近年、危機的な状況や将来の職業、そのための具体的な目標をもたないまま「自分探し」をするために入学してくる学生の増加（文部科学省,2000）が指摘されている。そのため、大学生活を送る上で、高い不安を抱いている学生は多いと考えられる。このような学生は現実に直面すると自分自身を否定的に捉えることが多い。大学生活の不安が高いほど、具体的な目標をたてることが困難となり、物事を否定的に捉える傾向が高まる。そこで、本研究では、大学生の生活不安の高低が自己肯定感に影響を及ぼすかについて検討することを目的とする。

【方法】

調査対象は都内の四年制大学の学生 158 名（男性 82 名、女性 76 名）、1 年生 38 名、2 年生 28 名、3 年生 50 名、4 年生 42 名、調査時期は平成 17 年 10 月下旬～11 月中旬に調査を実施した。質問紙はフェイスシート、大学生活不安尺度、自己肯定意識尺度を使用した。

フェイスシートは、年齢、学年、性別、生活環境を記入してもらった。

大学生活不安尺度（藤井,1998）は「日常生活不安」,「評価不安」,「大学不適応」の 3 つの下位尺度からなり，全 29 項目。

自己肯定意識尺度（平石,1990）は対自己領域と対他者領域に二分され，対自己領域は「自己受容」,「自己実現的態度」,「充実感」，対他者領域は「自己閉鎖性・人間不信」,「自己表明・対人的積極性」,「被評価意識・対人緊張」からなる。全 41 項目。

【結果】

学年別による不安得点の差を検定するために大学生活不安尺度の各下位尺度を独立変数、学生の学年別を従属変数として SPSS を用いて、分散分析を行った（Table1）。その結果、評価不安尺度 F（3,150）＝2.61, p＜.05)、大学不適応尺度 F（3,152）＝3.88, p＜.01）で有意であった。多重比較の結果、評価不安尺度・大学不適応尺度ともに２年生が他の学年よりも得点が低かった。これらから、他学年よりも２年生の方が不安が高いと言える。

次に、不安得点高群・低群と自己肯定感得点との差を検定するために大学生活不安尺度の合計得点の上位 25%を高群、下位 25%を低群とし、自己肯定意識尺度を用いて t 検定を行った（Table2）。その結果、自己受容尺度[t（73）＝5.32, p＜.01]、自己実現的態度尺度[t（72）＝3.51, p＜.01]、充実感尺度[t（74）＝1.39, p＜.05]、対自己領域合計尺度[t（71）＝4.97, p＜.01]となり、高群よりも低群のほうが高い得点を示した。また、自己閉鎖性・人間不信尺度[t（73）＝－4.03,p＜.01]、自己表明・対人的積極性尺度[t（73）＝－7.00, p＜.01]、被評価意識・対人緊張尺度[t（72）＝－3.27, p＜.01]、対他者領域合計尺度[t（71）＝－6.60, p＜.01]となり、低群より高群のほうが高い得点を示した。これらから、不安が高いほど、自己肯定感が低いと言える。

Table1　大学生活不安得点と学年別の差の検定

		1年生	2年生	3年生	4年生	全体	F値		多重比較（5%比較）
日常不安	MEAN	29.39	28.93	28.08	28.55	28.68	0.23		
	SD	8.34	7.60	7.38	6.87	7.47			
評価不安	MEAN	33.22	36.89	31.86	31.88	33.10	2.61	*	2年＜1,3,4年
	SD	9.50	8.70	7.46	7.87	8.44			
大学不適応	MEAN	11.42	14.67	11.33	10.40	11.68	3.88	**	2年＜1,3,4年
	SD	5.68	5.31	5.55	4.25	5.37			

**p＜.01,*p＜.05

Table2 大学生活不安得点と自己肯定各得点の差の検定

		N	MEAN	SD	t
自己受容	低群	37	30.03	5.84	5.32 **
	高群	38	22.79	5.95	
自己実現的態度	低群	38	26.89	4.88	3.51 **
	高群	36	22.17	6.63	
充実感	低群	38	16.76	2.57	1.39 *
	高群	38	15.82	3.34	
対自合計	低群	37	73.81	10.09	4.97 **
	高群	36	60.78	12.25	
閉鎖性・不信	低群	38	19.89	5.93	-4.03 **
	高群	37	25.73	6.60	
表明・積極性	低群	38	14.79	5.04	-7.00 **
	高群	37	23.32	5.52	
被評価・緊張	低群	38	13.18	3.81	-3.27 **
	高群	36	16.56	5.02	
対他合計	低群	38	47.87	9.70	-6.60 **
	高群	35	66.03	13.62	

**p＜.001,*p＜.05

【考察】

本調査結果から、評価不安と大学不適応において２年生が他学年より不安が高いということが分かった。２年生は、一般に生活上の変化が少なく、学生が時間をかけて自分を見つめることができる貴重な時期である一方、スランプや無気力、無関心に陥りやすい時期である（鶴田 1998）と指摘している。今後の自分の生き方について深く考えることで不安が高くなったと考えられる。また、大学生活不安が高いほど自己肯定感が低下することも分かった。これは、大学生活の不安を抱くと、自分に自信が持てず、ありのままの自分を受容することに難しさを感じると解釈できる。本研究は大学生活に伴う不安を否定的に捉え調査を行った。しかし、不安感情があるからこそ、人は成長できるといった指摘が多くされている。以上から、人の不安が意欲的な行動に与える影響についての研究を行う必要がある。これらから、不安についての発展的な検討を行うことができるだろう。

【参考・引用文献】

武藤由佳・河村茂雄 2002 大学生の心理・社会的危機の未解決状態と喚起される達成動機、親和動機の関係　カウンセリング研究 35　9-18
高垣忠一朗 2004 生きることと自己肯定感　新日本出版社

（しぎはらよりこ）

自覚的ストレスと食習慣、生理指標との関連について

○内田誠也、木村友昭、津田康民、山岡淳

(財)MOA 健康科学センター

キーワード:指先容積脈波、加速度脈波、血管年齢、ストレス、食習慣

1. はじめに

ストレスは、食事や運動などの生活習慣に影響を及ぼし、生活習慣病を引き起こすと考えられる。特に、生活習慣病の中で、循環系疾患における動脈硬化の検査として、加速度脈波計測を用いた検査が注目されてきている。指先で計測される加速度脈波計測は、動脈の状態のほかに、末梢血管をコントロールしている自律神経活動からの支配も大きく影響していると考えられる。そこで、我々は、自覚的ストレス度や食習慣と加速度脈波の関連を調べ、生活習慣病の予防的な指標として、加速度脈波計測の有効性を調べることを目的とする。

2. 対象

2004 年 11 月、2005 年 5 月、11 月、2006 年 5 月に、大仁農場(伊豆の国市)で行われた瑞泉郷まつりに来た健康な来場者の中から、研究活動の同意書に署名された 1036 名(51 歳±15)を対象とした。同意された被験者は、瑞泉郷まつりの健康度計測ブースへ希望して参加されたため、健康に関して意識が高い群であることが考えられる。

3. 計測および解析

生理指標として、加速度脈波計測および体脂肪率、筋肉率、BMI が計測された。加速度脈波計測は、ダイナパルス(SDP-100、フクダ電子㈱製)を用い、STPTGAI 指数で評価した。STPTGAI 指数とは、加速度脈波の 5 つのピークを a、b、c、d、e としたとき、(b-c-d-e)/a の比率で表される指数である [1]。この指数が低値であった場合、動脈硬化が進んでいないと推定される。逆に、高値であった場合、動脈硬化が進んでいると推定される。体脂肪率、筋肉率、BMI は体重体組成計(HBF-954、オムロンヘルスケア㈱製)を用いて計測された。

自覚ストレスは、自覚ストレス調査票(JPSS)[2]をタブレット PC で入力するシステムで計測された。アンケートについては、17 項目からなる食習慣および運動習慣、嗜好品に関する質問を行った。

解析では、統計解析ソフトウエア(SPSS)を用いた。

4. 結果

表1は、全変数間の spearman 相関を調べ、年齢や性別と相関が高かった変数名および相関係数を示す。アルコールに関するアンケート項目以外の変数は、年齢と有意な相関が見られ、特に、SDPTGAI と年齢との相関は顕著であった(0.655)。男女間については、BMI およびストレス度以外の変数で有意な相関が見られ、特に、筋肉率との相関は顕著であった(-0.769)。SDPTGAI の年齢相関は有意であったが、相関係数は低い値であった(0.070)。

ほとんどの変数が性別や年齢と高い相関を示すことから、3 つの年代(若年群:39 歳以下、中年群 40-60 歳代、老年群 60 歳以上)、性別に分けて、かつ年齢を制御変数とした偏相関を調べた。表2は、有意な相関があった変数の内、高い方から2つ変数の相関係数を示す。但し、老年群男性では有意な相関を示す変数が無かったので、一番高い相関を示した変数を示す。老年群女性では、有意であった変数は一つであった。

その結果、男性ではストレス度(若年群、老年群)やタバコ(中年群)との相関が高く、女性では筋肉率(若年群、中年群)や BMI(老年群)との相関が高い傾向にあった。

5. まとめ

加速度脈波計測は、年齢や高い相関を示し、血管の加齢状態を評価する指標として有効である。年代および性別ごとに、加速度脈波と関連する変数があり、加速度脈波の増減に係る因子は複数あると考えられる。つまり、食生活によるライフスタイルの乱れやストレスの対応性などによる生活習慣病の悪化を調べる指標として、加速度脈波計測は、有効であると考える。今後は更に、例数を増やして検討したいと考える。

表1 年齢と性別に対する他の変数との spearman 相関

変数名	vs 年齢	変数名	vs 性別
SDPTGAI	0.655	筋肉率	-0.760
筋肉率	-0.51	体脂肪	0.624
脂肪率	0.413	アルコール	0.417
ストレス度	-0.301	間食	-0.280

表2 年代別性別にみた SDPTGAI 指数との相関

年代	変数名	男性	変数名	女性
若年群	牛乳	0.325	筋肉率	-0.218
	ストレス	0.218	お茶	0.199
		n=97		n=163
中年群	BMI	-0.202	筋肉率	-0.189
	タバコ	-0.152	運動	0.164
		n=179		n=240
老年群	ストレス	0.158*	BMI	0.130
		n=111		n=246

* 有意ではない。

引用文献

1) Takazawa K, et al. 1998 Assessment of vasoactive agents and vascular aging by the second derivative of photoplethysmogram waveform: Hypertension 32(2): 365-70.

2) 岩橋成寿 他 2002 日本語版自覚ストレス調査票作成の試み 心身医 42: 459-466.

(うちだ せいや・きむら ともあき・つだ やすたみ・やかおか きよし)

反応歪曲を補正した心理特性値の推定

服部　環
（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

キーワード：心理検査，歪曲反応，項目反応モデル

採用試験のようなハイステークスな試験状況で質問紙形式の心理検査を実施したとき，受検者は反応を歪曲する。本稿は個々の受検者ごとに，そうした反応歪曲の影響を除去して心理的特性値の大きさを推定する方法を提案し，数値実験を行う。

方法

・モデル　平常受検時における受検者 i の特性値を θ_i，項目 j の識別力を a_j，カテゴリ k の困難度を $b_{j,k}$ とする。そして，社会的望ましさの影響を受けて増加するカテゴリ困難度の増分を δ_j（通常は負），受検者 i が示す反応歪曲の強さを β_i，検査の項目数を NI，平常受検時の回答であるとき $t=1$，社会的望ましさの影響を受ける状況での回答であるとき $t=2$ とする。このとき，本稿のモデルは受検者 i が項目 $\mathrm{NI}(t-1)+j$ においてカテゴリ k 以上の値を取る確率 $p^*_{i,\mathrm{NI}(t-1)+j,k}$ を次式によって定義する。

$$p^*_{i,\mathrm{NI}(t-1)+j,k} = \frac{1}{1+\exp\Big(-a_j\big[\theta_i-\{b_{j,k-1}+(t-1)\delta_j\beta_i\}\big]\Big)} \quad (1)$$

$$\text{ただし，}\quad t=1,2,\quad \beta_i=\omega_0+\sum_{l=1}^{m}\omega_l(x_{il}-\bar{x}_l)+\epsilon_i$$

$t=1$ の場合（項目 1 から項目 NI まで），本稿のモデルは通常の段階反応モデル（Samejima, 1969）であり，$t=2$ の場合（項目 NI+1 から項目 2NI まで），各カテゴリ困難度に $\delta_j\beta_i$ が加算される。受検者集団が社会的に望ましい方向で回答すればカテゴリ困難度が小さくなるので，δ_j は負の値を取る。また，社会的に望ましい方向へ回答する傾向の強い受検者ほど β_i は正の大きな値を取り，平常時と同様に回答する受検者は $\beta_i=0$ となり，通常は考えにくいが，自分を悪く見せかけて回答する受検者ほど β_i は負の大きな値を取る。

・モデル母数の推定とテストの運用　テストを運用する前に，同一受検者集団の平常時の回答と採用試験のように反応が歪曲した状況での回答，さらに当該の質問紙の回答とは別の測定値 x_{il},（$l=1,2,\cdots,m$）を収集して β_i の予測式（実際には ω_o，ω_l）を求めておく。そして，現実の試験場面では次式に項目母数の推定値を代入して，θ_i を推定する。

$$p^*_{i,\mathrm{NI}(t-1)+j,k} = \frac{1}{1+\exp\Big(-\hat{a}_j\big[\theta_i-\{\hat{b}_{j,k-1}+(t-1)\hat{\delta}_j\hat{\beta}_i\}\big]\Big)} \quad (2)$$

$$\text{ただし，}\quad t=2,\quad \hat{\beta}_i=\hat{\omega}_0+\sum_{l=1}^{m}\hat{\omega}_l(x_{il}-\bar{x}_l)+\epsilon_i$$

・数値実験　人工データ（平常反応と歪曲反応）の生成　受検者数を 400，項目数を 10，各項目の反応カテゴリ数を 4，θ_i の真値に標準正規乱数，$a_j=1$，$b_{j,1}=-1$，$b_{j,2}=0$，$b_{j,3}=1$，δ_j には -3 と 1，およびその間を 9 等分する値を与えた。また，$\omega_0=2.0$，$\omega_1=0.5$，$\omega_2=1.0$，x_{il} と ϵ_i にはそれぞれ標準正規乱数を与えた。そして，真値を所与として式 (1) の値を求め，その値と 0 から 1 の一様乱数とを比較することによって平常受検時の項目反応（10 項目分；以下，平常反応）と反応歪曲を混入した項目反応（10 項目；以下，歪曲反応）を生成した。

モデル母数の推定　母数の推定には WinBUGS（Spiegelhalter, Thomas & Best, 2000）を用いた。

まず，無作為に受検者を折半して，一方を推定標本，他方を妥当化標本とした。そして，(1) 推定標本の平常反応と歪曲反応を用いてすべてのモデル母数を同時に推定した。このときの θ_i の推定値を $\theta^{(1)}$ とする。(2) 推定標本で求めた項目母数の推定値を用い，妥当化標本の平常反応から θ_i を推定した（$\theta^{(2)}$）。(3) 推定標本で求めた項目母数と ω_0，ω_1，ω_2 の推定値を用い，妥当化標本の歪曲反応から θ_i を推定した（$\theta^{(3)}$）。(4)ω_1 と ω_2 を 0 へ固定した上で，推定標本で求めた項目母数と ω_0 の推定値を用いて妥当化標本の歪曲反応から θ_i を推定した（$\theta^{(4)}$）。(5)ω_0，ω_1，ω_2 を 0 へ固定した上で，推定標本で求めた項目母数の推定値を用いて妥当化標本の歪曲反応から θ_i を推定した（$\theta^{(5)}$）。

結果と考察

・尺度得点　推定標本において，尺度得点の平均（標準偏差）は平常反応が 25.01（6.54），歪曲反応が 33.15（5.98）であった。

・推定標本におけるモデル母数の推定　推定標本における θ_i の真値（以下，真値を $\theta^{(0)}$ とする）と $\theta^{(1)}$ の相関は 0.88 であった。また，$\theta^{(0)}$ と平常反応の尺度得点との相関は 0.84，歪曲反応の尺度得点との相関は 0.43 であった。歪曲反応の相関が 0.43 と小さいのは，尺度得点に天井効果が生じたためである。以上のように，ほぼ現実的な人工データを生成できたと思われる。

・交差妥当化　$\hat{\omega}_0=1.91$，$\hat{\omega}_1=0.44$，$\hat{\omega}_2=0.91$ であった。妥当化標本で $\theta^{(2)}$，$\theta^{(3)}$，$\theta^{(4)}$ を推定する際には，この推定値を用いた。妥当化標本の $\theta^{(2)}$，$\theta^{(3)}$，$\theta^{(4)}$，$\theta^{(5)}$ および尺度得点の平均と標準偏差，推定値と真値 $\theta^{(0)}$ との相関係数を表 1 に示す。

$\theta^{(2)}$ の平均は -0.01，$\theta^{(0)}$ との相関は 0.85 であり，推定標本の場合と同様，平常反応では比較的良い推定値が得られた。

$\theta^{(3)}$ と $\theta^{(0)}$ との相関は 0.64 であり，平常反応を用いて求めた $\theta^{(2)}$ と $\theta^{(0)}$ との相関よりも小さい。これは，個人の反応歪曲の大きさ β_i を完璧には推定できないためである。

$\theta^{(4)}$ と $\theta^{(2)}$ との相関は 0.51 であり，反応歪曲の個人差を無視したことにより，$\theta^{(0)}$ とのずれが大きくなったことがわかる。したがって，できる限り β_i を予測しておく方が望ましい。

反応歪曲の影響を無視して求めた $\theta^{(5)}$ と $\theta^{(0)}$ との相関は 0.47 である。この値は $\theta^{(4)}$ と $\theta^{(0)}$ の相関 0.51 とほぼ等しいが，$\theta^{(5)}$ の平均は 1.28 である。したがって，$\theta^{(5)}$ は集団全体としても反応歪曲の影響を除けないことがわかる。実際にテストを運用する場面では，$\theta^{(5)}$ を利用することはできない。

β_i の適切な予測式を必要とするが，本稿のモデルは個人ごとに反応歪曲の影響を除いて特性値を推定できよう。[本稿の一部は日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会で発表された。]

表 1　妥当化標本における特性値の推定値

推定値・尺度得点	平均	標準偏差	$\theta^{(0)}$との相関
$\theta^{(0)}$	0.01	1.05	−
$\theta^{(2)}$	−0.01	0.95	0.85
$\theta^{(3)}$	−0.10	1.03	0.64
$\theta^{(4)}$	−0.27	1.26	0.51
$\theta^{(5)}$	1.28	0.97	0.47
β_i	2.16	1.56	0.08
平常反応の尺度得点	25.01	6.84	0.85
歪曲反応の尺度得点	33.58	6.45	0.46

（はっとり　たまき）

大学生の社会的スキルの検討　1

（ＫｉSS－１８とＫ－SCTによる比較）

○橋本泰子[1)]　西村和久[1)]　佐藤嘉晃[2)]
([1)] 桜美林大学大学院　[2)]城西大学)

キーワード：社会スキル、KiSS-18、SCT

１、目的

日本では親が過保護で子供が“甘える”（町沢 2001）といった日本文化も関係してか、若者達のニートや引きこもりが増加している。内閣府の報告ではニートは約８５万人で、2015 年には 100 万人を超えるとされている。厚労省によれば、引きこもりの家庭は 100 万世帯を越え 30 代、40 代になっても社会に出られないことが、注目されている。

1970 年代より、中国において「一人っ子政策」が実施され、親の服従的な養育態度が、子供の自己中心的で自立の遅れに影響していると指摘されている。毛（２００２）は、「中国のＩＴ技術も進展を遂げ、都市部の若者の間で、携帯電話やインターネットが普及し、間接的なメディアによるコミュニケーションが多くなった」と、対人関係の変容を報告している。このような場合、若者は、社会的スキルが発達せずに孤独になり、ストレスを受けやすく、うつ病になると警鐘がなされている（相川２０００）。

そこで、大学生と中国留学生との間で、社会的スキルや心理特性の検討を試みたので報告する。

２、対象と方法

対象は、東京近郊の四年制大学３２８名(平均年齢 20.0 歳、ＳＤ＝1.1)、留学生４１名(平均年齢 22.7 歳、SD＝2.88)である。

方法は、ＫｉＳＳ－18(Kikuchi's Social Skill Scale）、Ｋ－SCT を、２００６年１１月に集団法で実施した。ＫｉSS－１８とは菊池（１９８８）による社会スキルを測定する１８項目から構成されている尺度で、５件法で評定し、1～5 点までの得点を与えた。Ｋ－ＳＣＴは１５の書きかけの短文から構成されている。

表1.対象について

	男子	女子	計	平均年齢	SD
高群	19	28	47	20.2	1.22
低群	22	18	40	20.2	1.59
留学群	20	21	41	22.7	2.9

３、結果と考察

まず、ＫｉＳＳ－18の全体の平均値56.8から±１SDにより、高群４７名と低群 40 名そして留学生４１名の３群間で、検査結果の検討をした。

（1）　ＫｉＳＳ-１８による検討

高群と留学群間に、ｔ検定で１１項目（61.1%）、低群と留学群間に１６項目（88.9%）に有意差（ｐ<. 05）が認められた。高群と留学群間で「自己コントロールスキル（４項目)」、「他人と交際するスキル（３項目)」、「自己開示スキル（２項目)」、「適応スキル（２項目)」に高群よりも留学群の得点が、低かった。従って、留学群は、知らない人に気軽に声えかけ、困っている人の支援、トラブルをうまく処理する、和解、謝罪、感情の統制、仕事の計画、決断等が困難である。これは、対人関係の経験不足ではと解釈される。

次に、低群と留学群で差の無かった２項目は、「適応スキル」、「自己コントロールスキル」で、失敗した時に謝る、仕事の目標を立てる。両群とも親の過保護な養育が影響しているようである。

低群は留学群より、２項目を除き低得点であることから、社会スキルに問題を有すると解釈される。

（２）Ｋ－SCT による検討

χ二乗検定で、危険率 5%以下で、11 項目（73.3%）に有意差あり。各群の特徴を要約する。

留学群は、性格は明るく、外向的で、物事を肯定的に解釈し、問題解決も積極的である。家族関係の結びつきは強い。将来に対しては、勉学中で、計画が立てられないためか、不安がある。

高群は、性格は外向型で、将来に対し、楽観的である。結婚願望が強い。主婦のステータスが高いことが、影響しているとも考えられる。

低群は、性格は内向的で物事を悲観的に考える。両親や友人との関係は希薄で、将来に対しても不安が強く、就職にも消極的である。不満が多いが自分で解決せずに我慢をし、ストレスを溜め込みやすい。将来、引きこもりやニート、フリーターになる可能性が考えられる。

３、結語

大学生と中国留学生を対象に社会スキルを ＫｉSS－１８とＫ－SCT により検討を試みた。低群が社会スキルに問題を有することから、その対策として、学生時代に対人関係のスキルアップの支援活動により、ニート、引きこもり、フリーターの予防になるのではと考察される。

参考・引用文献

相川　充　　(2000)　　人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－サイエンス社
毛　新華　　(2002)　　社会的スキル測定尺度 ＫｉSS－18 の中国の若者への適用

（はしもとたいこ・にしむらかずひさ・さとう）

アレルギー児童のＰＡＣ分析

― 心理をふまえた教育的配慮のために ―

梶原　隆之
（文京学院大学人間学部）

キーワード：アレルギー、児童、教育

【研究の目的】文部科学省は 2004 年 6 月、全国の公立小中高校に通うすべての児童生徒を対象に、アレルギー疾患に関する調査を行った。その結果、学校側の対応は十分ではないとして、学校用の手引き作りを進めるという。ただし、この内容は、給食や、掃除当番など、疾患そのものへの対応のことを指しており、疾患を持つ児童生徒の心理的な実態や、それに対する教育的配慮の部分には、触れていない。そこで、本研究では、児童のアレルギーに対する心理を、PAC 分析で事例分析し、教育的配慮について検討する。

【方法】〈被検者〉食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、ぜんそくなどのアレルギー疾患を持つ小学校４年生（９歳）の女子児童。給食は食べられないので、弁当を持参して登校している。

〈手続き〉「アレルギーについて、関係する大切な特徴や、イメージや、言葉を、すべてカードに記入して下さい。」と教示し、連想反応を得た。次に、重要順に並べ替えさせたあと、各項目の直感的イメージ上の類似度を、PAC 分析支援ツール（土田義郎作成,2006）を用いてパソコン画面上でマウスのドラックにより、100 段階で評定させた。次いで、ウォード法でクラスター分析を行い、各クラスターのイメージや併合の理由、単独の＋、－、０のイメージを質問した。分析およびデンドログラムの作成には let's stat! ver.040917 を用いた（土田 2002）。

【結果】重要順位、反応順、クラスター分析および単独＋－イメージの結果は Fig.1 のようになった。

〈被検者による解釈〉

クラスター1：食べられない食べ物を食べて、ひりひりする。アレルギーの人以外には無いこと。「ひりひりする」は苦しい。

クラスター２：アレルギーの人以外には無いこと。「じんましん」「かゆい」は苦しいときがある。

クラスター３：ひどくなっちゃうからやらなきゃいけないんだなあと思う。

「食べられない食べ物」と「給食の時にちがう食べ物」は、マイナスの中のプラスかなあ。みんなが心配してくれるからいいの。

〈補足質問〉

「うつる病気じゃないから仲よくしてね」の反応順が１番だったことと、「みんなが心配してくれるからいいの」の発言から、「友達関係が一番気になるのかな？」と質問すると、うなずきながら、泣き出してしまった。検査者が「友達にわかってもらえるかが心配なんだけど、今はうまくいっているからうれしいんだね？」と言うと、泣きながらうなずいていた。落ち着いてから、「こんな話は誰かにしたことがあるか」聞くと「誰にも無い。ママにも無い。」と答えた。

【考察】クラスタ１は「失敗による症状」、クラスタ２は、「人間関係」、クラスタ３は「対処」と、命名した。プラスのイメージの反応は１つも無いが、「対処」はニュートラルであり、生活上の、自分で行わなければならない治療は苦にしていないことがわかった。クラスタ１の「ひりひりする」が、重要度順位が１位になっているのは、「ひりひり」という症状と合わせて、意識がもうろうとしたことが、かつて数回あったことに、関係していると思われる。同じような反応なのに、クラスタ１と２に分かれているのは、症状そのものとして捉えるか、2 次的な人間関係と関連してとらえるかの違いと考えられるが、クラスタの結びつきからしてもつながりは深い。また、小学校４年生（9 歳）であるため、言語活動が PAC 分析に耐えられるのに十分であるかという課題もある。検査者の予想では、一般の病弱児にみられるといわれている、低い自尊感情を示しているとみられる反応が現れるのではないかと考えていたが、その反応は１つもなかった。本児は、アレルギーに理解のある幼稚園、小学校で過ごしているため、そういった反応が現れなかった可能性がある。それは、「マイナスの中のプラス」という表現でわかるように、これまで、担任が他の児童に適切な説明をし、理解され、差別をうけることなく、むしろ自然に他の児童から配慮をされている現状がある。例えば、弁当持ちではあるが、給食当番も共に行い、アレルギー食材の時は交代してくれたりするとのことである。実現はしなかったが、栄養士と担任、保護者を交えて給食での特別食を作り、弁当を持ってこなくても良いようにしようとしたこともある。よって、あまり、配慮の十分でない学校の児童の事例も分析し、自尊感情、有能感に影響を及ぼしていないかを検討する必要があるということである。

本研究では、学級経営等での教育的配慮が必要なものとして、アレルギー疾患からの「人間関係への不安」が示された。また、言語表現能力が十分でなかったがゆえ、混沌としていた感情を PAC 分析によって表現することができたという有意義な機会にもなったといえる。それゆえ、被検者に対する臨床心理学的配慮や、カウンセリング技法の必要性が示された。

【引用文献】

内藤哲雄　1997　PAC 分析実施法入門　ナカニシヤ出版

土田義郎　2002　認知構造の分析法の比較―評価グリッド法と PAC 分析―　2002 年度大会（北陸）学術講演梗概集，学術梗概集　計画系 2002（D－1）　845-846（社団法人　日本建築学会）

内藤哲雄　2006　オーストラリア人の人間関係スキーマ―日本人日本語教師による PAC 分析―　日本応用心理学会第 73 回大会発表論文集　88

（かじはら　たかゆき）

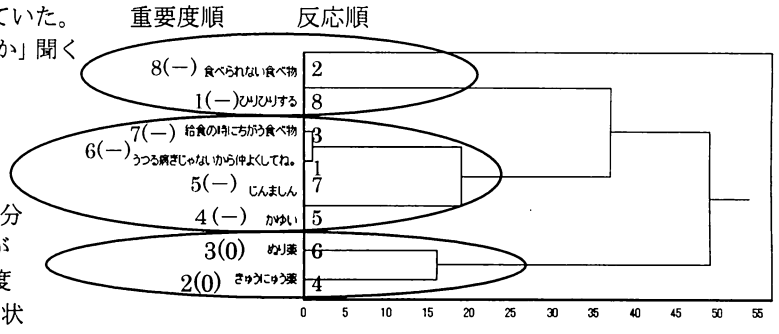


Fig.1. 被検者のデンドログラム

大学生の社会スキルの検討２

—風景構成法における検討—

○西村和久[1)]　橋本泰子[1)]　佐藤嘉晃[2)]
([1)] 桜美林大学大学院　[2)]城西大学)

キーワード：投影法、感情、プライベート空間

１、目的

大学生を対象に、ＫｉＳＳ－18の結果より高群と低群に区分し、さらに中国留学生の３群間で風景構成法により、社会スキルの検討を行う。

２、対象と方法

対象と方法は１、と同じである。風景構成法は、時間の関係で、彩色は未施行である。

３、結果と考察

風景構成法による３群間のアイテムの比較

人物(自己像・理想像を表す)：留学群は右下であることから、外向・現実志向、高群は左右の下で、現実的・退行傾向、低群も高群と類似しているが右上が他群より多いことから、未来志向的である。

人物は３群ともステック状で、この記号化は、皆藤（１９９４）によれば「集団法に多く、匿名性の中に内界を覆い隠す」に一致するようである。

人物の年代は、留学群は学童から成人と幅が広い。しかし、高群はステック状が多いため防衛的である。低群は高校生から成人とほぼ同年代であった。健康者のサインとして「同性・子供像」と指摘されていることから、留学群はそれに一致すると解釈される。

川（無意識の流れ・生命の源泉・水の流れは危険性も孕む）：高・低群とも中と下が多く川幅も広いことから、生命エネルギーは強い。留学群は、中で幅が狭いことから、多少、エネルギーの低下が認められる。

これは、年齢や異文化の中で生活することが、関係するようである。

木(無意識の自己像・身体イメージ)：場所が高群は右の上下、低群は左上、留学群は左下から、高群は外向性、低群は内向・退行そして留学群も内向傾向が認められる。ところで、木の大きさでは、留学群が高く、低・高群の順であることから、留学群は、自信もあり向学心から留学したようである。

なお、低群の場合いは、自我肥大との関連性が窺える。

道（人生の方向性）：留学群の道は、左上に幅が狭く短いことから、大志を抱き来日したが、現実に直面し、計画通りに運ばない、不確実感の投映のようである。在日期間の平均は、約２年であることから、生活にも慣れ将来のことを具体的に検討する時期も関係するようである。

田（描く人の心が指向する「時」を示す）：場所は留学・高群は左下、低群は右側、苗あり、低群が多くついで高・留群となっていることから、低群は真面目に課題に取り組む。留学群は、都市出身者が多く、田と馴染みが薄いことが関係しているようである。

石（障害物・重荷を表す）：３群とも下に、小さい石を描いている。現実的な問題をいろいろ有している。

家（家庭環境・家庭内葛藤を示す）：留学群は右、高・低群とも左で、留学群の家族関係は緊密であるのに対し、他の２群は、関係がやや希薄のようである。

花（生活の色取り）：花は人物の側に描かれている等から、留学群は右、高群は下、低群は中と下から、留学群は外向性、低群は、自己中心性、高群は現実的と解釈される。

動物（転生輪廻）：犬・猫・ウサギ等、ペットとして身近にいる動物が多かった。

付加物：留学群に多くの加筆があったことから、豊かな創造性を有して居るようである。しかし、高・低群は、少数で性格の硬さが窺われた。

１）病的サインの検討

皆藤の指摘する６項目に、「はみ出し」を加えて検討したところ、「枠と接しない」と「はみ出し」に χ 二乗検定で有意差（$p<.05$）が認められた。留学群に出現した項目は、「枠と接しない」これは、社会との結びつきが薄い。日本の伝統的な閉鎖的文化に、溶け込みにくいことや、自己不全感も関係するようである。

そして「はみ出し」で、これは規則を守らないことや、自己主張の強さを裏付けると解釈される。

天児（２００３）によれば、「中国人は自らの面通を重視したり、自らを中心に物事を考えたり強烈に自己主張するなどの傾向がある」と、指摘している。これに共通すると考えられる。

結語

留学群の特徴として、本来の自己像は大きいが、生活環境が異なるためか、多少エネルギーの低下や不確実感が強い。創造性は豊かで、自己主張が強い。これは、一人っ子政策による影響も考えられる。

高群は、外向的で要求水準が高い。低群は内向・自己中心的で、自我肥大の傾向がある。真面目であるが、硬い性格が認められる。学生時代にコミュニケーションスキルトレーニングの支援が、必要ではないかと考察される。

（にしむらかずひさ・はしもとたいこ・さとうよしあき）

大学生のアルバイトと学業

三井清美
（文京学院大学大学院人間学研究科）
キーワード：アルバイト、学業、充実感

【研究の目的】

2006年の大学・短大進学率は52.3%になった。その大学生の8～9割がアルバイトに従事しているという調査結果がある（文部科学省 2006）。その一方で、大学生の休学や退学の問題も取り上げられるようになった。大学生にとって充実感を持ち、満足した生活を送ることは重要である。従って、現代の大学生がどのような生活を送り、どう感じているのかを探ることは必要であると考える。河地（2005）によると、勉強している大学生の自信は高く、大野（1984）は、現代大学生の充実感は、自己肯定的な感情で、生活気分としての感じ方と、自我の問題、仲間との連帯意識、基本的信頼感、将来に対する時間的展望などの側面からなる、といっている。そこで、本研究は、大学生の充実感について、学業とアルバイトを通して検討する。

【方法】

協力者：大学2、3年生381名（男　47名、女　334名）
手続き：2006年5月～6月に、授業時間中に質問紙を配布、その場で回答してもらい回収した。
質問項目：フェイスシート（勉強時間、アルバイト時間など）、大学生活のおける重要度（学業・勉強、アルバイト、教員との交流など6項目）、充実感「私のしたことで人に喜んでもらえる事がよくある」、「努力した結果報われたと感じることがある」「はっきりした将来の目標がある」「毎日が同じことの繰り返しで退屈だ」など22項目と、アルバイト観（職種、収入、使い道、アルバイトと大学の授業の比重など9項目）をそれぞれ4件法で回答を求めた。

【結果】

アルバイトと学業・勉強　協力者381人のうち、アルバイト従事者は303人（79.5%）であった。また、アルバイト時間と勉強時間に関連があるかどうか見た結果、関連は見られなかった。

尺度の確定　充実感、アルバイト観について内容の構造を明らかにするためにそれぞれ因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。その結果、充実感は、4因子が抽出され、第1因子「存在価値」（5項目、$\alpha=.85$）、第2因子「努力感」（5項目、$\alpha=.72$）、第3因子「将来目標」（4項目、$\alpha=.77$）、第4因子「不全感」（5項目、$\alpha=.71$）と命名した。アルバイト観は、2因子が抽出され、第1因子「アルバイト有意味」（3項目、$\alpha=.70$）、第2因子「アルバイト優先」（4項目、$\alpha=.57$）と命名した。

アルバイトと勉強の比重における類型化　アルバイト時間（11時間以上/週）と勉強時間（1時間半以上/日）から、勉強もアルバイトも両方しない群、勉強とアルバイトを両方する群、アルバイトのみする群、勉強のみする群を抽出した。その結果、両方しない（13.6%）、アルバイトのみする（51.9%）、勉強のみする（22.8%）、両方する（22.8%）で、アルバイトのみする群が最も多かった。

充実感　前述の4群間で充実感に差があるかどうか見るために、充実感の下位尺度「存在価値」「努力感」「将来目標」「不全感」についてそれぞれ分散分析を行った。その結果、存在価値（$F(3,201)=3.72$、$p<.05$）、努力感（$F(3,199)=5.27$、$p<.05$）、将来目標（$F(3,200)=2.86$、$p<.05$）、不全感（$F(3.201)=6.51, p<.001$）で有意差が見られた。多重比較の結果、「存在価値」は、両方する群がアルバイトのみする群より高く、「努力感」は、両方する群がアルバイトのみする群と両方しない群より高かった。「将来目標」は、勉強のみする群と両方する群が両方しない群より高く、「不全感」は、両方しない群とアルバイトのみする群が両方する群より高かった。

大学生活における重要度　大学生活で何を重視しているかについて4群間で差があるかどうか見るために、分散分析を行った。その結果、「学業・勉強」（$F(3,202)=5.33$、$p<.001$）、「友人との遊び」（$F(3,202)=2.89$、$p<.05$）、「アルバイト」（$F(3,201)=35.43$、$p<.001$）で有意差が見られた。多重比較の結果、勉強のみする群と両方する群は、アルバイトのみする群より「学業・勉強」を重視し、アルバイトのみする群と両方する群は両方しない群と勉強のみする群より「アルバイト」を重視、「友人との遊び」を重視する群は、両方しない群が勉強のみする群より有意に高い結果が得られた。

充実感と大学生活における重要度の関連　充実感の下位尺度と、大学生活において何を重視していると考えているかについて、関連があるか見た。その結果、「努力感」と「学業・勉強」・「教員との交流」、「将来目標」と「学業・勉強」・「教員との交」・「習い事」で正の相関が見られた。

充実感とアルバイト観の関連　充実感の下位尺度の「存在価値」「努力感」「将来目標」「不全感」とアルバイト観の下位尺度の「アルバイト有意味」と「アルバイト優先」について関連があるかどうか見るために相関係数を求めた。その結果、「アルバイト有意味」は「存在価値」と「努力感」と正の相関があった。

【考察】

大学生の充実感は、アルバイトと勉強の両方をしている人、とりわけアルバイトに意味を見出して従事している人に高いことが分かった。学業以外の活動が現代の大学生の生甲斐感と関連がある（近藤・鎌田、1997）ことが示されているが、アルバイトは学生にとって学業以外の活動になるのではないか。さらに、アルバイトと勉強の両方をしている人は、「存在価値」と「将来目標」、「努力感」が高く、「不全感」が低かったことから、大野（1984）が示した大学生の充実感の自己肯定的な感情を満たしている、といえる。

しかし、その一方で、学業・勉強よりアルバイトを優先することと充実感とは結びつかないことが示された。河地（2005）を支持する結果となり、やはり大学生にとっては、たとえアルバイトをしていても、学業や勉強にも重点を置き、勉強することは重要であると考えられた。

（みつい きよみ）

障害のある人の表現と造形活動に関する研究

－障害のある人の造形作品はどのようにして生まれるか－

山田　宗寛
社会福祉法人おおつ福祉会　唐崎やよい作業所

キーワード：造形活動、発達保障、アウトサイダー・アート

【研究の目的と問題意識】

障害のある人の造形作品が美術的な評価を得るようになり，美術教育を受けていない人の作品や生の芸術という意味で「アウトサイダー・アート」（Outsider Art）や「アール・ブュルット」（Art Brut）などと称されている．作品には障害のある人の内面が表現され，知的障害の場合は「発達の世界」が投影されていると考える．そう捉えると障害のある人の表現について研究することは人間の内面を理解していくことと同じことといえる．つまり障害のある人の作品や造形活動は発達研究の視点からも考えていくことができるといえる．

本研究では滋賀県の造形活動の取り組みを対象とした．滋賀県は障害のある人の造形活動について全国的にも先駆的に取り組まれてきたといわれている．糸賀一雄らが設立した近江学園（1946 年）では戦後間もない頃より造形活動が取り組まれ，その実践は県下の施設にも引き継がれ，今日まで発展してきた歴史がある．絵画の他に，特に陶土を使った造形作品は全国的にも優れた作品がたくさんつくられ、高く評価されている．

近江学園は障害のある子どもたちへの教育実践と研究から発達保障論が提起されたところでもある．他県にない造形活動の独自性と発展は糸賀一雄らの福祉思想や発達保障論と深く関わりがあるという仮説を持ち，第 70 回と第 71 回日本応用心理学会で報告した「障害の重い青年期以降の労働問題と人格性発達」とも関連する成人期障害者の発達保障や権利保障につながる研究課題として取り組んだ．

【研究の方法】

滋賀県の福祉施設での造形活動に関わる記録，開催された展覧会の資料を参考に滋賀県の福祉施設でどのようなに造形活動に取り組まれ，どんな教育や福祉の実践が行われてきたのかを調べた．「滋賀県における障害者の造形活動に関する調査研究」（滋賀県障害者造形活動研究会，代表大槻倫子，2006 年）では滋賀の造形活動にとって重要な役割を果たしたと考えられる創世記から現在までの関係者 14 人の聞き取り調査が行われたので参考にした．

【結果】

造形活動の歴史と実践論

滋賀県における造形活動の取り組みは開設間もない頃の近江学園からはじまっている．施設が窯場で有名な信楽と山続きにあり，施設の土地から陶土が採れたことにはじまる．窯業科が 1948 年に発足したが事業としては失敗し，手持ちぶさたになった子どもたちが自由に造形するようになり芸術的なものも発見された．後に発展的に設立された施設でも実践がひねり班などとして継承されていった．1954 年には陶芸家の八木一夫がボランティアとして関わり「子どもが自分から粘土に近寄ってるまで、絶対に無理に粘土をさわらせてはならない」「ものをつくることをおしつけてはならない」「子どもたちがつくっているときに口を出してはいけない」という造形指導であった．「八木さんの考えや発想は、当時の施設の造形担当者には水が土にしみこむみたいに吸収されていった」といわれ，これが造形指導の基幹となった．

粘土については，糸賀一雄は「普通児も知的障害児もなく，土に対する感覚と興味は全ての子供たちに共通である．造形芸術に対する本然の心の要求とも見るべきだろう」，田村一二は「粘土細工というものは，知的障害の子どもにはよい教材や」，岡崎英彦は「遊びの要素を持ちながら，次第に作業の性格をもちうるという，指導や教育の素材として優れる」と評している．

聞き取り調査から

聞き取り調査では「知的障害者は知的におくれているだけで,感受性や感情については大変鋭いものをもっている.それを手と健康と心情で証明するような,そういう方向に造形教育はいかねばならない」「（職員に対して）ねじくったらあかん.お前らの頭でお前ら流に教育したらあかん」という田村一二の言葉や「彼らの作品はどう焼こうが彼らの作品だと思っています.釉薬はかなり早い時期から使わなくなりました.その方が彼らの作品がよりリアルに表現できると思いました」「職員はあくまでも脇役でなくてはいけないと思います.場所の提供者でしかない.先生でも指導者でもないとおもいます.土練機と立場は同じですね.一人一人に合った粘土の固さとか,日常生活や興味関心,その行動とか,そういうところを認識した上で場の提供をしていかなくてはいけない,地道な実践しかないのだと思っています」など造形活動や作品に対する考えを聞くことができた．

まとめ

造形活動においては障害のある人の主体性を引き出そうと教育的なはたらきけがされ，その実践理念はどこまでも障害のある人の主体性を大切にしようとするものであった．これは糸賀一雄の「この子らを世の光に」という思想や発達保障の考えが具体化されたものと捉えることもできる．

このように障害のある人の表現を主体的な姿として考えると，作品は人格や発達を表したものといえ、造形活動はそれにはたらきかける取り組みといえる．人間にとって表現することは人間発達にとって必要であり、文化や芸術活動の意義は大きいといえる．

（本研究は「滋賀県における障害者の造形活動に関する調査研究」の一部で，ポーラ美術振興財団平成 18 年度助成を受け実施された.）

（やまだ　むねひろ）

中期語学留学生のニーズと資源

― 4ヶ月間の語学留学事例から―

○岡崎 琴恵　　伊藤 亜矢子
（お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科）

キーワード：中期語学留学、ニーズ、資源

【研究の目的】

社会の国際化に伴い、多くの日本人が海外留学をするようになってから久しい。さらに交通・通信手段や経済事情のめざましい発展により、海外へ渡航することが容易になった今日、多くの高等学校、中学校などでホームステイ体験が準備され、多くの大学では語学研修を含む「交換留学制度」が活用されており、海外の大学進学だけではなく、語学留学をサポートするエージェント企業の留学市場開拓により、多くの日本人が、非常に簡単、気軽に短期・中期の語学留学を経験することが可能となった。藤沢・小森（1999）は、3-4か月程度の語学留学を「中期語学留学」であるとし、その英語力向上への効果について検討している。この研究によると、現地での生活を通した中期語学留学経験群は、そうでない群と比較して、有意にTOEFL得点が向上していた。だが、日本からの中期語学留学生のニーズについて検討した研究というのは数少ない。本研究では、4ヶ月間のカナダ語学留学をもとに、中期語学留学生のニーズと得られる資源について検討し、中期語学留学生への発達促進的、様々なトラブルへの予防的アプローチについての可能性を探ることを目的とする。

【方法】

筆者自身が4ヶ月間の語学留学をし、その間毎日送り続けたE-mailを基に、自分自身の経験、現地での日本人の留学生との状況・交流、現地の大学で得られた資源やサポートについての文章を抽出し、内容分析を行なった。

【結果と考察】

1）留学生に対する発達促進的、予防的アプローチの可能性

留学中に必要とした資源やサポートについては、Table1のような時系列に応じた資源の必要性が考えられた。まず、松田（2002）が語学留学生の目的意識の低さを指摘しているように、留学の効果を高めるためには、目的意識は欠かせないと考えられる。短期留学においては、問題や困難が生じた際の立ち直りに多くの時間をかけてしまうと、その間に帰国に至ってしまうという特徴がある。そのため、予防的アプローチや早期の介入が重要になることが考えられる。そのため、入国前の予防プログラム、現地での予防・早期発見的アプローチが重要である。

Table1 中期語学留学生に対するアプローチ仮説

時期	必要な資源	具体的な手立て
入国前	留学先の事前情報 健康・食生活情報	目的意識。意欲を高めるプログラム 留学中に起こりうる危機・問題対処予防プログラム
留学直後	諸手続きサポート 母国語 インフォメーション	入国後の手続サポート 履修、カリキュラムの手続きと、履修要件 重要な情報を漏れなく伝える Cultural Liaison（カルチュラル・リエゾン） 日本とのインターネット通信
留学中	オーガナイザー	必要な資源へのアクセスを可能にする窓口 （支援が必要な時に、まずどこに行けばよいか？） 授業の担当教員とのネットワーク・システム
帰国直前 直後	逆文化適応	時差ぼけ対策 逆カルチャー・ショック 日本の所属コミュニティへの復帰

2）中期語学留学生が得られる資源

中期語学留学生が留学期間中に得られる発達促進的、また予防的な資源としてFig.1に示したような仮説的な生態学的モデルが考えられた。

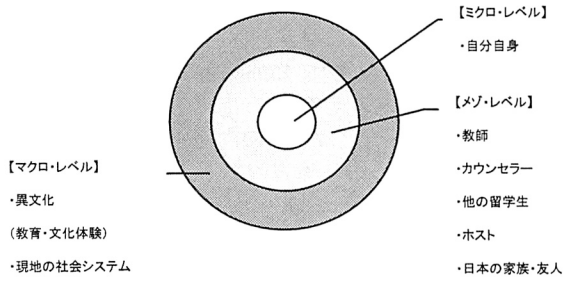


Fig.1　中期語学留学生の資源仮説モデル

3）中期語学留学生のニーズ

中期語学留学生が直面する問題として、言語の問題はもちろんのこと、食生活、社会システム、留学生間の人間関係、ホストファミリー、費用、授業など、様々な問題や課題を抱える様子がみられた（仮説モデル；Fig.2）。これらのニーズ自体は長期留学生とは大きく変わらないものの、人間関係においては、語学留学独自の「クラスメートは全員外国人」という特徴から、現地の文化よりむしろ、日々の生活を共にする他の留学生によって持ち込まれた様々な国の文化に触れる機会が多いところにニーズがあることが示唆された。

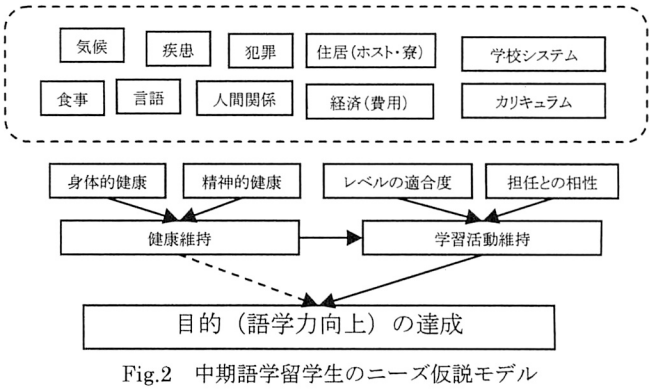


Fig.2　中期語学留学生のニーズ仮説モデル

【今後の課題】

本研究では、筆者自身が当事者となり、中期語学留学生としての体験を通じて得られた質的データを元に仮説を生成した。今後、様々な国・地域の中期語学留学生を対象に、ニーズ調査、有効な資源の調査データを増やすとともに、これらから作成された仮説モデルが適切であるのか、質的・量的の両方法を用いて検討をしていく必要がある。

【引用文献】

藤沢良行・小森道彦（1999）中期語学留学プログラムの英語学力への効果に関する研究－日本の大学英語教育への提言－．　大阪樟蔭女子大学論集，**42**，35-47.

松田節子（2002）学生の語学留学について－アンケート調査をもとに－．沖縄国際大学外国語研究，**6**，11-24.

（　おかざき　ことえ　・　いとう　あやこ　）

全方位映像通信システムを利用したグループワークの実験と評価（１）—グループワークの実験—

○井上孝之　青木慎一郎　柴田 義孝　佐藤 洋介
（岩手県立大学社会福祉学部）（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）

全方位映像通信システム　グループワーク　トレーニング

【はじめに】トレーニングを目的としてグループが活用される場面は多く、普遍化・理論化が求められている。一方、近年情報機器の開発が進んでおり、これらを活用することで、これまでの研究上の困難を克服する可能性が出てきた。本研究は、柴田研究室が開発した全方位映像通信システムを記録法や遠隔教育法として活用した。

【対象と方法】社会福祉学部２、３年生６名を対象として、問題解決型のグループワークを実施した。全方位映像通信システムを用いて遠隔トレーニングを実施、記録分析した。

【結果と考察】発話を逐語記録に起こし分析した。

①発話機能の分析　社会心理学における三者間会話研究を参照した。藤本他は個人レベルの会話の分析を行うために、発話コードを使っている[1]。この叙述、投掛（質問+指示）、応答、反応（返事+あいづち）という４コードにより分類した。６人の会話を個人レベルでみると、上記研究による三者間会話における「討論条件における主導的討論者」が４人（ＡＢＣＥ）「親密条件における情報提供者」が２人（ＤＦ）であった。また、発話数の明らかに少ない参加者（Ｆ）と、発話数が多く、叙述より投掛が多いという特徴ある発話内容の参加者（Ｅ）が認められた（表１）。

表１．話者別の発話の割合

	A	B	C	D	E	F	計
叙述	64	33	42	39	37	20	235
(%)	57.7	47.8	39.3	50.0	30.3	66.7	
投掛	35	20	41	14	51	1	162
(%)	31.5	29.0	38.3	18.0	41.8	6.7	
応答	8	7	11	18	19	4	67
(%)	7.2	10.1	10.3	23.1	15.6	13.3	
反応	4	9	13	7	15	4	52
(%)	3.6	13.0	12.1	9.0	12.3	13.3	
合計	111	69	107	78	122	29	516

②リーダーシップ役割による分析　教育分野ではリーダーシップ等のトレーニングが重視される。三隅は、リーダーシップＰＭ論によって、リーダーシップ行動を類型化している[2]。

ここでは、リーダーシップＰＭ論から発展した坂野によるリーダーシップ役割によって分類した。坂野はＰ機能 1)課題達成機能とＭ機能 2)集団維持機能をさらに詳細に分類している[3]。1)は、①話し合いの基盤を作る機能②情報や意見を引き出す機能③意見をまとめて、結論を出す機能④役割を分担する機能と下位分類している。これらの分類は実際の会話に即しており理解しやすい（表２）。

表２．話者別の役割コード別発話数

役割	A	B	C	D	E	F	計
1)-①	10	5	8	5	4	5	37
1)-②	6	4	11	10	23	1	55
1)-③	14	9	12	4	16	1	56
1)-④	4	0	7	0	3	0	14
2)	40	22	38	36	54	15	205
計	74	40	76	55	100	22	367

Ｅの発話を見ると 1)-②、1)-③、2)が、他の参加者と比べても、またＥ自身の発話の中でも大きな割合を占めており、リーダーの役割（Ｐ機能、Ｍ機能）を果していたと思われる。

③発話機能とリーダーシップ役割の関係　発話コードによる「投掛」は、役割コードによる 1)-③、「叙述」は 1)-①が多い（表３）。二種類の分析コードの関連性を示すものであり、社会心理学分野での発話機能が教育現場でも活用可能であることを示唆している。

表３．発話コードと役割の関係

	叙述	投掛	応答	反応
1)-①	28	6	5	1
%	45.9	7.1	35.7	33.3
1)-②	20	27	5	2
%	32.8	32.1	35.7	66.7
1)-③	11	42	3	0
%	18.0	50.0	21.4	0.0
1)-④	2	9	1	0
%	3.3	10.7	7.1	0.0
計	61	84	14	3

文献 1) 藤本学他　2005　会話状況に応じた発話行動：個人レベルの会話コミュニケーション分析　大坊郁夫編著　社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション　ナカニシヤ出版　111　2) 三隅二不二　1984　リーダーシップ行動の科学　有斐閣　496-498　3)坂野公信他　1995　新グループワーク・トレーニング　遊戯社　170-171

（いのうえたかゆき　あおきしんいちろう　しばたよしたか　さとうようすけ）

保育学生における子どものイメージ研究

○林田　りか[1)]　中　淑子[2)]　遠藤　美根子[3)]　内海　滉[4)]
([1)] 県立長崎シーボルト大学　[2)] 元県立長崎シーボルト大学　[3)] 独協医科大学　[4)] 千葉大学)

キーワード：保育学生、子ども、イメージ、接触体験

【研究目的】

近年、女性の就職率の増加、結婚・出産年齢の高齢化とそれに伴う少子化、核家族化などで、子どもをとりまく社会環境が大きく変化している。そのような中で、子どもを対象とした職業である保育士の仕事は重要視されており、保育士を希望する学生も増えている。しかし、現代の大学生の大部分は子どもとの接触の機会が少ない状況下にあり、そんな中で大学に進学し子どもに関する学習を続けている。さらに、子どもに対するイメージも時代とともに変化してきていると考えられる。以前、我々が保育士や看護学生に対して行った調査では、「愛着因子」が主な子どものイメージとして強調される結果となった。

そこで今回は、保育学生を対象とした子どものイメージ調査を行い、子どものイメージとの関連要因を明らかにすることを目的とした。

【研究対象および方法】

福岡県の3つの大学に通う保育学生1～2年次318名を対象に、アンケート調査を行った。調査内容は、学生の属性（年齢・性別・同胞数など）や幼少期の成育環境、子どもへの接触体験の有無などである。子どものイメージ調査は45項目で構成され、回答は5段階評価法にて実施された。

イメージ調査の分析方法は、因子分析（プロマックス回転法）を行い、属性ごとの因子得点の比較にはt検定、分散分析を行った。

【結果および考察】

回収率は100%であり、既婚者やイメージ調査の無回答者を除いた対象者数は294名（有効回答率92.5%）であった。

1．対象の属性

学生の年齢は18～19歳が269名（91.5%）と多く、女子学生が273名と全体の92.9%を占めていた。兄弟数は3人が最も多く129名（43.9%）で、次いで2人の123名（41.8%）であった。兄弟の順位では、長子が141名（48.0%）で多かった。子どもとの交流の有無では、約80%の学生が「大いにあった」「あった」と答えており、その中でも幼児の面倒をみる機会があった者が60.5%と多く、次いで小学生が50.0%、乳児44.9%、中学生23.5%の順であった。「子どもと聞くと何歳ぐらいをイメージしますか」という質問に対して最も多かった回答は、幼児後期56.8%であり、次いで幼児前期43.9%、学童期24.5%であった。これは、子どもとの接触体験と同様の結果であり、学生が抱く子どもの年齢と大きく関連していることがわかる。また、看護学生に対する調査でも同様の結果であった。

2．因子の検討

次に、保育学生がもつ子どものイメージを因子分析した。その結果、6因子が抽出された（表1）。第1因子は「子どもは苦手である」「接し方がわからない」などを含めた逆転の9項目で構成されており、仮に『肯定因子』とした。第2因子は「子どもなりの意思を持っている」「同じ年齢でも人によっては違いがある」など9項目で、『発達因子』とした。第3因子は「よく泣く」「未熟である」などの9項目で『自己中心的因子』、第4因子は「一緒にいると楽しい」などの4項目で『愛着因子』、第5因子は「正直である」など5項目で『純朴因子』とした。第6因子は「エネルギッシュだと感じる」「生き生きしている」などの4項目で構成され、『生命力因子』とした。

表1　子どものイメージに関する6因子

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子	6因子
＊子どもは苦手である	0.671	−0.062	0.065	0.298	0.000	−0.034
＊接し方がわからない	0.655	0.003	0.013	−0.056	0.110	−0.150
＊子どもに接するのに怖いと感じる	0.630	−0.227	0.103	0.081	0.181	−0.076
＊一緒にいると疲れる	0.612	0.063	−0.081	−0.058	0.181	−0.117
＊一緒にいるとうるさい	0.588	0.084	−0.190	0.059	0.154	−0.030
＊子どもには説明してもわからない	0.491	0.221	−0.151	−0.160	−0.188	0.123
＊子どもは嫌いである	0.485	−0.168	0.087	0.280	−0.150	0.172
＊親と離れて暮らしてもよい	0.403	0.065	0.192	−0.089	−0.149	0.059
＊抑制や拘束はしかたない	0.341	0.030	−0.147	−0.095	−0.077	0.210
子どもなりの意思を持っている	0.081	0.584	−0.032	0.044	−0.121	0.155
同じ年齢でも人によって違いがある	0.045	0.568	0.089	0.087	−0.193	0.087
たくましさがある	−0.105	0.553	−0.109	−0.023	0.209	−0.133
想像力がある	−0.035	0.505	−0.036	−0.034	0.242	0.059
かわいいと思う	−0.015	0.460	−0.042	0.130	0.199	−0.228
子どもでもプライバシーはある	0.120	0.419	−0.042	0.126	−0.163	−0.055
成長や発達が著しい	0.050	0.371	0.092	−0.203	0.130	0.227
意外な行動をする	−0.050	0.370	0.053	0.097	−0.073	0.176
周りの影響を受けやすい	−0.075	0.304	0.251	0.057	−0.112	0.049
よく泣く	−0.066	−0.060	0.614	0.027	0.136	−0.036
未熟である	−0.013	−0.088	0.593	−0.009	0.014	−0.003
わがままである	−0.059	−0.127	0.582	0.038	−0.038	−0.084
気分が変わりやすい	0.042	0.140	0.568	−0.091	−0.002	−0.112
自分本意である	−0.074	0.068	0.555	−0.033	−0.024	−0.093
小さい	−0.071	−0.027	0.518	0.085	0.076	0.021
無防備である	0.120	0.070	0.507	−0.046	0.045	0.100
感情がハッキリしている	0.199	0.149	0.405	−0.106	0.132	−0.096
集中している時間が短い	0.008	0.104	0.375	−0.024	−0.130	0.004
一緒にいると楽しい	−0.024	0.110	−0.041	0.955	0.018	−0.089
子どもは好きなほうである	0.007	0.028	0.026	0.862	−0.039	−0.047
一緒にいるとおもしろい	0.100	0.280	−0.047	0.608	0.033	−0.029
かわいいと感じる	−0.001	−0.056	−0.046	0.475	0.148	0.178
正直である	0.059	0.024	0.016	−0.089	0.592	0.018
素直である	0.118	−0.012	−0.033	−0.030	0.534	0.117
よく遊んでいる	−0.021	−0.039	0.015	0.116	0.478	0.171
純粋である	0.112	−0.098	0.086	−0.014	0.443	0.221
遊びが大好き	0.015	−0.005	0.023	0.156	0.420	0.082
エネルギッシュだと感じる	−0.031	0.007	−0.068	−0.020	0.201	0.672
生き生きとしている	−0.163	−0.065	−0.101	0.233	0.182	0.558
可能性があると思う	0.039	0.111	−0.093	−0.163	0.087	0.539
好奇心が旺盛	−0.025	0.236	0.097	0.093	−0.005	0.359

因子抽出法: 主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法　　＊は逆転項目

3．属性ごとの比較

イメージ調査で得られた因子得点を用いて、学生の属性ごとに得点の比較を行った。兄弟の順位では、第3因子の『自己中心的因子』で長子のほうが中間子と末子より得点が高かった（$p<0.01$）。これは、長子が幼少期から中間子および末子に対しわがままを許してきたという、育ち方に関係すると考えられる。次に、学生が子どもと聞いて抱く年齢別では、第1因子『肯定因子』と第3因子『自己中心的因子』、第4因子『愛着因子』、第5因子『純朴因子』、第6因子『生命力因子』にて幼児前期の子どもをイメージするほうがしない者より得点が高かった（第1・4・5因子；$p<0.01$、第3・5因子；$p<0.05$）。その他の年齢では、差はなかった。休日の過し方では、第1因子『肯定因子』と第4因子『愛着因子』、第5因子『純朴因子』にて「外出する」ほうが「自宅で過す」者より得点が高かった（第1・5因子；$p<0.01$、第4因子；$p<0.05$）。休日に主に外出する学生は、子ども連れの家族を目にする機会が増えるために、子どもに対して好意的で愛着を持つようになると考えられる。

子どもに関係する学問分野では、学生が子どもをどのように認識し、受け止めるかが重要な問題である。子どもとの接触体験が、学生の子どものイメージ形成に大きく影響しているため、接触体験が少ない学生には子どものありのままの姿を理解させることができるように、教員は教育内容の構築を検討していく必要があると考える。

（はやしだ　りか・なか　よしこ・えんどう　みねこ・うつみ　こう）

全方位映像通信システムを利用したグループワークの実験と評価（２）－グループワークの評価－

○ 青木慎一郎　井上孝之　柴田 義孝　佐藤 洋介
（岩手県立大学社会福祉学部）（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）

全方位映像通信システム　小集団研究　グループプロセス　応用研究　実践研究

全方位カメラによって得られた映像データの小集団研究における有効性とトレーニング活用の有効性について考察する。

１．記録データとしての有効性

従来のオーディオ・ビデオテープを使った録音や録画に比べてみる。第一に、逐語記録の作成作業において、全方位映像は(1)発言が重なった場合の発話者の特定(2)表情等による発話内容の確認において有効に活用することができる。(2)については、発話機能のコード化の際、最初は逐語記録のみでコード化し、再度全方位映像を参照してコード化したところ、516 コード中変更 32・追加 17 であった。

第二に、従来のビデオカメラによる撮影の先行研究の多くは 3 人以下のデータである。6 人の映像記録により、3 人の会話にはないグループ展開の観察が可能となる。仮に、ビデオカメラ 6 台を使った撮影の場合、その異様さは自然な会話環境を損なうだろう。また、全方位映像は 6 台のカメラによる 6 区分映像と違って参加者同士の空間的なつなぎの部分もデータ化が可能となる。参加者の心理がつなぎの部分の姿勢・しぐさ・距離に表れ、相互作用がより正確に観察できる。小集団研究の有効なデータを得ることができるのである。

２．グループプロセス分析のデータとしての有効性

「グループプロセス」の分析は、小集団研究、グループダイナミックス研究で早くから研究されており、古くは Bales らの方法などが挙げられる[1)]。また最近の Wheelan のレビューによれば、「個々のメンバーの性格には関わらないグループ発展の一貫性についての研究」が多く存在している[2)]。また、グループ展開の展開モデルは様々のものが取り上げられている[3)]。つまり、小集団における会話の展開過程は一般化、普遍化することが可能と考えられている。

しかし、これまで記述的な会話研究は主として社会学や言語学の領域で行われており、また 2 者間における会話分析が主なものである。3 人以上のグループプロセスとしての記述的研究は少ないし、概略的なものにとどまっている。研究の目的を応用や実践とした場合、グループの展開過程をより詳細に記述的に検討する必要がある。例えば、全方位カメラを使用した記録を検討すると展開過程の一部として「情報の均衡化」とも呼べる小集団全体の課程が観察された。グループの展開過程において情報の不均衡がおこり、情報が少ない 2 人に、別の 2 人が説明し、他の参加者はその説明が終わるのを待つという、不均衡を是正し集団としてのまとまりを維持しようとする過程が観察された。そして、この情報均衡化が起こった上で、情報が少ないと見られた二人の参加者から、逆に新たな情報を引き出すこととなり、結果的に問題解決に結びついている。

３．小集団研究とトレーニングにおける有効性

①上述のグループプロセスの所見に加えて、発話数の明らかに少ない参加者（本実験のＦ）が発生する可能性、リーダーの特徴を顕著にあらわす参加者（本実験のＥ）が発生する可能性が指摘される。

②参加者とアドバイザー両者への質問紙調査により以下の結果が得られた。(1)カメラがテーブルの中心に一台のみという撮影条件は参加者にとっての違和感が少なく、自然な状況でグループワークを実施できる。(2)アドバイザーは、実施者全員の表情を見ながらインストラクトできるというメリットがあり、その遠隔化も可能である。

これまで別々に追及されてきた、グループプロセスの小集団研究と、グループによるトレーニングの多様な実践とを統合する応用研究あるいは実践研究の手段として、全方位カメラによる「中心から対面で表情を見るというバーチャルなコミュニケーション」の活用が期待できる。本研究は、平成 18 年度岩手県立大学地域専門職高度化プロジェクト研究（代表武田利明）の研究費により行われた。

文献 1)Bales,R.B., 1950 Interaction Process Analysis －A method for the study of small groups－ ADDISON-WESLEY PRESS, INC. 2) Wheelan, S. A., 2004 Group Processes : A Developmental Perspective 2ND Edition Allyn & Bacon 6 3) Kelly,J.R, 2001 Mood and Emotion in Group Hogg,M.A.&Tindale,R.S. edited 2001 Group processes Blackwell Publishers 166-168

（あおきしんいちろう　いのうえたかゆき　しばたよしたか　さとうようすけ）

就職活動に対する自己効力感

― 大学生を対象とした測定 ―

○太田さつき　田畑　智章　岡村　一成
（東京富士大学 経営学部）

キーワード：自己効力感、就職活動、尺度作成

【研究の目的】 Bandura（1977）の自己効力理論を、職業や進路の選択場面に応用した研究を見受けることが多い。その中において、太田・岡村（2006）は、職業や進路の選択よりも、就職活動そのものを対象とすることを重要と考え、就職活動に対する自己効力感尺度を作成した。そして、短大生を対象として尺度の信頼性を確認するとともに、就職活動水準や内定に対する予測妥当性を報告した。

しかし、太田・岡村（2006）では短大生のみを対象としていたため、4 年制大学の学生にも適用可能な尺度を作成する必要が考えられた。太田・田畑・岡村（2006）は、大学生を対象とした尺度を作成したが、一校のみを調査対象としたため、一般化の可能性について疑問が残った。本研究では、その点を改善すべく、太田・田畑・岡村（2006）の尺度を用いて、複数の大学の学生を対象に調査を実施した。そして、大学生の就職活動に対する自己効力感の因子構造について検討を行った。

【方法】 対象者 大学４年生および３年生を対象とした。４年生はＡ大学を対象とし、３年生はＡからＦの６大学を対象とした。対象学部は社会科学系に統一した。その結果、４年生については 110 名、３年生については 442 名から回答を得た。

調査時期 ４年生対象の調査は、2006 年４月の最初の授業において実施した。3 年生対象の調査は、2006 年 9 月～10 月の秋学期最初の授業時間に行うよう担当教員に依頼した。授業時間の進行具合によって必ずしも初回の授業に実施することはできなかったが、10 月中には全ての回答を回収した。

尺度 太田・田畑・岡村（2006）の尺度を使用した。同尺度は、短大生だけでなく大学生が経験する多様な就職活動内容を含むこと、理解が容易で回答がしやすくなることを念頭において太田・岡村（2006）を改定したものである。全 23 項目に対し、「1:まったくあてはまらない」から「5:よくあてはまる」まで５件法で回答をもとめた。

【結果】 最尤法を用いて因子分析し、５因子構造を適当と判断した。うち１項目がどの因子に対しても負荷量が低く、平均値が高く標準偏差が小さいという特徴もみられたため、削除し、22 項目で分析した（Table 1）。KMO は.87 と、高い標本妥当性を示していた。適合度検定は $\chi^2(131)=359.1$ ($p<.001$)であった。負荷量の高かった項目群毎に α 係数を算出すると、それぞれ .77, .78, .73, .78, .69 であったが、項目 14 を削除すると α 係数が .73 から.79 へと上がるため、除外して因子の解釈をすることにした。第１因子は「就職活動実行への期待」、第２因子は「自己と就職の統合への期待」、第３因子は「書類作成への期待」、第４因子は「自己理解への期待」、第５因子は「就職活動への結果期待」と解釈した。

【考察】 短大生を対象とした太田・岡村（2006）では３因子が見出されたが、大学生を対象とした本研究では５因子が見出された。履歴書等の書類作成は他の就職活動内容と区別されて認知されていると考えられる。「自己理解」は大学生を対象とするにあたって加えられたものであるが、それを就職に結びつけることとは区別されていることを確認した。これらは、大学生は短大生よりも、就職活動内容を複雑に認知していることを示唆している。この尺度を用いて、就職活動に対する自己効力感が、実際の活動にどう関係しているか確認することが今後の課題である。

【引用文献】

太田さつき・岡村一成 2006 就職活動に対する自己効力感：測定尺度作成の試み. 応用心理学研究 31, 65-75.

太田さつき・田畑智章・岡村一成 2006 大学生の就職活動に対する自己効力感. 日本社会心理学会第 47 回発表論文集

（おおた さつき・たばた ともあき・おかむら かずなり）

Table 1　因子分析結果（最尤法、プロマックス回転後）

	1	2	3	4	5	H^2
a07 面接の前に面接対策の本を参考にしたり練習するなど十分な準備ができると思う	**.66**	-.04	-.13	.16	.00	.20
a10 筆記試験のための事前勉強ができると思う	**.62**	-.05	-.06	.03	.03	.24
a06 学校の進路支援課やハローワークを上手に利用することができると思う	**.61**	.03	-.01	.03	-.18	.27
a11 できるだけ多くの企業説明会（セミナー）に参加することができると思う	**.61**	-.10	.13	-.15	.15	.18
a03 就職活動を他の何よりも優先することができると思う	**.52**	.12	-.04	-.21	.02	.34
a04 志望する企業にできるだけ多くエントリーすることができる思う	**.49**	.05	-.02	-.10	.12	.45
a08 先輩やOB・OGから必要な情報を得ることができると思う	**.43**	.03	.04	.14	-.11	.26
a02 就職活動がうまくいかない時があっても、その後活動を続けることができると思う	**.35**	.06	.02	.06	.04	.15
a05 気に入った求人条件を見つけたらすぐ人事担当に電話をかけることができると思う	**.26**	.06	.22	.03	-.09	.36
a09 家族や親戚から必要な情報を得ることができると思う	**.25**	-.09	.15	.13	-.02	.42
a18 自己の持ち味・能力をいかせる仕事や就職先を決めることができると思う	-.01	**.84**	.01	.07	-.02	.59
a19 自分の望むライフスタイルにあった仕事や就職先を決めることができると思う	.03	**.83**	-.01	.03	-.03	.82
a20 自分の興味に合う仕事や就職先を決めることができると思う	.00	**.73**	.06	.03	.09	.32
a13 エントリーシートや履歴書をスラスラ書けると思う	-.14	-.01	**.99**	-.04	-.01	.59
a12 好印象をあたえるエントリーシートや履歴書を書くことができると思う	.12	.09	**.67**	-.01	-.03	.64
a14 就職情報誌にあるようなリクルートマナーを守ることができると思う	.18	-.10	**.26**	.23	.13	.47
a16 自分の望むライフスタイルを把握することができると思う	-.06	.02	-.01	**.81**	.04	.77
a17 自分の興味を把握することができると思う	-.02	.21	-.11	**.61**	.00	.73
a15 自己の持ち味・能力を把握することができると思う	.01	.07	.18	**.60**	.02	.67
a21 自分の興味や能力を理解すれば、よりよい就職ができると思う	-.07	.11	-.02	.00	**.75**	.61
a22 就職活動に必要な知識やテクニックが分かっていれば、よりよい就職ができると思う	.01	-.15	-.01	.11	**.71**	.47
a23 時間はかかっても、就職活動に一生懸命取り組めばよりよい就職ができると思う	.10	.19	-.01	-.06	**.42**	.31
因子寄与	4.0	4.2	3.6	4.1	2.7	

学習への動機づけが試験成績に与える影響 I

― 進学動機と学習スタイル ―

○松田浩平[1)]　佐藤恵美[2)]　中山智恵[3)]
([1)] 文京学院大学　[2)]白百合女子大学大学院文学研究科 [3)] 文京学院大学大学院人間学研究科)

キーワード：動機づけ，進学動機，学習スタイル

【序論】

大学は入学者の選抜において一定水準範囲の学力層を結果的に抽出するので，大学の学業成績は入学試験の成績よりも入学後の学習状況によって決定されると考える。入学後の授業科目に対する学習姿勢によって，その科目における試験成績や結果に対する原因帰属が大きく左右される(松田・佐藤, 2004)。

達成動機は，優れた水準で意義あることを成し遂げたいと思う気持ちであり，この達成動機が生じることによって，学業やスポーツなどに対する姿勢が形成され，成績や結果として反映される(Weiner, 1980)。試験前あるいは普段からの学習活動は達成動機の1つの典型とされている(宮本,1979)。また，大学への進学動機とを達成動機の一つとして考えるなら，大学へ進学しようとする進学動機と，最終的に特定の大学・学科を選択する入学動機という二段階の構造を持ち，大学における学習姿勢や課外活動に反映される(西野ら, 1985,1986)。

具体的な学習活動に影響を与える要因を探り，学生指導の基礎資料を動機づけの観点から研究を試みる。本研究では，授業内に行われる中間考査への学習の取り組みから，大学生の達成動機と試験結果の原因帰属のあり方が試験得点にどのような影響を与えるかを検討した。

【目的】

大学生の学習状況による課題への学習方略から，試験への達成動機と原因帰属について検討した。本研究では進学動機と学習スタイルが試験成績に与える影響を検討する。本稿では，進学動機と学科選択動機と学習形態の状況によって学生を分類し，そのプロフィールを検討することを目的とした。

【方法】

【被験者】心理学測定法 I を履修する心理学科1年生95名のうち，有効回答数は 83 名(男 34 名，女 49 名)。

【授業概要と試験内容】授業は測定法の心理学科の必修科目として，数的処理の基本的な技法と心理的変数の基本的な性質を数式の操作を含めて具体的に学習することを目的とする講義科目であった。

【質問紙】

[知能検査]京大NX(芋阪・梅本,1984)

[学習実態アンケート]

アンケートA: 普段どのぐらい勉強しているか，試験前にどのぐらい勉強しているかなどの学習状況と，中間考査の予想点数と期末考査の目標点数について 10 項目を答えてもらった。さらに，達成動機測定尺度 23 項目(堀野,1987)を4件法で答えてもらった。さらに大学への進学動機 38 項目および入学動機 24 項目(西野ら, 1985,2003)を加え3件法で答えてもらった。

アンケートB: 中間考査の得点への満足度を5件法で答えてもらい，中間考査の得点に満足した／満足しなかった理由として 15 項目を挙げ，試験結果への原因帰属を検討した。

【手続き】

1. 心理学測定法 I の中間考査実施(2007年 6 月 15 日)
2. 学習動機調査票実施(2007 年 6 月 22 日): 心理学測定法 I の中間考査を返却する前にアンケートAを配布，自分の得点を予想してもらい直ちに回収した。
3. 心理学測定法 I の中間考査返却(2007 年 6 月 22 日): 採点済みの中間考査答案を返却し，自分の点数を確認した。
4. 原因帰属調査票実施(2007 年 6 月 22 日): アンケートBを配布し，中間考査得点を自分の予想と比較して，満足度と難易度ならびにその理由について答えてもらった。

【結果の処理】

進学動機，入学動機，学習状況のそれぞれについて因子分析を行い因子スコアに変換した。これをもとに，階層的クラスタ分析を行い学生のタイプを分類した。これをもとに，学習への動機づけタイプごとに検討するための外的基準とした。

【結果と考察】

大学進学動機については，自己実現と青春享楽の 2 因子を得た。入学動機については，立地評判と学科内容の 2 因子を得た。学習動機はある種の能力感と思われる高得点への期待と，日常や試験前の学習量に関する 2 因子を得た。これらの，進学動機と学習スタイルは，図1に示す構造を持つ次の5つのクラスタに分類された(表1)。

1. 自己実現，立地評判，学科内容の全て低い群
2. 自己実現，青春享楽，能力感が高く，学習量が低い群
3. 自己実現，立地評判，学科内容，学習量の全てが高い群
4. 青春享楽，学科内容，学習量が高く，能力感が低い群
5. 学科内容が高く青春享楽が低い群

さらに，クラスタ1とクラスタ2でネガティブな動機で入学し能力感が高いが学習に消極的な上位クラスタ，クラスタ3とクラスタ4とクラスタ5でポジティブな動機で学習に積極的な上位クラスタの 2 群に分類された。

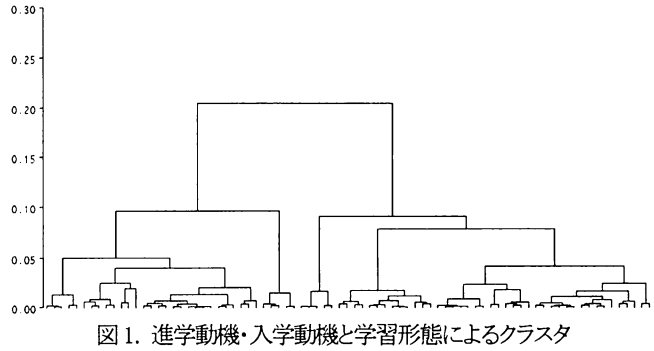


図 1. 進学動機・入学動機と学習形態によるクラスタ

表1. 進学動機・入学動機と学習形態によるクラスタ

クラスタ		自己実現	青春享楽	立地評判	学科内容	能力感	学習量
1	μ	**-.670**	-.280	**-.443**	**-1.034**	.011	-.130
(n=30)	σ	*1.011*	*.795*	*.438*	*.489*	*.744*	*.817*
2	μ	**.940**	.887	-.329	-.242	.898	**-1.967**
(n=5)	σ	*.485*	*.414*	*.587*	*.335*	*.896*	*.560*
3	μ	**1.008**	.608	**2.424**	**1.491**	.278	**.604**
(n=5)	σ	*.343*	*1.070*	*.606*	*.325*	*.279*	*.296*
4	μ	.185	**1.123**	-.171	**.594**	**-.488**	**.661**
(n=13)	σ	*.779*	*.729*	*.531*	*.479*	*.379*	*.374*
5	μ	.207	**-.504**	.169	**.491**	.005	.069
(n=29)	σ	*.594*	*.493*	*.715*	*.472*	*.815*	*.816*

このことは，自己評価が過剰で動機づけが不十分なまま大学に進学した者は，学習に対して消極的であることが示された。これらの学生に対して，学習能力に応じた学習支援が必要なことを示唆した。

【引用文献】

西野泰広　松田浩平　村井潤一郎　2003　人間学部入試データの多変量解析における入試のあり方の検討　文京学院大学総合研究所紀要　Vol.3 ,69-85.

(まつだこうへい・さとうえみ・なかやまちえ)

発達障害児を持つ母親とイルカ触れ合い活動

—活動前後の母親のストレス変化—

○植田　有香　　宮川　治樹
（帝塚山大学大学院人文科学研究科）（帝塚山大学）

キーワード：イルカ介在活動、障害児、母親ストレス

【目的】

ここ数年、イルカブームによって、ドルフィンセラピーやイルカの癒し効果が期待されているが、これらには科学的実証データが少なく、日本においてはここ数年でようやく調査・研究が進められているのが現状である。しかし、今までの研究は、イルカと子供の関係のものばかりで、子供がイルカと触れ合うことによって家族の変化や、保護者の変化についての研究はほとんどされていない。

そこで本研究では、触れ合い活動に参加している子供の母親のストレス変化を明らかにすることを目的とする。

【方法】

・調査場所

香川県さぬき市にあるドルフィンセンター。ここでは動物介在活動(animal-assisted activity、AAA)を行っているので、疾患治療や、明確な目標設定をした教育訓練的なプログラムではない。保護者や周囲の人々は介入せずに見守り、参加する子供が楽しい時間を過ごせる事、子供の興味や関心に基づいた自由な体験が出来る事を尊重する活動である。

・調査対象者

イルカ触れ合い活動に参加した発達障害児(平均年齢 7.25歳)の母親(平均年齢 38 歳)、32 名を対象とした。

活動前のアンケートは全 32 部、29 部回収。活動後のアンケートは 29 部、回収は 24 部。前後共にアンケート回収できたものは 24 部。その内、調査対象となったのが 21 部であった。

・調査票

今回作成した質問紙は、「最近の状況について」(日本版GHQ 精神健康調査票 12 項目番、以下 GHQ－12)が 12 項目、学齢期心身障害児を持つ父母のストレス尺度(植村・新美、1983)から、「この子自身の問題について」から 16 項目、「自分自身の問題」から 13 項目、「家族の問題」から」12 項目、任意で抽出した。

フェイスシートに関しては、母親や子供の年齢、子供の診断名、家族構成、子供のスキルの程度を聞くものであった。

・実施日

8 月 5 日～10 月 2 日までの期間に、調査を実施した。

【結果】

GHQ、「この子自身の問題について」、「自分自身の問題」、「家族の問題」の各項目は、活動前後で有意な差は見られず、「自分自身の問題」では有意傾向が見られた(表 1.)。従って、母親自身のストレスは、イルカ触れ合い活動をすることによって軽減される傾向にあると考えられる。

表1.活動前後での各項目の平均得点

	活動前の平均得点	活動後の平均得点	t値
GHQ	26.85(SD=5.59)	26.25(SD=5.51)	t(19)=4.67, n.s
この子自身の問題	12.71(SD=5.763)	12.71(SD=5.05)	t(20)=0.00, n.s
自分自身の問題	10.75(SD=4.87)	8.95(SD=5.73)	t(19)=1.90, p<.10
家族の問題	5.85(SD=3.87)	5.60(SD=3.95)	t(19)=－0.48, n.s

また、子供の障害が軽度、中度、重度に分類し、再び活動前と活動後の各項目の平均得点差を出した。すると、障害が重度の子供を持つ母親の GHQ と「自分自身の問題」は、子供がイルカ触れ合い活動に参加する事により軽減が、家族に関するストレスは軽減する傾向が見られた。

【考察】

障害が軽度の子供を持つ母親・中度の子供を持つ母親でストレスの軽減が見られなかったのは、「母親の子供に対する期待度」が、障害が軽度・中度の子供を持つ母親と、障害が重度の子供を持つ母親とでは異なるという事が挙げられる。中塚・蓮郷(1989)は、子供への発達期待感がいつまでも高く、それに固執する母親は日常なれた家事労働を非常に負担に感じているのではないか、と述べている。これと同様に、障害が軽いので子供に過度の発達期待をかけてしまった結果、イルカ触れ合い活動を行って子供のスキルに変化がみられず落胆してしまい、ストレスが軽減されなかったという事が考えられる。

障害が重度の子供を持つ母親では GHQ と「自分自身の問題」ではストレスの軽減が、「家族の問題」はストレスの軽減傾向が見られたのは、母親自身のストレス項目となっているからだと思われる。障害が重度の子供ほど普段つきっきりになり、多くの時間をとられてしまい、外出の機会も減る。その為に、イルカ触れ合い活動に参加することは大きな環境の変化となったり、いつもと違う視点で子供を見ることが出来たりし、気分転換になった為、母親自身のストレスが軽減したと考えられる。また、中塚(1984)は「障害児を持つ母親は子供が障害を持っていることが不憫でならないと思う一方、このことに自分の責任を感じ、色々悩んだり苦労したりする」と述べている。この事から、障害が重度の子供を持つ母親の「この子自身の問題について」ではストレスは軽減が見られなかったという結果が出たと思われる。

【引用文献】

中塚善次郎・蓮郷さなえ 1989　障害児を持つ母親のストレスと家庭における夫婦の役割分担について 鳴門教育大学紀要　教育科学編, 4, 139－149.

中塚善次郎 1984 障害児を持つ母親のストレス構造　和歌山大学教育学部紀要　教育科学, 33, 27－40.

（うえだゆか）

学習への動機づけが試験成績に与える影響Ⅱ

― 試験成績と原因帰属 ―

○佐藤恵美[1)]　中山智恵[2)]　松田浩平[3)]
([1)] 白百合女子大学大学院文学研究科 [2)] 文京学院大学大学院人間学研究科 [3)] 文京学院大学)

キーワード：動機づけ、原因帰属、試験成績

【序論】

帰属は行動の原因を説明する過程であり，行為者の期待や価値によって行動の原因を外的，内的原因に帰属するという帰属理論から(Wainer,1972)，学習行動を対象にした研究がなされている。これに関連して，試験の結果と原因帰属が感情喚起に及ぼす影響が指摘されている(奈須,1990)。

さらに，試験への学習状況と試験成績による学習への動機づけと原因帰属について検討を行った研究では，授業科目に対する学習姿勢によって，その科目の試験成績や結果に対する原因帰属が大きく左右された(松田・佐藤，2006)。このような試験成績と原因帰属は試験前の動機づけとも関連性が指摘されているが，試験成績はこれまでの学習成果や過去の学習の積み重ねであるため，試験に関するこれまでの履修課程も考慮に入れる必要があるだろう。そこで本研究では，授業内に行われる中間考査への学習の取り組みから，大学生の試験結果への原因帰属のあり方が試験得点にどのような影響を与えるかを検討した。

【目的】

大学生の学習状況による課題への学習方略から，試験への達成動機と原因帰属について検討した。本研究では進学動機と学習スタイルが試験成績に与える影響を検討する。

【方法】

【被験者】心理学測定法Ⅰを履修する心理学科1年生 95 名のうち，有効回答数は 83 名(男 34 名，女 49 名)であった。

【授業概要と試験内容】【質問紙】【手続き】は「学習への動機づけが試験成績に与える影響Ⅰ」と同様であった。

【結果】

中間考査の平均値と期末考査の予想得点を示した(Table1)。

Table1. 試験成績と予想得点

	n	μ	σ	Median
中間試験	81	62.9	21.0	65
期末予想得点	83	73.2	13.1	80

1) 試験成績への原因帰属に関する因子分析

試験成績の原因帰属の項目について因子分析(最尤法，Harris-Kaiser 回転)を行った結果，3因子解とした。

因子Ⅰは他者への期待因子，因子Ⅱは努力志向性因子，因子Ⅲは運・好機志向性因子とした(因子負荷等は当日掲示)。

2) 因子スコアを基にした原因帰属クラスタによる試験得点

他者への期待，努力志向性，運・好機志向性の3因子について，サーストンの最小二乗法により因子スコアを算出した。この因子スコアをもとにウォード法による階層的クラスタ分析を行った結果，以下の原因帰属の3クラスタが得られた。

[クラスタ1(N=18)] 因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから，他者への期待があり，運・好機志向性の強いクラスタとした。

[クラスタ2(N=30)] 因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから，努力志向性はなし，運・好機志向性はなしクラスタとした。

[クラスタ3(N=33)] 因子Ⅰと因子Ⅲの因子スコアから，他者努力志向性があり，運・好機志向性はなしクラスタとした。

3) 原因帰属の3クラスタによる分散分析結果

原因帰属の3クラスタと数学の履修状況を独立変数，試験得点を従属変数として分散分析を行った。

この結果，原因帰属の3クラスタにおいて有意差が認められた($F(2,72)=4.56, P<.01$)。tukey 法の結果，クラスタ 2 と3との間に差が認められた。これは，運・好機志向性については共通したクラスなので，努力志向性があるクラスタの方は得点が高かった。クラスタ別に試験成績を示した(Fig1)。

高校時の数学の履修状況でも試験結果に有意差が認められた($F(2,72)=7.38, P<.01$)。tukey 法の結果，数Ⅲと数Ⅱ，数Ⅲと数Ⅰとの間に差が認められたことから，数Ⅲを受けた受講生は試験得点が高いことが明らかになった。

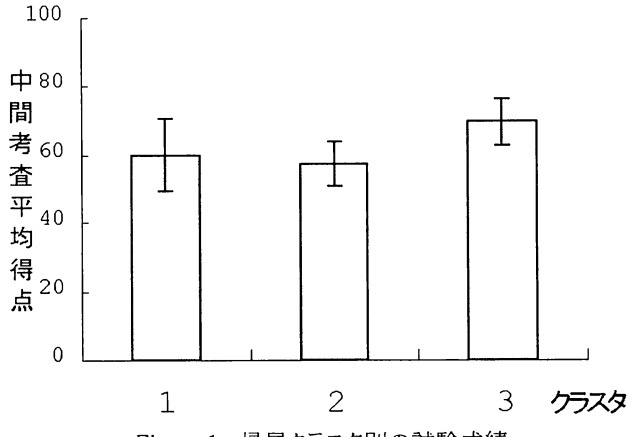


Figure 1. 帰属クラスタ別の試験成績

【考察】

原因帰属項目の因子分析の結果3因子が抽出された。昨年の試験への原因帰属因子とほぼ同様の結果であった。しかし，昨年の因子Ⅰは「課題の困難さ」因子であったが(松田,佐藤他,2006)，今年は「他者への期待」因子となった。これは，「自分にとって問題がわかりにくかった」「授業の内容がわかりにくかった」の因子負荷が高かったためである。

また，本研究の因子Ⅲ．運・好機志向性因子は「試験当日はたまたま調子が悪かった」「もし、この科目を落としても卒業できそうだから」2項目のみで構成された。測定法Ⅰの授業は必修であるため，この科目を落とすと卒業できないことはガイダンスで告知しているが，項目の負荷が.787 と高かった。また，分散分析の結果、努力志向性の有無によって試験得点が変わることが示唆されたが，試験への原因帰属の因子分析とクラスタ分類の結果から，クラスタ1，2に属する48 人は他者への期待が大きく，クラスタ3に属する 33 人は自分にとって大切な科目と考え，勉強する努力に試験結果の帰属していることが示唆された。成功・失敗に関する原因の理論より(Wainer,1986)，今回のテスト結果をどのように認知するかによって，次のテストの成績がある程度決定されることが予想される。このため，本研究の試験への帰属要因と，動機づけとの関連から，次回の試験成績を検討する予定である。

【引用文献】

松田浩平　佐藤恵美　地頭沙織　田中翔子　田原理恵　森　昇子　2006　学習への動機づけと試験成績の原因帰属が学業成績に及ぼす影響－学習能力と性格の関連性から－　文京学院大学人間学部紀要 Vol.8, No.1, pp177-188.

(さとうえみ・なかやまちえ・まつだこうへい)

小学校における学生サポーターの活用の検討（1）

—事前のニーズ調査を通して —

○佐脇 亜依　神澤 創
（帝塚山大学大学院人文科学研究科）　（帝塚山大学）

キーワード：学生サポーター、ニーズ調査、小学校、地域貢献

【目的】近年、学校現場では教師やスクールカウンセラーだけでなく、学生や地域の方も様々な形で児童をサポートしている。特別支援教育も始まり、児童のサポート活動への関心はさらに高まっている。A市では教育充実に向けた協定をB大学と結び、平成19年度より児童へのサポート活動を目的に学生を小学校へ派遣する事業を実施している。本研究では、学校現場で児童へのサポート活動を行う学生を「学生サポーター」とし、サポート活動に対するニーズ調査をもとに今後の学生サポーターの活用の在り方を検討する。

【方法】調査対象：学生の派遣を予定しているA市小学校5校の教職員73名（男性29名、女性42名、不明2名／回収率50.7%）、学生派遣事業に登録しているB大学の学生（学部生33名、院生6名／男性18名、女性21名）

調査方法：筆者が作成した質問紙（学校長、教職員、学生の3種類）による調査を平成19年5月～6月初めに実施した。［学校］A市教育委員会より小学校に調査の依頼をし、質問紙を配布。1週間を期限として、筆者が回収した。［学生］B大学で行われている事前研修にて実施し、その場で回収した。

質問紙：多肢選択法と自由記述法を合わせた質問紙で、内容は以下の通りであった。［学校］学生サポーターの活用経験の有無、学生サポーターの必要性、具体的に希望する活動等（学校長には児童数など学校の概要も尋ねた）、［学生］希望する活動、参加動機、活動を通して学びたいこと、不安や疑問等。

【結果】学校のニーズ：教職員の31%がこれまでに学生サポーターを活用したことがあり、その活動内容の半分は「学習指導のサポート」であった。また、81%が学生サポーターの活用が必要と回答し、32%が「毎日」、29%が「週1～2回」、27%が「週3～4回」活動することを希望した。活動内容（「学習指導のサポート」「クラブ活動のサポート」「学校行事のサポート」「障害児のサポート」「不登校児・別室登校児のサポート」「気になる児童のサポート」「心理面でのサポート」より複数回答可）は「気になる児童のサポート」（64%）、「学習指導のサポート」（60%）を多くの教職員が望んでいた（図1.）。教科でいうと特に「算数」（63%）、「国語」（32%）のサポートが必要であり、79%が「クラスの入り込みによる対応」、25%が「別室・相談室での対応」、23%が「登下校支援」を希望していた（図2.）。そして、学校が「学生サポーターに気をつけてもらいたいことや望むこと」（自由記述）を大学院生数名によるKJ法で分類したところ、表1.のような結果となった。まず学生が児童と関わる際の心構え（支援姿勢）と具体的な関わり（支援方法）に分類し、さらに、児童との全般的な関わりを重視した指導的な視点（全体・指導的側面）と個別での関わりや児童との関係を重視した視点（個別・受容的側面）から、学校の学生サポーターへの希望を分類した。

表1.学生サポーターに気をつけてもらいたいことや望むこと

	全体・指導的側面	個別・受容的側面
支援姿勢	指導者としての自覚	児童との関係を重視
	教育現場である意識	学生の人間性（誠実さ、積極性等）
支援方法	けじめ・児童との距離感	児童の目線に立ったサポート
	言葉遣い	児童としっかり向き合う
	クラス全体を意識したサポート	児童のつまづきへの気付き
	意欲・自主性を引き出すサポート	休み時間の関わり
その他	守秘義務	
	担任・学校との連携／学校の体制作り	

また、疑問や意見として、「学生サポーターに期待している」や「子どもだけでなく学生にとっても学びの多い機会である」等が挙げられた。「学生派遣の目的」や「学生に何ができるのか」を明示して欲しいといった意見もあった。

学生のニーズ：多くの学生が心理学（84%）や地域福祉学（13%）を専攻しており、児童関係の就職を考えている学生や発達障害などに興味のある学生が多かった。また、初めて小学校で活動する学生が85%おり、「児童や教師との関係作り」、「自分の適性」、「授業やクラブとの時間調整」等についての不安が挙げられた。ほぼ全員（97%）が「週1～2回」の活動を希望し、活動内容については「心理面でのサポート」（74%）、「不登校児・別室登校児のサポート」（72%）、「クラブ活動のサポート」（67%）が多かったが、複数回答が可能なためいずれの活動も40%以上の学生が選択していた（図1.）。そして、活動の形態として79%が「別室・相談室での対応」、72%が「クラスの入り込みによる対応」、51%が「登下校支援」を希望した（図2.）。さらに、学生の多くが小学校の現状を知り、自分自身の活動や教職員から児童との関わり方等を学びたいと思っていることがわかった。

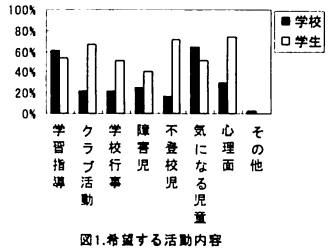


図1.希望する活動内容

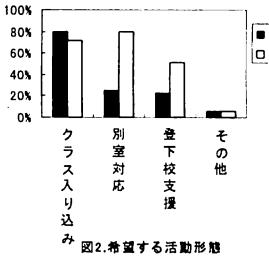


図2.希望する活動形態

学校と学生のニーズ比較：活動内容では「クラブ活動のサポート」、「不登校児・別室登校児のサポート」、「心理面でのサポート」でニーズに大きな差が見られた（図1.）。図2.を見ると、活動形態では「別室・相談室での対応」と「登下校支援」に差があることがわかった。活動日数に関しても、学生のほぼ全員が「週1～2回」を希望したが、学校は「週3～4回」か「全日」を希望している教職員が半分以上いた（59%）。また、学生が児童との関係等に対する不安を多く挙げている一方で、学校は「指導者としての自覚」や「クラス全体を意識したサポート」、「意欲・自主性を引き出すサポート」を求めていた。

【考察】学校と学生のニーズは異なり、教職員間においても異なる意見や考えが認められた（表1.）。学生サポーターを活用したことのある教職員や活動経験のある学生は少なく、さらに学生サポーターの役割の不明瞭さに対する指摘もあった。専門知識やスキルにおいて、学生が学校のニーズに十分に応えられない可能性もある。以上の結果より、学生にニーズ調査の結果を伝える場や学生の不安解消やスキルアップの場として、事前研修が重要な役割を担うと考えられる。また、大学、小学校、教育委員会など多くの人がそれぞれの立場から学生派遣に携わっているため、学生サポーターの役割やニーズを共有する機会を持つことも重要であることがわかった。ニーズ調査の結果と合わせて、今後、学生サポーターの派遣後に活動内容や学生派遣による効果、改善点などを調査することも必要だろう。（さわき あい・かみざわ つくる）

学習への動機づけが試験成績に与える影響Ⅲ

― 学習能力と試験成績 ―

○中山智恵 1)　松田浩平 2)　佐藤恵美 3)
(1) 文京学院大学大学院人間学研究科 2) 文京学院大学　3)白百合女子大学大学院文学研究科)

キーワード：動機づけ，学習能力，知能

【序論】

学校や大学での学業成績は，試験前の勉強や普段からの学習活動，学習態度，学習への意欲，知能，達成動機などの要因によって決定される。学業への達成動機づけは，子ども達の学業成績の差を説明するために考えられた概念である。オーバーアチーバー，アンダーアチーバーの原因解明のための手がかりとして進学後の学業達成の予測にも使用されている。この学業成績の予測に関して，学業成績と達成動機との関連性は相関係数が r=.40 以上の結果が認められている研究もある(Heckhausen,1967)。しかし，学習意欲の概念が明確ではなく，諸研究の結果はまちまちであり一貫した結果は得られていない。また，達成動機の測度のあいまいさと，学業への興味，勉強時間，知能，教科への動機づけなど学業成績に影響する要因の多様さにも問題があるとされている。授業内に行われる中間考査への学習の取り組みから，大学生の達成動機と試験結果の原因帰属のあり方が試験得点にどのような影響を与えるかを検討した。

【目的】

大学生の学習状況による課題への学習方略から，試験への達成動機と原因帰属について検討した。本研究では学習能力と知能に与える影響を検討する。

【方法】

【被験者】心理学測定法Ⅰを履修する心理学科1年生 95 名に対して対象者は，81 名(男性 33 名,女性 48 名)であった。このうち有効回答数 74 名(男性 30 名,女性 44 名)であった。

【授業概要と試験内容】授業は測定法の心理学科の必修科目として，数的処理の基本的な技法と心理的変数の基本的な性質を数式の操作を含めて具体的に学習することを目的とする講義科目であった。

【質問紙】

[知能検査]京大 NX15(苧阪・梅本,1984)

[学習実態アンケート]

アンケート A: 普段どのぐらい勉強しているか，試験前にどのぐらい勉強しているかなどの学習状況と，中間考査の予想点数と期末考査の目標点数について 10 項目を答えてもらった。さらに，達成動機測定尺度23 項目(堀野,1987)を4件法で答えてもらった。

アンケート B: 中間考査の得点への満足度を5件法で答えてもらい，中間考査の得点に満足した／満足しなかった理由として 15 項目を挙げ，試験結果への原因帰属を検討した。

【手続き】

1. 心理学測定法Ⅰの中間考査実施(2007年 6 月 15 日)
2. 京大 NX15 (2007年 6 月 22 日)
3. 学習動機アンケート実施(2007年 6 月 22 日):心理学測定法Ⅰの中間考査を返却する前にアンケートAを配布，自分の得点を予想してもらった。アンケート A 回収後，中間考査を返却し，自分の点数を確認した。その後，アンケートBを配布し，中間考査得点は自分の予想と比較して，満足できた／満足できなかった理由について答えてもらった。

【結果】

中間考査の平均(標準偏差)は 62.9(21.0)であった。また京大 NX15 の知能指数については，98.9(10.3)であった。中間考査の直後に行った集団式知能検査の結果としては妥当なものと考えた。

アンケートAから，学習スタイルに関する日常の学習量および試験勉強と中間考査の予想得点の 8 項目について因子分析(最尤推定→Harris-Kaiser 基準)を行った。高得点期待と事前学習因子に関する2因子を得た。これに知能指数(京大 NX15)を加え，試験得点を従属変数に重回帰分析を行った。得られた回帰式は，決定係数が R^2=0.514 と高く有意であった(F(3,70)＝26.69, p<.01)。学習スタイルの2因子についてサーストンの最小2乗推定式で因子得点を求めた。その因子得点からそれぞれを高低に分け，高得点期待因子と事前学習因子がともに高い HH 群，高得点期待因子は高いが事前学習因子が低い HL 群，高得点期待因子が低く事前学習因子が高い LH 群，高得点期待因子と事前学習因子がともに低い LL 群の 4 つの学習パタンに分けた。この学習パタンと京大NX15の評価段階を独立変数として，試験成績を従属変数とする分散分析を行った。その結果，評価段階で有意差傾向が認められた(F(2,62)=3.04, p<.10)。特に学習パタンにおいて顕著な主効果(F(3,62)=19.23, p<.01)が見られた(図 1)。

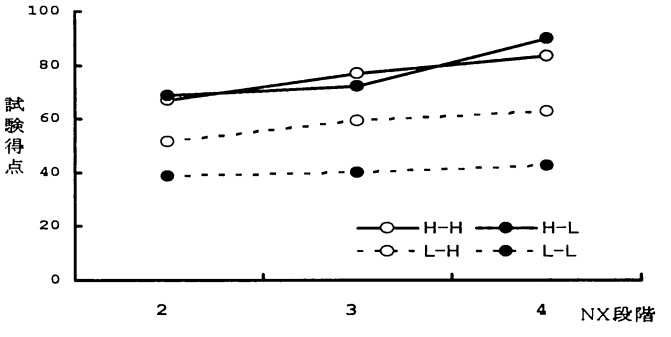


図 1. 京大 NX15 と学習パタンによる試験得点

【考察】

重回帰分析の結果から，知能指数と学習スタイルが試験得点に関連していた。さらに，分散分析の結果から，評価段階よりも学習パタンにおいて顕著な主効果が見られた。Tukey 法による多重比較で全ての知能段階で学習スタイルによる有意差が見られた。特に，高得点に対する期待が低く事前学習が少ない LL 群では，評価段階が上がっても試験得点の平均にさほど変化が見られなかったが，高得点に対する期待が低く事前学習が多い LH 群では，評価段階が上がるごとに試験得点の平均が上がった。また，高得点に対する期待が高く事前学習が多い HH 群では，評価段階が上がるごとに試験得点の平均が上がり，高得点に対する期待が高く事前学習が少ない HL 群では，評価段階が上がるごとに試験得点の平均が顕著に上がった。

これは，個人の知能の評価段階が上がるごとに試験得点も上がるが，試験得点の上昇は個人の学習パタンによる影響が強いということを示している。図 1 より，事前学習が少ない HL 群が評価段階 3 から 4 において急激に試験得点が上がるが，事前学習が多い HH 群は評価段階に合わせて上昇していることからも学習パタンの影響が示めされていると考えられる。

以上のことから，学習することにおいて，個人の知能も関係するが何より意欲を持って学習することが試験得点という学業成績につながることが示された。また，指導する側としても学習意欲を持たせるよう指導することが必要であると考えられる。

【引用文献】

苧阪良二，梅本堯夫　1984　新訂京大NX15－知能検査　第2版　大成出版

(なかやまちえ・まつだこうへい・さとうえみ)

母親の育児ストレスの規定要因の分析

—親の養育態度、愛着、ならびにソーシャルサポートとの関連—

○南　憲治　　寺見陽子
（神戸親和女子大学発達教育学部）　（中部学院大学子ども学部）

キーワード：育児ストレス、母親、ソーシャルサポート、愛着、養育態度

【目的】子どもをもつ母親の育児ストレスの規定要因の構造を構造方程式モデリングによって分析する。本研究では、特に母親が自分の親からうけた養育態度、母親の愛着の質、ならびにソーシャルサポートの影響について検討する。

【方法】調査対象者：大阪市A区に在住する3歳以下の子どもをもつ母親1079名。年齢構成は25歳以下67名、26～30歳244名、31～35歳462名、36～40歳258名、41歳以上44名、不明が16名。

手続き：区役所の住民台帳から3歳以下の子どもをもつ母親2055名を無作為に抽出し、質問紙を郵送で配布し、母親に質問紙に回答するように依頼し、質問紙に対する回答も郵送によって回収した。回収率は52.5%であった。

調査内容：母親の属性（年齢・子どもの数）。次に示す5つの尺度。①母親が自分の親からうけた養育のありようを調べるための養育態度尺度10項目。②母親の愛着を調べるための詫摩・戸田（1988）による愛着尺度18項目。③育児サポート尺度13項目。④子育て情報尺度11項目。⑤育児ストレス尺度17項目。

【結果】（1）因子分析の結果：5つの尺度に対して、それぞれ因子分析（重み付けなし最小2乗法・プロマックス回転またはバリマックス回転）を行った。①養育態度尺度：2因子からなり、第1因子は「干渉」、第2因子は「非受容」と名づけた。②愛着尺度：因子分析を2回行い、詫摩・戸田（1988）と同様、3因子を抽出。第1因子は「不安」、第2因子は「安定」、第3因子は「回避」と命名。③育児サポート尺度：5因子からなり、第1因子は「夫の協力」、第2因子は「自分の親やきょうだい」、第3因子は「専門機関や育児サークル」、第4因子は「夫の親」、第5因子は「近所の人」。④子育て情報尺度：2因子からなり、第1因子は「子育て情報・援助の必要性」、第2因子は「親・友人からの情報」と名づける。⑤育児ストレス尺度：3回の因子分析を繰り返し、最終的に3因子を確認。第1因子は「育児拘束感」、第2因子は「育児をめぐる夫との不一致」、第3因子は「育児当惑感」と命名。

（2）育児ストレスの規定因に関する因果モデルの検討：子どもをもつ母親が自分の親からうけた養育のありよう（親の養育態度）によって、母親の愛着の質が形成され、その母親の愛着の質の違いが、ソーシャルサポートを媒介にして母親の育児ストレスの受け方に影響を及ぼすという仮説をたて、この仮説を構造方程式モデリングによって検討した。構造方程式モデリングによる分析にあたってはAmos5を使用した。まず、母親が自分の親から受けた養育のありようについては、養育態度尺度を因子分析して得られた「非受容」を潜在変数として選択した。次にこの親の養育態度によって影響を受ける母親自身の愛着の質としては、愛着尺度を因子分析して得られた「回避」を取り上げた。そしてこの「回避」がソーシャルサポートを介して育児ストレスに影響するものとして、ソーシャルサポートとしては、育児サポート尺度を因子分析して得られた「夫の協力」と、子育て情報尺度を因子分析して得られた「親・友人からの情報」を取り上げた。その結果、最終的に図1に示す因果モデルが適合した。モデルの適合度に関しては、適合度指標の数値がGFI=.928、AGFI=.913、CFI=.912、RMSEA=.049であり、モデルとデータの適合は良好であると考えられた。図1には標準化されたパス係数が示されており、各潜在変数間のパス係数の値はいずれも有意であった。すなわち、「非受容→回避(p<.001)」「回避→夫の協力(p<.001)」「回避→親・友人の情報(p<.001)」「親・友人の情報→夫の協力(p<.005)」「夫の協力→育児拘束感(p<.001)」「夫の協力→育児当惑感(p<.005)」「育児拘束感→育児当惑感(p<.001)」であった。

【考察】親から受容されることがなく育った母親は、人に対する「回避」傾向が強く、その結果として、育児に関して「夫の協力」や「親・友人の情報」を得ることが少なくなり、「育児拘束感」や「育児当惑感」といった育児ストレスを強く受けることが明らかになった。本研究の結果は、小さな子どもをもつ母親の育児ストレスが、親からの養育によって形成された愛着の質を媒介にして、母親を取り巻くソーシャルサポートによって強く影響を受けることを示唆している。母親の育児ストレスを軽減するうえで、ソーシャルサポートのあり方が重要であるとともに、母親の愛着の質を考慮することが必要なことを示している。

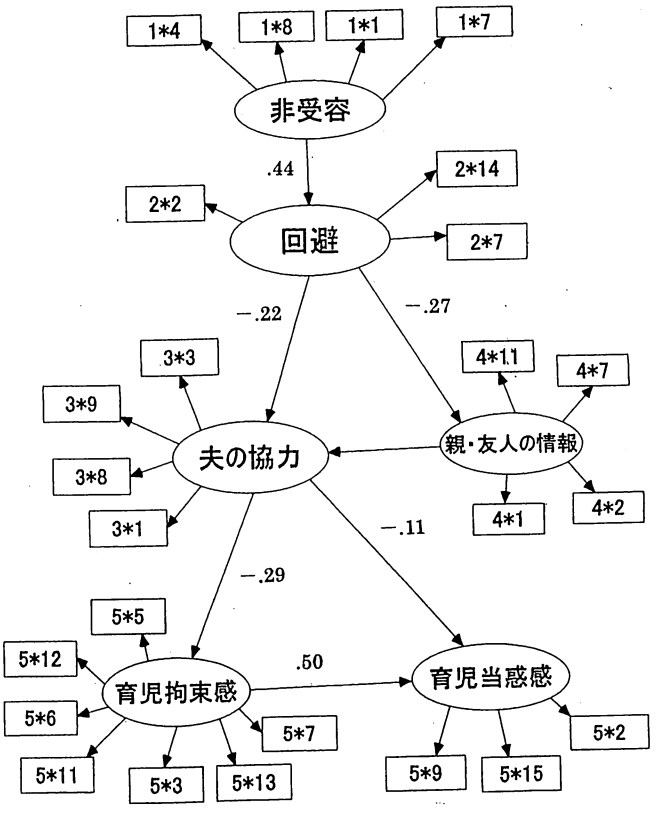


図1. 育児ストレス規定因の構造

（みなみ　けんじ・てらみ　ようこ）

索　　引

人名索引

ア
青木　慎一郎　109, 111
青木　喜子＃　17
雨森　雅哉　76
イ
飯田　敏晴　7
伊賀　憲子　86
池田　満　9, 63
石井　紀子　51
石井　裕美　55, 56
石田　敏郎　24, 25
石橋　里美　68
伊藤　亜矢子＃　9, 98, 108
伊藤　武彦　6, 7, 59
井上　枝一郎　70
井上　孝之　109, 111
井上　孝代　6, 13, 59
今留　忍　58
岩崎　祥一　89, 92
ウ
宇惠　弘　19, 34
上田　真由子　10
植田　有香　114
浮谷　秀一　8, 81, 83
臼井　伸之介　17, 21, 36
内田　誠也　42, 101
内海　滉　49, 58, 60, 110
エ
エスコ　ケスキネン＃　1
遠藤　美根子　110
オ
及川　理恵＃　61
太田　さつき　112
大野　太郎＃　67
大前　泰彦　29
大村　政男　8, 81, 83
大森　直樹　88
大森　正子＃　18
岡崎　琴恵　9, 108
岡村　和子　64
岡村　一成　71, 112
荻野　七重　8, 73, 75, 77
奥村　隆志　70
カ
柿本　敏克　33
垣本　由紀子　25, 26
梶原　隆之　104
加藤　純子　5, 20
神澤　創　116
蒲生　澄美子　56
河合　優年＃　82
河内　和直　80
川島　大司　84
神作　博　11, 12
キ
岸　太一　6
岸本　英男　28
北風　菜穂子　7
北川　博巳＃　3
木下　冨雄＃　3
木村　友昭　42, 101
桐生　正幸　40, 41
桐田　隆博　91
ク
釘原　直樹＃　3
久米　稔　84, 86
コ
小池　はるか　82
幸野　里寿　48
小杉　考司＃　62
小平　朋江　59
小竹　久実子　58
小谷　正登　30
事崎　由佳　92
小西　浩嗣　5
今野　葉月＃　56
サ
齊藤　勇　73, 75, 77
櫻井　美由紀　89
佐藤　恵美　113, 115, 117
佐藤　敬子＃　56
佐藤　洋介＃　109, 111
佐藤　嘉晃　103, 105
佐脇　亜依　116
澤田　幸嗣　19
澤田　正康　43
シ
施　桂栄　70
鴫原　依子　100
篠原　一光　36
柴田　義孝＃　109, 111
島崎　敢　24
清水　美帆　96
白井　清太郎　76, 93
ス
菅原　博嗣　45, 46, 47
角野　善司　97
セ
関　陽子　39, 45
関口　恵子　56
關戸　啓子　60
タ
大坊　郁夫　8
高澤　昌代　37, 38
高田　宗樹＃　18
高野　隆一　86
高橋　美奈　40, 41
高橋　有里　91
多久島　寛孝　50
竹内　由則　16
太刀掛　俊之　10, 17, 36
田中　真介　8
田畑　智章　112
玉井　航太　9, 63
玉井　寛　43
玉木　ミヨ子　56

ツ
津田　康民　42, 101
テ
寺澤　美彦　86
寺見　陽子　118
ト
銅直　優子　85
所　正文　25
豊村　和真　37, 38
ナ
内藤　哲雄　6, 8, 68, 78
内藤　久士 #　10
内藤　美智子　86
中　淑子　110
中井　宏　10, 21
中尾　彩子　76
長坂　晟　7
長塚　康弘　15
長縄　久生　66
永光　優　90
中谷内　一也　3
中山　智恵　113, 115, 117
成田　猛　86
ニ
西土　泉　56
西村　和久　103, 105
ハ
橋本　泰子　103, 105
長谷川　聡 #　18
蜂屋　真　65
八田　武俊　79
服部　環　102
花尾　由香里　71
濱　保久　74
濱口　まち子　9
林　潔　87
林田　りか　110
ヒ
平山　裕記　22
フ
福岡　欣治　35
福田　廣　62
福本　純一　62
福本　敏宏　5
藤掛　和広　18
藤田　主一　8, 81, 83
藤田　勉　44
渕　真輝　10
ホ
星　薫　61
細田　聡　70
細部　国明　32
本多　明生　95
本多　和子　56
マ
前田　惠利　57
松浦　常夫　25
松尾　千尋　76
松上　伸丈　59
松田　浩平　113, 115, 117
松田　睦代　40
松永　保子　52, 53
松野　凱典 #　62
ミ
三浦　公一　43
水澤　慶緒里　31
三井　清美　106
三井　利幸　45, 46, 47
満石　寿　94
南　憲治　118
宮尾　克 #　18
宮川　治樹　114
三宅　郁子 #　56
宮﨑　素子　56
ム
向井　希宏　10
村上　幸史　17
村田　和美 #　56
村山　正治 #　51
モ
森下　高治　20, 72
森田　敏子　52, 53
ヤ
矢野　伸裕　23
矢野　優人　5, 67
山岡　淳　42, 76, 101
山田　宗寛　107
山田　竜平　73, 75, 77
山本　勝則　49, 50
山本　初実 #　82
山本　美知子　99
ヨ
吉田　一子　49
吉光　清　69
余村　朋樹　70
レ
蓮花　一己　22
ワ
若原　克文　45, 46, 47
和田　一成　17, 36
渡辺　亜紀子　9, 98
渡部　英夫　27

（# は非会員）

日本応用心理学会第 74 回大会準備委員会

大会準備委員長・大会会長	蓮花　一己	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
大会顧問	森下　高治	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
事務局長	中谷内　一也	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
委員	大久保　純一郎	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	神澤　創	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	川合　悟	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	瀧上　凱令	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	玉瀬　耕治	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	松岡　誠	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	三木　善彦	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	宮川　治樹	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	山本　隆宣	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	中地　展生	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
	志満　慈子	（帝塚山大学心理福祉学部心理学科）
スタッフ	国府田　美幸	
	加藤　妙子	
	山本　真規子	

日本応用心理学会第 74 回大会発表論文集

発行日　2007 年 8 月

発行者　日本応用心理学会第 74 回大会準備委員会

大会準備委員長　蓮花　一己

〒631-8585　奈良県奈良市学園南 3-1-3

帝塚山大学　応用心理学研究室

TEL：0742-41-4740

FAX：0742-41-4358

http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/

印刷　株式会社　国際文献印刷社